

ソードアート・オンライン
～知られざる天才
剣士～

モフノリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミュールゲニア大陸という場所で自称、傲岸不遜で常勝無敗が売りの世界最強の男、レインが

少年のときに次元を超えて日本にやってきた際にSAOというゲームに途中参加していたら。

最強の片鱗を見せている彼がレベル一からはじめるデスゲームでどのように戦っていくのか。

これはチートであって、チートではない。

基本的にS A Oは原作沿いです。

レイン布教のために書かせていただいています

吉野匠先生による《レイン 雨の日に生まれた戦士》という作品のスピノフ作品である《異邦人》のすぐ後、という設定で書いています。

一応、レインを知らなくても楽しんでいただけるように書いているつもりではありませんが（汗）

レインという最強戦士に少しでも興味がありましたら、原作であるレインとスピノフ作品の異邦人を読んでみてくださいただければ幸いです。

努力と才能で強くなったレインをどうかよろしく願います。

《追記》

アインクラッド編、完結

フェアリーダンス編、完結

ファントムバレット編、完結

オーディナル・スケール編、連載

アリシゼーション編、連載予定

目次

アインクラッド編

プロローグ

レベル1からのスタート

謎の多い初心者

知られざる天才剣士

黒の剣士

規格外の規格外

高い口止め料

ルインソーサリー

謎のPKK

黒の兄弟

無謀な攻略

136 122 113 99 89 70 51 35 19 7 1

二刀流

過去の記憶

レインという少年

異世界

アインクラッド番外編

二人の攻略 E.P. 1

二人の攻略 E.P. 2

二人の攻略 E.P. 3

フェアリーダンス編

妖精の国へ

飛ばない妖精

再会

グランドクエストの鍵

333 311 286 282 271 249 234 203 182 172 158

優しすぎる彼	359
雪の世界	368
象とクラゲ	378
エクスキヤリバー	391
不思議で不可視で不可解な	417
世界樹の攻略、そして現実世界へ	446
少年、レイン	486
フアントム・バレット編	
強さを求める二人の出会い	507
自称天才の男	517
戦友から助言のために	529
変わったような変わってないような	

ガンゲー無視の馬鹿たち	544
バレットオブバレッツ	564
予選	583
線引き	594
ファーストコンタクト	613
仮想と現実と異世界に	630
感謝の言葉を	641
残すモノ	651
閑話 マザーズロザリオ編	
天使を迎えに来た死神	657
オーディナル・スケール編	
王子というよりヤクザ	662

戦場の歌姫と騎士

関係性

彼の知らない一面

本格的な介入

—————

669

—————

675

—————

681

—————

691

アインクラッド編 プロローグ

いつもの黒一色の服装を全て脱いでいるレインはジェル状のベツトに横たわり、鉄でできたナーブギアという機械を頭に被されており、その表情には不機嫌以外のものはない。

元々彼はこの地球という世界の人間ではない。

剣と魔法が存在し、魔獣や竜も生きている世界にいた。

つまり、レインは異世界から地球にきた異邦人ということになる。

その世界でレインはある日を境に強さを求めるようになり、昼夜問わず、戦いに身を投じていた。

いつのまにか知られざる天才剣士なる二つ名がつけられていたが、レインからすればさして気にすることもない。

事実、国を滅ぼしたといわれる傾国の剣を使い、千人の軍勢を一人で迎撃したといわれている風の剣聖なる人物からエクシードという名の闘気術を学び、ヴァンパイアマスターから魔法も教えてもらった彼は一年もたない間の修行で人間離れした強さを有

している。

それでも、彼はまだ強さを求めており、異世界に来たからといって変わることはなかった。

その結果、剛やイヴ達と出会うことになったのだが、その際のひと悶着はすでに解決している。

ひと悶着が終わった後、本来であればレインはそのまま元の世界に戻り、また愛剣である傾国の剣を振るい、戦いに身を投じるはずだった。

それなのに、どうして彼が今、ナーブギアをかぶりベッドに横たわっているのかというのは、少し前の出来事から始まる。

全ての一件が終わった数日後、レインは剛たちと再会を果たしていた。

違う世界から来ていたレインはすぐに帰るつもりだったのだが、悲しきかな、レインは己が強くなることに固執しすぎていたせいで、それからこの世界のスポーツ選手という人たちがする試合を見回っていた。

その日は高校の柔道の試合を見ていた。

なぜ高校生という発展途中の試合を見てくるかというのと、発展途中の人の動きを見ることで、欠点を探し、何がだめかということ把握できるといふ理由だ。

そして、何よりも試合会場に入りやすい。お金を払わなくていい上に怪しまれることもない。

そうして見に来ていた試合会場でレインは剛とイヴ再会した。いわく、剛の友人が出演しているのことだった。

そこからは、流される形で剛達と夕食を共にすることとなった。

レインからすれば不本意ではあるが、ただで飯にありつけるのならいいだろう、ということで無理矢理納得することにした。

彼らの住んでいる家に招かれ、剛とイヴ以外は用事で外出中だったことは不幸中の幸いだっただろう。

組織にいたときからの知り合いである学者は、無駄に自分のことを心配してくるため、会いたくはなかったのが本当によかった。

「そういうえば、ソードアートオンラインみたいシステムに管理された世界でもレインの強さは通用するのかな？」

居心地悪そうに無言で晩御飯であるオムライスを食べていた剛が唐突に口を開いた。

無視をするという選択肢もあったが、己の強さが通用するのか、という言葉に反応せざるをえなかった。

「そのソードアートオンラインっていうのはなんだ？」

「ゲームだよ。フルダイブ……っていつても通じないか。えっと、機械を使って意識だけを仮想世界に送り込むっていう技術を使ったゲームで、まあ、人間が作り出したルールが基盤になってる異世界みたいなものなんだけど。そこでは魔法はなくて剣とかの武器だけで戦っていくらしくてさ。その人間が作り出した異世界に一人人を閉じ込めて、死んでもいいゲームから死ねないゲームになってちよつと前に話題になったんだよ」

ゲームをクリアすれば開放されるらしいけど、いまだにとらわれた人たちは眠り続けたままだけどね。

と、剛は付け加えた。

それを特に驚くこともせず、レインは冷静に聞いていた。

「で、ふとゲームっていう世界でもレインみたいな人間の枠から逸脱した強さは通用するのかなっておもってさ」

レインは少し考えてからオムライスをすくって口に運んでいたスプーンをとめた。

「ゲームに関してはよくわからないが、理不尽なことではなく、いつもどおり動けるのなら魔法が使えなくても問題は無い。むしろ、そこに行くことで強くなれるのであれば行ってみたいぐらいだ」

そう冷静に発言したレインは再びオムライスを食べるためにスプーンを動かし始め

る。

正直、エクシードを読み取れるかわからないが、たとえそれがなくてもある程度なら通用はするだろう。

むしろ、エクシードも魔法も制限された状態で戦うことで強くなれるのであれば、レインにとっては望むところである。

が、その言葉がレインの運の尽きだった。

そこからはあれよあれよという間に全ての準備が次の日の夕方には整ってしまったのである。

逃げ出そうと思えば逃げ出すことはできたのだが、いかんせん、レインもそのゲームのシステムというルールで縛られている異世界というのにも興味があつた。

聞くところによるとすでに何千人もの死者が出ているらしいそのデスゲームで無事生き残ることができればきつとさらに強くなることができると思ってしまったのだ。

元々、戦いには死がつきものだったレインにとって遊びが遊びじゃなくなったことなどたいしたことではない。

そして現在までに至るといふことだ。

デスゲームがどれほど続くかはわからないといふことで、他のSAOの被害者が病院

で受けているものと同じ処置をすることでしばらく現実世界に戻ってこれなくても大丈夫なようにしている。

場所は剛たちの組織の施設ということもあり、特に問題はないだろう。

『レイン、準備は良いか？』

レインが寝ているベッドと死なないようにするための多くの機械がおいてある部屋とガラス張りの壁で仕切られている隣の部屋で剛がスピーカー越しに声をかけてくる。

「問題ない」

『じゃあ、はじめてくれ』

まるで今から実験を始めるような感覚にため息をついてからレインは意識だけの世界に飛び込むための言葉を小さく、しかししっかりと声に出した。

「リンクスタート」

レベル1からのスタート

目の前に次々と文字が浮かび上がる。

レインは地球とは違う世界からきた異邦人であり、本来であれば読めないことで詰んでしまうところではあるが、日本に来てからすぐに捕らえられた組織によつて言葉が通じるようになり文字も読めるようになっていたのでさしたる問題にはならない。

それらを難なく操作し終えたレインの視界は徐々に暗くなつていった。

このまま始まるのかと思つたのもつかの間、視界いつぱいにノイズが走る。

何事かと思うが、自分にはどうすることもできないということがわかつていたので、おとなしく今起きている何かが終わるのをまつ。

しばらくのノイズの後、視界は真っ白に発光しだし、あまりの眩しさに閉じた目を開けたレインの視界に入つてきたのは灰色の壁だった。

壁からは百メートル以上は離れているのにもかかわらず、視界いつぱいに見えるということとはかなりの大きさということだろう。

そして、それが天井だということに気がついたのは自分が落下しているということに気がついたときのことだった。

空に天井があることに疑問を感じつつも、あわてることなく着地に備えて体勢を整える。

天井よりも地面のほうが近くにあり、レインからすれば死ぬことはない程度の高さだった。

眼下には森が広がっており、木がない開けた場所に着地できるように空中でありながらも身体をうまく動かすレインは空を飛んでいるようだった。

モンスターが徘徊しているというのは事前に聞いているのでできるだけ静かに着地を試みる。

足が地面につくと同時に膝で全ての衝撃を吸収し、見事にレインは静かに着地

ドオオン

——をすることはなかった。

いや、レインとしては静かに着地をしたつもりだった。

実際、自分自身には大した衝撃はない。

にもかかわらず、すさまじい轟音が鳴り響き、ありったけの土煙が舞った。

そして地面には紫色の文字が浮かんでいる。

おそらく、これがシステムというやつなのだろう。

轟音と土煙のわりに地面は全くえぐれていない。

予備知識として剛からはいろいろと聞いていたので、落下によるダメージは感じなかったが、一応自分のHPバーを確認する。

視界の左上にある、RAINという自分の名前が書かれている横にあるバーを見ると多少は減っているものの、許容範囲内だった。

初期装備として腰についている軽い剣を引き抜き一振り。

それだけで周りの煙は晴れたが、レインは身体の違和感のなさに驚く。

先ほど、文字がいろいろ浮かぶときに自分が操作するキャラクターを作る画面があった。

そのとき、顔に関してはめんどくさいと思い最初の顔から何も変えずそのまま進んだが、身体に関しては忠実につくろうとしたものの、よくわからないのと時間がかかりそうだったので身長を同じにする程度しかできなかった。

にもかかわらず、本来感じると予想された違和感はなく、今のレインの身体は現実世界とほとんど変わらなかった。

何がどうなっているかわからないが、現実の自分と同じになっているのだろうとレインは察する。

なぜなのかわからないがレインにとってはうれしいことなので特に理由を考えるとことはしなかった。

さて、これからどうしたものか。

先ほど空からこの薄暗い森を観察したが、結構な広さがあった。

森から抜けるのは少し時間がかかりそうだがとりあえずこの場所から動かなければいけない。

そう思い、一步を踏み出したところで、目の前に光のエフェクトと同時になにやら動物を模した生き物が現れた。

自分よりも高い位置に顔があり、全身に毛をまとい右手に棍棒、左手になにやら紐のついたつぼを持っている。

「これがモンスターか」

抜き身のままだった愛剣に比べると心もとない剣をだらりと下げたまま身構え、モンスターを注視する。

すると、敵の頭上に赤黒いひし形がうかび、その上にはドラゴンエイプという文字と緑色のバーが現れる。

おそらく、敵の名前と体力ゲージだとあたりをつけて、改めてドラゴンエイプに集中する。

ドラゴンエイプがこちらに向かって駆け出したと同時にレインも地面を蹴った。

「むっ……」

思っていたスピードが出ず、一瞬顔をしかめるがすぐに戦闘に思考を切り替え、ドラゴンエイブが振り下ろしてきた棍棒にあわせて剣を振り上げはじき返そうとする。

モンスター自体はレインからすれば大して強くはないが、そこでもまた誤算が生じる。

押し返すだけの筋力が足りないうえに、棍棒に当たった瞬間、剣は見事に弾けとんで一瞬で壊れた。

このままでは自分に棍棒が当たると瞬時に理解したレインは無理矢理身体を動かし、ぎりぎりでかわす。

その一瞬の攻防でレインはシステムというものの理不尽さを実感する。

身体が思うように動かないのも、剣が砕け散ったのも、おそらくシステムというもののせいだろう。

雲行きがいきなり怪しくなってきたと思いつつも、レインは逃げることなくドラゴンエイブと向かい合う。

が、突然そいつは弾けて青い欠片をぶちまけて消えた。

「今日は迷子が多いんですかね？」

「命大事にとって世界のはずなんだけどな」

弾けた青い欠片の向こう側に人の影が二人分うつすらと浮かび上がる。

一瞬、また違う敵なのかと思ったが、全くこちらに対して攻撃してくるそぶりもなければ、よく見るとモンスターとは違い、グリーン色のひし形が見えた。

「えっと、武器が壊れたつぼかったから手助けしたつもりなんだけど……」

大人しそうな同年代ぐらいの少年が恐る恐るといった様子でこちらをうかがっている。

「いや、助かった。礼を言う」

そつげなくレインが答えると、少年はほっと一息をつき、こちらに近づいてくる。

少年の横には自分よりも年下であろうツインテールの少女がちよこちよこと着いてきた。

「すごく大きな音が聞こえて、あわててこっちに来て正解だったみたいです」

「ああ。ところで、あんたはここで……ってそれ初期装備じゃないか?！」

少年はオーバーとも思えるリアクションをする。

それほどにも驚くことなのだろうかとそのときレインは思うが、それがあまりにも無謀なことだと知るのはいま少しこの世界になじんでからのことだ。

この仮想世界に来たばかりの、そしてゲームというものの事体をほとんど知らないレインにはわかるはずはない。

「まあ、たぶんその初期装備っていうやつだ。さっきここに落ちたばかりだから。君

が聞いたという大きな音もおそらく俺が着地したときのものだとおもおう」

冷静に言うレインを少年は不思議なものを見る目でまじまじと見る。

「あんた一体……」

「悪いが詳しく説明できない。というか……なぜ俺がここにいるかわかっていない」

「それって記憶喪失ってことですか……？」

少女が心配そうな表情でこちらを見ってくる。

レインはそれに対して優しく微笑む。

「いや、記憶自体はあるよ。ただ、現実世界でいろいろあって、このデスゲームに今しがたぶち込まれたばかりなんだ。てっきり街のようなところから始まると思ったんだが、まさか上空に放り出されるとおもってなかった」

あながち間違いでもないだろう、と思いながら適当に話す。

変に嘘をついたところで後々面倒になることは予想できる。

「SAOにぶち込まれたって……またなんで」

理由はレインが強さを求めたからといつても過言ではないが、ここで必死に生きる人たちにそんなことを言うのはあまりにも無粋だろう。

そう考えたレインは適当にお茶を濁す。

「まあ、そういうことを簡単にするやつらに絡まれたせいだけ言っておこう。あま

り首を突っ込むとたとえこの世界で生き残れたとしても、現実に戻った後のことは知らんぞ」

あながち間違っていない理由をレインがさらつというところ、少年は顔を引きつらせ、少女は目を逸らした。

「と、とりあえずこの森を抜けようか」

「そ、そうですね」

そう言つて歩き出した少年は、一步を踏み出したところで突然ピタリと止まったかと思ふと、すごい勢いでレインに近づき、両肩と思いつきり掴んできた。

殺意がなかったため、とくに避けることなく肩を掴まれたレインだったが、ぐいっとな顔を近づけられたので、避けておけばよかったと、頭の隅の方で思った。

「いきなりなんだ」

「いきなりなんだじゃない！あんだ、ついさつきここに来たばかりだつて言ったな？」

「言ったが」

「その、ついさつきここに来たばかりで初期装備……。まさかと思うがレベルはいくつだ？」

目の前の少年の目つきはかなり真剣だった。

しかし、

「レベルってなんだ？」

レインはゲームというものに関して知識は皆無だった。異邦人なのだから当たり前
といえは当たり前だ。

真剣そのものだった少年の目は大きく見開かれる。

「えっと、レベルって言うのはその人の強さを表した数字で……じゃなくて!!あ
あもう！右手借りるぞ！」

そう言いながら、少年はレインの右手を掴むと人差し指と中指を揃えさせて縦に振つ
た。

同時に鈴の様な音になり、白くて薄い板が目の前に現れる。

それには色々と文字が書いてあるが、じっくりと見る暇もなく、少年がレインの右手
を動かして、その板でなにやらいろいろしている。

「おい、一体なにを——」

「やっぱり……」

少年はとある場所を顔をひきつらせながら見ている。

何事かと思い、レインも少年が見ているところを見る。

白い板には、左上にあるものと同じように、自分の名前とHPゲージが書かれている。

それに付け加えて、性別やスキルというものも書いてあり、少年の言うレベルも書

いてあった。

その横には数字の一という文字が周りの広い空間も相まってかなり目立つ形で書いてあった。

「この一というのがレベル、つまり俺の強さをという訳か？」

であれば、不服以外の何者でもない。

一といえば数字の中でも一番最初を飾るものだ。

つまり、これが指すのは、レインが一番弱者だということだ。

その数字はまるで、なぜお前は自分が強いと思っていたと、お前は結局だれも守るところとは出来ていないだろうと、お前なんかの強さでは誰も守れないと言ってきているようだった。

不服に思うと同時に、まさにその通りだと思った。

「待ってください!! 一ですか?! レベル一なんですか?!」

先程まで黙っていた少女がかなり困った顔でこちらにせまってくる。

「間違いないよ。っていうかあんた、ここのこと何も知らないのか？」

「知らない。この白い板も初めて見た」

「こりや、参ったな」

先ほどのレベル一という弱者である証を見たことと、少年と少女を困らせていること

に、レインは不甲斐なさと自分に対しての憤りを感じた。

何がゲームであろうと大丈夫だ。

ここに来た瞬間、自分は弱者になり、名前も知らない同年代の少年少女に迷惑をかけているではないか。

「迷惑をかけてしまっているようで申し訳ない。剣は壊れてしまったが、それでも逃げ足には自信がある。この世界は死と隣り合わせだというし、足でまといの俺はほっといてくれていいから——」

「だめです!!」

これ以上他人の負担にならないようにと、誰も守れない自分が誰かと行動するなどあつてはならないことだと思い、別れを告げようとしたレインの左手を少女が突然掴んだかと思うと、ぎゅつと握りしめた。

「この世界はゲームですけど、HPがなくなってしまうたら本当に死んでしまうんです!! 突然ここに投げ出されて何も知らないあなたを放って行くなんでできません!」

「いや……でも……」

「でもじゃないんです!」

レインは助けを求めるように少年を見ると、少年は小さくため息をついた。

「ニュービーのあんたが一人増えたところで、俺がいれば何の問題もないからおとなし

く一緒に街まで来てくれると嬉しい。さつき出会ったばかりの人とはいえ、こんなところに置いていったら不安で寝れないよ」

「そうです！寝れません！もしかして、そのまま死んでしまったんじゃないかって考えて泣いちゃいます！」

少女の泣いてしまうという言葉は、常時ぶつきらぼうなのにもかかわらず、女の子に對してはこれでもかというほどに優しいレインを折れさせるのには絶大な効果があった。

「……わかった。俺はレインだ。しばらくの間、よろしく頼む」

「俺はキリト。よろしく」

「私はシリカっていいいます。私もキリトさんに比べれば弱いですけど、ここでならソロでも行動できる程度のレベルなので安心してくださいね」

にこにここと笑うシリカに、よろしくといいながら微笑み返す。

この世界で強いのであろうキリトと一戦交えたいと思いつながら。

謎の多い初心者

キリトはなぞの青年、レインのことを考えながら、一匹目のドラゴンエイブを屠っていた。

先ほどここに上空から落ちてやってきたという青年。

デスクゲームであるSAOへの途中参加をさせられたという彼が何者なのかを考えるのは当たり前のことだろう。

彼の口ぶりからは本当に実在したのかよ、といたくなるような闇の組織的なものが背後にはあるような感じだった。

キリトが一撃で三匹現れたドラゴンエイブのうち一匹を屠っている間に、シリカはきちんと一匹の対処をしており、ゲージはすでに半分になっている。

残った一匹も本当は先ほど屠った一匹と同時にキリトが対処する予定だったのだが、いかんせん三匹とも離れた距離に出現したので、仕方なく放置という形でレインにはキリトの近くにいてもらうつもりだった。

そう、近くにいてもらうつもりだったのだ。

にもかかわらず、あろう事かレベル一の彼はふらふらと残りの一匹に近づき、攻撃を

避け始めたのだ。

ついさつきここに放りだされたばかりのレベル一であるはずのレインが、だ。

剣を渡さなければ無茶はしないだろうと思ひ、そのまま放置したことをキリトは後悔する必要もないほどに、レインはすべての攻撃を最小限の動きで攻撃を避けていた。

そのうえ、モンスターを翻弄させていたのだから本当にお前は何者なんだと聞きたくなる。

しばらくの間、あっけに取られてみていたものの、避けるだけでは敵のヒットポイントは減らないのであわててキリトが一撃をあたえて屠る。

そして、レインは会ったときから変わらない大して感情のこもっていない顔で

「剣を持っていないのを忘れていた」

と、つぶやいた。

「いや、そういう問題じゃないからー」

キリトの叫び声は迷いの森で悲しく響いた。



ところ変わって、シリカお勧めのレストランに三人は来ていた。

最前線に比べればだいぶ下の層に来ているにもかかわらず、キリトは無駄に疲れを感じていた。

言わずもがな、目の前でシリカにウィンドウの扱い方やスキルなど、根本的にわかっていないと強くなることすらできない部分を教えてもらっているレインのせいだ。

あまりの無知っぷりとレベル一とは思えない動きをする彼をNPCで何かしらのイベントかと思ったが、ウィンドウを開けたということはプレイヤーで間違いないだろう。

つまり、本当に彼は何者かによつてこのデスゲームに放り込まれたプレイヤーということだ。

むしろ、一番最初に彼のウィンドウを開いてレベル一という絶望的な数字をみたのはキリト本人だ。疑いようがない。

だからこそ、自分が彼を守りながら街までつれてこようと思ったのだが、ここまで疲れることになるとは思わなかった。

というのも、レインが全くとなくおとなしくしないのだ。

ドラゴンエイプへの対処をみて、剣だけはとりあえず持たせておこうと渡したのだが、それが間違いだった。

森を抜けるまでは、キリトが誰よりも早く動くことでレインは何もしなくてもいいよ

うにしていたのだが、そこから街に来るまでの間で、突然目の前にポップしたモンスターにレインがいち早く突っ込みに行ったときは肝が冷えた。

レベル一とは思えない動きで敵の懐に入ったレインは、キリトが渡した剣で切り付けたのだが、レベル差というものは理不尽にも大したダメージを与えなかった。

あわててキリトが駆けつけることで大事には至らなかったが、そのときレインはキリトに向かって

「お前はやっぱり強いんだな。後で手合わせしてくれないか？」

と言いつ放ったのだ。

はあ？

と返すしかできなかったキリトを誰が責めようか。

キリトとの決闘はレインのレベルがある程度上がったらということ収まり、レインがモンスターを見るなり飛び込んでいくのはシリカの願いによってどうにかなくなった。

そこまでならまだここまで疲れることはなかっただろう。

精神的にさらに疲れたのは町に戻ってからだ。

初期装備ということをしつかり忘れて町に連れていったことで、レインのことをちらちらと見る人が多かったのは、気が回らなかったキリトのせいでもあるので仕方がない

といえよう。

レイン自身も人目のことなど全く気にせず、キリトたちについて歩いてきていた。

疲れさせたのは、中層ではそれなりに名が通っているらしいシリカに声をかけてきた人たちへの対応だ。

シリカに対しては時折優しい笑顔を見せたり、シリカの押しに困った表情を見せたりしていたし、無茶な行動をしたりしているを見たりしているので、キリトからすれば世話の焼けるお兄さんのような感じだった。

しかし、百七十以上はあるであろう身長にガタイのいい体つきをしていて、精悍で整っている顔は表情がかなり乏しいせいで、何も知らない人からは相当威圧感があるようで、初期装備ということも相まってシリカに声をかけられた人にやたらと騒がれた。

「初期装備のやつがなに粋がってんだ」

「かつこいいだけで何しても許されると思うなよ」

などといわれているときは、軽くあきれた様子だったのだが

「弱くて誰も守れないくせに一緒に行動するな」

といわれた瞬間、かすむ様なスピードで動いたレインの右手は喚いていた男の顔面をわしづかみにしていた。

「誰が誰も守れないだど?」

と底冷えするような声で言ったときは先ほどまでのレインと同一人物かと疑うほどに豹変し、ただでさえ乏しい表情はさらになくなっていった。

呆然とすることしかできなかつたキリトと違って、咄嗟に飛びついたシリカによって正気に戻ったレインはあつさりと手を離し、すまなかつた、と一言小さく言つて、男の顔をわし掴みにしていた手と同じ右手でシリカの頭をなでた。

結局その場合は、シリカが丁重にお断りをして事なきを得たが、どつと疲れを感じた。そしてさらにその後だ。

キリトとシリカが出会う前にシリカがパーティーを組んでいた人たちと遭遇したときのことだ。

ぐだぐだとシリカに嫌味を言っていたロザリアが、レインを見た瞬間に目の色を変え、そんな可愛いだけのお子様じゃなくて私と一緒にパーティーを組まないかといつてきたのだ。

レインがかっこいいのはキリトも認めてしまうので誘われるのは自然な流れだった。めんどくさいことこの上ないが、適当にやんわりと断つておけばいいものをレインはというと

「申し訳ないが性格の悪い女より優しい女の子と俺は一緒に行動したいので断る。あん

「とも見た目はいいんだから性格を改めたほうがいいぞ」

「などと褒めてるのか貶してるのかよくわからないことを言ったせいで、今度はキリトがフオローを入れる羽目になった。」

「おかげさまで無駄に疲れているというわけだ。」

「底冷えるような声を出していたときの怖い表情と、人を貶しているときの飄々としている表情と、現在シリカに教えてもらっているときの優しい表情は、本当に同一人物なのかと思ってしまう。」

「ぼけつとしながらそんなことを考えていると、先ほどNPCに注文した料理と飲み物が来た。」

「パーティ結成を祝して」

「かんぱーい」

「キリトとシリカがこつんとコップをあてる。」

「次はレインと思いコップを差し出した。」

「もしかして俺もか?」

「当たり前だ。というか、あんたにはシリカとの用事が終わってもしばらくは俺といってもらうぞ」

「明らかに、なぜだ、という顔をしてくるレインに思わずキリトはため息をついた。」

「あんたみたいなのを放っておけるわけないだろ。詳しい話はシリカとの用事が終わってから話すから」

「だが——」

「これは強制だからな？ 四六時中俺と一緒にいろとは言わない。あんたがこの世界に慣れるまでだ」

「……わかった」

不服でしかなさそうな顔ではあるが、一緒に行動してもらおうしかなかった。

レベル一だということ以外に、レインはこの世界のことを知らなさ過ぎる。

どこかのギルドに連れて行って面倒を見てもらうことも一度は考えたが、ここまでのレインの行動を考えると、集団の中に入れるのはやめておいたほうがいいのは明らかだ。

だからといって知り合いに渡すには気が引ける。

いろいろ考えた結果、レインの面倒を見るのはソロで行動している自分が最適だと判断したのだ。

「んじゃ、乾杯」

「乾杯」

「キリトさんがついてくれるなら安心ですね。レインさん、少しの間ですがよろしくお

願います」

「よろしく頼む」

シリカとレインもコップを合わせる。

ひとまずはどうにかなりそうので安心する。

「おいしい。あの、これは……?」

シリカが不思議そうな顔をする。

おそらく、この飲み物をこのレストランでは飲んだことがないからだろう。

それは当たり前のことだった。

「NPCのレストランはボトルの持ち込みもできるんだよ。俺が持ってた《ルビー・イ

コール》っていうアイテムさ」

キリトは自慢げに話しながらレインの口にもあっているか不安におもってを見る。

彼は特に気にすることなく、普通に飲んでる。仏頂面からはおいしいと思ってるのかそれともまずいと思ってるのかはまったく読み取れない。

普通に飲んでるということは、まずいわけではないのだろうと思いつくことにした。

「カップ一杯で敏捷力の最大値が一も上がるんだぜ」

「そ、そんな貴重なもの……」

申し訳なきような顔をするシリカをみてあわててフオローを入れる。

「酒をアイテム欄に寝かせてても味が良くなるわけじゃないしな。俺、知り合いもいないから、開ける機会もなかなかないし……」

自分で言いながらも悲しくなったが、涙をこらえておどけたように肩をすくめただけに抑えた。

「……酒?」

レインがつぶやきながら盛大に顔をしかめた。

その視線はコップにまだ残っているらしいルビー・イコールに注がれている。

「まあ、酒って言ってもデータの世界だから酔うわけでもないし、ただのジュースみたいなものだよ」

「しかし、日本という国は未成年は酒を飲んではいけなかったんじゃないのか?」

意外にもお堅いレインに驚きつつもキリトは特に気にするわけでもなく会話を続ける。

「まあな。でもこんな世界では誰も気にしてないよ。お前も自分は飲むくせに未成年には飲むなって言う質なのか?」

「誰が何を飲むかが、それで後悔しようが人の勝手だと思ってるが、自分が飲むのはまた話が違うだろ。成長の妨げになるものは極力避けてきているからな。俺は飲んだこと

はない」

「確かに、お酒って成長期に飲むのは駄目だって言いますもんね」

シリカがそういいながらもルビー・イコールを飲む。

「成長期だけだろ？ レインはもう特に気にすることないんじゃないのか？」

レインは身長も高く、筋肉もしつかりついている。ゲームのままであればそれは嘘のものだろうが、この世界では自分の体つきも顔も、茅場晶彦のせいで現実のものと同じにされているのだから途中参加といえど、現実と同じものになっているはずだ。

つまり、目の前にいるまるでデザイナーが作ったような精悍な顔立ちも、程よく鍛え上げられている身体も本来の彼なのだ。

彼の容姿と落ち着いた雰囲気がいまって二十歳は超えているだろうとキリトは思っている。

そんなキリトの推察をレインは容赦なく木っ端微塵にする。

「キリトよりは身長はあるが、まだこれからも成長するつもりだぞ。俺はまだ十五歳だからな。ここで止まるつもりはない」

と、レインが拗ねるようにそっぽを向きながらルビー・イコールを呑む。

キリトはというと、開いた口がふさがらないという言葉を体現していた。

数秒後、我に返ったキリトは立ち上がって食い入るようにレインに向かって叫ぶ。

「待て待て待て待て。嘘だろ?!」

「うるさい」

盛大にしかめられた顔を向けられたキリトは思わず、怖いと思ってしまう。

「ま、まあまあお二人とも落ち着いて」

シリカが慌てて仲裁に入る。

おかげで少し落ちついたキリトは椅子に座りなおす。

「わ、わるい」

「俺もなのか」

「レインさんもです!」

「そうか」

妹にしかられているようにしか見えないレインをキリトは自分のことを棚にあげてにやりと見る。

それに反応したレインは眉間にしわを寄せてこちらを見返す。

なるほど、こういう反応は同年代なのを納得できた。

「てつきり二十歳ぐらいだと思ってたよ。もしかして、その性格は作っているのか?」

「作ってない。俺は元々こんなものだ」

S A Oどころか、ゲームの知識すら全くない彼が第一層の迷宮区で知り合った少女と

かぶる。

そう思うと、標準装備が無表情というレインとも仲良くやって行けると思え始めた。

むしろ、彼女とは違い同性だということもあるので、彼女よりやりやすいかもしれない。

同年代だと聞いた瞬間、レインとの距離がぐつと近くなった気がしたキリトはふつと笑ってしまう。

「むしろ、さっきの性格が悪い女の方が作つてるとしか思えんだらう」

「確かにそうですね。なんであんな意地悪言うのかな」

あんな、とは先ほどのロザリアの事だろう。

「君は、MMOはSAOが？」

「初めてです」

「そうか。——どんなオンラインゲームでも、キャラクターに身をやつすと人格が変わるプレイヤーが多い」

キリトは従来のMMOと今のSAOをくらべて、自分が感じる差異をシリカに吐露する。

「でもな、他人の不幸を喜ぶ奴、アイテムを奪う奴——殺しまでするやつが多すぎる」

彼女が妹に似てるからなのか、また違う理由なのかはわからない。

理由が何なのかはわからないが、思っていることを口から吐き出すことを何故か止めることはできなかった。

「俺はここで悪事を働くはやつは、現実でも腹の底から腐ったやつなんだと思っている」ふと、シリカを見ると気圧されたような表情をしている事に気づく。

「すまない、と軽く笑う。」

レインは腕を組んで話しを聞いているだけだった。

その佇まいは同年代とは思えない。

「俺だって、とても人のことを言えた義理じゃないんだ。人助けだってろくにしたことないしな。仲間を見殺しにしたことだって」

今までのことを、まるで走馬灯のように思い出す。

見捨ててしまった人、見殺しにしてしまった人、そして、助けることの出来なかった人たち。

「キリトさんは」

ふいにシリカにコップを握りしめていた手を両手で包まれる。

そこでようやくキリトは自分が力を込めてコップを握っていたことに気がついた。

「キリトさんは、いい人です。あたしを、助けてくれたもん」

反射的に手を引つ込めようとしたが、シリカの顔を見てそれはやめた。

「俺が慰められちゃったな。ありがとう、シリカ」

微笑みながらそう言うと、一瞬固まったシリカは直ぐに手を話した。

「ど、どうかしたか?」

「いや、あの、えっと、レインさんはこの世界についてどう思いましたか?」

シリカは突然まだここに来たばかりのレインに話しをふつたが、まともな答えは帰ってこないだろうとキリトは思う。

しかし、今日何度目になるかわからないが、またもやそれまで閉じていた目を開けたレインにキリトは驚くことになった。

「俺には、この仮想世界の人たちは現実逃避をしているようにしか見えないな。もともと、この人達は死との距離がある。もちろん、現実世界での話なんだが。ここでは、基本的に病気で死ぬ。あとは事故とかもあるが、それもどこか他人事だ。だから、この世界の現実世界では死というものが遠く離れた場所にある」

淡々と低音の効いた声が耳から入って身体に染みるように入ってくる。

レインの話は淡々と続く。

「だから、さっきの女も突然近くに来た死に受け入れられていないのだろうと、俺は思うな。まあ、例えゲームじゃなくてもクソみたいなやつはいるがな。自分のテリトリーに入るだけでキレル奴、種族が違うだけで嫌悪する奴。それから、弱者だけを狙う卑怯な

奴とかな」

怒りを孕んでいるわけでもない声と、無表情ではないのにも関わらず読み取れない表情をしているレインを見ると、何か口を挟むことも、言い返す言葉も何も思い浮かばなかった。

「キリトには勝手にしとけと言うが、シリカのような女の子が気にすることではないさ」「俺には勝手にしとけてあまりにも酷くないか?!」

とんでもない毒と優しい言葉を吐くレインに思わずキリトは突っ込む。

思わずシリカが小さく笑い出し、重たかった空気は消え去った。

知られざる天才剣士

夕食を食べ終わった後、一人でレインは街から少し離れた平原に来ていた。

ここは迷いの森というキリト達と初めて出会った場所から、宿をとった街に帰るときに通った場所になる。

夕食を終えたレインは街を散策すると嘘をついてここに来ていた。

理由はいうまでもなく、レベル上げのためだ。

レベルというものを上げなければ、たとえ技術が高くてもレベルが低ければレベルの高い敵を倒すことができないというのはシリカの丁寧な説明で、ゲーム初心者どころか何も知らないレインにも理解をすることが出来ていた。

数値のみで強さが決められているこの仮想世界というものにうんざりする。

そして、レベルを上げなければキリトからは解放されないのも理解できている。

こここの層の敵と今のレインが戦えば一撃で死ぬというのは、散々キリトに聞かされているので重々承知の上だ。

そんな危険をおかしてまでここでレベルを上げようとしているのは、レインにとってこの層のモンスターの動きは危険ではないというからでしかない。

極論で言えば、当たらなければ死ぬことは無いのだ。

今まで見てきた程度の動きしかしないモンスターへの攻撃を受けるのであれば、あのにきに、大切な人が死んだときに一緒に死んだ方がマシだったと思える程だった。

それらの理由で、レインは一人、レベル上げに勤しみに来たということだ。

余談ではあるが、レインはキリトと同じ部屋で寝ることになっている。

レインとしてはこの平原で朝方まで寝ることもなく特訓するつもりなので、あまり関係はないのではあるが。

慣れたとは言えない手つきでウインドウを操作し、夕食後にフレンド登録やパーティ申請をし、その際に貰った装備に着替える。

こちらに來た時に着ていた簡素な服装と大差ない簡素なものだが、キリト曰く、レインからすれば課金というものをしたようなものらしい。

課金というのが詳しくはわからないが、どことなく嫌な空気を感じるのです。うちの服をキリトに返して自分で調達しようと思っっている。

外だということを全く気にせず、黒いシャツに七分丈のコート、ベルトがたくさん付き、布が邪魔になりにくい黒いズボンに着替え、ハイカットのブーツを履き、ハイディングが三、上がるといらい黒のマフラーを装備しおえ、最後に剣を実体化させた。

一撃と砕け散った最初の剣とは違い、キリトから借りた剣はずっしりとしていた。

それでも、やはり愛剣である傾国の剣に比べると軽い。

筋力パラメーターというもののせいでレインが現在持てる限界の重さのものを借りても傾国の剣には全く届く気配はない。

「しばらくはレベル上げと筋力を上げんといかんみたいだな。速さも足りんがまあそっちは枷だと思えばいいだろう」

自分に言い聞かすように独白すると、近くに現れた蜂を巨大化させたような敵に視線を向け、だらりと剣を下げたまま突進していった。

巨大蜂が気付いて反応するまでに接近に成功したレインは細くなっている関節を狙ってぶら下げていた剣を一閃する。

本来であれば引きちぎれて敵は瀕死に陥っていただろうが、ただ赤い筋がついただけで終わる。

ようやく攻撃できるようになった巨大蜂は大きな体の先端についている針をレインに向かって突き刺そうと振りかぶるが、レインは身体を後ろにそらすことでそれをかわす。

そのまま地面に手を突いたレインはバク転をする要領で下半身を持ち上げる。

同時に腰をひねり、巨大蜂の間だらけの横腹に右足で蹴りをくらわせる。

「っー」

渾身の蹴りであったものの、蜂はびくともしない。

舌打ちをしながらも、蹴っていないほうの左足を使い、蜂を土台にして飛ぶ。

身体をひねりながら見事に着地するさまは体操選手顔負けだ。

距離をとったレインは蜂のHPゲージを見てみるとほとんど削れていなかった。

思わず顔をしかめるが、思考を切り替えてもう一度蜂に向かつて低姿勢で駆け出す。

そこからは一方的な戦闘とも言えないものになった。

効かないとわかった体術を一切使わず斬撃だけを蜂に食らわせる。

全ての攻撃を急所に叩き込み、蜂がこちらに攻撃してくることがわかると器用に身体をひねり避け、そうしながらも隙だらけの蜂に切りつける。

時には蜂の頭上を、時には地面を縫うように、しかし蜂からは一切離れることはなく、レインは一方的に蜂のHPを少しずつではあるが、それでも着実に削っていった。

五十分ほどかけてようやく残り一割まで削ったところで、モンスターが出現するとき聞こえる独特の音がレインの耳に届いた。

それと同時に対処している蜂が攻撃を仕掛けてきたので新たに出現したモンスターを確認するために後ろに飛び退き、バク宙をして身体をひねる。

音の聞こえた方に視線を移すと、対処している蜂とは別の蜂が姿を現していた。

そいつはすでにレインのことを視界に捕らえているらしく、こちらに向かつて飛んで

くる。

着地したと同時にレインは残り一割のゲージを早急に削るべく、元々対処している蜂に向かって駆け出す。

しかし、レインのレベルは変わることなく一のままだ。

次の蜂が接近するまでに削りきれられるわけもなく、レインは二匹の蜂を同時に対処せざるおえなくなった。

今は一撃どころか、かすり傷ですら致命傷と成りえるため、細心の注意をはらって攻撃を避け続けるしかない。

先ほどまでは蜂から一切離れることなく戦っていたレインだが、さすがに二匹を同時に相手取るとなるとそうするわけにもいかず、一度距離を大きく開けて体勢を整える。

すでに五十分も戦っていたにもかかわらず、レインの呼吸は一切乱れていない。

目を閉じて集中し、蜂達の気配を感じ取ってみる。

現実世界とは違い、読みにくくはあるが蜂たちから微量に気配を感じ取れた。

データという仮想であろうがそこに何かがあるということにはかわりないおかげだろう。

「いける」

レインはさらに集中力を高めて駆け出すと、一匹目の蜂に向かって大上段に剣を構え

て勢い良く振るおろす。

二匹目の蜂が隙を突いて後ろから攻撃を仕掛けてくるが、かすかな気配を頼りにレインはそれを避ける。

それはもう人間のする動きではなかった。

二匹の蜂の合間を踊るように動き回るレインはあまりにも綺麗で、レインに振り回されて踊らされている蜂はあまりにも哀れたつだ。

レインは残り一割だった蜂のHPゲージを集中的に削り、十分弱で削りきった。

青いパステイクルが舞い、レインの目の前にはドロップ品やレベルアップの通知が届くが、それを気にすることなく、二匹目の蜂の処理を始める。

三十以上も上の蜂を一人で倒しきったレインは一気にレベルがあがり、そのおかげで二匹目に与える一撃でのHPゲージの減りは一匹目に比べると微量ではあるが増えた。

先ほどまでの動きにくさも少し緩和され、すでに超人的な動きをしていたレインのスピードもさらに上がる。

もし、蜂達に意識というものがあつたのであれば、驚異的な動きをするレインから逃げていただろうし、新しく出現した蜂も近寄ることはなかっただろう。

しかし、近くのプレイヤーに攻撃を仕掛けるようにプログラムされている蜂たちは、蜜に吸い寄せられるようにレインの元に定期的に自ら経験値になりについていた。

虐殺といっても過言ではないレインのレベル上げは三時間ほどたつても終わることはなかった。

この間、レインはダメージを一切受けていない。倒した蜂の数は四匹になった。着々とレベルを上げ、一匹をしとめるのにかかる時間も少しずつではあるが短くなっている。

レイン自身も徐々に重かった身体が軽くなってきたこともあり、戦いやすくなってきた。

元の世界にいたときから鍛錬を夜通ししていたこともあり、レインの顔には疲れはあまり見えない。

最初は宿に帰るつもりはなかったが、キリトが寝てるうちに戻らないとうるさそうなのがし始めたので、きりの良い五匹を目安にしている。

つまり、今対処している蜂でラストということになる。

定期的にあつてくる蜂のせいで基本的に二匹同時に相手をしなければならなかったのだが、今は丁度追加分の蜂はおらず、一対一になっている。

「なにやつてんだ!!」

後一匹、と気合を入れようとしたときにレインの耳にすでに聞きなれた声が聞こえ

た。

しかし、気にすることなくレインは戦闘を続けた。

「うるさい。少し黙っている」

走って近づいてきているであろうキリトに向かってレインは言う。

たとえ、少しレベルが上がったとはいえ、攻撃を受けるわけにいかないことにはかわらない。

へまをするつもりはないが、無駄に騒がれるのも嫌だと思ったための言葉だった。

「くそっ、後で説明してもらってからな！」

視界に入ってきたキリトが、新しくレインに近づいてきてた蜂に向かっていくのが見える。

今対処しているやつだけに集中しろということだろう。

キリトの行為をありがたく受けとり、レインは目の前の蜂だけに集中する。

すでに二割ほど減っている敵のHPゲージを削り、敵がパーティクルになってはじけ飛ぶまでは一瞬のように感じた。

「ん」

満足げにうなずくとレインは剣を一振りして鞘に収める。

「ん、じゃねえよ！ 何一人でこんなところまで来てるんだよ！」

すっかり存在を忘れていた。

というわけでもないが、飛び掛ってきたキリトにレインは多少驚く。

「なぜといわれると、レベル上げと言うことしかできん」

「何でそんな無茶をした!」

そこでようやく、レインは自分が怒られているということに気がつく。

「俺にとつては無茶ではなかった。よく見る。俺のゲージは減っていないだろ?」

怒られている理由もわかっているのにレインの口から出るのは心配などいらんといわんばかりの言葉だった。

「そういう問題じゃないだろ。俺とシリカがどれだけ心配したと思ってる」

「……心配など俺にはいらん。される価値もない」

そう、心配などしてもらう価値はない。

「俺はこの手で人を殺したことがある。そんな俺をお前は心配するのか?」

キリトの目をしっかりとみてレインは言う。

そして、元の世界で手にかけて老人のことを思い出す。

目の前で殺される少女のことを思い出す。

自分の利己的な考えで殺した大勢の人を思い出す。

たとえ、人を守るためだとしても、人を殺したことに変わりはない。

「俺はそういう人間だ。それをふまえたうえでもう一度俺とともに行動するか考えろ」
何かをいいたそうなキリトを見つめ続けた後、レインはその場から立ち去った。

その場に取り残されたキリトはただそこに立ち尽くしていた。

この手で人を殺したことがある。

そういつたレインの目は黒い瞳がさらに黒くなったように見えるほどだった。

そして、その目が嘘ではないということを物語っていた。

今も見えているレインの背中を——伸びた背筋で頼もしく、そしてどこか孤独な背中をキリトは見ていることしかできなかつた。

もともとは、先ほどシリカに四十七層について説明しているときに、聞き耳スキルを使つて話を聴かれ、危険なことになると伝えようと思つただけだった。

キリトの目的であるタイタンズハンドを牢獄に送るということを考えれば、当たり前のことだったが、何も知らない二人からすれば怖い以外のなんでもないと思い、せめてレインには教えておこうと思つたのだ。

もしかしたら、レインのほうにも誰かがついていつているかもしれないと心配になつたキリトは、メッセージでは不安だったのでフレンド追跡を使つて、わざわざレインの場所まで行くことにし、圏外に出て行ったことがわかつたときは不幸中の幸いだったと

そのときは思った。

タイタンズハンドのメンバーに連れて行かれたのかと駆けつけてみれば、モンスターと普通に戦っているレインがおり、一瞬安心しかけたが、レインのレベルを思い出して一気に血の気は引き、気がつけば叫んでいた。

あの光景が——サチたちが死んだ時の光景が嫌でもフラッシュバックした。

レインが死ぬと思った。

また守れないと思った。

しかし、レインから言われたのはうるさいとの一言。

どうにか蜂とレインの間に入りたかったが、ピッタリとくっついて戦うレインのせいで、キリトが割り込むのは逆に危険だった。

仕方なく、レインのことを気にしながら周りに湧く蜂を仕留めることにする。

三十七層の巨大蜂のモンスターはキリトのレベルからすれば雑魚でしかなく、一撃で仕留めることができる。

次のモンスターがポップしてレインにタゲをとるまでにくらでも時間ができた。

その間に、レインの戦いを見たが、それはもう人間とは言えないものだった。

一瞬でこいつには勝てないと思った。

S A Oで数多くの人を見てきたが、これ程にも戦い慣れをしている奴は見たことがな

い。

レインが相手をしてきたモンスターがパーティクルになって消えるまで、キリトはただ呆然と見ることに出来なかった。

我に返ったキリトは心配のあまり怒鳴りつけたが、まさか人を殺したことがあるなど聞くとは思わなかった。

レインの姿が見えなくなってもその場に立ち尽くしながらもキリトは考える。

彼が本当に悪人なのかと。

一番最初に思ったのは、悪いやつじゃないという事だった。

あの目をみれば人を殺したことは本当だと思うが、今までの彼をみれば、この世界のレッドプレイヤーの様な奴ではないのは明らかだ。

どんな理由があったかはわからない。

わからないが、それはレインにとって殺すという選択肢しかなかったんだと、思ってしまう。

キリトはこれからの方針を決意すると、街に戻るために歩き始めた。



宿に戻ると、レインはレストランの一人席に座り、腕を組んで目を閉じていた。

それが寝ていると気がついたのは、規則正しい寝息が耳に届いてからだだった。

なぜこんなところで寝ているのかはさっぱりだが、たとえデータの世界でどんな体勢で寝ようと身体を痛めることがないとはいえ、さすがに部屋に入らずにこんなところで寝るのは無防備すぎる。

圈内だからといって安全とはいえないのだ。

「レイ——」

近寄って声をかけようとする、レインはまるで起きていたかのように静かに目を開けた。

「起きてたのか」

「いや、寝てた。で、人殺しの俺にお前も出て行けと言いにきたか？」

「……お前もって？」

引つかかってしまった言い回しに思わず聞いてしまう。

まずかったか、とおもったがレインはため息をついて語り始めた。

「気にするな、とはいえないなさそうだな。俺は少し前にクズに襲われている人たちを助けるためにクズたちを殺したことがある。そのクズたちには恨みもあつたから大して気にすることなく剣を振るつたよ。そして最後には俺の足元がそいつらの血で染まった。村の人たちからすれば、虐殺にしか見えなかったようだな。仲良くしてくれていた少女

も、俺の本性をみて怖がっていた。そして出て行けといわれたよ。元々旅をしていたから、特に気にすることなくその村から立ち去ったがな」

それを聞いたときに何かのイベントの話しかとおもったが、彼はここに来たばかりでイベントを何かこなしているはずがないし、NPCだというわけでもない。

しかし、それが日本で起きたことだとも思えなかった。

一瞬、ということなのか聞いてしまいそうだったが、リアルの話を持ち込むのは基本的にNGだということを思い出してキリトがぐつとこらえた。

その代わりに、違うことをいう。

「なんでレインが人を殺してきたのかは知らない。だけど、俺にはお前が悪いやつだとは思えない。むしろ、無茶ばかりしてほつとけない。だから約束どおり、お前がこの世界に慣れるまでは無理やりにも着いていくからな」

「だが——」

「そうそう」

何かを言おうとするレインをあえて無視して言葉を続ける。

「シリカもだいぶ心配してたからちゃんと謝っておけよ」

「おい」

「それと、そんなところで寝ずにちゃんと部屋に来いよ」

キリトはそういい残してきつきと部屋に戻っていった。

強引にでもしないとレインが引き下がらないとおもったからだ。

なぜ、ここまで強引にレインの世話をすることに固執したのかは、きつと今では攻略の鬼といわれる彼女のことを思い出したからだろう。

しばらくは大変そうだなとおもいながら、ベッドに入ったキリトは明日に備えて眠りについた。

◆ 一人取り残されたレインはなんともいえない複雑な表情をしていた。

翌日、レインは昨夜、キリトに強引に話しを進められた場所と変わらない椅子で起きた。

結局部屋には行かなかったのだ。

というか、いけなかった。

昨晚、なぜ人殺しだといったのに無理やりにもついて来ると言ったのかさっぱりだった。

キリトの強さを考えるとレインに合わせるのには明らかに得策ではない。

その後も散々悩んだが、結局結論は見出せなかった。

起き抜けにもう一度考えてみるが、やはりキリトの考えがわからない。

レインは仕方なく二人が起きるまでウィンドウを開いていろいろ見ることにするとにした。

そうこうしている間に、キリトとシリカが自分の元にやってきた。

「おはようございます」

まだ完全に起きていない様子のシリカが眠そうな顔でレインの前に座る。

キリトはどこからか椅子を持ってきてシリカの隣に座り、じとりとした目で見てくる。

おそらく、昨日のことを謝れということだろうというのはなんとなくわかった。

「その、昨日は心配かけたみたいですまなかつた」

「えっ？あ、昨日のことですか。レインさんが大丈夫だったのならいいんですよ」

にこりと笑うシリカをみて、あの時怖がらせたしまった少女を思い出す。

きっと優しいこの子も、自分の本性を知れば遠ざかっていくだろうとまるで他人事のように頭の隅のほうで考えた。

黒の剣士

「うわあーきれいいー」

第四十七層のフローリアというところは一面が花で覆われていた。

綺麗な景色をみてはしゃぐシリカはキリトから見ても幼く可愛いと思う。

隣に立っているレインも微笑ましそうにみている。

が、そんな和やかな雰囲気はしばらくすれば、それはもうカオスな状態になっていた。

「いやあああああああ!!」

花の形をしたモンスターに宙吊りにされるシリカ。

彼女はスカートを履いているのでキリトは手で目を覆うことしかできない。

本来であれば助けに行くべきなのだろうが、キリトが渡した装備があれば大して強い敵ではない。

それにキリトがみていれば何の問題はない。

これだけであれば、女の子が慌てていて、どこか微笑ましいだけで終わる。

しかし、少し離れたところでは、すでに慣れてしまったおかしな光景——レインがピ

エロも驚くようなアクロバットな動きで敵の攻撃を避けながらシリカを宙吊りにしているモンスターと同じタイプの敵を相手取っているというレベル性MMOの理不尽さを諸共せずにつくりではあるが着実にモンスターを屠っているという光景が続いている。

しかも

「俺のせいで遅くなるのは申し訳ない。ちゃんと着いていくから気にするな」といいだしたのだ。

最初は何を言っているんだと思ったが、モンスターを相手取りながら先に進むキリトとシリカに遅れることなくついて来た時は正直化け物かと思った。

シリカも最初は助けに行こうとしたが、レインに攻撃があたらないとわかった今では、超人的なレインの動きを時折みてはすごい一言を漏らすだけになった。

昨晚の騒動のときに、すでにレベルを五以上も上げたと聞いたときは本当はただのチーターなのではないかと思っただくらいだ。

しかし、システムに対してあまりにも無知すぎるのでそうではないのは明らかだった。

本人曰く、現実世界で柔道などの武術を一通り学んだとのことだが、それだけで納得しがない部分が多くある。

これはもう、ラスボスがレベル一で目の前に現れたと思うしかなかった。

そう思つて無理やり納得したキリトだが、実は別のゲームでレベル九十九のラスボスとして設定されていたことを知らない。

片手で目を塞ぎながら、どうしてこうなったのかと思つてみると、シリカがモンスターを倒しきつたようので、敵が弾ける音がした。

それと同時に、シリカが地面に降り立つた音も聞こえる。

「み、みました?」

「………みてない」

何をといわれることはなかったが、キリトは否定の言葉を言うしかなかった。

それから特に苦労することなくキリト達は進んでいった。

シリカは普段よりも上の層に来ているおかげもあり、レベルが一上がっている。

レインに関してはいつの間にか相当の量戦つていたようで、元々低いレベルも相まってさらに十以上レベルを上げていく様子だった。

自分も戦闘狂だといわれれば否定できないほどには自覚があるが、レインに比べればそんなことはないと思えてくる。

ちなみに、レインは今、キリトの隣を歩いていて、はしやぎながら歩くシリカを見ているので大人しい。

理由はあまりにも単純で、モンスターがポップしていないからだ。

すでにプネウマの花があるはずの場所の近くまで来ていることもあつてか、途中のポップ率に比べれば低くなっている。

「レインさん！こんなお花もありますよ！」

楽しそうなシリカはレインを手招きする。

それにレインは苦笑しながら駆け寄っていき、シリカの横に並んでしゃがむ。

年齢的に言えばシリカの方が年下だと思われるが、無茶をするレインに対して説教をしたり、この世界について説明したりしているシリカを見るとレインの方が弟に見えるのが不思議だった。

一時期に比べれば、ポップ率は低くなっており、そのおかげでカオスな景色がなくなつたことと、姉弟を見ているような和やかで暖かな空気が、普段最前線をソコで挑むキリトを穏やかな気持ちにさせていた。

そうこうしていると、ようやく目的地に着いたようで、花が咲くといわれている台座が視界に入る。

「シリカ」

台座を指さしてシリカに伝える。

何も咲いていない台座を見て少し不安そうな顔をしながらも、シリカは台座に小走り

で近づいていった。

シリカが台座のそばまで来ると、台座の中心が淡くひかり、芽が出たかと思うと、それはまるでここまで頑張つてやって来たシリカに対して頑張つたね、とでも言うようにスローモーションではあるが力強く伸びて花を咲かせた。

緊張しているシリカはちらりとキリトの顔を見てくる。

大丈夫だと言うかわりに微笑んで頷いた。

そして、そろりとシリカが手を伸ばすと、ぽきりと折れた花は自らの意思でシリカの手に収まったようにキリトには見えた。

ちらりと横目でレインを見てみると、レインも少しではあるがいつもより目を開いて見ている。

普段仏頂面で表情の変化はすくないとはいえ、彼とて感情がないわけではない。

ここに来るまでに、何度かシリカがモンスターに足をとられた時は血相を変えてシリカを助けていたりすることからわかるように、ごく普通の優しい少年なのだ。

「すぐに蘇生させてあげたいところだけど、街に帰つてからにしよう。その方が落ち着けるしね」

「はーい」

満面の笑みで返事をするシリカに、少し罪悪感を覚える。

落ちて着いて蘇生させてあげたほうがいいと言うのは本当のことだが、もう一つ、ここで使つては昨日釣ったタイタンズハンドの連中が来なくなってしまう可能性も危惧したからだ。

そのとき、ちらりとキリトを見ていたレインの目が細められていたことにキリトは気付かなかつた。



橋に差し掛かつたところで、キリトが突然足を止めた。

レインはどうかしたのかと声をかけようとしたが、真剣な表情で橋の向こうを見据えるキリトをみて、それをやめる。

「そこに隠れているやつら、出てこいよ」

キリトがそう言うのと木の影から昨日、シリカに対してやたらと突つかかつてきた赤髪の女が出てきた。

「あたしのハイドを見破るなんてね、甘くみていたかしら。まあいいわ」

「ろ、ロザリアさん……?」

くるくると指先で毛を触りながらにやりとこちらを見て笑う。

「その様子だとちゃんとプネウマの花、取れたみたいね。そしたら、それ、置いてってちょうだい」

シリカの友達をプネウマの花というアイテムで生き返らせるために、ここに来ているのは今朝聞いたのでわかっている。

そして、キリトからはそれを狙ったやつらに襲われるかもと知れないということも聞いていた。

怖がらせないためにシリカには伝えていないらしいので隣で困惑している。

落ち着かせるために、レインはシリカの頭に手を乗せる。

「キリトに任せておけば大丈夫だ」

それでも、シリカは心配そうに自分たちより前に進み出たキリトをみる。

レインも心配ではないといえれば嘘になるが、これまでの彼を見ていれば、あのような女には負けないだろうという核心はあった。

「そうは行かないな、ロザリアさん。いや、犯罪者ギルド《タイタンズハンド》のリーダーさんといったほうがいいかな？」

シリカのほうがレベルは上であろうが、レインはシリカをかばうように立って成り行きを見守る。

シリカも、レインの卓越している戦闘能力は見ていたので特に気にすることはなかつ

た。

「そこまでわかっててその子についてたの？馬鹿じゃない？」

ロザリアが醜く笑うのを冷めた目で見ながらも、レインは違うことを考えていた。

先ほど、キリトは陰に隠れていたロザリアに気がついてた。

レインも微量に感じ取れる気配を探ってはいたが、まだこの世界に慣れていないこともあつて十メートルは離れた場所の気配を感じ取ることはできず、キリトが声をかけてロザリアが出てくるまで気がつくことはできなかった。

キリトは何かここで人の気配を知る術をもっている。

その術というのは、いうまでもなく索敵スキルでしかないのだが、何も知らないレインはキリトに後で聞こうとおもっていた。

そんなことを考えていると、いつの間にか話は進んでいてロザリアの回りに新しく10人ほどの男たちが現れていた。

人の上にあるカーソルはオレンジ色をしていて犯罪をおかしているということがレインにもわかった。

「キリトさん！」

心配するシリカがレインの腕をぎゅつと握りながらキリトの名前を呼ぶ。

すると、先ほどまで嫌な笑みを浮かべていた男たちがざわめきだした。

「キリト…….?」

「全身黒い服に盾無しの片手剣……まさかこいつ、《黒の剣士》？」

「やべえよ!こいつ、ビーター上がりの攻略組だ!」

あのような奴でも知っていて怖がられているということは、やはり、キリトは相当な実力者であるとレインは確信する。

「攻略組がこんなところにいるわけじゃないじゃない!もし《黒の剣士》だったとしてもこの人数なら敵じゃない!」

ロザリアがそういうと、またいやらしい顔に戻った男たちがキリトを取り囲む。

キリトは剣を抜くことも、ポケットから手を出すこともしない。

その様子を見た男たちは好機とばかりに次々とキリトに斬りかかる。

「だめ!キリトさんが死んじゃう!」

隣でシリカが悲痛な声で叫ぶ。

本当の戦いであれば、今頃キリトは血だらけで死んでいただろう。

しかし、ここの生死は致命傷や出血多量ではなく、HPゲージだけで決まる。

ちらりと、自分のHPゲージの下に表示されているキリトのHPゲージを見ると、少し減っては回復をするということを繰り返していた。

今にも飛び掛りそうだったシリカもそのことに気がついたようで、不思議そうな顔で

レインを見てくる。

もちろん、なぜそんなことになっているのかはレインも知らない。

首を振ってわからないことを伝え、もう一度視線をキリトにもどす。

どうやら、散々斬りかかっていた男たちも異変に気付いたようで、攻撃をやめ、戸惑いの表情を浮かべていた。

「なにをチンタラやってんのよ！ 遊んでないでさっさと殺しなさい！」

ロザリアが焦りをはらんだ声で叫ぶ。

それに反応したのはキリトだった。

「10秒あたり350前後つてところか。俺の今のレベルは78。HPは約14500ほどある。俺を倒すには七分弱殴り続けてたらいんだけど、《戦闘回復》のスキルで10秒で350以上の自動回復がある。だからあんたらに俺を倒すことはできないよ」

「そ、そんなの………そんなの、アリかよ………」

「レベルに差が有るからつて………無茶苦茶すぎるだろ………」

確かに無茶苦茶だった。

いくら戦っても倒せない敵など存在していいはずはないのだ。

ゲームで理不尽さえなければと公言したレインは本当に起きている目の前の理不尽に顔をしかめる。

そして、その理不尽を超えるにはレベルを上げるしかないのだと再認識した。呆然としている男たちに向かってキリトは冷たく、吐き捨てるように告げる。

「……………そうだ。たかがレベル。そんなレベルの数字が増えるだけ。たつたそんなことで、ここまで無茶で、どうしようもなく覆せない差がつく……………ついてしま。それが、レベル制MMOの理不尽さつてもものなんだよっ！」

手は硬く握り締められていて、何かに耐えているようだった。

キリトの覇気に気おされた男たちは一歩下がる。

これで終わりだな、とおもった瞬間、一人の男が突然こちらに飛び掛ってきた。

強いものに勝てないのであれば、弱いものを狙えばいい。

そういう魂胆だろうとおもったレインは迎え撃とうと身構えたが、自分ではなく、シリカに矛先が向けられているのを理解したとき、自分の中の全てが冷めていくのをどこか他人事のように感じた。

しまった。

そうおもったときには駆けつけても間に合わない距離までオレンジのうちの一人がシリカの目の前まで迫っていた。

やめろ、と叫ぼうとしたが、その前に何かがすばやく動いていた。

何が起きたかわからないというように全員が止まっていると、パシヤンとオブジェクトが弾ける音とカランと男が握っていた剣が落ちた音が響いた。

「う、腕が……」

シリカに斬りかかっていた男は自分に何がおきたのかわからないというようになくなった右腕を眺めていた。

その男を冷めた目で見下すレインが剣をおろすのを見て、ようやくレインが男の腕を切り落としたのだということを理解することができた。

シリカが無事だったことに安心したのもつかの間、困惑したままの男にレインが蹴りを入れてその場に転がし、長い足で男の胸を踏みつけてその場に押さえ込む。

嫌な予感がしたキリトはすぐに駆け出した。

そこまで距離が離れていないのに遠く感じる。

レインは駆け出したキリトに見向きもせず剣を逆手に持ちかえ、男の顔めがけて突きおろした。

「………っ！………」

叫びながらもキリトはどうかレインの腕をつかむことで、突き下ろされた剣が男の顔に刺さる直前で止めることができた。

ようやくキリトに気付いた様子の子のレインが底冷えするような黒い瞳でキリトを見据える。

「なぜとめた？」

「……お前に人を殺させたくないからだ」

レインの視線があまりにも冷たくて今にも震えだしそうだったが、どうにか意地で耐えて言葉を続ける。

「それに、シリカの前でそんなことをしてるお前を見せるわけには行かない」

シリカの前で、という言葉に反応したレインは腕の力を抜き、目もいつもどおりの穏やかなものに戻っていた。

もう大丈夫だろうと手を離すと、レインはおとなしく剣を鞘に収める。

一息はいたキリトは、レインの足元で涙で顔をぐしゃぐしゃにしている男の襟首をつかんで引きずりながら呆然としている男たちのところに戻った。

引き摺っていた男を、オレンジギルドの男たちに投げ捨てて、腰のポーチから回廊結晶を取り出す。

そして、コートからは薄緑色の粘液に濡れた小さな短剣を取り出した。

「これは俺たちに依頼した男が全財産をはたいて買った回廊結晶だ。黒鉄宮の監獄エリアが出口に設定してある。さっきも言った通り、アンタら全員これで《牢屋》まで跳ん

でもらう。あとの面倒は《軍》の連中がしてくれるだろうさ。嫌がるなら、レベル五の麻痺毒がついたコイツを突き刺して動けなくなったらところをコリドーに放り込む」

先ほどのレインの様子にまだ震えている男たちが手に持っていた剣を手放すのに、そんなに時間はかからなかった。

「コリドー・オープン！」

システムコールを認証した結晶は砕け散って、青い光の渦が空中に現れた。

そこに男たちが次々と入っていく。

最後はロザリアだけとなったところで、彼女はようやく我に帰った。

「グリーンのアタシを傷つけたら、今度はアンタがオレンジに——」

「言っておくが、俺はソロだ。一日二日オレンジになったってかまわない」

キリトが短剣をロザリアに向けて冷たく言い放つと、ようやく観念したようでおとなしく回廊に入っていった。

その直後、回廊そのものも消滅した。

無駄に騒ぐことなくおとなしく入っていったのは、先ほどのレインがタイタンズハンドのメンバーの戦意を削ったからだだろう。

依頼が終わったことでキリトは一息つき、きよとんとした様子のシリカのところにもどった。

「……すまなかつた。シリカを囿にするようなことしちやつて。本当は俺のこと、昨日の内に言おうと思つただけけど……怖がられると思つて言えなかつたんだ」

「俺も、君に怖い思いをさせてしまつてごめん」

レインがしやがみこんでシリカの目をきちんと見ながらつぶやくように言う。

その姿は普段の豪胆な振る舞いからは想像できなかつた。

「い、いえ。驚いちゃいましたけど、二人とも私を守つてくれましたから」

さすがにぎこちなくはあるが、シリカはにっこりと笑う。

少し驚いた様子だったレインだったが、微笑み返した。

「ありがとう」

さっきの冷たいレインと同一人物とは思えないほど暖かな笑みだったが、それがでるのは今のところシリカだけなのは短い間しかまだいないキリトにもわかつていた。

そして、この優しいほうがレインの本性なのだどキリトはおもっている。

なぜなら、優しい表情のほうが彼は似合っているからだ。

「んじゃ、とりあえず街にもどろう」

「そうだな」

そういつて二人とも歩き出した。

「あ、あの！……その……」

歩き出した二人にシリカが申し訳なさそうに声をかけてくる。

何事かと、二人とも同時に振り向くと、もじもじとしていた。

「どうかした？」

レインが優しく声をかけると、シリカが顔を赤くしてうつむいた。

「あ、足が動かないんです」

レインが一瞬きよんとしたが、優しい笑顔でシリカに手を差し出した。

やはり、キリトの目にはレインが人を殺すような人には見えなかった。



「やっぱり、レインさんもキリトさんについていくんですか？」

フロアリアに着いて、シリカの友達であるピナをよみがえらせるためにとった宿屋の部屋で、突然シリカが話を切り出してきた。

「まあな」

しれつと言うレインにキリトはじとつとした視線をむける。

キリトが付き添うを嫌がっていたくせにいつの間にかレインの中ではキリトとの決闘が確定事項になっているらしく、むしろそれまでキリトがレインに付きまとわれるこ

とになっていた。

このレインから逃げれる気もしなければ勝てる気もしない。

「キリトさんも行っちゃうんですよね？」

「え？まあ、うん。さすがに五日も前線から離れてちやつてるし。それにコイツの面倒も見ないといけないしな」

「そう・・・ですよね」

少し落ち込み加減でうつむくシリカは、少し泣いているようだった。

キリトが声をかけようとするまえに、レインが微笑みかけた。

「この世界は狭いし、転移ですぐに移動もできる。この世界にいる間はいつでも会えるよ」

この世界にいる間という単語がシリカに複雑な気持ちを与える。

レインとてそんな言い方をすればシリカが困ることぐらいわかっていただろうに。

小さくため息をつく、キリトも声をかける。

「俺たちの間にあるのはレベル差なんてものは大したものなんかじゃない。所詮この世界は作られた幻なんだから。そんなものよりも大切なものはある。だから、今度は現実で会おう。そうしたら、また同じように友達になれるよ。もちろん、レインもな」

そういつてレインをみると、複雑そうな顔をした。

「俺は……」

口ごもるレインをみてキリトは思い出した。

「そういえばお前がここに来た理由って……」

はじめてであったとき、レインはまるでアニメのような裏社会の組織を匂わせた。それが本当であれば、現実世界に戻っても会うことは難しいだろう。

「そういえば、そうでしたね」

シリカも思い出したように涙を流しながらも引きつった笑顔をする。

もちろんキリトの顔も引きつっていた。

「いや、まあ……」

困ったようにレインは頬をぼりぼりとかいた。

「えっと……一応少しの間なら現実でも会えなくてもないから。でも、期待はしないでくれ」

「じゃあその分この世界で会いますね！」

「ああ」

気付けばシリカは笑顔に戻っていた。

「さあ、ピナを呼び戻そう」

「はい！」

ピナの心にプネウマの花の蜜をたらし、蘇ったピナを見たレインが驚いたことは言うまでもなかった。

規格外の規格外

リズベットは五十二層にある山のフィールドでメイスを片手に佇んでいた。

ここにはゲームでよくいるゴブリンの進化系のようなモンスターが住んでいて多様な鉱石を守っている、という設定がある。

リズベットの目的はもちろんその鉱石で、ゴブリンからドロップする使用になつていった。

聞くとところによると、ゴブリンと言うだけあって大した強さでもないがポップ率が高いという。

そのおかげか、最前線がここだった時はレベリングのために攻略組が押し寄せていたらしい。

しかし、今の最前線は更に上に行っており、中層プレイヤーももう少しお手軽なところでレベリングをするので、リズベットのような鍛冶屋ぐらいしか来ることにはなくなっている。

鍛冶屋達も欲しかった分が集まれば帰るので、本来であればゴブリンがうざうざといるはずだった。

そう、いるはずだったのだ。

安全マージンは十二分にとつているが、ソロで来ているということもありリズベツトはわりかし気合をいれてきていた。

にも関わらず、いぎ付いてみればゴブリンは皆無で、まるでゴミのように鉱石が落ちまくっていた。

突発的なイベントか、何かのバグなのか。

リズベツトは頭をフル回転させて考えてみる。

しかし、頭に浮かんだのは上層で今も迷宮に潜っているであろうキリトやアスナであればこの謎現象にも対応できただろうな、という感想ぐらいだった。

この謎の空間に足を踏み入れても大丈夫なのか、と考える。

そして、キリトならどうするだろうかと考える。

彼なら自分の身をかえりみずに誰かが犠牲になるくらいなら、この空間に足を踏み入れるだろう、と安易に想像できた。

ならばと、リズベツトのすることは決まった。

安全マージンは十二分だ。

バグではなくイベントだったとしても、この層にあったレベルのものだろう。

大丈夫。

と自分に言い聞かせて、謎の空間にリズベツトは入っていった。

足元に落ちていている鉱石を拾いたい衝動を抑えながら、リズベツトは慎重に進んだ。

鉱石を拾わないのは、これがトラップで拾った瞬間にわんさかゴブリンがでてくるかもしれないからだ。

これが拾っても大丈夫なやつだったら拾う。だから今は回りに気を配れ。

自分にそう言い聞かせて慎重に一步、また一步と奥に進んでいく。

気を張り詰めていたせいか、いつもより長く時間を感じつつ、一番レア鉱石を落とすこのボスゴブリンがいるところまであと少しのところまで来た。

それを意識したと同時に、カンカンと、剣と剣がぶつかり合う音がリズベツトの耳に届いた。

誰かが戦っている。

それがわかった瞬間、リズベツトは音のするほうに駆け出していた。

助けなければとか、この謎な現状の出所だとかそういう考えはなかった。

ただ、何かに吸い寄せられるようにリズベツトは走っていた。

音の出所はボスゴブリンがいるところのようで、何度か来たこともあるのですでに慣れた道を駆け抜ける。

「一体何が」

パシヤン

リズベットがたどり着いたのと同時に、おそらくではあるがボスゴブリンが消滅した。

今もかすかに残っている青のパーティークルの向こう側に黒衣の男が剣を鞘に戻すのが見える。

全身黒服。

そうおもった瞬間に彼がキリトかと思ったが、よくみると違うことに気がついた。

キリトのように紙装備、もしくはそれ以下の服装で、キリトには失礼かもしれないが、そこに立っている男は長身だった。

青のパーティークルが彼の周りをきらきらととんでいる様子はとても絵になっていた。

それはもう、画家が描いた一枚の絵のように。

ぼけつとリズベットが男をみていると、男はウィンドウを操作し始めた。

ドロップ品の確認なのか、その場でオブジェクト化をしていく。

ここでなぜオブジェクト化をわざわざするんだと疑問に思ったのもつかの間、その男はいくつか出したオブジェクトをその場に捨て始めた。

捨てたものの中にはボスゴブリンから出たのであるうレア鉱石も含まれており、それに気がついたときにはリズベットは走り出して、男の胸倉をつかんで、高い位置にある

頭を自分に引き寄せていた。

「あんたはいつたいなにしてんの?!」

「え?」

以外にもリズベットの存在に気がついていなかったらしく、きよとんとした顔でこちらを見返した。

「な、なについていわれてもな」

「なんで鉱石捨ててんのか聞いてんのよ!」

ようやく納得がいったようで、男はそれが通常であるかのようにとくに感情がない表情になった。

一瞬怒ったのかと思い、怖気づきそうになったが、馬鹿なことをしているのは目の前の男だということを出して、リズベットは胸倉を離すことはしなかった。

「そのことか。別にいらんからだ。すでにストレージもほとんど埋まっていてな。換金できる、というのは知ってはいるが、金稼ぎじゃなくてレベリングに来ているからいち換金しに戻る時間ももつたない」

さらつとあまりにもな理由を言ってきたので、さすがのリズベットも固まるしかできなかつた。

すでにストレージがいっぱいになってしまうほどアイテムを持っており、そうなるま

で街に戻つてもいない。

ということとはとつもない時間、この場所にいるのでは、とふと思う。

「い、一応なんだけど、そんなことはないとは思つてるんだけど、そこらじゅうに落ちてた鉱石もあんたが……?」

「ああ、捨てた」

あの量を捨てた。

リズベットの思考が固まるのは仕方のないことだろう。

「そろそろ手を離してもらえないだろうか」

しばらくたった後に、黒衣の長身男に声をかけられたリズベットは、胸倉をつかんだままだったことを思い出した。

「え、あ……ごめんなさい」

胸倉から手を離れたところでもう一度リズベットは我に返つた。

「じゃなくて!」

「なんだ。うるさいな」

「うるさいな、じゃないわよ! 貴重な鉱石ポイポイ捨ててんじゃないわよ! もつたいな
いわね」

そっぴいなながら、リズベットは鉱石を拾いだす。

この珍妙な景色を作り出したのは目の前の男だということはずでに判明しているの
で、拾ったところで突然モンスターがわいて出るなんてことはない。

このとき、この状況があまりにも異様なことにキリトと出会ったばかりで感覚が少し
変わってしまったリズベツトが気がつくことはできなかった。

「ほら、あんたも突っ立ってないで拾いなさい！私のストレージとあんたのストレージ
いっぱいになるまで詰め込むわよ」

規格外さと全身真っ黒な男にキリトがかぶっているせいで怖気づくことなくリズ
ベツトは指図していた。

「さて、俺は待ち時間の間にレベルを——」

「関係ないわよ。安心しなさい、あんたのストレージの鉱石も私が買い取ってあげるか
ら。馬鹿な行動をしてた罰として安くだけどね」

にやりと笑って男を見ると、男の眉間のしわは深くなったが、ため息について鉱石を
拾い始めた。

リズベツトの勢いには従ったほうがいいと思ったのだろう。

それから二人分のストレージをいっぱいにするのには一時間と少しの時間がかかっ
た。

この量を集めようと思えば何倍もの時間がかかるので、一時間など大した時間ではな

いだろう。

「じゃ、今から私の工房に戻るからあんたもついてきて」

「……わかった」

かなり仏頂面ではあるが、この一時間もの間、特に文句を言うこともなく一緒に鉞石を拾い続けてくれていたので、いいやつなのはリズベットは分かっていた。

また、変な奴と知り合ったな、と思いながらもリズベットは自分の工房に帰るためにこの層の主街区にむかって歩き始めた。

ずっと無言で着いてくる男にリズベットが話しかけたのは、リンダースについてからだった。

「そーいえば、あんたなんであんなところにいたの？」

「いまさらか。レベリングだと言っただろう。本当はもつと上に行きたいんだが、普段は一緒にいる奴が許してくれなくてな。一人のときは自分のレベルより五以上の層でレベリングするなつてうるさいんだ。俺が悪目立ちすると、人前に出るのが嫌らしくてな。レベリングする場所まで決めてくる始末だ」

どんな過保護だ。

「と言いかけたが」自分のレベルより五以上の層でレベリングをするなどいわれて

いる、という言葉葉を思い出して、リズベットは眉間にしわを寄せた。

この世界での安全マージンはその層に十足したレベルだといわれている。

それは彼は今なんと言った？

自分のレベルより五以上の層といったはずだ。

「えっと、あんたのレベル聞いてもいい？」

本来であれば、それはタブーだ。

しかし、聞いてしまうのは当たり前だろう。

少なからず、リズベットは良くて嫌な顔をされるか、悪ければ怒られるかと思っていた。が、男は気にすることなく

「四十七」

と、あっさり答えた。

しかも、先ほどまでいた層とびったり五下のレベルを。

特に気にすることなく、男は話を続ける。

「さつさと最前線に一人で行きたいんだがな。あ、そういえばいくつレベルが上がったか忘れてたな」

そういつて、男はウィンドウを操作し始める。

「むっ、最前線にいけるレベルにはまだ足りないか」

独り言のようにつぶやいた言葉を聞いて、ぼんやりと今の最前線の階層から五を引いた数を計算した。

その計算をしている時点で、目の前にいる男は何を言っているんだと思います。その場でわめき散らしたかったが、ここは街中で目立ってしまうことを気にして、ぐつとこらえた。

ぶつちやけ、どうせ嘘だろうと思っっている部分もリズベットにはあった。



「お前は鍛冶屋をしていたのか」

リズベットの工房に着いたときに、男は無表情ながらに驚いた様子だった。

「そうよ。だから鉱石ほしがってたんじやない。安値で買い叩いてやるから覚悟しなさい」

男を工房に招きいれ、リズベットは一人自分の部屋に戻って装備をはずす。

そういうえば、男の名前を聞くことすらしていなかったとふと思ひ出す。

「あんた、そういうえば名前は？」

「……レイン」

工房に戻って男に聞くと、立てかけてある剣を見ていて、振り返ることもなく答えた。「剣にそんな興味あるの?」

「まあな。俺はこの世界のシステムとやらはいまだにさっぱりでな。剣を新調するときには普段一緒にいる奴に任せてしまっている。お前がその知識持ったらどんな無茶しだすかわからないから教えない、と言われて教えてもらえないし、情報屋たちにも口止めされてるらしくてな」

レインの表情はただでさえ無愛想なものにも関わらず、眉間にしわを寄せているせいで、怖さしか感じられない。

まあ、すごい量の鉱石を捨てて歩くような男だ。

実際に知識が乏しいのはリズベットにも察することはできた。

今の話を聞いたところでは、よほど無茶をしまくる馬鹿、ということしかわからない。情報屋にまで手を回されているというのはよっぽどのだろう。

規格外に規格外を重ねまくっているような目の前に立つレイン。

背が高く、体格もしっかりしているし長い足はどこのモデルかと思うほどだ。そして、精悍な顔立ち。

最初の出会いのせいでよく見ていなかったが、これほどのイケメンがこのゲーマーしかないような世界になぜいるのかといまさらながらに思ってしまう。

「なんだ？」

ぼけつとレインをみていたリズベットは、レインに声をかけられて我に返った。

「な、なんでもないわよ！ほらさっさとトレードウィンドウ出しなさい」

首をかしげながらもレインは慣れたとはいえない手つきでウィンドウを操作していき。

しばらく待って、リズベットの前にトレードウィンドウが表示された。

「あんだ、まだ操作慣れないの？」

トレードウィンドウに入っているアイテムをみてレインに渡す金額を頭の中で計算しながら、何の気なしに聞いてみた。

「ああ……」。基本的には機械が苦手だ

あまりにも会話を続ける気を感じないことに対してリズベットはなんとなく、無理やりでも会話を続けてやろうと思った。

「へえ。そういえば、最前線に行きたいって言ってたわよね？安全マージンはその層に十足したレベルって言われてるけど、なんであんたは自分のレベルより五足した層なの？」

嘘だと思いつつ、にやりと口をほころばせながら聞いてみると、一瞬ではあるが、眉間にしわを寄せたレインが今までの不敵とも言える空気を変えることなく説明しだし

た。

「最近、がんばろうかと思いはじめてな。最初のころから最前線の知り合いと遊びでデュエルはしてたからそれなりに戦えるんだが、敵とは大して戦ってなかったからレベルは低いんだ。今から最前線に行くってなったらちよつと高めのほうがレベルも上がりやすいつてことでちよつと上の層でレベリングしてる。その最前線の知り合いにも大丈夫だつて見極めてもらつてるから心配は何もいらん」

「じゃあそれまでは何してたの？」

「……パルクールの練習をしてた」

「は？」

「街中でパルクールの練習してた」

どこか不機嫌なレインはつぶやくように言った。

その顔を見て、これ以上は聞かないほうがいいということがわかった。

「そ、そう……。さっきの鉾石の代金、これぐらいでいいかしら？」

最初から言っていたように少し安めの設定にして出してみる。

「いや、代金はいらん」

あつさりとそういつたレインは代金を受け取らずにトレードを済ませてしまった。

「えっ？」

「その代わり、武器について教えてくれないか？俺のパラメーターと照らし合わせて一緒に検討してほしい」

真剣な眼差しを真正面から受けて思わずリズベットは固まってしまった。

こんな精悍な顔立ちにドキッとしれない女の子はいないだろう、とリズベットは自分に言い聞かす。

「そんなこと言ったって、どんなものがいいとかあるの？」

「ある。今のじゃ軽いし小さい。俺は強くなるためにここに来たのに、スタート地点にも立てていない」

あまりにも真剣なレインの表情を見て、リズベットはあきれるようにため息をついた。

「仕方ないわね。なんであんたの知り合いに止められてるのは知らないけど、このアインクラッド一の鍛冶屋であるリズベット様がレクチャーしてあげるわ」

「よろしく頼む、リズベット」

はじめて自分の名前を教えたなと思いつつも、ずっと無表情だった彼もきちんと笑えるんだと、どこか片隅で思った。



レインはリズベットに自分のパラメーターと剣の相性を教えてもらっていた。

現在、レインは今のところ筋力値にし極振りしている。現実のものと同じぐらいになれば敏捷というものを上げるつもりだ。

ロザリアの一件で気になったこの世界特有の気配を感じる方法をキリトに聞いてみたところ、索敵スキルというシステムに頼りきったものだったので、レインは現実世界では使えないと判断し、取得することはしなかった。

キリトにはソロで行動するなら必須だと言われたが、そんなものに頼っては強くなれないと貫き通すと、隠蔽スキルだけとはとるということで妥協してくれた。

まあ、レインとしてはそれを使う気はさらさらしないのだが。

筋力値極振りのステータスや、所得スキルのガバガバさについてリズベットに怒られたが、好みの問題だと押し切った。

余談ではあるが、パルクールを練習してたというのは、キリトにそう説明しろと言われたからだ。レインとしては正直この説明が気に入っていない。

そして、途中参加だと言うのは誰にも言うなときつく言われている。

「にしても、あんた相当戦いにくかったんじゃない？今使ってる片手剣とか、あんたのステータスからしたら半分以下の性能よ？」

たまにため息をついたり、うめき声を上げたりしていたリズベットが呆れたように説明しはじめた。

「たぶんだけど、戦いにくくさせることでレベリングしてる場所が適切だと思わせるようにしてみたいね。あんたのレベルは言ってたとおりの安全マージンより低いし、持っている武器も大したことないくせによくもまあ、あの鉱山地帯であんな珍妙な光景が作り出せたわね」

リズベットの説明を聞いて、意図的にキリトがやっていたのだろうと察し、レインは眉間にシワを寄せた。

なぜ、それほどまでに最前線に行かせたくないのかレインには分からなかった。

「なぜあいつはそんなことを」

思わず呟いたレインにリズベットが盛大にため息をついた。

「よっぽどあんたが無茶するってことがその最前線の知り合いには分かってたんでしようよ。レベルで言えば最大の譲歩って思えるわ。多分攻撃を受けても多少なら耐えられるところにしてるのよ。この性能の低い武器のおかげで、あんたは物足りないって感じじゃなかったんじゃない？」

確かに、敵の耐久性のことを考えれば物足りないことは無く、むしろまあ、そんなものだろうという感想が得られる。

何度かかすり傷を受けた時は意外な量のHPを持っていかれ、まともに攻撃を受けられるのは一回だと常に思っていた。

「物足りなくなつて上の層に行けば一撃で死ぬから、ということか」

「おそらくそういうことでしょうよ」

レインは考える。

キリトが最大の譲歩かつ、レインの実力も考慮した上で散々悩み、現状にしているのであれば、それを變えてしまうのはいい事なのだろうかと。

この世界について間違いなくキリトは**ずば**抜けて知識があるとレインでもわかっている。

情報屋にも手を回せることもあるし、最前線で戦っている一人の戦士だ。

その彼が、順序よくレインをここで強くなれるようにしてくれているのであれば、知識の少ない自分は彼に従うべきではないのかと思える。

でも、それでは強くなる事ができない。

「その知り合いの言う層できちんと戦うなら私もあなたにあつた武器を定期的に提供してあげなくもないわよ?」

突然のリズベットの言葉にレインはきよんとすることしか出来なかつた。

「どういう事だ?」

「あんたが無茶するから効率が悪くても無理やり性能の低い武器を渡してることでしょう? 無茶せずに言う事聞いて、ちゃんとした武器をもつて戦えば効率が上がって早く

最前線にいけるでしょ」

なぜ彼女は出会ったばかりの自分にそんな提案をしてくれるのだろうか、ふと思う。

いや、リズベットだけではない、シリカも自分の身を心配してくれていた。

キリトに関しては間違いなく足でまといになっているであろうに世話をしてくれている。

彼に迷惑をかけないためにも早く強くならなくてはと思う部分もレインにはあった。

「この世界ではやはり、武器で変わるか？」

「変わるなんてもんじゃないわよ。最前線じゃ使い物にならない武器だってわんかさあるわ。なんでそんなにもこの世界について知らないのかは分からないけど、もう少しこの世界に興味をもちなさいよ。たとえ嘘の肉体でも、私達の心はここで生きてるんだから」

優しく笑いながらいつてくるリズベットをみて、レインはまたもこの少女に驚かさされる。

たしかに、レインは、最低限の知識でこの世界を乗り越えようとしていた。

この仮想世界は通過点で、現実世界に戻ったら意味の無いものになる。

ましてや、レインは異邦人だ。

この世界の武術以外の知識は大していららないの思っていた。

キリトからの情報で大丈夫だと思っていた。

だか、それは自分らしくないのではないかとふと思う。

レインは真剣な眼差しでこの世界で生きているリズベットを見る。

「この世界での知り合いが俺には少ない。色々教えてくれるのは知り合いの最前線で戦ってる一人だけだ。それだけじゃダメだと思つて情報屋に当たつてみたが、そこにも手が回つていて大したことは教えてくれない。だからリズベット、この世界について、システムについて教えてくれないか？」

リズベットは一瞬きよんとしたが、にこりと笑つた。

「最初は武器だけについてだったけど、それだけじゃなくなつただけだしね。任せなさい。私もその過保護な最前線の奴にぎやふんと言わせてやりたいわ」

男らしく拳を突き出してきたリズベットに苦笑しながら、レインはその拳に自分の拳をぶつけた。

「よろしく頼む」

それからのレインの成長速度は著しく上がり、キリトが逆に苦労したのはまた別の話。

高い口止め料

あと少し。

二足歩行のトカゲと戦闘中のレインは現在の愛剣、ルナティックを振り回しながらすこし焦りを感じていた。

剣の耐久値の問題もあるが、あと少しで最前線に乗り込めるようになるのだ。

一週間ほど前までは、一匹に倒す時間がかかりかかったが、リズベットにシステムから裏技まで教えてもらい、いまでは一般プレイヤーとは遜色ないほどには知識を有しているレインは思っている。

その割には索敵スキルを取ることなく、相変わらず現実世界に比べれば感じにくい気配だけで対処してきていたり、筋力値が現実のものと同じになっただけ上げるのをやめ、敏捷値も思っていたより早く現実世界と同等のものになり、こちらももちろんそれ以上上げていかなかったり、この世界の人達からしたらもつと強くなれるのになろうとしていなかっただけ。

システムで上げるのはレインにとって本当に強くなるのは違うことだと思っているからだ。

もともとが化け物級ではあるので今更レインに関係ない数値な気がしなくもないが。身体感覚としてはようやくスタート地点に立てたが、レベルを上げなければキリトだけではなく、リズベツトからも最前線に行く許しがでない。

普段であれば無視してでも最前線に繰り出していたが、キリトに関しては必死に止められた経緯もあるので従っていた。

そして、とうとう最前線にいけそうなレベルになってきたのだ。

しかし、徐々に上がってきているレベルのせいではなかなか経験値が増えない。

トカゲは盾も持っていて、ガードをしてくるという地味にめんどくさい敵でそれも相まって時間がかかるというのも難点だ。

流石に、ゴブリンのような奴を五体同時に相手するようにはいかず、出来れば一対一、多くても一対三ぐらいまでがレインにとっては限界だった。

もちろん、それは攻撃をかすり傷以外で当たらないという条件付きだ。

攻撃に当たってしまった時は、ポジションを飲んで回復を待ちながら攻撃をさけるといふ、これもまた人外じみた行為では間違いないのだが、それをしなければ二撃目でHPは全損する。

それはレインにとっては時間の無駄と感じているので、そうならないように無駄に無駄に無茶はしていない。

本来のその階層に十を足したレベルが安全マージンと言われているので、本来の安全マージンになれば多少の無茶はできるようになるだろうと思っていたりするが、それを言えばまたキリトがうるさいので誰にも言っていない。

ちなみにであるが、レインはソードスキルを使うことがほとんど無い。

もちろん、キリトはレインにソードスキルについて教えたし、その重要性も教えた。

それを聞いてもなお使わないのは、硬直時間というものがレインの中ではかなり気に食わないからだったりする。

もともと剣を振るって戦っていた戦士だから使わないという選択ができるのだろう。

それに、システムに補助されたものではレインにとっては意味がないのだ。

が、しかしである。

英雄と言われた老人に天性の才能があると言われたことのあるレインはキリトが使っているソードスキルをみて、独力でソードスキルと同じ動きはする。

ソードスキルが発動している訳ではないので、攻撃力が上がるわけではないが、ソードスキルのシステムアシストされた動きと遜色ないほどの動きを平然とするレインを初めてみたキリトが逆に何も言えなくなつたのは言うまでもない。

異世界から来た戦士はそれほどにもシステムを嫌がり、使おうとはしなかった。

しかし、そんなレインは装備品に関してばかりとシステムに従っている。

リズベツトとあつた時は動きやすさを優先されていた文字通りの紙装備だったが、今では一見変わらず紙装備に見えなくもないが、それ自体の防御の数値やバフなどはわりと良いものになつてゐる。

著しく変わったのは武器である片手剣だろう。

すでに愛剣となつてゐるルナティックはリズベツトに作つてもらつたもので、持ち始め当初は要求値ギリギリのものだつた。

剣自体の大きさや刃の部分の太さは傾国の剣に近いものになつており、重さもそれなりにある。

次に剣を変えてもらうのは最前線に行けるようになったらとは思つてはいるが、愛着もそれなりにあるので、そのあたりはリズベツトに相談するしかない。

この、剣を強くしていくというシステムにはレインも興味深々だつたりする。

鉱石を自分で探して剣を強くするというのはなかなか体験できるものではない。

今の剣を振るいながら、もうすぐ替え時で少しの喪失感を感じつつも次は剣をどんなやつだろうかと考えてしまう。

どここの鉱石をつかつてリズベツトに作つてもらうか。

あと少して削れられるHPから視線を離して珍しくレインはソードスキルを使うためにシステムにそつた動きする。

早くレベルをあげて最前線に行くためと、次の剣へかえたいという気持ちからだつた。

ルナティックには申し訳ないとは思っているが、インゴットという状態にして、次の剣と合成してもらおうのでどうにか我慢してもらうしかない。

「ふっ」

システムによって動かされる身体に合わせて自分も身体を動かすことで、通常のヴオーパルストライクよりもスピードがのっついていて、レインの基本技術によって切れのあるものが放たれる。

スピードについて行けていないトカゲはそれをまともにくらい、青いパーティクルになつて消えた。

それと同時に目の前にはレベルアップの表示が現れる。

それは最前線にいけるといふことも同時につげていた。

「やっとか。あとはキリトとの決闘だな」

仏頂面が少し不敵な笑みに変わる。

その前にリズベットに新しい剣を作ってもらおうと、レインは最前線より五つしたの迷宮から上に向かって足をすすめた。

◆
主街区にいたレインはいまでは慣れた操作でリズベットに店に明日行くとメツセージを送る。

そのついでに、いまでは情報を教えてくれるようになった情報屋のアルゴにいい鉱石について教えてもらうために会いたいとメツセージも送る。

日本語を読むのもの聞くのもなんの問題はないが、打つことに関しては難しい。

そのため、かなり簡素な文章になってしまいが、いつもの態度のおかげであまり突っ込まれたことはない。

打つのに時間は時間がかかったが、リズベットからもアルゴからも少し長い文章がすぐ返ってきた。

リズベットからは無茶をしていないかという内容と、明日は昼頃まで鉱石をとりに行っているということと、早めに来て店で寛いでいいという事がががかれていた。

アルゴからは今から行くので指定の酒場で待っているという内容だった。

たまたま、指定された酒場は普段滞在している階層の行きつけの酒場だったのでなれた様子でレインはそこに向かう。

この世界は結局仮想世界だということでも食べなくても生きていけると知ったレイン

は基本的に最低限の食事しかしていない。

しかし、最前線に行ける祝いということに珍しくちゃんと食べようと思い、酒場の席についたレインは普段は注文しないような量の食べ物を注文した。

落ち着いた空気と高身長が相まって二十歳に思われていることが多いが、これでもレインは育ち盛りの少年。

運ばれてきた料理を周りに気にすることなく、ガツガツと食べ始めた。

「レインがそんなに食べてるなんて珍しいナ」

「俺だって食べる時は食べる」

突然後ろから声をかけられたにも関わらず、レインは特に驚いた様子もなく、返事をする。

「ありや、後ろにいたのバレてたカ」

ニシシと笑いながら髭のペイントをしたアルゴが空いていた前の席に座る。

レインはそれを気にするようでもなく、半分程残っている料理を食べ続ける。

「やっこの世界の気配を読むのにも慣れてきたおかげでな。あと、今日のレベリングで最前線にも行けるようになった」

「相変わらず規格外な男だナ。キー坊が過保護になるのも分かるヨ」

それから、数分で食べ終わったレインは最後にミルクを飲んでから、話しを切り出し

た。

「で、何かいい鉱石が手に入る場所を教えて貰っていいか？」

「構わないヨ。ちゃんとキー坊の言うことも聞いて最初の頃みたいな無茶はしてないみたいだしナ」

それから、アルゴはレインがソロでも行けるような場所でレアな鉱石の情報を聞いた。

それはクエストの報酬らしく、村を襲うモンスターを討伐してくれというものらしい。

そのモンスター自体は弱いのだが、ソロ限定クエストだというのに討伐数が1000というふざけた数字らしい。

前もって報酬が提示されているおかげで何が貰えるのかは分かるが、誰一人としてクリアした者がいないらしい。

「レインならこんな数でも平気だロ？アンタのレベルのことも考えてもクリティカル三撃ぐらいで一体仕留めれるはずだしナ」

「それぐらいなら問題ない。いつも情報助かる」

「いやいや、あのキー坊が過保護にしてる人だからナ。オレたちもそれなりな対応をしたくなるのサ」

ニシシと笑うアルゴはレインにとっても謎の多い人物だった。

どこからどうやって情報を得ているのか聞いてみたが、企業秘密だと言われ教えてくれなかった。

「そうそう、レインもラフコフには気を付けろヨ」

「ラフコフ？」

「ありゃ？キー坊から聞いてないか？平気でPKする頭のおかしな連中のことだよ。奴らは最前線に行くことはないが、中層とかで活発に動いてやがるからナ。中層の、しかもソロで動いてるレインは標的になりやすそうだから、キー坊が忠告してるもんだと思っただけド」

レインは特に表情を変えずにその話を聞いた。

キリトからそのことを教えられていないのは、タイタンズハンドの一件や、他にもオレンジギルドに単身で殲滅しに行ったことがあるせいだろう。

それが分かっているから、レインは意識して自分の空気を変えなかった。

「そんなギルドがあるのか」

「最近、活発化してきているからアジトを探してるんだヨ。見つかった時は攻略組のやつらが討伐隊を組んで乗り込むって話になってル」

「そのときは俺にも教えてくれないだろうか？ただし、その事はキリトには内密で」

「ん？そのヘンの事情はよくわからないが、それは口止め料にもよるナ」

「なら、キリトも知らない俺の強さ秘密を教えてやろう」

レインは不敵な笑みを浮かべてアルゴをみた。

それに対して、アルゴは驚いた様子を見せたが、にやりと笑った。

「なんか面白そうだな。のつタ」

ここに来た経緯以外のことを話したレインはクエストに向かって店を出ていつてしまっている。

一方アルゴは仮想世界でなければ冷や汗をかいていたであろう話をきいたせいではばらく酒場から動けそうにもなかった。

「まさか異世界から来た途中参加者だったなんてナ。っていうか、異世界なんて本当にあったのかヨ。こりや高い口止め料になっちまったナ」

嘘だと、全部作り話だと言うことも可能だったが、あのレインがそんなことを言うとは思えないのと、実際の彼の實力と突然現れたレインという存在に矛盾がなかったせいでアルゴは信じるしかなかった。

「どおりでハイドが全く効かないわけだヨ」

アルゴのそんな呟きは酒場の喧騒のせいで誰にも届くことはなかった。

ルインソーサラー

大上段に構えた剣を振り下ろし、器用に手首を返して横一文字に斬る。すでに残ったHPが二割だった敵は青いパーテイクルになつて消えた。

そこでとまることなく、後ろから迫ってくる敵には横に振った剣の勢いを使つてまわし蹴りを食らわす。

さらに近づいてきた敵にはまわし蹴りした右足が地面についた瞬間、身体を捻りながら左足で頭に踵落としをお見舞いする。

地面に叩きつけた敵の頭を踏み台にして空中に跳び、猫のように回転したまま剣を振り回す。

そんな人とは思えない動きですでに900以上もの敵を一度も止まることなくレインは屠り続けていた。

息すら乱していないのを見るに、まだ余裕が見える。

この、千という膨大な数の討伐クエストをやり始めたのはアルゴとわかれた少し後で、今はそれからすでに一夜明けていて、空がすでに明るくなり始めている。

途中で寝たわけでもなく、夜通しレインは戦い続けていた。

寝ることができなかつたのだ。

モンスターを討伐するにあたって、自分で探してちまちまと倒していくのかと思つていたレインだったが、実際はモンスターの住処である洞穴に特攻して倒すものだったのだ。

結果、1000ものモンスターの住処に特攻した途端、わらわらと集まり、気がつけば取り囲まれていたというわけだ。

一応、ルナティックの耐久値のことも考え、体術スキルもつかつたり、敵の武器をぶん取つて使つたり、相打ちにさせたりということもしている。

敵が弱いということもあり、命の危険はまったく感じることはない。

レインは淡々と無双ゲームのようにそれからからも敵を屠り続けた。

それからレインがクエストを終わらせることができたのは昼になる少し前のことだった。

実際に討伐自体が終わつたのはそれから二時間程度だったのだが、襲われていた村の村長にクエスト終了を報告した後が、とてつもなく長かつた。

感謝の言葉の一言で終わればいいものを、いつから村ができて、いつからモンスターに襲われるようになったとか、何人の村人が犠牲になつたとか、延々と聞かされたのだ。

最初から最後まで律儀にも聞き流すことなく聞いていたレインだが、連戦からの長話

にさすがに疲れが出てきているようで、普段と変わらない様子に見えなくはないものの、いつもよりも眉間のしわが深かった。

それでも足取りが軽いのは、リズベットに新しい剣を作ってもらうからだろう。

主街区に戻ったレインは、リズベット武具店に行くために転移門に向かった。

時刻は昼過ぎ。リズベットは今頃まだレインと初めてであった鉱山のフィールドで鉱石を集めているだろうかと、ふと考える。

確認のために、フレンドリストを見るとリズベットは鉱山フィールドにいと表示されていた。

「すれ違ったとしても、問題はないか」

いつも世話になってるリズベットにお返しと思い、鉱石集めを手伝いに行くことにしたレインは、転移する階層を予定と変更した。



五十二層の主街区についたレインは特に装備にの点検をする訳でもなく、そのまま鉱山に向かった。

リズベットの用事が終わればそれだけ早く新しい剣を作ってもらえる。

次の剣への気持ちが増すばかりだった。

足取りが軽く、先程までの疲れもなくなっていたために、標準装備の仏頂面よりは少し微笑んでいるせいで、街中ではやたらと目立っていたことにレインは全く気がついていなかった。

ゲーマーとは思えない長身イケメンがいるとそれからすぐに広まるのだが、それはまた少しあとの話。

すぐに鉾山にたどり着いたレインはいつもリズベットがいる場所に向かっていた。

フレンドリストも確認して、まだここにリズベットがいるのは確認している。

入り組んでいる道を小走りで進んでいく。

あと少しの所でレインの耳に笑い声が聞こえた。

誰かと一緒にいるのだろうかと思っただが、会話が聞こえた瞬間、レインは駆け出した。

ここで自分は死ぬのだろうか。

そんなことをリズベットは麻痺によって動かない身体を動かそうとすることも無く、ただぼんやりと考えていた。

「こいつ、全然抵抗しやがらねえし、まじしらせるわあ」

「どうしたらもつと楽しませてくれるんだあ？」

なにが楽しいのかゲラゲラと笑う男二人組をぼんやりと眺めた。

ただ自分はここで鉱石を集めていただけだった。

これが終わればレインが店にやって来て剣を作る予定だった。

彼が気に入ってくれる剣を、最前線で振るう剣を作るんだと息巻いていた。

そして、そろそろ帰ろうかとした時にこいつらは現れた。

不意打ちで麻痺毒のついたナイフを投げられたリズベツトは為す術もなく倒れるしかなかった。

アスナは自分の死に気がついた時に泣いてしまうのだろうか。

キリトは怒りに身を任せてしまわないだろうか。

レインは、あの今でも謎の多い彼はいつもの調子で冷めた様子で特になにも思わないのだろうか。

いや、おそらくレインが一番荒れ狂うだろうというのは、幾度となくあったリズベツトにはもう手に取るようにわかってしまった。

冷めているようでもだれよりも優しい彼は下手をするとこいつらのアジトをどんな手でも見つけ出して単身で乗り込んでしまうだろう。

そう思った瞬間、自分は生きなければいけないと思った。

「ははっ」

思わず笑いが出てしまう。

レインに対してキリトのように恋愛感情がある訳では無い。

むしろ、世話の焼ける兄貴のような感覚だ。

そんな彼のために生きようと思っている自分が馬鹿らしくなってくる。

「てめえ、何笑ってんだ？」

リズベットの笑いが癩に障ったようで、髪の毛をつかんで無理やり立たせる。

痛みはないが、不快感に顔をしかめる。

「あんた達が可哀想っておもっただけよ」

「ああ？」

「だってそうでしょ？こんな小娘殺すためだけに麻痺毒つかって、しかも二人がかりでね」

簡単にブチギレたであろう男の顔を見て、思い切り投げられた瞬間、自分は死ぬとおもった。

HPはすでにレッドゾーン入っている。

背中に感じるはずの地面に叩きつけられる感覚は、待っても来ることはないどころか、柔らかいが硬さを感じるなにかに当たった。

それが人に受け止められていた感触だと気がついたのはしばらくたってからだだった。
「ヒール」

低く響く声が耳に届くと、自分のHPが回復する。

「なんだてめえ？ ヒーロー気取りか？」

にたにたと笑う男に対して、今もリズベットを抱きとめているレインは今まで見たことない冷たい瞳で見据えるだけだった。

優しく岩壁にリズベットを持たれかけさせたレインは未だ一言も喋ることもなく、男達に向かって歩き出した。

止められればいけないと思ったが、リズベットは麻痺のデバフせいで動く事が出来なかった。

「俺たちラフコフにたてつこうってか？」

「ラフコフ」

レインは確認するように呟く。

「ああそうさ」

「そうか」

レインは抑揚の無い声で呟いた瞬間、その場から消えた。

何が起こったのか分からなかったのはリズベットだけではなく、ラフコフの男達も

だった。

いつの間にかラフコフ達の後ろに移動していたレインは冷たい瞳で男達をただ見ているだけだった。

そして、男達のそれぞれの片腕が根元からずれ落ち、それはパーティクルになって消滅した。

「安心しろ。時間をかけるつもりは無い」

本当にレインなのかと疑いたくなるような冷たくて感情が一切感じられない声で吐き捨てるようにつぶやいたレインはラフコフの二人を切りつけていく。

レインがそこまでレベルの高いプレイヤーではないおかげで、ラフコフの二人のHPの減るスピードは実にゆっくりだった。

しかし、レインからは威圧感が放たれており、対処が全くできないほどの速さで繰り出される斬撃は的確に二人の急所を狙っている。

まるで、わざとじわじわと、しかし恐怖を植えつけるようにレインは二人を切り刻み続け、宣言通りと言っているのかはわからないが、ラフコフの二人がいなくなるまで時間はかからなかった。

あまりの恐怖に二人組は転移結晶を躊躇なくつかって逃げ出したのだ。

それを止めなかったのはレインの慈悲なのか、何なのかはリズベットには知るすべは

ない。

「レイン」

自分の声が震えていることに多少驚いたが、助かったという安堵感のせいで麻痺がきれているにも関わらず、立ち上がることはできなかった。

声をかけられてリズベットのことを思い出したようでレインはゆっくりと振り向いた。

戦っている間——いや、男達を殺そうとしている間は何よりも深い瞳をしていたにも関わらず、リズベットを見た瞬間、少し揺らぎ、どこか悲しそうな瞳になった。

「すまない」

目をそらして謝るレインにリズベットは驚く。

いつもの無愛想で不適な空気は今のレインからは剥がれ落ちていた。

「なにが？」

「俺は、奴らを躊躇なく殺そうとしていた」

その言葉を聞いて、ようやくレインが何に謝ったのかわかった。

リズベットにレインが人を殺そうとする場面を見せたことについて謝っているのだ。

そんな血なまぐさいところを見せて怖い思いをさせて悪かった、と。

ルナティックではない剣を片手に佇む彼は無表情だったが、瞳は揺らいでいた。

「あんたは私を助けてくれようとしたんでしょ？」

レインの今にも泣いてしまいそうな、でも絶対に涙を流すことはないだろうという瞳を見ていると、立ち上がることができた。

「しかし」

「しかしもかかしもないわよ。むしろ、助けてくれてありがとう」

につこりと笑うとレインはきよんとする。

たしかに、ラフコフの人たちに剣を突き立てていたときのレインは人を殺すことに躊躇っている様子は全くなかった。

正直、あれは本当にレインなのかと疑いたくなるほどだった。

キリトとは違う意味で圧倒的な強さを持っている。

それでも、人を斬るときにリズベットが鍛え上げたルナティックを使っていないのを見て、どこか嬉しくなってしまうている自分もいる。

明らかに戸惑っているレインに対してにやりと笑う。

「あんた知ってる？この世界って感情表現、大袈裟なのよ」

そう言った後のレインの顔は記憶結晶があればと思うほど、珍しく慌てている表情だった。

そのとき、初めてリズベットはレインが同年代相応にみえた。

同時に、世話の焼ける兄貴のような存在ではなく、世話の焼ける弟のような存在に変わった。

◆ この世界で出会った人たちは不思議だ。

一般的な人種は人を殺すことに対して基本的に嫌悪感を抱いている。

そのため、殺人ギルドや犯罪者ギルドにはかなり嫌悪を抱いている。

にもかかわらず、自分が同じような行動をとつても特に気にする様子でもない。

むしろ、人を殺そうとした後のほうが距離感を詰めてくることがおおい。

元の世界での同業者やシルヴィア達ヴァンパイアは彼女達も生きるために人を殺めた経験があるから、自分に対して何も思わないのはわかる。

しかし、この世界の普通の人たちはモンスターという本当の命の無いものしか倒していない。

命を持つプレイヤーを殺したことなどないはずだ。

そんな彼等が何故、自分を相手にするのか。

レインにはそれがわからなかった。

それに対して、自分がさして嫌だと思っていないことに対してでも理解することができなかつた。

悶々と考えながらもリズベットの後ろをついて歩いていくうちに、いつの間にかリズベットの店についていたようだった。

「ほら、はいって。剣作るんでしょ」

「でも……」

自分がリズベットの剣を使ってもいいのとおもってしまう。

彼女の剣で人を殺すことはレインにはできないことだった。

「でもじゃないわよ。そのための鉱石持つてるんでしょ？」

先ほどのことがなかったように振舞うリズベットを何も言えずに見ると、困った顔をされる。

「あたしはあんたに助けてもらったの。そのお礼をさせてちょうだい」

それを聞いたレインは断ることをできるわけがなかった。

レインから青みがかかったグレーの鉱石を受け取ったリズベットは工房で作業にうつる。

カン、カン、と静かな工房にリズベットが剣を打つ音だけが響く。

すでに何十回も同じことを繰り返している彼女の表情は、システムが勝手に作ってくるはずだというのに真剣だった。

それから、しばらくリズベットは打ち続ける。

そして二百近く打った頃に、鉱石は光って形を変え始めた。

形になったその全体的な印象はこの世界の片手剣にしては大きいだった。

暗めの青色をした柄と古ぼけたように見えるグレーの刀身すこし青みがかつていて、どこか現実世界での愛剣、傾国の剣を髣髴とさせる。

リズベットは剣をタップしてステータスを見る。

「ルインソーサリー……聞いたことがないわね。ちよつとでかいかもしれないど試してみる?」

無言でうなずいたレインはリズベットから受け取り、柄を握る。

驚くほどレインの手に馴染んだ。

リズベットのことも忘れてレインは剣を振る。

ウエンディーのことを思い出しながら、ハンナのことを思い出しながら、ホークのことを思い出しながら、そしてフィーネのことを思い出しながら剣を振るった。

「どう、かしら……?」

恐る恐るという様子でリズベットが声をかけてきた。

そして、もう一度剣を見る。

人を助けるために打たれた剣を見る。

「俺には……この剣を持つ資格はない」

思わず、そう言ってしまおう。

剣自体が悪いわけではないのだが、やはり自分にはいわくつきの傾国の剣がお似合いだと痛感した。

「なら、あたしからお願いするわ。その剣で戦って」

驚いて振り向くと、こちらをしつかりと見ているリズベットがいた。

「あたしにはレインが抱えているものはわからない。もちろん、教えてもらおうとも思わない。その代わり、その剣でレインを支えたい」

「だが、俺は……」

人を殺したことがある、ということと言葉に出すことができなかった。

「あたしを助けたみたいにな、その剣でたくさんの人を救いなさい。それがその剣の代金」
「よ」

いつもの調子で明るい笑顔をこちらに向けて。

レインは自然と、わかったと返事をしていた。

謎のPKK

レインは一人、最前線よりかなり下で誰も寄り付かないようなダンジョンを歩いていた。

彼の腰にぶら下がっているのは、リズベットに作ってもらったルインソーサリーではなく、最前線の迷宮区で拾ったそれなりの剣。

今から使う用途を考えれば、ルインソーサリーは使えなかった。

いつもよりも増して感情の見受けられないレインは、こつこつと足音を響かせながら奥へとすすむ。

たまに出てくるモンスターを一撃でほふりながら進んでいたレインがようやく足を止めたのは少し開けた場所だった。

一見、なんでもないような場所だが、レインはそこから動こうとはしない。

「おい、いるんだろう」

どこにでもなく声をかける。

返事はなく、ただレインが独り言を言っているようにしか見えないが、レインは気にすることなくしゃべり続ける。

「卑怯な手しか使えないクズ共がいるのを知ってここに來ている。それともなにか？こんなガキ相手にびびって出てこれないのか？」

それでも状況が変わることはない。

あきれたレインは鼻で笑って、不敵な表情をした。

「ガキ一人にびびって出てこれないなんてな。ただの弱虫のクズ以下のクソ雑魚連中だったてことか」

レインが吐き捨てるように行つたと同時に、その場の空気が変わった。

殺気のようなものが立ち込める中、レインは動じることなくやつとか、といわんばかりにため息をつく。

そんなレインに向かってどこからともなくナイフが飛んできたが、レインはまるでハエが飛んできたかのようにそれを手で受け止める。

もちろん、毒が塗られていることも配慮して刃の部分に触れないように受け止めているあたり、さすがというしかないだろう。

「なんだ？」

「何だじゃねえだろ」

どこからか声が聞こえたかとおもうと、そろそろとまるで山賊のような男たちが出てきた。

にたにたと気持ち悪く笑っているやつもいれば、すでに頭に血が上っている様子のやつもいる。

三十人以上はいるであろう男たちに囲まれたレインだったが、表情は変わることがなかった。

「攻略組のゴミ共を待ち伏せしてんに邪魔すんじゃねえよ。ここは俺たちラフコフ住処だぞ。早死にしてえのか？」

「ゴミとはお前たちのことだろう。怖くて最前線にもいけない雑魚が何を言っている。それに言っただろう。クズ共がいるのを知ってここに來ているとな。そんなこともすぐに忘れるほどお前の頭は使い物にならないのか？」

明らかにレインのほうが不利だというのに、煽ることをやめる気配は全く見受けられないどころか、さらにレインは男たちを——殺人ギルド《笑う棺桶》のメンバーである男たちをあおっていく。

「殺人ギルドというくせに中身をのぞけばただの雑魚が群れをなして傷を舐めあつていただけだなんてな」

わざとらしく肩をすくめるレインに、とうとう我慢ができなくなった二人の男がレインの背後から斬りかかった。

全く動かないレインをみていい気になった二人はいやらしく笑う。

しかし、二人の武器が届く前に、二人の両腕が吹き飛んだ。

両腕を失った二人は何が起きたのかわからず、啞然としながらレインの両サイドを通り過ぎて無様に転がる。

そんな二人をレインはいつの間にか抜いた剣を片手に冷たく見下ろすだけだった。

「どうかしたか？」

そういつたレインの声はひどく冷たいものだった。

こいつを殺らなければこちらが殺られる。

瞬時にそう判断したラフコフのメンバーの動きは早かった。

次々にナイフや剣を抜いて、レインに飛び掛っていく。

レインは冷たい目をしたまま、飛び掛ってきた男たちに向かって剣を振りはじめた。



キリトを含めた攻略組でも先鋭がそろった一行は滅多に来ないような場所に来ていた。

目的はボス攻略ではなく、殺人ギルド《笑う棺桶》の討伐だ。

今回は命のあるプレイヤーということもあって、ボス戦に向かうときよりもパー

ティーの空気は重い。

キリトも例に漏れず、重い空気を漂わせている。

黙々と歩き続ける討伐隊はラフコフがいるといわれている場所に近づくとつれてどんどん空気を重くしていった。

「キリト君」

隣を歩いていた少女——アスナに突然声をかけられたキリトはびくりと肩を飛び上がらせた。

「な、なんだよ」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。そんなことより、何か聞こえない？」

静かだったところにアスナの綺麗な声が響いたので、その場にいた全員が歩みを止めて耳をすませた。

足音もなくなった空間に、かすかにではあるが剣と剣がぶつかり合う音、何か落ちる音、それから叫び声や何かが消滅したときに聞こえる音が小さくではあるがかすかに聞こえた。

「なんだ？」

クラインが訝しそうな表情で音の出所である前方を見る。

キリトも前方に注意しながらもさらに耳をすませた。

「ば、ばけもの!!」

「やめてくれ!!」

かすかにそんな叫び声が聞こえる。

アスナにその場に向かう許可を取ろうとしたとき、キリトの耳に聞きなれた低い声が届いた。

「お前たちは大勢の人を殺してきたんだろ。そのくせに殺される覚悟はなかったのか？」

聞こえた瞬間、キリトは誰に何を言うでもなく駆け出していた。

後ろでアスナが自分を止めようと声をかけてきているのを感じながらも、キリトは今まで出したこともないようなスピードで駆け抜けた。

その場所にたどり着いたキリトは、血の海を幻視した。

実際にはない血の海の真ん中に剣を片手に自分と似たような黒ずくめの男が立っている。

その男を取り囲むように、ナイフや剣などが大量に落ちていた。

さらに、腕や足を失って動くことすらできなくなっている肉塊となった人間も転がっている。

胃の中のものがせり上がってくる感覚をキリトを襲った。

しかし、ここは仮想世界なので、何かが出てくることはない。

その感覚がやつとのことでなくなつたキリトは目の前に一人だけ立っている男に向かつて声をかける。

「……………レイン」

思つた以上にかすれた声ができる。

キリトの声に反応したレインはゆっくりとした動きで振り返つた。

酷く冷たく、何もうつしていないレインの目を見た瞬間、キリトは何も言えなくなつてしまつた。

「キリトか。後の処理はお前たちに頼む」

「キリト君！いきなり走り出して一体……………っ！」

やつと追いついてきたアスナたちが目の前の惨状をみて言葉を失っているのをどこか遠くに感じる。

レインは特に気にした様子でもなく、こちらに向かつて歩き出した。

彼のことを知らないアスナたちは咄嗟に柄をつかんだが、抜こうとすることはしなかつた。

いや、レインのかもし出す空気のせいで抜くことができなかつたのだろう。

レインは冷めた目をしたまま歩き、討伐隊だつた攻略組のメンバーは彼に道をあけ

た。

「レイン！」

キリトはやつとのもう一度声をかける。

無視されるかとも思ったが、レインは足を止めて振り向いた。

よく見ると、体中に切られた様子が見受けられ、HPゲージはレッドゾーンまで入っていた。

「なんだ？」

「一体何人……」

殺したのか、と聞こうとしても声が出なかったが、レインは何を聞かれたのかわかったように答えた。

「二十一」

その数にキリトは目を見開いたが、こちらを見ていないように見えない目を見てなぜか落ち着いてしまった。

「あとで事情聞きに行くからな！メッセージにも返事しろよ！」

キリトがそう叫ぶと、レインは一瞬瞳を揺らがせた。

「勝手にしろ」

吐き捨てるようにそう言ったレインがどこに帰るのかは知らないが、その場から立ち

去った。

取り残されたキリトたちが動けるようになったのは、完全にレインの姿が見えなくなっただけだった。

気持ちをどうにか落ち着かせたキリトが大きく息を吐いたのが合図だったかのよう
に、全員の緊張感が溶ける。

「おい、キリの字。あいつ知り合いか？」

クラインの質問にどう答えたものかと考えてキリトはげんなりとした。

クライン以外のメンバーも気になるようで、キリトの返事を待っている様子だった。

「まあ……知り合いつていうか、なんというか」

「なんだ、その煮え切らない答えは」

最初の出会い方の問題もあってキリトは笑ってごまかすことしかできなかった。

黒の兄弟

クラインは風林火山のメンバーと共に最前線の迷宮区の奥深くまで来ていた。

おそらくもうすぐボス部屋が見つかるであろうところまで来ているので、風林火山のメンバーはどこことなく緊張している。

そんな彼らの目の前にボス部屋の扉が姿を現したとき、さらに緊張が走った。

ギルドマスターであるクラインもその例外ではなかったが、扉の目の前に立つ黒ずくめの男が視界に入った途端、どこかほっとしたような感覚を襲う。

最前線で見える黒ずくめといえればキリトしかない。

声をかけようと口をあけたクラインは、少しの違和感にあけた口を閉じた。

ボス部屋の扉を見上げている黒ずくめがキリトにしては身長が高いということに気がついたのだ。

「おい、あいつ誰だ？」

「え？キリトさんじゃないんすか？」

「ばかやろう。キリトはもつとちっさいだろう」

「たしかに」

「じゃあ別人つすかね?」

「シックレットブーツみたいなアイテムでも使ってるとか」

キリトに対してかなり失礼な会話を繰り返す風林火山のメンバーだったが、その謎の男がボス部屋の扉に手をかけて、開けようとしているの見て、全員がぎよつとする。

クラインが止めるために駆け出そうとした瞬間、その横を黒い何かが猛スピードで駆け抜けた。

「な、なんだ?」

その黒い何かが近づいていることに気がついた様子の子の謎の男は急いで中に入ろうとしたが、黒い何かがぎりぎりのところで腕をつかんで止めることに成功していた。

無謀な行為が止められたことにクラインはほつと息をつく。

「が、謎の黒ずくめと黒い何かが何やら言い合いを始めたようで、げんなりとしてしま

う。」

「邪魔をするな」

「邪魔をするな、じゃないから!なに無謀なことしようとしてんだよ!」

「無謀じゃないぞ。すでに一回は様子見をした」

「すでに一回はって何してんだよ!」

「無茶はするなといったのはお前だろう」

「ボスに一人で挑もうとしてる時点で無茶だから！」

「無茶じゃない。装備だつて見直してきたし、武器だつてちゃんと調整もしてきた」

「そういう問題じゃないから！」

「ならどういふ問題だ」

終わる心配のない言い合いに思わずため息が出る。

クラインだけではなく、他のギルドメンバーもげんなりとしていた。

「さてさて、お二人さん。ちよつと落ち着け」

「落ち着いていられえるか！」

「落ち着いている」

そんな二人の反応に思わずクラインは笑ってしまう。

「お前ら兄弟なのか？キリト」

後からやってきた黒い何か——キリトにさういふと、当の本人は心底嫌そうな顔を
した。

最初からいた黒づくめは邪魔をされて不機嫌なのがひしひしと伝わってくるほどむ
すつとした顔をしている。

「で、一体どういふ状況なんだ？」

「この馬鹿が一人でボス攻略しようとしてんだよ」

「馬鹿とは何だ」

「それは馬鹿だな」

「お前まで」

「むしろ大馬鹿野郎だ」

クラインとキリトの言い草に言い返せなくなった黒ずくめは盛大に顔をしかめて何も言わなくなってしまう。

「で、キリト、こいつは誰なんだ？」

「あ？ああ。すまなかった。こいつは……」

なぜか口ごもったキリトに変わって本人が答えた。

「俺はレインだ。少し前にキリトに世話になつてな。ボス攻略には参加することはないんだが、迷宮の攻略はさせてもらっている」

「単身でボス戦しようとしてたくせに」

ぼそりとつぶやくキリトをみるに、レインに苦勞させられるのは今回だけではないらしいのはなんとなく察することができた。

「クラインだ。キリトとは最初の頃からの知り合いだったんだが、はじめてみる顔だな」
「こつちにもいろいろ事情があるんだよ。っていうか忘れたのかクライン。一度こいつのこと見たことあるだろ」

キリトの言葉をきいて首をかしげながらレインの顔をじつくりと見てみる。

嫌がらせかと思うほどのイケメンなど見たら忘れることはないと思うのだが、と思いながらもクラインはしばらく記憶を探ったが思い出せなかった。

しばらく考えても思い出せそうにないクラインはキリトを見て催促する。

あきれたキリトはげんなりとしながら教えた。

「ほら、ラフコフ討伐のときにいたやつだよ」

それをきいたぐらいいはぎよつとした様子でもう一度レインを見た。

レインはかなり迷惑そうな表情だったが、気にすることなくクラインはレインを見る。

むすつとしたレインをクラインはぼけつとそのまま見ていた。

「鬱陶しい」

男にはとことん優しくないレインは遠慮なくクラインに蹴りを入れた。

もちろん、圏外なのでそんなに強くはない。

「圏内だったら吹き飛ばしていただろう。」

「いでっ」

「あーもう。とりあえずここにいたらいつレインがボス部屋に入っていかないかって心配だからすぐその安地行こうぜ」

すでにどこか疲れているキリトがレインの腕を掴んで引つ張りながら安全地帯に向かう。

「おい、引つ張るな」

「じゃないとお前行くだろ」

「そのために今日は迷宮区に来たんだから当たり前だろ」

「当たり前だろって当然のことのように言うな！このバトルジャンキーが！」

「お前も人のことを言えないだろう」

「レインよりはマシだ！」

筋力パラメータはキリトのほうが上のようで、嫌がるレインをズルズルと引つ張っていく。

それは周りから見れば兄弟にしか見えなかった。



結局、風林火山のメンバーと二人は迷宮区にはレインがボス部屋に行ってしまったかどキリトが落ち着かなかつたので、迷宮区から主街区まで返ってきていた。

風林火山のメンバーのクライン以外は大勢いても話が進まないということで帰って

もらっている。

残されたクラインはというと、ぎゃーぎゃーと言い合うキリトとレインから事情を聞いたために、二人に付き添ってアルゲードまで来ていた。

「で、どこで話すんだ？」

「そーだな。行きつけの酒場があるからそこでいいか？」

アルゲードを住処にしているキリトがそう言うと、レインは怪訝な顔をした。

「もしかして、あの酒場か？」

その質問にキリトはにやりと笑うだけだったが、その時点でクラインは嫌な予感しかしていない。

しかし、クラインはアルゲードに詳しいわけでもないので従うしかなかった。

鼻歌でも歌いだしそうなキリトとどこがげんなりとしているレインの後ろをクラインはぼけつとしながらついて行く。

しばらくして三人はいかにも怪しげな店の前についた。

「まさかここじゃねえだろうな……」

「そのまさかだ」

にやりと笑いながらキリトは中に入っていく。

レインもげんなりとしながらではあるが、キリトの後に続いて入っていったのでクラ

インも戸惑いながらも中に入った。

内装は、外装のごちゃごちゃとしたどこかの民族を彷彿とさせたものよりかはすつきりとしていた。

それでも、今までクラインが見てきた酒場の中でも一番奇抜だった。

アルゲードの入り組んだ小道を通ってきたうえに、こんなにも怪しげな店に入る人などいないようで、他に客は見当たらなかった。

キリトは特に気にした様子でもなく、そこが自分の特等席といわんばかりに慣れたように隅のほうの四人席に座った。

特に気にすることなくレインはキリトの前に座る。

やつぱり兄弟にしか見えないなおもいながらキリトの隣にクラインが座ったのは、ラフコフのときにみたレインを思い出したからだろう。

今のレインからは全くあのときの威圧感を感じることはないが、それでもやはり近寄りたいたいところがあるのだ。

時刻はすでに夕方で晩御飯を食べるのには丁度いい時間になっている。

「エール一つとピリ辛シチュー一つで」

キリトが慣れた調子で注文をする。

そのときに盛大にレインは顔をしかめていたのだが、メニューを見ていたクラインは

気付くことができなかつた。

「じゃあ俺もエール一つとピリ辛シチュー一つ」

「おっ」

「えっ」

「ん？」

へんな空気が流れたが、レインが咳払いをして注文をしだす。

その量は晩御飯にしてはかなりの量で、クラインは呆けて口をあけたままレインをみることにできなかつた。

「あと、ミルク」

その締めがミルク。

キリトはまたか、いわんばかりの表情だったが、はじめてのクラインが変な顔になつてしまうのは仕方がないだろう。

レインは特に気にすることなかつた。

その後、持つてこられたピリ辛シチューという名前の癖に激辛カレーでクラインが涙を浮かべながら食べきる間に、辛い料理がほとんどのこの店でも数少ないまともな料理を頼んでいたレインががつがつと食べていたのはちよつとした小話だ。

「さて、やつと食い終わったし、説明してくれよ」

やつとしゃべれるようになったクラインが待つてましたといわんばかりに口を開く。

「ぶつちやけ、俺もこいつに関しては何も狂ってことぐらいしかしらないからな」

キリトは両手をあげて自分から説明できることはないことを伝える。

実際、レインが異邦人だというのは口止めのためにアルゴに教えた以外に教えたことはない。

あの時、きちんと契約を守ってくれたことには感謝しているが、あの後にアルゴにこれでもかというほど怒られ、やたらと高いキーキを奢らされたのは不服だった。

さらにいえば、ラフコフのときの事情をキリトに聞かれたときにアルゴにそんな話をしていたことを伝えると、さらに怒られた。

そのときにはなんと口止めしてもらっていたかは伝えていない。

アルゴもどれだけ聞いても言わないようにしてくれているらしい。

少し悩む。

キリトは無茶だといってよくレインの行動をよく止めてくることが多い。

ステ振りを途中で止めているレインでは日々強くなつていくキリトの筋力値には勝つことができず、引きずられて迷宮から連れ帰らされたのは今回が初めてではない。

邪魔をされないうちにも話すべきか。

しばらくレインは考えた。

その間にここ最近、レッドプレイヤーやオレンジプレイヤーを次々に牢獄送りにしていた謎のPKKがレインだったという話をしたりしていたが、レインにとっては些細なことではかない。

「お前たちは、口が堅いか？」

突然口を開いたレインに驚きつつも、キリトとクラインはしばらく固まった。

「誰にも言わないことと、これからは俺の邪魔をしないっていうならアルゴの口止めに使った俺のことを言ってもいい」

こんな簡単に言ってもいいのか、ともおもうがそれほどにレインはキリトに邪魔をされるのが嫌になっていた。

クラインというおまけがついてしまっているが、彼からもお節焼きだというのはキリトとの会話を聞いていればなんとなく察しはつく。

たとえ、広まったとしても戯言だと流されて終わるだろう。

そんなわりと軽い感じにおもっているレインとは裏腹に、あのアルゴがどれだけ大金を払ったとしても教えないといっていた情報を本人から聞けるのかと、キリトは思わず息を呑んでいた。

「い、いいのか？」

「邪魔をしないならだ」

今度はキリトが考える番だった。

クラインはよく分かかっていないので、呆けることしかできていない。

「お前の無茶を止めなくてもいい内容なら……」

話しても邪魔されるという可能性もあるのかとおもいつつも、邪魔されなくなるだろうと高をくくっているレインはまるで、今日はスーパーでみかんが安売りだというようにさざらつと言ってしまった。

「俺は地球とは違う世界からきた異邦人だ」

「は？」

「は？」

二人の反応は当たり前前の反応だろう。

とくに気にすることなくレインは話を続ける。

「俺はもともとミュールゲニア大陸というところから地球の日本に来てな。めんどくさいことはざっくり省くが強くなるために一時期は異邦人たちを集めている組織にいたんだ。現実世界では魔法も使えるから特に問題なくその組織を壊滅させることができただが、元の世界への帰り方がまだ見つけられてなくてな。うろろしてたら知り合

いに会って、流されるように仮想世界に放り込まれた」

沈黙が流れる。

まあ、嘘だとおもわれても構わないとおもっているレインはいつもの無表情でミルクを飲む。

「……………えっと、本名とか聞いても？」

ようやく口を開いたキリトが顔を引きつらせながら聞いてくる。

「レインだ。お前たちのように別に偽名を使ってこの世界に来てるわけじゃないしな。

俺の世界じゃ平民は苗字みたいなものはないんだ。貴族にはあるがな」

「じゃ、じゃあレインはその世界でどんなことを？」

「どんな、と言われてもな。今と大して変わらない」

またしばらく沈黙が流れる。

今の説明じゃわかりにくかったのかと、また微妙に変なことをおもったレインは丁寧に話し始めた。

「旅してたんだ。俗に言う傭兵なんだが。そこでは魔獣とかもすんでいてな。もちろんそこにはシステムなんてものは無いからな」

「そういう問題じゃないから！」

「そういう問題じゃねえから！」

ぴったりと息が合っている二人を見て、仲良しなんだなど、レインはまたずれたことを考えていた。

無謀な攻略

キリトとアスナは叫びながら敏捷パラメーターで出せる限りのスピードで走っていた。

なぜ二人がパーティーを組んで最前線の迷宮区で走っているのかといわれると、それは前日にさかのぼる。

ことの始まりはどこかといわれると、キリトがラグーラビットの肉をドロップさせたところだろう。

料理スキルを持っているわけでもないのに、装備品を新調したかつたし、と自分に言い訳してエギルの店に売りに言ったのだが、そこにアスナがやってきた。

アスナは最強ギルド《血盟騎士団》の副団長で、閃光という二つ名を持つほどの実力ある女性プレイヤーなのだが、料理スキルといういわば趣味スキルを上げている奇特な人物だ。

そんな彼女にラグーラビットの肉を半分あげる代わりに料理してうことになり、アスナの部屋に招待され緊張したのだが、なんやかんやで理由をつけられてパーティーを組

むことになった。

最前線の主街区でクラデイルとのひと悶着があつた以外は特に無く、実力のある二人だったので順調に攻略が進み、ボス部屋を見つけることができた。

少し様子を見ようということになり、転移結晶も準備して扉を開けると、グリーンアイズという悪魔型のモンスターが出現した瞬間、二人は叫びながら走り出して現在にいたる、というわけだ。

結局、安全地帯まで走ってきた二人は壁にもたれて座りこんでいた。

あれやこれやと会話をし、盾を持っていないことを突っ込まれたひやりとしたが、どうにかごまかせたようであスナお手製のお昼ご飯を食べる。

「うまいー」

あまりのおいしさにキリトは大きく口をあけて頬張る。

すぐに食べ終わってしまったもったいないことをしてしまったかもしれないと思つてしまう。

「しかし、この味どうやってっ？」

キリトがそういうと、アスナは自慢げに胸を張った。

「長年の研究と研鑽の成果よ。アインクラッドで手に入る約百種類の調味料が味覚エンジンに与えるパラメータを解析して、これを作ったの」

あつさりとそのなことを言うアスナに思わず言葉を失う。

「これ、なめてみて」

小さなピンを差し出されたので手を出すと、そこになにやら緑色の液体が落とされる。

見た目は調味料というより健康飲料感があるが、意を決してそれをなめてみる。

「?! しようゆだ!!」

のんびりと過ごしていると、キリトの索敵スキルに反応がでて安全地帯に集団がやってくる。

あわてて身構えると、そこには見知った顔があつた。

「おおーキリトーしばらくだな」

どこか嬉しそうにこちらを見つけたクラインがやってくる。

「よお、クライン。久しぶり」

「お前が誰かと一緒なんて——」

そこでクラインの言葉が止まる。

キリトはとくに気にすることなく、二人の紹介をする。

「攻略で、なんか顔を合わせてると思うけど紹介しておくよ。こいつはギルド、風林火山のクライン。それでこつちが血盟騎士団副団長のアスナで・・・クライン?」

ようやくクラインが固まってしまっていることに気がついたキリトはクラインの顔を覗き込む。

「おい、クライン？ラグってんのか？」

声をかけても反応がないので今度は何度か顔の前で手を降つてみると、突然クラインは手を差し出して、緊張したように喋りだした。

「クライン、二十四歳、独身、仕事は——ぐはっ」

とんでもないことを口走り始めたので思わずキリトはクラインの腹に拳をめり込ませた。

といつても、アンチクリミナルコードが反応しない程度にはあるが。

「「「リーダー!!」」」

仲間思いな風林火山のメンバーがキリトに近づき、乱闘が始まるかと思つたが、全員がアスナに声をかけ始めた。

それをあわててキリトが抑える。

「根は悪い奴らじゃないからさ」

なんだがごちゃごちゃし始めてしまったものの、あわててフォローをいれたのにもかかわらず、キリトの足をクラインが踏みつけた。

「いでっ！クライン?!」

「へへ、お返しだ」

その様子にアスナがくすくすと笑う。

そんなときに、風林火山のメンバーたちをどうにか抑え込んでいたキリトの視界に黒いものがちらついた。

堂々と歩いているくせに、物音を立てず歩き、誰にも気付かれずにキリトたちのいる安全地帯を横切っていくそれが何か気付いたキリトは風林火山のメンバーを押しつけてその黒い何かに向かって駆け出した。

何度目になるか分からないデジャヴを感じながらも黒いなかにすばやく近づいて腕をつかもうと手を伸ばした。

が、キリトがいることをわかっているその人物を簡単につかめるわけもなく、伸ばした手がかんだのは空気だった。

「ちっ」

その黒い人物はキリトがつかむもうと伸ばした手を見事にかわしているくせに舌打ちをする。

舌打ちをしたのはこっちだとおもうキリトの後ろではクラインがあきれたようにまたかため息をついていた。

そして、その黒い人物であるレインはまるで何事も無かったかのように声をかけてき

た。

「お前がこの時間帯にいるのは珍しいな。キリト」

「もしかして、俺が迷宮区にいる時間まで考えて攻略してるわけじゃないだろうな」

私不機嫌なんです、といわんばかりの表情の全身黒づくめの男——レインをつかみ損ねたキリトは空気をつかんだ手をごまかすように頭をかいた。

当のレインはというとそっぽを向いて返事をしない。

「どうやらその〃もしかして〃だったらしい。」

その反応に思わず無言になってしまう。

「そんなことより、お前はもうボス部屋見つけたのか？」

思い出したように聞いてきたレインはなんでもないようなことを言うように聞いてくる。

その問いにキリトはどや顔で答える。

「さつき見つけたところだ。残念だったな」

「くそ、ここの敵がいい練習台になるからと一日先延ばしにしたのが裏目にでたか」

「おい、まさか——」

「えっと、キリト君？」

すっかり忘れていたアスナの存在を思い出したキリトはしまったとおもう。

いつの間にか後ろに来ていたアスナをみると、彼を紹介してくれないかという顔をしている。

「レインはアスナと会うのは初めてだよな。たまに話に上げてた閃光のアスナだ」

肩書きを気にしないレインに対しては血盟騎士団の副団長だという説明は省いた。

「で、この無愛想なやつは……」

すでにいろいろ聞いてしまっているキリトがどう説明しようかとあたふたしている
と、レイン自身が答えてくれた。

「レインだ」

「えつと……」

あまりにもなにも説明をしないレインに思わずため息がでるキリトだったが、クライ
ンたち風林火山も同じ気持ちだったようで全員がため息をついていたのをみて、自分
がおかしくないということを確認する。

全ての状況に取り残されたアスナは戸惑うことしかできないが、仕方ないだろう。

「ああ……こいつ、極度の人見知りでさ。あまり目立ちたくないからボス戦には
参加してないんだけど、迷宮区は攻略してるんだ」

仕方なく適当な説明したキリトだったが、レインからは軽く睨まれる。

おそらくではあるが、極度の人見知りということに反応しているのだろうと、すでに

レインに振り回されまくっているキリトにはなんとなく察することができた。そして、レインが黙っているわけもなく

「適当なことを言うな。目立った行動をするなって言ったのはお前だろう」

「おまえそこは話あわせとけよ」

「なぜ俺があわせないといけないんだ」

「じゃあお前はなんて説明する気だったんだよ」

「別に説明する必要も大して無いだろ」

「あるに決まってるからな?!」

「俺の事情とかを話すなって言ったのはお前だろうが」

「話せるような事情を一切持ち合わせてないお前が悪いんだよ」

「俺は別に隠そうとはおもってない」

「隠せ馬鹿」

いつものようにレインとキリトの言い合いが始まる。

それはレインがいつものように無茶をして、それをキリトがいつものように止めているからだけなのだが、クラインからすればこれはお約束のようなものになっている。

それに、こういう状況でなければ二人は非常に会話が弾む。主に剣についてというあたり、やはり似たもの同士なのだろう。

いつも飄々としているキリトが騒ぎまくっているという状況についていけないアスナは爆弾を投下する。

「えっと……キリト君のお兄さん？」

「違う！」

「違う」

見た目が黒ずくめで身長以外は似ている二人が同時にそう叫ぶ様子は、兄弟にしか見えなかった。

まことに遺憾であるといわんばかりにキリトがむすつとした顔で続ける。

「言っておくけど、下手したらレインのほうが俺より年下だからな」

「嘘だろ?!」

「まさか?!」

全員に疑いの目を向けられたキリトはさらにしかめっ面になった。

確かにレインのほうが身長が高いし、自分も最初は二十歳前後だとおもったしと、もやもやとおもい始めてしまう。

「俺からも言わせてもらうが、こいつと出会ったのはこの仮想世界に来てからだからな」

レインもぶすりと否定する。

レインの言っている十五歳というのも結局のところ、この世界に來た時の年齢なので

日数的には十六歳といってもいいのだが、考えるのも面倒でレインは十五歳で通しているに過ぎない。

「まあ、たしかに二人のやり取り見てたらレインののが弟だわな。俺としちゃあ双子だが」「クラインさんもこの人と知り合いなんですか？」

一人だけ仲間はずれにされている感覚に思わずアスナはむすつとした。

それにいち早く反応したのは意外にもレインだった。

「雑な説明になってすまなかった。俺が最前線にやって来たのは少し前のことだな。ずっとソロでやってきたというのもあってまともに連携が取れるのはキリトぐらいなんだ。そんな状態でいきなりボス戦に混ざるのもと思つてな。迷宮区のマツピングの手伝いだけさせて貰つてるんだ」

一見まともそうに聞こえる説明にキリトがまともじゃないことを付けくわえる。

「ボス部屋の情報もつてても絶対に公開しないけどな」

「え、なんで？」

「ソロでボスに挑むつもりだからだよ。こいつの事情知ってる人たちとの約束で、レインがボス部屋を見つけた二日後の朝までに他の人が見つけられなかったらこいつは一人でボス戦することになってる」

呆れながらそう言ったキリトの胸ぐらをアスナが掴んだ。

「どういうこと?!なんでそんなこと許してるのよ!!」

まあ、当たり前前の反応だろう。

などと、揺さぶられながら何も考えずに言ってしまったキリトはぼんやりと思っただけだった。

どう説明したらいいのかと思ってしまう。

この約束は、キリトとアルゴ、それからクラインの三人がレインに対して出した条件だった。

レインは傷を負えば痛みを感じる現実世界で命をかけてきた戦士だということを知った三人はレインの数値では表すことの出来ない強さを認めざるを得なかった。

この話が持ち上がった頃にはすでにレインのレベルは本来の安全マージンの状態になつていたこともあり、本当はやめて欲しいところを三人が妥協して出している。

が、そんなことをしらないアスナに説明するのは難しい。

ぐるぐるとキリトが揺さぶられながら悩んでいると、レインが口を開いた。

「俺がこの世界でたくさんの人を殺しているからだ」

そう言った瞬間、アスナの動きが止まった。

その殺してきているのはレッドプレイヤーだけだということも、戦う気力を無くしたものは牢獄送りにしている事も知っているキリト達からすれば、その行為は決して咎め

られるものではない。

むしろ、キリト達が出来ないことを彼は代わりにしてくれているのだ。

そして、本来の理由とは全く違う。

しかし、なにも知らないアスナはレイピアに手をかけようとした。

慌ててキリトがそれを止める。

「までアスナ。レインも説明が足らなすぎてる」

先程までふざけた空気が漂っていたにも関わらず、今は緊張で張り詰めている。

レインはその中でも更に空気を冷たくしていった。

「説明もなにも事実だろう」

「レイン！」

たまにレインはこのようにわざと自分が悪人になるようなことをする。

最初に出会った時もそうだ。

自分が邪魔だと思つた瞬間、躊躇うことなく自分を捨てていけと言つた。

自分が心配されているとわかつた瞬間、人が離れる様なことを言つた。

今はなぜ、自分が悪人になるような事を言っているのかキリトには分からなかつたが、レインと一番長い付き合いの自分がどうにかするしかない、どうにか誤解をとこうと頭をフル回転させる。

しかし、そんな必要もなく、アスナはあっさり緊張をといてため息をついた。

「キリト君やクラインさんたちが仲良くしてる人つてことはなにか事情があるんでしょ？」

アスナの意外な反応に全員が固まった。

「な、何よその反応」

「い、いやなんで簡単に許してくれるのかな、と」

恐る恐るという様子でキリトが聞くと、アスナはまたむすつとした。

「言つときますけど許したわけじゃないからね。ただ、なにか事情があるのはわかったから。それに」

言葉を止めてアスナはちらりとレインを見る。

レインは何故だという表情をしている。

それを見たアスナはくすりと笑う。

「なんとなくね」

全く理由になっていない理由をアスナが言ったのだが、笑顔で言われてしまったせいで誰も何も言えなくなってしまうた。

しばらく呆けたキリトだったが、せめてレインが人を殺したことに關しての説明はしようとして口を開いた。

「えっと、さっきレインが人を殺したって話なんだが、アスナも知らないわけじゃないんだ」

「おい、キリト」

レインが止めようとしてくるが気にすることなく話を進める。

「ラフコフ討伐の時にアスナもこいつを見てるはずだ」

キリトがそう言った瞬間に、アスナは勢いよくレインの顔を見た。

目をこれでもかという程にレインを見る。

レインは居心地悪そうに目をそらした。

「たしかにあの時の人も真っ黒の服だったけど」

言葉を詰まらせたアスナが言いたいのは、あの時の人物と空気が違いすぎると言いたいのだろう。

「俺がレインって呼んで呼び止めてただろ」

「た、確かに」

アスナはまじまじとレインをみる。

耐えかねたらしいレインは小さくため息をついて、ちやんと説明し始めた。

「俺はこの世界のレッドプレイヤーみたいなクズが嫌いなんだ。最近、謎のPKKって言われてるのも俺らしい。現実世界で色々あってっていうのもあるんだが、この仮想世

界でも知人が狙われた事があってな。人を殺すことに対して俺は躊躇うという気持ちはないんだ」

どこか悲しそうな響きに、レインの本当の本性がちらりと顔を覗く。

どこか気まずい空気になってしまったのをアスナが気を使って話題を戻す。

「とりあえず、レインさんがまだボス戦を一人でしてないってことは、その約束の日数までに私たちがボス部屋見つけられたってことよね？」

「呼び捨てでいい。残念だが俺がボス部屋を見つけたのは一昨日の朝だ。本当だったら今朝にボス戦ができたんだが、ここの迷宮区のモンスターはいい練習相手になるし、剣の強化をしてからにしたくてな。昨日素材集めをして、今は剣と素材を知り合いの鍛冶屋に預けて強化してもらっているところだ」

そういえばと、キリトはレインを見た。

腰には片手剣はなく、ドロップ品である木製の槍を担いでいた。

「強化を待てばよかったのに」

メインアーム以外で戦場に出るのは死に行くようなものなので、普通は強化を目の前でもらうものだ。

にもかかわらず、目の前のレインはキリトが知らないところで得た知識をつかってどこかで手に入れてきたラインソーサリーというごつい剣を持っていないという。

普通であれば怒るところなのかもしれないが、レインだからという理由で細かいことはもうどうでも良くなってしまうている。

「かなりの数の強化をやってもらってから、空き時間に使ってみたかった槍の練習とおもってな。それに、無茶言ってるのもわかっているから、今晚はなにか奢ってやるために金も稼ぎに来た」

槍の練習を最前線でやるのか。

おそらくここにいる全員が思ったことだろう。

初めてレインとまともに会ったアスナも、目の前にいる男は違う次元にいるというのをラフコフの件もあり、瞬時に理解してしまったため、口を挟むことはなかった。

「ボスの動きを見るために今朝一度だけ入ったんだかな、強化することにして正解だったよ」

「あのボスを見たのか?！」

さらりととんでもないことをいうレインにキリトは反応した。

メインアームでもないそのへんのドロップ品の槍を持って偵察をするという根性はどこから来るんだろうかと思ってしまう。

「見たぞ。少しの時間だが観察したんだが、あれば攻撃力はかなり高いな。スピードはどうにかかなりそうだが、俺の筋力値のことを考えると体術スキルで弾くか剣でいなすの

が精一杯って感じだったな。うまくよければいなす必要性はないんだが」

すでにレインの頭の中ではあのボスとの戦い方がシミュレーションされているようだった。

「レインはその、あのボス見ても怖くないの？」

恐る恐るという感じでアスナが聞く。

アスナとキリトも、二人だったということもあつてちらりとボスを見ることにしたが、二人して叫んで逃げるほどの威圧感だった。

レイドを組んで対峙すればそんなことは無いだろうが、トッププレイヤーの中でも強いと言われている二人が一緒でも怖かったのだ。

たった一人で立ち向かう根性は二人共持ち合わせていない。

レインはいつもの調子で余裕だと返してくるのかと思いきや一瞬瞳を揺らした後、目を細めた。

「俺はある出来事のせいで恐怖という感情が焼き切れててな。怖さは何も感じないんだ」

そう言ったレインの瞳には何か違うものがうつっているようにキリトにはみえた。

それが何なのかレインに聞こうとしたが、全員の耳にガシャガシャという音が聞こえてきた。

安全地帯言うのに全員が身構えてそちらをみる。

「軍だわ」

二十人が同じ装備で隊列を組んだ軍といわれる大一層を支配しているギルドのメンバーがぞろぞろとやってきた。

「全員休め！」

軍は二十五層で被害を受けてから前線には来ていなかった。

そんな彼らが久しぶりにやってきたせいで、軍の人たちはかなり疲れているように見える。

全員がリーダーが休憩の合図をした瞬間にその場にへたり込む。

リーダーがこちらに向かってきたので、キリトが代表して前に出た。

「アインクラット解放軍、中佐のコーバッツだ」

「キリト、ソロだ」

キリトの後ろではレインとクラインがこそそとしゃべっているのが聞こえる。

レインが軍という存在をクラインに聞いているようだった。

軍を知らないということに目の前のコーバッツが何か言っこないかと不安になったが、意外にもそんなことはないようだった。

もしかしたら睨み付けていたりしたのかもしれないが、ヘルメットをかぶっているせ

いで全く見えないのでキリトからすれば関係ない。

「君たちはどこまでマツピングが終わってるんだね？」

「一応ボス部屋まですんでるけど……」

「ならばこちらに提供してもらおう」

あまりにも自分中心的な意見に癪に障る。

それはキリトだけだったわけではないようで、それまでレインに軍について教えていたクラインが声を上げた。

「お前、マツピングがどれだけ大変な作業かわかっていつてるのか？」

「俺たちには！ アインクラッドに囚われた人々を救う義務がある！ それに一般人も協力して当たり前のことだ」

「ふっ」

レインが鼻で笑う声が聞こえてキリトは頭を抱えなくなった。

今まで前線に来ていなかったやつらが何を言っているんだと、キリトもおもわなかったわけではない。

しかし、そんなことを言ってもただのトラブルになってさらに面倒になることは目に見えているので、耐えたのだ。

それをレインはあっさりとしてしまう。

「貴様！何を笑う！」

まあそうなるだろう。

怒り出すコーバツツをみてそう思うことしかできなかつた。

むしろ、他のことを何も考えたくないというのが正しい。

「何を笑うって、びびって今まで表に出なかつたやつが急に出来たに威張っているのが面白くてな」

今まで軍のことを知らなかつただろ！

と、突っ込みたくなるがここはぐっとこらえる。

「我々は怖気づいて前線に來なかつたのではない！人々の治安を——」

「人に物を頼む態度もまともじゃないやつが一体何を言っている。それに、自分の兵の状況すらまとも判断できないやつが隊長の時点でお前たちは人の上に立つべき存在じゃない。お前のようなプライドだけが高い馬鹿は一度最初から人生をやり直してこい」

ふてぶてしさ極まりない態度で言うレインに誰も何も言えなくなる。

コーバツツはあまりの怒りでなのか、小さく震えている。

嫌な空気が流れるなかで、どうにかキリトが口を開いた。

「まあ、俺はマップで稼ぐつもりもないし、街に戻ったら公開する予定だったから渡す

「よ」

「協力感謝する」

明らかに怒りをはらんだ声だったが、そこは抑えることができたようでそれ以上は何もいわなかった。

先ほどの態度をみて、レインのようにいきなりボスに行ってしまったわらないだろうかと不安になってくる。

「さつきボスの様子を見たけど、ちよつかいは出さないほうがいいと思うぜ。あんたの仲間たちも疲れてるみたいだし」

「私の部下たちは疲れてなどいない！」

キリトがしまったと思ったときにはすでにおそかった。

「お前たち！先に進むぞ！立て！」

キリトたちが無言で見守るなか、コーバツツ達は先に進んでいった。

「……追いかけるか」

特に考えるわけでもなくキリトの口から言葉が出ていた。

はつとしてクラインたちをみるとニヤニヤとしていたので、むすつとしてしまう。

「レインはどうする？」

視線を自分から逸らすためにレインに声をかけると、レインは相変わらず特に表情に

変化は見えなかったが、小さくため息をついた。

「あそこまで単細胞だとは思わなかった」

そういつてレインはコーバツツたちが向かったほうに歩き出した。

どうやらレインも軍の人たちと一緒に追いかけてくれるらしい。

結局のところ、彼もお人よしなのだ。

「よし、なら久しぶりに連携しようぜ」

「今の俺がつかつてるのは槍だぞ？」

「ならなおさらだ」

「………足を引つ張るなよ」

「お前こそ」

久しぶりにレインと連携を組めることにすこし喜んでいるキリトは、そのときにクラインとアスナが自分についてなにやら話していることを知ることはなかった。

二刀流

「スイッチー！」

「ん」

先程までは自分とキリトがコンビを組んでいたはずなんだけども、とアスナはぼんやりと思いながら目の前で戦闘を繰り返している戦闘狂の二人を見ていた。

一人のPKKによってラフコフは壊滅した。

その一件の後に犯罪者ギルドがPKKに襲われるようになりはじめ、襲われたレッドプレイヤーは容赦なく殺され、オレンジプレイヤーで戦意を失った人は牢獄送りだが、そうじゃなかった人はこの世界からだけではなく、現実世界からも消えてしまう結果になるという。

謎のPKKの出現と、人を殺すということに躊躇がないその人物の噂は一気に広がり、犯罪は著しく減った。

そんな彼を英雄扱いするものもいれば、躊躇なく人を殺せるということで畏怖の感情を持っている人も少なくはない。

アスナとしても、もう少しやり方があるだろうと思っっている。

そんな噂のPKKが目の前で槍を振るっているレインという少年らしい。キリトのように全身真っ黒の服を纏っている。

背が高く、精悍な顔立ちをしており、この世界では数少ないカッコいい男性の分類に入るの間違いないだろう。

アスナはそんな彼に少しだけ昔の自分を重ねていた。

攻略の鬼と言われていたときの自分にどこか似ていると思ってしまう。

レインに対するキリトの態度を見れば、仲がいいのはよく分かる。

二人は否定したが見た目だけではなく、互いに互いの強さを信頼して戦っている二人は本当に兄弟に見える。

「スイッチ」

「はあ?!今?!」

本来では大きな隙を作ってするのはスイッチをほとんど隙とは言えないようなものでレインはキリトに要求した。

レインはまだ敵の至近距離にいる。

今の状態では下手をするとレインにキリトの剣があたってしまうのは誰が見ても明らかだった。

あわててアスナが声を上げようとしたが、キリトは文句を言いつつも突っ込む。

まるでレインがそこにいないかのようにキリトはバーチカルアークを繰り出した。V字に敵を切るその技の軌道にはレインがいる。

あれではあたってしまうとアスナの血の気が引いたが、レインがそれをわかっていないわけもなく、敵の頭をつかんだかとおもうと敵の頭上に飛び上がった。

たしかに、そこだったらキリトが繰り返し出しているソードスキルには当たらないだろうが、そんな無茶苦茶なことをしようとする人はいないだろう。

いや、そもそもそんな動きができる人がいない。

キリトのソードスキルも見事に当たり、ごつそりと敵のHPを削ったが、あとほんの少しだけゲージが残る。

まるでそれがわかっていたかのようにレインが上空で身体を捻って槍を突き刺し、敵のHPを全損させた。

KOBの人たちの中にもランスを使っている人がいるが、これほど鮮やかに使っている人はアスナも見ることがなかった。

しかも、聞くところによればレインが普段使っているのは片手剣だという。

そして今日は普段使っている武器を強化してもらっているから槍の練習をしているという。

なのに、今まで使っていたかのように槍を誰よりも使いこなしている。

敵が消滅したときの青いパーティクルの中で着地のために態勢を整えているレインをただ見ることしかできなかつた。

「アスナさん」

先ほどキリトのことを頼まれたときのようにアスナはクラインに声をかけられる。

「あいつは平気で人を殺すし、今みたいに無茶苦茶な戦いかたしたり、基本的に冷めてるやつですけど……ほんとはただのお人好しで優しいやつで大人びて見えてますけどキリトと変わらないぐらいの子供なんですよ。だから、普通にしてやってください」

困ったように笑いながらそういうクラインはまるで二人のお兄さんのような人だとおもった。

そして、ずっとレインどこか疑わしくみているアスナにも気付いていた勘の鋭い人もあつた。

それ気がついたからこそ、今の話をアスナにしてきたのだろう。

「わかりました」

アスナは笑ってそういうことしかできなかつた。

地面に着地したレインは剣を背中の鞘に収めるキリトをじろりと見る

「わざと俺に当たるようにしただろ」

何も知らない戦闘狂の二人はいつもの言い合いを始める。

「無茶なスイッチ要求したお返しだ」

にやりといたずらが成功した子供ののように笑うキリトとそれに対して言い返すことはないが眉間にしわを寄せるレイン。

それはやはり兄弟のようだった。

レインとキリトに前衛を頼んだほうがいいということ二人を先頭に迷宮を進んでいる。

おかげでアスナも風林火山のメンバーも特に労することなかった。

「そろそろボス部屋のところまで来たんだけどなあ」

モンスターポップも落ち着き、マップデータを確認していたキリトがつぶやく。

「もう転移結晶でも使って帰ったんじゃないか？」

「だといんだけど」

「俺らも帰ろ——」

「うわあああああああ!!」

クラインが言葉をいい終わるか終わらないかのあたりで叫び声が響いた。

間違いなくボス部屋の方からだった。

それに早く反応したレインとキリトが駆け出す。

慌ててアスナと風林火山のメンバー達も二人のあとを追った。

攻略組でも敏捷パラメータの高いキリトとアスナの二人と、敏捷パラメータを大して上げてはいないものの、元から人間離れた速さを有しているレインの三人はクライン達を置いて先に進む。

ボス部屋まであと少しという所で、視界にモンスター二体が現れる。

「俺が対処する」

それだけ言ったレインは、更にスピードを上げて二体のモンスターのタゲを取るために、槍を振るう。

タゲがレインに向いたと同時にキリトとアスナはレインとモンスターを飛び越え、止まることなくボス部屋に向かった。

追いついてきたクライン達にもキリトとアスナの援護に行かせたレインは、普段使っていない槍だったということもあり、モンスターの処理に手間取っていた。

レベルは日々の迷宮区潜りのおかげでかなり上がっているのだが、練習だけのつもりだったために、ドロップしてたまたま持っていた対して強くない槍を使っている。

朝から使っているということもあって槍の使い方は慣れてきているのだが、攻撃力がかなり低くなかなかHPを削り切れないのだ。

ボス部屋まであと少しの場所ではあるが、この先を曲がったところにあるため、あちらがどうなっているのかはわからない。

太めの槍を振り回し、柄の部分でトカゲのモンスターの後頭部を強打する。

間髪いれずに槍を回して穂先を首に突き刺した。

そこでようやく一体目のゲージがなくなり、青いパーティクルを撒き散らして消失する。

まだ一体残っているのでレインの動きは止まらない。

槍を持っている腕を思い切り引いてレインの後ろから襲いかかってくるもう一匹の腹に石突を穿ち、振り返りながら押し込む。

レインから無理やり遠くに押しやられたトカゲにレインは自ら近づき、くの字に折れているトカゲの懐に素早く入ったレインはトカゲの顎目掛けて掌打を食らわせる。

レインの筋力パラメータと腕の振り上げる速さになす術もなく、トカゲのモンスターは打ち上げられた。

まだHPゲージがまだ残っているのを確認したレインはまだ飛んでいるトカゲめがけて跳んだ。

トカゲの横まで跳びあがったレインは身体を回転させて敵を蹴り落とし、止めに上空から地面に蹴り落とされたトカゲの心臓めがけて槍を突き刺した。

少しオーバーキル気味だったか二体目のトカゲを仕留めたレインは一息付くことなく、再びボス部屋に向かって駆け出した。

「だめえええええ!!」

アスナの叫び声が響く。

レインは出せる限りのスピードでボス部屋に向かう。

ボス部屋の前にたどり着いて見たのは、倒れている軍と呼ばれていた人たちを助けているクライン達。

それから倒れているアスナとそれを助けているキリトだった。

ドクンとレインの心臓が脈を打つ。

血が飛び散った小屋とその床に倒れる少女。そして、無様にも生き残ってしまった少年が泣いている姿が思い浮かんだ。

「あの時とは違う」

レインは意識することなく小さくつぶやく。

息を吐いて身体から一度力を抜いた。

そしてすぐに全身に力をいれて、キリトの前に立つ悪魔に向かって飛び出した。

今日二度目になるがグリーンアイズとの対峙しても、いつもと同じく恐怖心はない。

キリト達の横を駆け抜けたレインはグリーンアイズに槍を突き刺す。

「キリト……いつは俺が引きつける！その間にどうにかしろ！」

レインはそれだけ叫び、グリームアイズに集中する。

こんなことなら強化を待って、ルインソーサリーを持ってくればよかったと後悔する。

今もっている槍だとゲージがさっきのトカゲ以上になかなか減らない。

そして、耐久値も先ほど強引に使ったせいで最後まで持つ自信はなかった。

柄の部分まで金属製であれば可能性があったが、残念なことに木製でできている。

さすがのレインも武器が壊れたあと、体術だけで目の前の悪魔に勝てる自信はなかった。

振り下ろされた大剣をレインは強引に槍で受け流す。

大剣が地面に突き刺さり受け流すことができたが、今度はレインに向かって拳が飛んでくる。

でかい図体のくせに俊敏に動く悪魔に舌を巻きながらも、反応できたレインは槍の耐久値のことも考えて左手を握り、あらん限りの力で飛んできた拳に向かって自分の拳をぶつけた。

ぶつかり合った瞬間、強い衝撃が全身に走るが、何とか受けきる。

互いに押し合う拳にあらん限りの力をこめつつも、ちらりと自分のHPゲージを確認

すると三分の一ものHPが削られていた。

じわじわと押され始め、急に力をこめてきた悪魔の力にレインは反応することができなかつた。

「ぐっ」

突き合わせていた左腕は根元から弾け飛び、レインはそのまま殴り飛ばされた。

空中で何とか体勢を整え、槍を地面に突き刺して跳ぶ勢いをころすことでどうにか着地する。

左腕を失ってもレインは戦意を失うことはなく、地面を蹴って悪魔に向かって槍を振るう。

自分以外にタゲがいかないように、全員が逃げられる隙を作るために、目の前で誰も殺させないために、レインはただ悪魔と対峙した。

「レイン！あと十秒持ちこたえてくれ！」

キリトの声が聞こえたレインは息を吐いて集中しなおす。

右腕だけでは力が足りないので足も使って槍で振り回し、悪魔にダメージを与える。

全神経を研ぎ澄ませた。

「スイッチー！」

その合図が聞こえた瞬間、大きな隙を作るために、振り下ろされた大剣に対して槍の

耐久値のことも気にせず、全力で槍をぶつけた。

大剣と槍がぶつかつた衝撃で大気は揺れ、レインの槍は青いパーティクルになつて消滅した。

レインは無理やり後ろに飛び退き、キリトとすれ違う。

背中に二本の剣を背負つたキリトをみて、きつと大丈夫だろうと、安心した。

無理な体勢でグリームアイズから離れたせいでまともな受身もとれないままレインは地面を転がつた。

痛みがないのと、腕が千切れていてもHPは残っているおかげで死ぬかもしれないとおもうことはなかつたが、どうにも動く気にはなれなかつた。

それでも無様な格好を晒すのがらじやないとおもい、倦怠感を押し殺して立ち上がり、二本の剣を振るうキリトを見る。

レインはキリトの二刀流を初めてみるわけではない。

夜中にレベリングをしていたときにたまたま二刀流を練習しているキリトに遭遇したことがある。

何かアドバースとかないかと聞かれたときに、同じく二刀流だった女性を思い出していろいろ言つたのだが、それからというものの頻繁にアドバースを求めてきたり、デュエルを申し込まれたりしたのだ。

ゆえに、キリトの二刀流の強さはレインは身にしみて知っている。

しかし、今のキリトは今までになく速かった。

ソードスキルによるエフェクトで軌跡が幾重にもかさなる。

まるで魔剣のオーラが残す軌跡のようなそれを見たレインはただ、現実世界の愛剣である傾国の剣を思い出していた。

そのとき、ふわりとレインの右手に青いオーラがまとつたのを、キリトの猛攻を見ていたレインは気付くことはなかった。

それからどれぐらいの時間がたったのかわからなかった。

体感時間は長かったが、キリトのソードスキルが終わるまでの時間は十六連撃とはいえ、それほど長い時間ではない。

ただ、気がついたときにはグリームアイズは青いパーティクルと成り果てていた。倒れるキリトにアスナが駆け寄る。

一瞬キリトも消えるのかとおもったが、疲れて倒れただけのようで一息つく。

「お疲れ」

クラインから放り投げられたポーションを受け取り、そこでようやく自分のHPがレッドゾーンに入っていることに気がついた。

特に何を言うでもなく、レインはポーシオンを一気に飲み干した。

失った左腕も現実世界なら戻らないだろうが、仮想世界であるここでは違う。数分すれば戻るはずだ。

「にしてもお前、ボス相手に肉弾戦し始めるってどんな根性だよ」

「それ以外に方法がなかったんだから仕方ないだろ。それに現実と違って腕が吹き飛ばうが死なないしな」

「だからって、身体を雑に扱っていいわけじゃねえからな？」

わりと強めにレインの頭を小突いたクラインは意識を取り戻したキリトのところに向かった。

むすつとした表情で小突かれた頭をかいいたレインは、転移結晶を取り出す。

キリトの二刀流にみんなが興味津々でレインには誰も注意が向いていない。

一人静かにボス部屋から出たレインは、こんなことの原因になった根源のもとに向かうために、転移結晶を掲げる。

「転移、はじまりの街」

その日の午後、軍の横暴を知った片腕の知られざる天才剣士がはじまりの街で大暴れしたのは、キリトの二刀流のニュースの影に隠れてしまったせいで、ほとんどの人に知られることはなかった。

過去の記憶

アルゲードで目立つ黒い剣士が一人、ベンチに座って黙々となにやらパンの様なものを食べている。

ちなみに、先程までは見た目は焼き鳥だが、おそらく鳥ではないなにかの串焼きを食べていた。

ここ最近、彼の座っているベンチは彼の特等席で、昼頃にどこからか現れた彼は食料を調達して現在のように黙々と食べ続けている。

人目を気にすることなく食べるその剣士は座つても分かるほど足が長く、精悍な顔立ちにとくに表情が伺えないのも相まって大人びて見える。

しかし、黙々と食べ物にがつつく様や、食べ物に付いていたのであろうなにかのタレが口元には付いていて、子供っぽさが伺える。

そんな彼がアインクラッドでは数少ないイケメンだと言うのは、彼を眺めている女性の多さで分かることだろう。

アルゲードに住んでいる人たちの中ではすでに有名人となっている彼は迷宮区でも出っ立しているらしい。

しかし、ボス戦には現れず、交流も少ないせいで巷では《知られざる天才剣士》と呼ばれていた。

もちろん、今も黙々と食べ続けている彼はそんなことを知らない。

そこに、彼に小走りで近づくと小さな影が一つ。

「レインさん！」

ぴよこぴよここという擬音がぴったりの走り方でやって来た少女の横を小さな竜が飛んでいる。

「ん？シリカか。」

先程まで美味しいと思つて食べてるのか分からないほど無表情で食べていた知られざる天才剣士、レインがふわりと微笑む。

「キュルル」

「ああ、ピナもここにちわ」

レインはベンチの隅によつて、シリカが座る場所をあける。

開いた場所にシリカはちよこんと座り、ピナはレインの膝の上に乗った。

そんな光景は、カップルというよりも兄妹に見えるのは二人の間に流れる空気が色恋など関係の無いものだからだろう。

シリカは、最前線から離れているキリトに頼まれてレインの様子を見に来ている。

キリトの周りで色んなことが起こりすぎたのが原因だといえるだろう。

七十四層であったことはレインもその場にいたので知っている。

その後に一悶着あったらしく、ヒースクリフという人物とキリトがデュエルをすることになり、S A Oの中で最強だと言われるヒースクリフに興味があったレインは二人のデュエルも見に行った。

その後からレインはヒースクリフに興味をなくしている。

結果的にはキリトが負けて血盟騎士団に入ることになってしまったが、あまりレインには関係の無いことだと事件が起きた日もいつものようにソロで攻略をしていた。

普段なら数日帰らないのだが、珍しく一日で主街区に戻ってきたレインの元にキリトから結婚したという報告としばらく前線から離れるというメツセージが届いた。

その理由を知ったのはそのメツセージが届いた次の日だった。

あの時に、二十一人の犯罪者を殺した時に全員殺しておけばと、今もクズを殺すことをしておけばと、思った。

しかし、この世界で人を殺すと親しい人は怖がるどころか近づいてきた。

そして悲しい顔をする。

だから、できるだけしないようにしてきた。

そしてこれからも人を殺せば悲しい顔をする人がいる。

考えたレインは早くこの世界を終わらせるために動き出した。

本来戦いに身を投じるはずのなかった人たちがこれ以上悲しまないようにと。

そうして無茶なレインの攻略のが始まったのだが、どこからかそれを知ったキリトがレインを知っている人たちに声をかけているという経緯になる。

女の子のお願いには弱いということ把握しているキリトはシリカに頼んで、せめて毎日食事は取らせるようにとしてほしいと頼んだ。

結局は仮想世界。食べなくても生きていけるといふ理由で基本的に食事をレインは抜いている。

食べる暇があればレベリング。

それがレインの日常だ。

たまたま食事に行けば、大量に食べ、また食事を抜く。

が、アルゴの情報でここ最近はその大量に食べることで頻度が減ったというのだ。

そこで、シリカが料理スキルを上げるために料理を作るからレインに試食をしてもらう、という形でどうか食べてもらっている。

その結果、いまの兄妹が仲良くしている光景や《知られざる天才剣士》の二つ名が生まれたのだが、仕方がないだろう。

そんなことを知らないレインはいつものようにシリカから貰ったお菓子を美味しい

と言って食べる。

「レインさんはこのあとどうするんですか？」

「今日はストレージがいっぱいになってきたからエギルのところに行くつもりだ」

ピナにもお菓子をおすそ分けしながらレインは淡々と言う。

レインさんは何しても絵になるなあ、とぼんやりとシリカは思いながら、荒んでいないレインとしばらく世間話を楽しんだ。



最近の日課である、シリカの手作りお菓子の試食を終わらせたレインはエギルのところにやって来ていた。

素材を捨てて歩いていたところをリズベットに怒られて以来、こうして売りに来るようになっていたレインはこの世界に馴染んできているのだろう。

「らっしやい。おっ、最近頻繁に来るようになったな」

ドアを開けると、気さくに話しかけてくるスキンヘッドのその人物は、元の世界でもいそうな人だとレインは思っているのもあって、不思議な感覚になる。

おそらく、傾国の剣の在り処を教えてくれた騎士に空気が似ているからだろう。

「最近は街に一回帰ってきてるからな」

「相変わらず、自分の寝泊まりする場所とか持つてないのか？金には困つてないだろ」

トレードをしながら二人の会話は弾む。

「まあ、別に困つてもないが基本的に安全地帯で仮眠とる程度だからな」

「仮眠つて。仮想世界だからつてちゃんと寝ないとやつてけんぞ？」

「死なないようにしてる」

店の中にある椅子に座り、エギルの鑑定が終わるのを待つているとメッセージが届いた。

差出人はキリトということもあり、眉間にしわをよせながらも開いてみる。

「んっ？」

そこには不思議な事が書いてあり、もう一度読み返した。

『すまん。もしよかつたら俺たちが住んでいる二十二層のログハウスまで来てくれないか？もしかしたらお前と同じ異邦人かもしれない子を保護したんだ』

同じ異邦人という言葉に首を傾げる。

レインが実際にやつて来たのは地球という世界だ。

この仮想世界に異邦人がやつて来るとは思えない。

「どうかしたのか？」

突然無言になったレインにエギルが声をかける。

鑑定も終わったようで、トレードウィンドウも閉じられていた。

「キリトに呼びだしされた」

たとえ同じ異邦人だとしても、だからどうしたというのがレインの率直な意見だ。

地球で出会った異邦人たちは皆違う世界から来ていた。

仮想世界に異邦人が来るとは思えないし、ましてや同じ世界から来ているとも思えない。

なぜ自分が行かなければいけないのだろうか。

「行つてこればいいんじゃないか？ いい気分転換になるだろ」

「気分転換？」

「攻略するのもいいが、たまにはこの世界を楽しめつてことだよ。キリトとアスナが前から離れてるし、お前が頑張ってくれてるおかげで攻略のほうも順調らしいじゃねえか。お前がちよっと休んだぐらいじゃ誰もおこらねえさ」

顔に似合わないウィングをさされて思わずしかめっ面になる。

「でもな、俺が行つたところで邪魔にしかならないだろう」

「じゃあ、こいつをあいつらに届けてくれないか？ あいつら、さつさと今の家に行つちまったからな。結婚祝いってやつだ。俺は店から離れられないし。頼む」

にやりと笑うエギルはどうしても行かせたいというのが伝わってきた。

「……わかった」

ため息混じりに承諾したレインはアイテムを受け取り、のんびりとした歩調でエギルの店を出た。



二十二層にやってきた時、レインは故郷を思い出していた。

木こりが多かったレインの故郷の村はミュールゲニアの北端にあり、そんな小さな村に傭兵の父親と優しい母親と共にレインは住んでいた。

そんな故郷に似ている主街区である村をでて、キリト達が住んでいるという家に向かう。

森の中を抜ければ小さな家があったらな、なんてがらにもなくぼんやりと思ったレインの目の前に、思い出した家とは規模も違えば造りも違うログハウスが見えてきた。

それでも、さらに思い出してしまふ。

思い出さなかった日などないが、いつもよりも鮮明にあの雨の日を思い出す。

自分が戦士になると、誰よりも強くなると誓った日を思い出す。

しかし、今から行くのは血に濡れてしまった小さな家ではなく、この世界で戦いを続け、ぼろぼろになってしまった二人の憩いの場所だ。

首を左右にふって気持ち切り替えたレインはドアをノックする。

「どうぞ」

中からキリトの声がきこえたので遠慮なくレインはドアを開けた。

「しつれいする」

一応一言告げてからドアを開けると、小さな女の子が出迎えに来てくれた。

「いらっしやい、レイン」

にこにこ可愛らしく笑ってレインを出迎えたその少女は

「フィーネ」

レインが愛した少女に似ていた。

フィーネではないとすぐに自分自身で否定する。

それでも、森の中の小屋から出てきた目の前の少女が彼女と被る。

彼女ではないとわかっていても、ただ呆然と少女を見ることしかできなかった。

呆然としているレインを不思議そうな表情で見ながら、少女はレインに近づいてくる。

無意識にしゃがんだレインはフィーネよりも間違いない幼い少女と目の高さが一緒

になる。

「大丈夫？」

少女の小さな手がレインの頬に触れた瞬間、自分が涙を流していたことにレインは気がついた。

気がついたからと言って止められる理由でもなく、むしろレインは感情を溢れ出させることしかできなくなった。

なにも気にせずその少女を力強く、優しく抱きしめる。

「ごめん。弱くてごめん」

せめて嗚咽は漏らしたくないという思いだけで、涙を流すだけでとどめる。

力いっぱい抱きしめているからもしかしたら痛いかもしれないとか、こんな情けない姿をみて呆れられているかもしれないとか考えたが、それでもレインは少女を離すことができなかった。

不意に頭を撫でられる。

「大丈夫だよ」

その一言でレインはさらに溢れ出す涙を隠すために少女の肩に顔を埋めた。

レインという少年

もしかしたらという思いでキリトはレインを呼ぶためのメッセージを送った。

彼のことだからレベリングをするだの、攻略をするだの言って来ない確率の方が高い
と思っていたのだが、

『わかった』

という彼らしい簡素なメッセージが届いたときは一度メッセージを閉じて差出人を
確認してもう一度メッセージの内容を確認するほどには驚いた。

今朝起きたユイにレインが来るということを教えなくてはと、ソファアに座って楽し
そうに談笑しているアスナとしてはユイに近づく。

自然とあけられたアスナと反対側のユイの隣に座る。

「レインが来てくれるってさ」

レインのことを詳しくは知らないアスナだが、キリトが奴ならわかるかもしれないと
いうことを伝えると快く彼を呼ぶことに賛成してくれた。

「れいん？」

首を傾げるユイに可愛いなと思うあたり、もう気持ちは父親なのだろう。

「うん。レインって言う。パパの友達が来てくれるんだ」

「レインが来たらお出迎えしよっか」

「するー！」

アスナがユイに言うとユイは満面の笑顔で返事をした。

「じゃあ、レインが来たら、いらっしやい、レインって言つてね」

「いらっしやい、レインー！」

お出迎えの練習をし始める母親と娘を前に思わず、顔がにやける。出会ってまもなくはあるが、そこには暖かな家族の風景があった。

そうこうしていると、ドアが叩かれる。

予想よりも早くレインが来たのだろう。

「どうぞ」

「しつれいする」

遠慮なく扉が開かれる。

慌ててユイが扉に駆け寄っていく。

「いらっしやい、レイン」

練習の成果もあつてか、元気で可愛いお出迎えに微笑んでしまう。

のんびりとした様子でキリトもユイのあとをついていった。

ユイのことなんて紹介しようかと考えていたキリトだったが、レインの様子を見て言葉が失った。

「フイーネ」

呟くようにそう言ったレインは入り口で佇み、ただただ涙を流していた。

あれほどにも強く、片腕を失っても戦意を落とすどころかむしろ、それまで以上に果敢にグリーンムアイズと戦っていたレインからは想像もできなかった。

彼が涙を流すなどないも思っていた。

そんなキリトの考えを打ち消すように、無表情で無愛想だが、誰よりも強くあろうとする彼の姿はそこにはなかった。

あまりのことにキリトは棒立ちになっていたが、ユイが心配そうにレインに近づくと、それにつられるようにレインはしゃがんでユイと視線を合わせた。

「大丈夫？」

ユイがレインの頬に触れながら声をかけると、レインはさらに涙を溢れさせ、顔を歪めて思い切り抱きついた。

「ごめん、弱くてごめん」

泣きながら謝るレインをみて、キリトはここにはいけないと反射的に思い、踵を

かえす。

「キリト君？」

お茶の準備をしていたアスナがやって来たが、ちらりとレインの様子を見た彼女はキリトに並んでその場から離れた。

ログハウスの玄関はリビングと繋がっているの、二人は寝室でレインが落ち着くのを待つことにした。

あんなにも弱々しいレインは見たことがない。

無茶をして心配が絶えない弟のような、強くて頼りがいのある兄のような、キリトにとってレインはそんな存在だった。

動揺でなにも言えずにいるキリトの手をアスナが握る。

「キリト君、レインのこと、教えてもらおうことってできる？」

聞いてくるアスナからは、たとえ夫婦であってもレインのことから聞いていいのかわからないという気持ち伝わってきた。

少し悩んだが、もしかしたらユイと関係があるかもしれない、と思ったキリトは、レインが異邦人だということや、アインクラッドには途中からやって来たこと、それから元の世界でも命をかけて戦っていたらしいことを伝えた。

もしかしたら、そんなことを信じている頭のおかしいやつだとか思われるかもしれない

いと、そんな非現実的な事があるわけないと、レインはきつと嘘をついていると言われる覚悟をしたが、以外にもあっさりとアスナは認めてくれた。

「そっか。だからレインはあんなにも強いんだね」

その事に驚きつつもキリトは会話を続ける。

「ああ。レベル一で三十七層のモンスターを一人で倒すようなやつだからな。黙ってて悪かった」

「そんな内容じゃ仕方ないよ。グリームアイズと戦ってたレインを見たから信じられるけど、それが無かったら私は信じられなかったと思う」

たしかに、あの時のレインの強さは尋常ではなかった。

ただでさえメインアームではない槍を使っていたにも関わらず、恐れることなくボスと戦うレインは本物の戦士だと再認識させられたほどだ。

この世界では黒の剣士キリトだが、現実世界にもどれば結局のところただの餓鬼だ。でも、レインはこの世界だけではなく、現実世界でも剣士であることは間違いない。

ずっと命をかけてきたからこそ、あれだけの戦いが出来ていたのだろう。

「あのね、私ずっと不思議に思ってたの。どうしてレインの表情はあまり動かないんだろうって。この世界って感情表情って大げさになるじゃない？なのに、レインは不機嫌な時とかは表情に出るんだけど、基本的にあまり感情を感じられなかった」

「うん。だから、さつきレインが泣いてた時、驚いた」

少しの沈黙のあとアスナは口を開いた。

「私もキリト君が死んじやったらきつとあんな風になつちやうかもしれないなつたの」

静かな部屋にアスナの悲しい声が響く。

心なしか、手を握っているアスナの力が強くなっている気がする。

「それは——」

「パパ、ママ」

少し控えめなユイが呼ぶ声が聞こえた。

慌ててユイとレインのところに戻ると、未だにユイに抱きついて肩に顔を埋めるレインと、困った様子のユイがこちらを見ていた。

「レイン、寝ちやつた」

「まじか」

まさかあのレインが泣き疲れて寝てしまうなどとは思わなかった。

「おい、レイン」

「まってパパ」

レインを起こそうと声をかけると、ユイが止めてきた。

でかい男にもたれかかられて重いようで、踏ん張って立っているのがわかる。とりあえず、ユイの負担が減るように支える。

「どうしたんだ？」

「寝かせてあげて？」

かわいい娘のお願いは叶えてあげることしかキリトにはできなかった。

「わかった。えつと、レインの腕から抜け出せそう？」

見るからにがつちりとホールドされている。

どうしたら寝ながらもそんなにがつちりと抱きしめ続けることが出来るんだとこちらが聞きたいほどだ。

「ユイも一緒に寝る」

「あ、アスナ、どうしよう」

「仕方ないでしょ」

ユイからレインを引き離すことを諦めたキリトはアスナはどうかこうにか筋力パラメータにものをいわせて二人がかりで寝室のベッドに二人を寝かせた。

ようやく見えたレインの顔は幼く、自分と同年代だということを思い出させた。

ユイという抱き枕のおかげか気持ちよさそうに寝ている。

「なんだか兄妹みたいだな」

キリトは寝ている二人を起こさないように小さな声でアスナに声をかける。

もぞもぞとレインの腕の中で動いたユイは、レインの胸に擦り寄る。

「あら、恋人かもしれないわよ？」

「え、っ」

「レインが義理の息子かあ。楽しそうね」

「そ、それはちよつと」

それは一時ではあるが、暖かな時間。

非現実的で現実ではない世界だが、それでも彼らにとつてはかけがえの無い現実がそこにはあった。



レインが意識を覚醒させ、いつの間に寝たのか思い出す。

そして、フィーネを幼くしたような少女に出会ったことを思い出して、飛び起きようとしたが、右腕に何かが乗っている重さに気がついて、動きを止める。

「なんだ？」

「おはよう」

声がした自分の腕の中をみると、その少女がいた。

「えつと……」

「やっと起きたか」

戸惑っている、後ろから声をかけられる。

首を捻って振り向くと、そこにはキリトがいた。

「その子はユイって言うんだ」

「ユイ……」

その名前を聞いてやはり違うと自分に言い聞かせる。

「とりあえず、夕方近いし晩飯食おうぜ。ユイおいで、ママのご飯もう出来るから」

ユイを抱きしめていたことに気がついて、あわてて腕を離す。

「その、ごめん。痛かった？」

「そんなことないよ。暖かった」

にこりとわらってそんなことをいう少女と思いつく出の中にいる少女がかぶり、再び涙腺が緩む。

そう言えば、リズベットがこの世界の感情表現は大袈裟だと言っていたなど、ふと思いついた。

「ありがとう」

先に起き上がったユイの後にレインも起き上がって頭を撫でる。

「いっ、レイン」

ユイに手を引つ張られ、レインはバタバタとキリト達のところ連れていかれた。流されるようにソファアにレインは座らされ、アスナにお茶を出される。

「じゃあ、とりあえず食べようぜ」

「いただきますー!」

元氣よく言つたユイはレインの隣で美味しそうにピザたべる。

口の周りが汚れても気にすることなく食べているユイは幼くかわいらしい。

最初は今いる層の雰囲気と、この家に着いた時の既視感の影響あつて、フィーネに似ているユイを見た時に動揺してしまつたが、冷静になつたレインは微笑ましく見る事ができた。

自然と顔が綻ぶ。

レインの視線に気がついたユイがこちらをみて笑顔を見せる。

それに対してレインも笑顔でかえし、ユイの口の周りについているソースを指でとつた。

特に気にせずそれを自分の口に運んだレインは、キリトがなんとも微妙な表情でそんなふうすを見ていることに気づくことはなかつた。

食事も終わり、エギルから預かつていた結婚祝いのどこで手に入れたのかわからな

い、片面にYESとかかれもう片面にNOと書かれた枕を二人にわたし、微妙な雰囲気になったものの、キリトは今日の目的の話をし始めた。

「ユイは昨日、森で出会って保護したんだ。どうやら記憶がないようだし。で、レイン。この子が異邦人である可能性はあるか？」

ちらりとアスナをみると、特に異邦人という言葉も聞いても話についていけなさそうではなかった。

察するにキリトがいつの間にか話したのだろう。

レインも気にする質でもないので話を進める。

「俺も詳しい原理がわかってるわけじゃないからな。現実世界で元の世界に帰る手立てを探している時に、この世界に行かされたようなものだし」

「でも、レインはユイちゃんのこと……」

「悪いが知らない。俺の知っている彼女ではない」

そう、似ていただけ。

「さつきは取り乱してすまなかった。もう大丈夫だ。ただ……」

そこでレインは口ごもる。

あの日のことを思い出してしまう。

あの子に、助けられなかった子に似ていただけと言うだけなのに、その言葉を言うこ

とができない。

まるで、システムによって阻まれているように口が動かない。

その事に戸惑っている、不意に手を握られる。

そちらを振り向くと、心配そうにこちらをみるユイがいた。

「レイン、無理しないで？」

レインはきよとんとしてしまう。

この子はどうしてこんなにも優しい子なのだろうか。

見ず知らずの男にどうしてこんなにも優しく出来るのだろうか。

なにも覚えていないはずで、その方が不安になるだろうに、自分の事で精一杯なはずなのに、なぜ他人に優しく出来るんだろう。

そして、その心配してくれているユイを見て、なぜか落ち着くことができた。

「すまん。詳しいことは聞かないでくれると嬉しい。聞かれたとしても、話せるかわからないが」

「問題ないよ」

へらつとわらいなが承諾してくれたキリトに少し頭をさげて話を進める。

「この子が異邦人かそうでないかは断定できないが、俺があくまでもやってきたのは地球の日本だ。この仮想世界にはナーブギアを被って来ている。俺と同様、途中参加とい

う可能性がないこともないと思うが……」

ちらりとまだ十歳にもなっていないであろうユイを見る。

「こんなにも幼い子、しかも記憶すら曖昧な子をこの世界にぶち込む奴がいると思うと胸糞悪くなるし、ゲームがクリアされたあとのことを考えると……ユイのことが心配だ」

「たしかにそうだな」

キリトが深刻な表情でレインの言う不安を肯定する。

「まあ、俺がこうしてお前達と言葉が通じたり、文字を読めたりするのは、現実世界で俺を捕まえてた気だった組織の連中のおかげなんだし、その組織は俺が壊滅させたから、言葉の通じるユイが異邦人ってことは可能性的には少ないと思う」

さらつとんでもないことを言っているレインに、キリトとアスナが顔を引き攣らせていたが、気にすることはなかった。

窓から外を見ると、すでに外は暗くなり始めていた。

普段は仮眠しか取らないこともあつて、予想以上に眠った上にご飯もご馳走になつてしまっている。

これ以上長居してしまつても申し訳ないと思つたレインは立ち上がった。

「もう夜だし俺は帰ることにする。その……いろいろと迷惑をかけてすまなかつた」

「いや、気にしなくていいよ。転移門まで送るよ。久しぶりに話したいしな」
にやりとわらうキリトにあきれつつ、扉に向かおうと足を進めると、腕をつかまれる。
振り向くと、ユイがレインの腕をつかんでいた。

「レイン帰るの？」

理由は特にわからないが、どうやら懐かれてしまったようだった。

すこし困った表情をしてから、視線をユイに合わせるためにしやがむ。

「ああ。俺の家に帰るんだ」

「帰らないよ。レイン、家に帰らない」

その言葉にさらに困ってしまう。

実際、レインは家に帰るつもりはない。

というか、家を買うどころか宿すら滅多にとらない。

元の世界で旅をしていたし、そのときは野営をするのは当たり前のことだったため、
アインクラッドに来たからといってそのスタイルが変わることはなかった。

しかし、安心させるために家に帰るとわざわざ言ったのだが、なぜかユイは嘘だとい
うことがわかったらしい。

夜中にも鍛錬をしていることを正直に言ってしまったらまたキリトに何か言われか
ねないとおもったレインは口ごもってしまう。

「帰っちゃやだ」

可愛らしくお願いするユイにすでに多少ではあるがフィーネを重ねてしまっているレインはどうしたら言いかわからなくなってしまう。

困ってしまったレインはキリトに顔を向けて助けをこよう。

「仕方ない。泊まってけよ」

「えっ」

ユイを宥めてくれるのかとおもっていたのにもかかわらず、レインが泊まることに賛成されて思わず声が出る。

「ベッド大きいし、レインはユイちゃんと寝てもらってもいい？」

にここことアスナもレインが泊まるという方向で話を進める。

「待て、誰も泊まるとは——」

「私、レインと一緒に寝る！」

◆ 可愛い笑顔でそう言ったユイを見たレインには断ることはもうできなかつた。

寝静まった寝室で、レインは静かに身体を起こした。

時刻はすでに深夜を回っている。あと三時間もすれば夜が明けられるだろう。

一切物音を立てず、ユイたちを起こさないように寝室から出たレインは、ログハウスからも出て行つた。

装備を整えて、ログハウスから少し離れたところの森の中に入っていく。

少し開けたところに着いたレインはすらりとルインソーサリーを抜き、右脇に構える。

目を閉じたレインは呼吸を整え、剣を左上に振り上げる。

目を閉じ続けながらもレインは動きを止めない。

時には大上段から振り下ろし、ときには剣を振るつた勢いで足も振り回す。

目の前に何かがいるわけでもなく、剣を振り続けるレインが相手をしているのは、グリームアイズにソードスキルを叩き込んでいたキリトだ。

あのときのキリトの動きを思い出し、頭にえがきながら、それに合わせて自分も身体を動かす。

今日はキリトのソードスキルだが、それが元の世界で名の通る騎士であつたり、魔法使いであつたり、日によって違うが、これはレインにとって日課だつた。

キリトのソードスキルに対して何通りもの対処の仕方を身体を動かしながら考える。

一時間程動き続けたレインは横に剣を一閃したところで動きを止め、目を開けた。

姿勢を正して剣を鞘に収めると、あきれたようにレインしかないのにもかかわら

ず、声をかける。

「満足したか？」

「ばれてたか」

レインの背後の木陰から現れたのはキリトだった。

今から攻略にいくわけでもないのにキリトは装備を整えていて、背中には二振りの剣が背負われている。

「夜中に出て行くから何かとおもって着いてきたんだけど、お前の強さの理由がまた増えたよ」

あきれたように言いながら、キリトはレインに近づき、剣を抜いた。

レインはそれに答えるようにキリトに向き合い、収めた剣を抜く。

「ボスを一人で倒しきったお前と戦いたいとおもっていたところだ」

「片腕でボスとやりあったくせに何を言ってるんだか」

レインがデュエルを受けてくれるとわかったキリトはデュエル申請をし、レインは承諾する。

二人の間にカウントダウンの数字が現れる。

お互いにしゃべることなく、集中力を高めていく。

空気が張り詰めるなか、カウントダウンの数字もみずに動かずにそのときをまつた二

人の黒衣の剣士は、カウントダウンがゼロになった瞬間、一步でトップスピードのつて剣を交えた。

レインとキリトが朝方家に帰ると、ドアの前でアスナが怒った顔で仁王立ちしていた。

そんなアスナの前でユイも頬を膨らませて仁王立ちしている。

後ろのアスナを見て顔を青ざめるキリトと、前のユイを見て気まずそうにするレインは、謝る事しかできなかった。

「で、結局どっちが勝ったの？」

「俺がレインに勝てるわけないだろ」

アスナとユイの怒りも収まり、朝食をとりながら二人が朝からいなかった理由を説明していた。

キリトが説明する中、レインはそ知らぬ顔で朝食のサンドイッチを食べる。

「こいつ、ソードスキル全く使わないし、筋力パラメータも敏捷パラメータも俺より低いし、レベルだって俺のほうが上なはずなんだけどなあ」

腕を組んで上を仰ぎ見るキリトはぶつぶつとつぶやきながら考える。

「やっぱり剣を握ってからの時間からじやないの？」

「俺が剣を握ったのはベータのときの一ヶ月足しても、二年とちよつとだからなあ」

「なら俺のほうが短いぞ」

ユイの口元についていたドレッシングをぬぐいながらレインはさらつと言う。

「俺が剣を握り始めたのは一年たつたないかぐらいだ」

小さな口で可愛く食べているユイを微笑ましく見ているレインをキリトとアスナは啞然と見るしかなかった。

「ほんとに始まりの街まで一緒に行ってくれないのか？」

「悪いな。俺があそこに行くは無駄にややこしくなるからな」

始まりの街であれば、ユイのことを知っている人がいるかもしれないということ、キリトたちは始まりの街に行くことにしたらいいのだが、レインは一度始まりの街で暴れていることもあり、アルゴにできるだけ行くなといわれている。

元の世界であれば人が言うことを聞かないことのほうが多いのだが、この世界のルールには従ったほうがいいことをいろいろところで学んだレインはできることであれば、

人のいうことを聞いていた。

「ユイ、二人の言うことをちゃんと聞くんだぞ」

レインと離れるのが嫌なのか、寂しそうな顔をしているユイの頭をなでる。キリトはお前が言うのかよ、とおもったがあえて口にすることはなかった。

「じゃ、俺は最前線にもどる。二人はユイのことを頼んだ」

「ユイのことは任せろ。最前線もみんなに任せてわるい」

最前線から離れていることに負い目を感じているらしい二人は申し訳なさそうな顔をする。

「そんなことを気にすることは無い。お前たちは誰よりもいろんなものを背負って戦ってきたんだ。少しぐらい休んでも問題ないさ」

もともと、命をかける必要のなかった二人なのだ。疲れてしまっても誰も文句は言えないだろう。

「それに、俺はキリトがいないほうが止められることがなくて動きやすいしな」

「お前、それが本音だろ」

キリトにじと目で見られたが、レインは綺麗にそれを受け流す。

そんな二人に、アスナもユイも笑顔になる。

「それじゃあな。転移、アルゲード」

そうしてレインは最前線に戻った。

——そして数日後、七十五層のボス部屋が見つかった。

異世界

レインが一日攻略をしなかったせい、七十五層のボス部屋を一番最初に見つけたのは血盟騎士団だった。

ボス戦に参加することのないレインは普段であれば、ボス攻略が終わるまではいろんな層にいったって観光のようなことをしていたのだが、今日は血盟騎士団の本部に来ていた。

鉄の都といわれるだけの事はあって、他の層に比べると寒々しい空気が流れている。

レインがここに来たのは観光ではなく、ヒースクリフに呼び出されたからだだった。

今まで面識もなければ、『知られざる天才剣士』という二つ名は有名になり始めているが、それが誰だというのはアルゴのおかげで出回っていなかったため、なぜヒースクリフがレインのことを知っていたのかは不思議だった。

しかし、アルゴの元にヒースクリフからレインと話がしたいというメッセージが届いたのだ。

レインとしても攻略を進めるつもりもなかったので断る必要もなく、こうして出向いているというわけだ。

血盟騎士団の本部の門に着いたレインは臆することなく、門番に声をかける。

「すまない。ヒースクリフに呼び出されたんだが」

きちんと話は通されていたようで、怪訝な顔をされつつもレインを通してくれた。

門番に案内されたとおりに階段を上っていき、ヒースクリフがいるらしい部屋の前に着く。

一瞬、いきなり扉を開けようとしたが、一応ノックしてから返事は待たずに扉を開ける。

システムによって扉は開かないかとおもったが、意外にも普通に扉は開いた。

「よく来てくれたね。レイン君」

扉の正面に座っている学者のような雰囲気をもっているヒースクリフがそこにいた。

近くに行くでもなく、ドアから少し離れたただけのレインは話を進める。

「で、俺をここに呼んだ理由はなんだ？」

アインクラッドにいる人であれば、ヒースクリフを前にするとか緊張してしまうのだが、レインはいつもと特に変わる様子はなかった。

「いきなり本題とは。すこし雑談もしたかったんだが」

苦笑したヒースクリフはすぐに真剣な面持ちになる。

「君をここに呼んだのは次のボス攻略に、君も参加してほしいとおもったのだよ。七十五層はクウォーターポイントといわれていてね。他の層に比べると強く設定されているんだ。そして偵察部隊を出したんだが……」

「帰ってこなかったのか」

「口ごもったヒースクリフの変わりにレインが言う。」

「その通りだ。いつもよりも慎重に行ったのにもかかわらず、ということも付け足しておこう」

「で、なぜ俺を？」

「君のうわさは私も聞いているからね。今までボス戦にきたことがないとはいえ、君も迷宮区を攻略できるほどの実力者なのであれば参加してほしいとおもったのだよ」

微笑みながら言うヒースクリフをレインはいつもと変わらない表情で見た。

目の前の男は中身の読めない男なのは確かだ。

何を考えているのか、腹に持っているものがレインにもさっぱりわからない。

「俺はこの世界での連携があまりできない。そんなやつを連れて行くのは得策じゃないとおもうが」

「かまわんよ。君には一人で遊撃隊の役割をしてもらうつもりだ。どんなボスでどんな攻撃をしてくれるかわらんからね。短時間で、しかもソロで急激に力をつけた君ならで

きるだろう?」

できなくもない、というのがレインの率直な意見だった。

しかし、とレインが考えていると、ヒースクリフは思い出したように口を開いた。

「ちなみにだが、キリト君とアスナ君にも参加してもらおう予定だ」

その言葉に、レインは眉をひそめる。

ヒースクリフは二人が来ることをレインが知れば参加するだろうというのをわかつて今の情報を伝えたとおもわれる。

しかし、レインは元々《知られざる天才剣士》といわれるだけの事はあって、ほとんどの人に素性を知られていない。

素性を知らなければ交友関係すらも大して広まるとは思えない。

にもかかわらず、ヒースクリフはキリトとアスナが来ると言えば、レインも来るということをわかっている。

ヒースクリフの思惑にはまるのは癪に障るものの、キリトとアスナが来るのであれば、レインは行くしかないとおもった。

あの二人に、自分と同じ思いをさせたくない、そうおもったからだ。

「わかった。今回のボス戦は参加させてもらおう。ただ、俺は自由に動かしてもらおうぞ」
「かまわんよ」

「なら俺は失礼する」

「待ちたまえ」

話は終わったとおもい、レインはすぐに踵を返そうとしたが、ヒースクリフはなぜかとめる。

特に用事のないレインだったが、いけ好かない人物と好き好んでいるタイプでも、相手のことを気にして内心を隠すタイプでもないので、盛大に顔をしかめた。

「そんなあからさまに嫌そうな顔をしないでくれないかね」

そこまで嫌そうな顔をされるとも思っていなかったヒースクリフは苦笑をしたが、すぐに真剣な面持ちに戻る。

むしろ、先ほどのボス戦うんぬんの話よりも真剣だった。

「さきほどのお願いは血盟騎士団団長としての話だったんだが、ここからは私個人からの質問だ。——君は一体誰なんだね？」

「それはどう意味がよくわからんな。俺も一プレイヤーでしかない」

堂々とそう答えたレインだったが、ヒースクリフはまるでレインを見定めるように目を細めた。

鋭い視線をレインは涼しい顔で受け流す。

「確かに君も一プレイヤーなのだろう。しかし、君は突然現れた。君のうわさが流れは

じめてから一年もしないうちに最前線で戦えるほどの剣士になっている。そしてなにより、君の名前は《生命の碑》にない。私が直接確認しに行つたので間違いはない。さて、それを踏まえてもう一度君に問おう。君は一体誰なんだね？」

ヒースクリフのかもしれないし出す雰囲気にも本当のことを話すまでこいつはしつこいだろうということも理解したレインはため息をついて正直に話すことにした。

元々、キリトに口止めされているだけで、レインとしては隠す気はないしてないのだ。キリトやアルゴに怒られるかもしれないが、まあ知ったことではない。

「俺はこの仮想世界に途中から参加している異邦人、地球ではない世界から来た者だ。元の世界でも剣を振るって戦っていたというのもあつて特に苦もなく進むことができている。《生命の碑》とやらのことはよくわからんがな」

レインの話を聞いている間、ヒースクリフは目を閉じていて、何を考えているのかはわからない。

しばらく、ヒースクリフは黙り込んでいたが、静かに目を開けた。

「なるほど」

つぶやいてからも、ヒースクリフはしばらく何かを考えているようだった。

瞳は少年のように輝いているような、大人が葛藤しているような揺らぎ方をしてい

その様子をうかがっていたが、最終的にはしずかな大人の目に戻った。

「アルゴ君やキリト君が君という存在を秘密にしていたということとは本当のことなのだろうね。もちろん、このことは秘密にしておくので安心してくれたまえ」

「話はもう終わりか？」

「ああ。聞かせてくれてありがとう」

意外にもあつさりと理解を示したヒースクリフに疑念を抱きつつも、レインからは特に何も話すこともなく、その部屋から出た。

血盟騎士団の本部からレインが出る間、本部にいた団員たちはレインに忌避の視線をばししてくる。

彼らも最前線で戦っている戦士たちで、レインを全く知らないというわけではない。

むしろ、《知られざる天才剣士》という二つ名は最前線で言われたはじめたものだ。

つまり、天才剣士とつけるほどにはレインの実力を認めているということになる。

実力を認めているからこそその視線だった。

キリトと変わらないほどの実力を持ちながらも、ボス戦には参加しないレインにいい気持ちを持っているものは少ない。

しかし、レインはいつものように涼しい顔でその視線を受け流して、血盟騎士団の本部を後にした。

◆

「聖騎士様直々にお呼び出しされて何事かとおもったが、レインがとうとうボス戦に参加加力」

KOBの本部を後にしたレインはいつものカフェでアルゴにヒースクリフからボス戦に参加してほしいということと言われたことと、それを承諾したことを話していた。

キリトとアスナの名前を出されたことや、異邦人だと言ったことは伝えてはいない。

「まあ、一人で自由にやってもいいと言われているから連携とかはしないけどな」

のんびりと紅茶を飲みながらレインはいつもと変わらない様子で話すが、アルゴは不安な気持ちになっていた。

一人で連携もなしに動き回るといことは、危ないときに援護をしてもらえないことでもある。

遊撃であれば、隙を見てどうにかポジションを飲むことぐらいはできるだろう。

それでも、偵察すらできないボスに援護がないというのは、レインの実力を知っているアルゴでも不安は残る。

「死ぬ気はないから安心しろ」

まるでアルゴの不安を取り払ってくれるように優しい声でレインは告げた。

そんなにわかりやすい空気を出していただろうかとおもい、レインの顔を見たが、アルゴのほうを見ることすらしていなかった。

何も気にしていないような顔をして、他人のことをちゃんと気にかけていて優しくする彼に思わず微笑んでしまう。

にやにやとしているアルゴに気がついたレインは顔をしかめるがそれ以上特に何かを言うことはなかった。

そんなレインに少し安心する。

彼ならどうにか生き残るだろうと、漠然とアルゴは思った。

「レインがちゃんと帰ってきたらいい情報をタダでやるヨ」

「アルゴがタダで情報をくれるのならがんばるしかないな」

「帰ってこなかったら、キリトとデキてたって噂流しといてやるヨ」

「それはそれで面白いことになりそうだな。キリトが」

嫌がる様子のなかったレインに思わずアルゴは顔をしかめる。

「レインは嫌じゃないのかヨ」

「知り合いに変な目でみられたりするのはいくらかは嫌……だな。ちゃんと帰ってく

るよ」

レインはへらつと苦笑する。

彼にしては今日は感情が表に出ているな、と思いつながらアルゴはしばらくレインとの会話を楽しんだ。



七十五層のボス部屋の扉の前に一人の黒衣の戦士が佇んでいた。

いわずもがなそれはレインで、他のボス戦に参加する人たちよりも先にこの場に来ていた。

集合時間と場所を教えられたが、一人で先に来ていた。もちろん、先に行くことはヒースクリフに伝えているので、問題はないだろう。

今、この扉をくぐり、今までにない強敵だといわれているボスに単身で挑むのもレインとしては捨てがたかった。

それでも、行動にうつきなないのは物足りなくなってしまうてきている身体のことを考えているからだだった。

現実世界では、剣の技術に合わせて筋力や自身の速さも上がっていったし、鍛えることもできた。

しかし、この世界では現実世界での自分を再現しているだけで、それ以上の成長はさせていない。

この剣の世界で剣の技術は上げることができても、現実世界で成長するはずの肉体に關しては何も手をつけることができなかったのだ。

そのため、技術だけ上がり、それについていけない身体に不満を持つていた。

ステ振りをすれば技術についていける身体にできるが、現実世界のことを考えてそれはすることができなかった。

現実世界の身体と仮想世界の身体を合わせることがどうするか考えるために、剣を万全な状態にしてから七十四層のボスに挑むつもりだったのだが、結局それどころではなくなってしまったので保留になってしまっている。

現実世界なら深く考えずに戦っていたら、仮想世界だとHPという命の器がある。

たとえば、自分が戦える状態でもHPがなくなってしまうと死んでしまう。

ヒースクリフの真剣さ、アルゴの心配の仕方、そしてキリトとアスナがやってくるということもふまえると、単身でいくのは得策ではないとレインは判断した。

レインが一人で先にここに来たことに關しては深い理由はとくになく、ただ単に他の人たちと関わりあうことを避けたことだった。

しばらく待つっていると、青い回廊がボス部屋の前に現れた。そこから続々とボス戦に参加するらしい人たちがでてくる。

最後に出てきたキリトとアスナをみて、レインは二人の元に近づいていった。

こちらに気がついた二人はレインが参加するとは聞いていなかったのか、少し驚いた様子を見せた。

「お前も参加するのか」

「ヒースクリフに頼まれてな。戦には参加したことがあるし、邪魔にはならんようにするさ」

戦とはいえ相手は人間だったし、多対多だったということもあって、多対一というボス戦とは勝手が違うだろうが、何か経験をしていることを言っておいたほうが多少は安心してくれるだろうと思つての発言だった。

そんなレインの言葉にキリトとアスナは顔を引きつらせたが、レインはなぜ二人がそんな反応をしたのかわからなかった。

「そういうえば、ユイはどうなったんだ？」

ふと思ひ出したレインが聞くと、二人はやさしく微笑んだ。

「ユイは今の世界にいないけど、必ず俺がまたユイと会えるようにするよ」

よくわからないことを言われ、レインは眉間にしわを寄せる。

その様子のレインにくすりとキリトは笑う。

「ボス戦がおわつたら詳しいこと話してやるよ。だから生き残れよ」

「この俺が負けるわけないだろ」

不敵に笑うレインとキリトは互いの拳をぶつけあった。

「そういえば、俺が帰らなかつたら、アルゴが俺とキリトがデキてたつて話を広めるそう
だぞ」

「はあ!？」

「えっ、キリト君……?」

嘘でしかないのだが、レインが真剣な——いつもと変わらない無表情で言い、アスナはキリトから一步はなれた。

もちろん、アスナも嘘だとわかって行動している。

「ちよつと、アスナ?! おい、レイン!」

あまりのことにてんぱっているキリトは、レインに嘘だといつてもらうために助けを求めようとするが、

「クラインもきてたのか」

「おうよ! レインには期待してるぜ」

すでにクラインとの雑談を始めてしまっていた。

その様子にキリトは呆然とすることしかできない。

そんなキリトにクライインが気がつく。

「ところでキリトのやつ、何かたまってるんだ？」

「ああ、俺とキリトがデキてたって話を広めることを伝えたらあわてだしてな」

「えっ」

いろいろとはぶいて説明をするレイイン——もちろんわかっている——のせいで新たな誤解が生まれた瞬間だった。

「待って待って！嘘だからな！嘘だからなクライイン！」

「いや、まあ二人の仲が異様に良いとは思ってたけどよお……大丈夫だ。たとえ

キリトが同性愛者でも俺達は今後もダチだからな！」

「違うって！頼むから話を聞いてくれ！」

アスナとは違いクライインは本気だったりするあたり、彼の良さがにじみ出ている。

そこにエギルが寄ってきて、アスナがことのいきさつを丁寧に説明してくれたのはキリトにとって唯一の救いだろう。

そんな緊張感のくそもない会話のおかげで、ボス戦に挑む全員がまとっていた張り詰めていた空気が消え去っていた。

「皆、準備はいいかな？今回はボスの情報がない。基本的には血盟騎士団が前衛で攻撃

を食い止めるので、各々柔軟に対応してほしい」

ヒースクリフの言葉で全員が気を引き締める。

ほどほどの緊張感に包まれ、これから戦いだという空気に変わる。

今まで戦ってきた彼らの切り替えは早かった。

「では——行こうか」

ボス部屋の大扉が重々しく開かれ、全員が慎重に中に入っていく。

最後にレインが入ると扉は強制的に閉められ、ここにいる全員が死ぬか、ボスを倒すまで開くことはなくなった。

レイン以外の全員は中央に向かって歩を進めるが、レインは扉の前から動くことはなかった。

いきなり単身で動くわけもなく、他のメンバーの動きを見てから自分も参戦しようと思っているからの行動だった。

いまだに現れないボスにも警戒しつつ、レインはルインソーサリーをだらりとぶら下げてそのときをまつ。

「上よー」

アスナが叫ぶと同時に全員の視線が上に行く。

それはレインも例外ではなく、上を見上げる。

天井にはとてつもなくでかい、足の多い骸が張り付いていた。

それを見てもレインの表情に恐れが現れることはない。ただ冷静にそれを見上げて
いるだけだった。

敵を注視したことでアイコンと《The Skullreaper》という名前が表
示される。

人間でもない骸骨の目に赤い光がこちらを見る。

その視線がキリト達のところに向くとスカルリーパーは天井から足を離して彼
らの真上に落下する。

「固まるな！距離をとれ！」

突然のことと、巨大で凶悪な姿をしているそれに固まっている全員にヒースクリフの
声が響き、我に返った彼らは壁に向かって走り出す。

それとすれ違うようにレインは走り出した。

「レイン?!」

それに気がついたキリトは振り返りながら叫ぶ。

気にすることなくレインはスカルリーパーの両手についている鎌を駆け抜けながら
も避け、スカルリーパーの眼前に飛び上がる。

後ろで誰かが死んだようでパーティクルがはじける音が聞こえるが、かまっているこ

とはできない。

身体を捻りながらありつた力の力をこめて、頭蓋骨めがけて斬撃を食らわせる。

硬い石に剣を叩きつけるような衝撃が走る。

下手をすると剣が折れてしまうのが直感でわかった。強化はされているおかげと、レインの強さのおかげで最前線でもまだ使うことができているが、レインの大してあげていない筋力パラメータにあわせているので、耐久値はそれほど高くないのだ。

頭に一度着地したレインは、背骨を滑り降りてスカルリーパーの背後に降り立つ。

それと同時に、レインの背後で激しい衝撃音が響いた。

音のするほうをちらりとみると、ヒースクリフが巨大な鎌を盾で受け止めているところだった。

しかし、鎌を受け止めているせいでがら空きのヒースクリフの横を狙ってもう片手の鎌を振りかぶる。

さすがに今の位置から助けに行くことはできないが、キリトが鎌とヒースクリフの間に滑り込み、二振りの剣をクロスさせてどうにか受け止めた。おされ気味のキリトをアシナが助けに入るのを見て、レインは自分のするべきことに集中する。

「大鎌は俺たちが受け止める！ 皆は側面から攻撃してくれ！」

キリトの声に、それまで固まっていた人たちが動き出す。

レインももう一度敵の弱点であろうの関節を狙うために飛び上がろうとしたが、視界の端で尾の先についている槍状の骨のきらりと光った。

それも敵の武器であると気がついたレインは他の人に向かって振り回しているそれに向かって駆け出す。

「ふんっ！」

狙われていた人と槍の間に滑り込んだレインは、剣で受け止めはじき返す。

キリト達が受けている大鎌よりも軽いおかげで何とか対処することができた。

突然のことで止まっている後ろの人物にレインは声をかける。

「固まっている暇があるなら動け！お前もこの世界で戦う一人の戦士だろ！」

叫ぶように言い放ったレインはすぐに他のところに向かって振り下ろされようとしている槍に向かって駆け出す。

敵の攻撃を味方にあたらないように受け止めるために縦横無尽に駆け回るレインの動きは人間離れしていたが、それを見る暇は他の人にはなかった。

そして、それが起こってしまったのは幾度の槍をはじき返して耐久値が削られていたさなかだった。

人が密集しているところに振り下ろされようとしている尾の先の槍をはじくには彼らの上空を飛びながらはじく方法以外ないと判断したレインはスカルリーパーの足を

駆け上がった背中へのぼり、槍に向かって飛び掛った。

地面に足をつけて踏ん張るといことができないのでレインは剣を振る力だけではじくしかなく、力いっぱい剣をスカルリーパーにぶつける。

槍をはじくことに成功はしたが、ルインソーサリーがパーティクルとなって消失してしまっただのだ。

レインは眉間にしわを寄せる程度で終わらせ、地面に足がついたと同時にスカルリーパーから距離を取る。

スカルリーパーから目を離すことなく、心のそこから傾国の剣を欲した。

傾国の剣であれば壊れることはない、何でも切り伏せれると、思わざるを得なかった。

そのとき、ふわりとレインの右手に青い光がまとう。

気がついたレインはしばらく考えた後、やけくそのように叫んだ。

「お前の主は俺だろう！俺のところに来い！」

次の瞬間、よりいっそう青く光ったレインの右手には多数の羽虫が出すようなブウウンという音を発し、刀身には青いオーラをまとっている魔剣——傾国の剣が現れた。

現実世界の傾国の剣にくらべると、刀身が薄く透けているが、レインはそれを見て微

笑を浮かべると、スカルリーパーへと駆け出し、尾を切らんとばかりに根元に斬りかかった。

そこには、本来の姿の知られざる天才剣士があった。

それからどれ程の時間がたったのだろうか。

久しぶりに傾国の剣を握ったレインとしては短いような、しかし長いような時間だった。

しかし、終わりというものはくるもので、それは突然で、しかしようやくといったところでスカルリーパーのHPはゼロになり、青いパーテイクルになって消失した。

高鳴ってる鼓動を落ち着かせると同時に右手の傾国の剣は消えた。

いまだ残る戦いによる高揚感と傾国の剣とルインソーサリーを失った虚無感の間をレインはさまよいながら立っていた。

周りの様子を伺ってみると、自分のほかに立っているのはヒースクリフだけで、他の全員は疲れて座り込んでいた。

キリトとアスナも無事のように二人は背中を合わせて座り込んでいる。

キリトの視線がヒースクリフに注がれているが、レインの頭は消滅してしまったルインソーサリーの代わりをどうするか考えていた。

筋力値をあげてより良い剣をもてるようにするかと考えていると、キリトが突然ヒースクリフに向かって駆け出して剣を振り下ろした。

何事かと思ったが、ヒースクリフの前に《Immortal object》という紫色の文字が表示される。

あれは基本的に壊せないものに表示されるはずのもので、人に現れるものではない。

「システムの不死……どういうことですか、団長」

アスナが問いかける。

キリトがヒースクリフがこのデスゲームを作り上げた茅場晶彦だと正体を看破している間、なるほど、とレインは納得していた。

最強と称されるものに今まで挑んできていたはずのレインがヒースクリフに興味をなくしてしまった原因である、キリトとヒースクリフの決闘で、レインはヒースクリフが何か不正を行ったことをわかっていた。

それまでのヒースクリフの動きを見て、明らかに彼の動きではない動きでキリトの攻撃を盾で受けていたからだ。

不正が何によるものなのかはわからなかったのと、システムについてよくわかっていないレインは深く考えることもなく、ただ、不正をするやつに興味はない程度にしか思っていないかったのだ。

レインは成り行きを傍観する間も会話はすすむ。

逆上した血盟騎士団がヒースクリフに襲い掛かったが、途中で動きを止める。

何事かと思ったが、突然レインの身体も動かなくなりその場に倒れこむ。

首をどうにか動かして周りを見てみると、キリトとヒースクリフの二人以外はレインと同じように倒れこんでいた。

「どうするつもりだ。ここで全員殺して隠蔽でもするのか？」

アスナを抱えながらキリトはヒースクリフをにらみつけた。

それに対してヒースクリフは飄々とした様子で答える。

「麻痺状態になってもらっただけだ。だが、こうなってしまうては致し方ない。途中で放り出すようで不本意ではあるが予定を早めて私は最上階の《紅玉宮》で君らを待つ。だが、その前に……」

ふわりと微笑みながらもヒースクリフは言葉が続ける。

「君には私の正体を看破した報酬として私と一対一で戦う権利を与えよう。無論、私の不死属性は解除してだ。オーバーアシストも使わない、真正正銘の決闘。私を倒せば、その時点でゲームはクリア、全プレイヤーがログアウトされる。これが、君に与える報酬だ」

レインはただ静かに成り行きを見守る。

周りからキリトをとめる声が聞こえるが、レインはただキリトを見ていた。ちらりとこちらを見たキリトと視線が合う。

目が合った瞬間は瞳が揺らいでいたが、一回目を閉じて開いたキリトの瞳は何かを決断した瞳に変わっていた。

お前なら大丈夫だ、とレインは小さくうなずく。

「いいだろう。決着をつけよう」

つぶやくように言い放ったキリトは抱きかかえていたアスナを優しく地面に寝かす。

「駄目だよ！キリト君！」

今にもなきそうなアスナにキリトはやさしく微笑んだ。

「ごめん。ここで逃げるわけにはいかないんだ」

「死ぬつもりはないんだよね？」

「もちろんだ。必ず勝つよ。勝つてこの世界を終わらせる」

「信じてるよ」

キリトは立ち上がってヒースクリフと向き合い、背中の鞘に収めていた二振りの剣をすらりと抜いて構える。

「やめろ！キリト！」

レインの視界の外でクラインが叫ぶ。

そんなクラインに対してキリトは声をかけて何か謝っている。その次にエギルにも何かしら声をかけていた。

その後にはレインをちらりと見やる。

しかし、何か声をかけるわけでもなく、ただレインを見たキリトはぐつと力強く剣を握りなおしてヒースクリフに向きなおした。

「悪いがひとつだけ頼みがある」

「何だね？」

「簡単に負けるつもりはないが、一日だけでいい。アスナを自殺できないようにしてくれ」

「よかろう。彼女はセルムブルグから出られないように設定しておこう」

その言葉を聞いたアスナが叫んで止める。

レインはその様子のアスナを見て絶対にキリトを死なせてはいけなと思った。

キリトがヒースクリフに負けるかはヒースクリフの本当の実力を知らないレインにはわからないが、もしもという場合がある。

しかし、動け、と念じても麻痺状態になっている身体が動くことはない。

そうこうしている間にもデュエルの準備が整ったようで、二人の間にカウントダウンの数字が表示される。

今までにないほどに緊張に包まれる。

キリトなら大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせるように思いながらレインは目を離すことなく二人を見る。

「殺すっ！」

数字がゼロになったと同時にキリトは地面を蹴った。

一瞬でヒースクリフとの距離はなくなり、キリトの右手の剣の横薙ぎをヒースクリフが盾で防いでからふたりの攻防が始まった。

久しぶりに見た、人同士の本気の殺し合いをレインはただ見つめる。

剣と剣、剣と盾がぶつかり合い、火花を散らしながら二人の世界はどんどん加速する。

それを見ていたレインの視界の端で何かが動いた。

その何かがアスナだと気がついたとき、レインは背中につめたいものを感じた。

彼女もレイン同様からだが動かないはずなのに、どうにか立とうと必死に身体を動かしている。

キリトがソードスキルを発動したタイミングでアスナは立ち上がり、キリトに向かって駆け出した。

完全に身体の自由が戻ったわけではないようで、動きはゆっくりではあるが、着実にキリトに近づく。

だめだと、動けど、レインは全身に力をこめる。

ヒースクリフは涼しい顔でキリトのソードスキルをすべて受け止めている。あのままではソードスキルが終わったあとの硬直時間の間にキリトはヒースクリフの攻撃を受けて死んでしまう。

それではだめだと。二人に自分と同じ思いをさせてはいけないと、レインは強く思う。

キリトのソードスキルが終わり、硬直時間に入った隙を狙うためにヒースクリフは剣を振り上げた。

「さくらばだ、キリト君」

しかし、ヒースクリフが剣を振り下ろす前にヒースクリフとキリトの間にアスナが滑り込んだ。

それを見たレインは、何かを考える間もなく、全力で駆け出していた。

動かなかった身体が嘘のように一瞬でアスナとキリトのところにとどり着いたレインはかばうようにヒースクリフに背を向けて自分の身体で剣を受け止めた。

仮想世界のおかげで痛みを感じることはないが背中に剣を切りつけられた不快感を感じる。

「レイン……?」

突然飛び出してきたアスナを受け止めたキリトが驚愕の目でレインを見つめる。

「まさか、解けないはずの麻痺状態で動くものが二人もいるとは」

そんな呟きが後ろから聞こえるが、レインは二人を守れたと安堵していた。

自分の視界が赤くなり、キリトの泣きそうな表情を見て自分のHPがなくなつたことを悟る。

そして、レインはキリトとアスナに微笑みかけ、

——レインは青く輝く光の粒になつてその場から消失した。

レインが消えた場所を、キリトはアスナを抱えながら呆然と見ていた。

いつも仏頂面で、不敵に笑うことしかなく、この世界で誰よりも強く死なないと思つていた人物が、キリトとアスナに向かつて今までにないほどやさしく微笑みかけ、この世界から消えた。

彼は絶対に死ぬことがないと思えるほどの強さを持つていたおかげで、キリトは安心して彼と一緒にいることができた。

黒猫団を失つたキリトはレインの底知れぬ強さに救われていたのだ。

「キリト君」

放心していたキリトに向かってアスナは声をかける。

彼女はキリトにとってレインが心の支えになっていたことを知っている。

「キリト君、戦わないと」

やさしくキリトの手に触れ、力強く光る瞳を向ける。

うなずきあつた二人は、ヒースクリフに向かって剣を構えた。

その様子にヒースクリフは目を細めて微笑む。

「なかなか面白い展開だ。受けてとう」

キリトとアスナはアイコンタクトをするわけでもなく、同時に動き出した。

スカルリーパーの大鎌を二人で受け止めていたときのように、言葉を交わさなくても意思疎通ができる感覚が再びやってくる。

今までにないほどに連携の取れた白と黒の剣舞がヒースクリフを襲う。

ヒースクリフはまるでそのことを喜ぶかのようにキリトとアスナを笑顔で相手取り、最後はキリトとアスナの同時に繰り出された斬撃を身体に受け、満足したように笑みを浮かべる。

「見事だった」

そして、ヒースクリフもパーティークルとなって消失した。

「終わったのか………?」

消えたヒースクリフが本当に死に、ゲームがクリアされたのか不安に思っていると、デスゲームが開始されたとき以来鳴っていない鐘の音が鳴り響いた。

クライン達の麻痺も解けたのか全員が立ち上がり、呆然と空の見えない天井を見上げる。

「ゲームはクリアされました」

世界に無機質なアナウンスが流れ始めた。



レインは気がつくとき空にいた。

地面を感じてたついでなので透明な足場がそこにはあるのだろう。

周りの様子を伺うと、空に浮かぶ城のようなものが崩れて落ちている様子が見えた。

「あの世界は、君にとって異世界だったかね?」

突然聞こえた声のほうを見るとそこには坂崎という研究者が着ていた白衣と同じものをまとった男が立っていた。

「自己紹介はまだだったね。この姿は君は知らないだろうが、私はヒースクリフだ。そ

してあの世界を作った茅場晶彦という異世界を夢見た一人の男でもある」

レインはもう一度崩れ落ちている世界、アインクラッドを見てから口を開いた。

「俺にとってアインクラッドもひとつの異世界だったよ。すべてが仮想でそこには存在しないものなのかもしれないが、人はそこで生きて、戦士として育っていた」

レインの言葉を聞いた茅場晶彦は目を閉じて、その言葉を噛み締めているようだった。

「そうか。それだけを聞ければ満足だ」

「ところで、キリト達はどうなった？」

レインがそう聞くとふわりと茅場晶彦は微笑む。

「君は自分の生死よりも、キリト君たちの安否の心配をするんだな。安心したまえ。彼らはこの私を破ってあの世界を終わらせたよ。そして、君も死んではいけない。時期に目が覚めるだろう」

そうか、とだけ崩れゆくアインクラッドを見ながらレインは返した。

「では、私はキリト君とアスナ君のところに言ってくるよ。さらばだ異世界の戦士、レイン君」

レインがもう一度茅場晶彦がいた所をみたが、すでにそこに彼はいなかった。

一人になったレインはぼんやりと崩れゆく一つの世界を見続けた。

世界が全てそこからなくなり、
レインも光に包まれ、
この世界から姿を消した。

アインクラッド番外編

二人の攻略 E p. 1

それなりににぎわっていて、いい空気の流れるおしやれな酒場に真つ黒い奴が二人。そこだけ異様に黒いせいでもかなり目立っている。

一人は日本人に対しての嫌がらせなのかとおもうほど足の長い男。

もう一人はぶつちやけ女でも通りそうな可愛い顔をしている男。

兄弟なのか、それとも兄妹なのか。

遠目からみることしかできない人たちには判断することはできなかったが、気になるものは気になってしまいうもので、ちらちらとそちらを見るものは多かった。

しかし、事実とは面白いもので、日本人に対しての嫌がらせなのかとおもうほど足の長い男は日本人でもなければ、異世界から来た異邦人の少年で、ぶつちやけ女でも通りそうな可愛い顔をしている男は皮肉が多くいたずら好きで辛いもの好きという少年だったりする。

そして、兄弟などでは全くない。

まあ、同じ色の服を着ていたり、かもし出す空気が似ていたり、同じソロプレイヤー

だったり、戦闘狂だったり、普段は飄々としていて頭の回転も速いくせに女性関連に関してだけ鈍感だったり、似てるところが多いものまた事実だったりする。

二人のことを知っている人が黒の兄弟と面白半分で言うのは仕方のないことだろう。

周りにそんなことを思われていると思ってもいけないレインとキリトは静かに食事をしていった。

戦闘狂である二人が昼間に静かに一緒に食事をしている理由は簡単で、とにかくお腹が空いていたからというだけである。



二日前

まだ最前線までいけるレベルではないレインの今日の予定はキリトに装備を見てもらい、そのまま最前線に連れて行ってもらう予定だった。

一応、キリト同伴であれば最前線に行くことの許可は出ている。

本当はそんなことを無視したいのだが、無視したらしたでかなりうるさい。

そして、この世界のステータスというものはレインにはかなり理不尽に働き、筋力パラメータでキリトに劣っているレインはキリトが強引に連れ帰ることから逃げるこ

ができないのだ。

無視して行動しているのにレインをことごとく見つけて連れ帰るキリトは一体どういう方法を使っているのかレインには全くわからなかった。

その方法とは、キリトがフレンドリストでレインがいる層を確認しているだけだったりするが、キリトに教えてもらっていないレインが知ることはできない。

そんなことも知らないレインはいまだ、この世界のシステムというものに順応できていないでいる。

というのも、キリトがなかなか教えてくれないのだ。

いわく、全部ちゃんと教えたら何し出すかわからなくて怖い、ということらしい。

世界を知らないのは死とつながるのではないのかと聞いたら

「お前がそんなもんで死ぬんだつたら初日に死んでる。そんなことよりも、お前の技術にレベルとステータスを合わせる方が先だ」

と言いつ返されたのは記憶に新しい。

キリトが言うには、レインの技術が高いのにレベルが低く、ステータスも足りないせいでたいした武器を持ってないからすぐに壊れるらしい。

すでに一ヶ月はたっており、折れてしまった剣を数えなくなつたのは五十を過ぎたあたりだっただろう。

折れたら最初のところに所得した体術スキルしか使えないのでただでさえ足りない攻撃力が減ってしまう。

まあ、ウインドウを操作しながら猛ダッシュで距離を取って武器を出すというふざけた技を使っているのです、そこまでストックさえ持ち合わせていればそんなことにはならないのだが。

最初のころに比べるとレベルもステータスも上がっているお陰で武器の壊れる頻度は減っては来ているが、それでも一日に数本は途中で碎け散っている。

そんなこともあって、レインが現実世界で使っていた愛剣、傾国の剣を手に入れる前までのことを思い出してしまふ。

「おまたせ」

昔のことを思い出しかけていたとき、キリトはやって来た。

レインは頭からファヌージュの騎士にもかかわらず、見た目は山賊のような男を頭から追い出し、遅れてきたキリトにしかめっ面を向ける。

「遅かったな」

「悪いって。いろいろあったんだよ。ほら、とりあえず武器屋行くぞ。本当はクエスト報酬のやつがいいんだけど、結局お前すぐ折るしなあ」

「折りたくて折ってるわけじゃないぞ」

「いやいや、あのほとんど見えない剣の振りはおかしいから。剣先が見えないぐらい速いフェンサーもいるけど、お前は下手すると腕消えるし」

「それはお前の目の問題だろ」

「お前の基本戦闘能力がおかしいんだよ。俺より筋力値低いのにでかい凶体の敵も投げると、敏捷値だって低いくせに俺の大差ないだろ」

「それでも足りないと思ってるし、遅いと思ってるぞ」

「何基準」

「俺基準」

いつものようになんだかんだ会話が続かない二人は強さを求める者同士で、なんだかんだ気が合うのだろう。

なにせ、二人共大切な者を失い、強さを求め始めたのだから。

会話は途切れることなく、新しい防具や武器を揃えた二人はそそくさと最前線の迷宮区に潜っていた。

夜から朝方までの時間帯にしているのは、言わずもがな、キリトがレインを目立たせたくないからだ。

レインの動きをみたらキリトのピーターどころではなく、チーター扱いされてもおかしくない。

まあ、剣の腕は確かだし、よく見ればチートなんかではないとわかるだろうが、もしものときもある。

人のステータスやスキルの詮索はマナー違反ということもあるので、強い人だと思われるだけですむ場合もあるだろう。

それでも、この途中参加者を表に出すのはあまりよろしくないと思ってしまうのだ。

「レイン・スイッチー」

しかし、と思いながら後ろに飛びのいた自分の横を敏捷パラメータが大してないのにキリトと大差ないスピードで駆け抜けるレインをちらりと見る。

自分と似たような真っ黒の服装。ただできえレベルの低さもあるせいで着れる服に制限があるのに動きやすさ重視のせいで大した装備ができず、紙装甲といっても過言ではなく、シャツ一枚にズボンにブーツといういでたちだから当たり前だろう。部屋着といわれたほうがまだわかる装備だ。

あれでも、ブーツには敏捷補正が付いていたり、シャツだって防御がそれなりに上がり筋力補正も付いている。

程度の低い装備をごちゃごちゃと着させるより、それなりにいいものを少し着させた

ほうがレインの”動きやすいほうがいい”という見た目と性能をガン無視した要望に答えられるのだ。

もはやチートといっても過言ではないレインの強さとキリト付き添いによる的確なレベリング方法のおかげで異常なスピードでレベルが上がっているのです、すぐにでも迷宮区にふさわしい見た目になるだろう。

そんなことをキリトが考えている間もレインはじわじわと敵モンスターであるドワーフのHPを削っていく。

フィールドではじめてまともにレインの戦いを見た時と変わることなく、敵から全く離れることなく最小限の動きで攻撃をよけながらも敵の急所を的確に狙い、わずかな隙ですら見逃すことのない鮮麗されたレインの動きは、もやは人の動きではない。

彼の話す内容から考えるにあまり触れてはいけない世界の裏側のようなものがあるので深く聞いてはいないが、間違いなく軍人レベルの、いやそれ以上の戦闘訓練は受けていただろう。

下手をするとここにきたのも訓練の一部の可能性や、実験的なものも可能性もあるキリトは考えている。

実際は、剛の好奇心とレインの強さへの執着心の結果でしかないのだが、キリトが本当のことを知るのももう少し後になってからのことだ。

誰も通らないような迷宮区の隅のほうで数時間にわたるレベリングを続けていた二人は朝が近くなってきたこともあり、迷宮区を後にすることにした。

「どれぐらいレベル上がったんだ？」

「ぎこちない操作でウインドウをいじっているレインにキリトは何の気なしに聞く。

「六」

「そっけなく答えたレインをキリトはぎよつとした様子でみる。

それを特に気にするわけでもなくレインはウインドウ操作を続け、何か宝石のようなものをオブジェクト化してキリトの前に差し出す。

「そういえば、こんなものがドロップしたんだが、何かわかるか？」

それは不思議な形をした赤く透き通った石のようなものだった。

タップしてアイテム名を見てみる。

「ドヴェルグの鍵？これがどっかの扉の鍵になるのか？」

「名前の通りなら、そうなんだろうな。ドワーフにまぎれてうじ虫が一匹まぎれててな。そいつをしとめたらドロップした」

「いつの間にもうじ虫がわいていたんだろうか。」

「じっくりそれをみているとどこか既視感を覚える。」

ぐるぐるとそれを回しながら見ている途中でかちりと頭の中ではまった。

「ああ、思い出した。迷宮区から少し離れた特に何も無い洞窟の奥のほうにこれをはめ込めるような窪みをみた覚えがある。でも何であそこに使うアイテムが迷宮区で見つかるんだ？」

「俺が知るか」

「いや、まあ……そうだろうけど」

表情を変えるでもなく即答してくるレインに多少驚いたキリトは引きつった顔のままレインにアイテムを返す。

「あれ、いらなののか？」

受け取ったレインはアイテムをしまいながら目を丸くして間抜けな顔をした。

ナーブギアが神経に直接繋がっているせいで表情を抑えたりすることが難しい世界なのにも関わらず、感情の起伏がほとんどなく、仏頂面ぐらいしか見せることのないレインがぼけっと間抜けな顔をしたので、キリトも間抜けな顔をさらしてしまふ。

「おい」

しばらく、沈黙のまま見つめあってしまっていたが、レインがいつもの仏頂面に戻って沈黙を破った。

「へ？あ……わるい。その鍵のところは今から行こうぜ。レインだって気になるだろ？」

「まあ気にはなるが……いいの？」

「人のドロップしたやつを横取りするようなことはしないよ。それにその鍵を使うともう洞窟のモンスターはこの迷宮区のやつらより弱いし大丈夫さ」

それに、多少強い敵が出てきたとしても、少し前に無茶なレベリングをして、ニコラスを倒した自分ならば大丈夫だろう。

レインほどの強さがあれば足手まといになることはない。

もちろん、一人のゲーマーとして気になるからでしかないのだが。

止めていた足を再び迷宮区の出口へと動かし始めながらも会話を続ける。

「クエストフラグみたいなのをお前立てた覚えとかある？」

「まず、クエストフラグというのがいまいちわからん」

レインの言葉を聞いて、キリトが最初に教えた体術スキルのクエスト以来、滅多にクエストを消化しないことを思い出した。

それと同時に、体術スキルを所得するクエストを受けたときのことを思い出す。

体術が効かないのが不便だ、というレインの言葉を聞いたキリトは今では遙か下の層になってしまった第二層まで戻ったのだ。

当時は苦労した層で間違いないのだが、最前線が五十層を過ぎてしまっている今では

適当に剣を当てるだけでもしとめることができてしまう。

そのときはレインのレベルも大して高くなかったので全ての敵をレインに任せて件の老人のところに行った。

キリトは三日間かけて岩を殴り続けてようやく割ったのだが、後々聞いた話によると、近くにいる牛型のモンスターをトレインしてぶつけて岩を割ってもらう方法でも良かったらしい。

なので、赤い布をストレージにキリトは入れて行った。

難なく到着し、レインにクエストを受けさせるために老人に話しかけてもらい、武器を奪われ、お髭のペイントを施されるはずだった。

そう、はずだった。

老人がレインの武器を奪うために人外じみた動きを下のにもかかわらず、レインはあっさりそれをよけてしまったのだ。

老人のNPCは何事もなかったかのように体勢を整えて、懇切丁寧に武器を預かる理由を述べるといふ珍妙なものを見せられたときはため息をつくことしかできなかったのは仕方がないだろう

そして、お髭のペイントつけられたレインはかなり不機嫌な顔をしていたのはいまでもない。

あれほどの強さを持つレインがどれぐらい岩にヒビをいれられるのか気になったので一回目は傍観することに決めていたキリトは少しはなれたところに座って様子を見ていた。

レインはバキバキと指の関節を鳴らして岩の前に立ち、すつと拳を構える。

「ふっ」

レインが息を吐いて拳を突き出した瞬間、けたたましく轟音が鳴り響き、衝撃で一瞬激しい風が吹く。

思わず顔を逸らしたキリトが視線をもどしたときには岩は本当にそこにあつたのかわからないほど粉々に砕かれていた。

「現実の岩より柔らかいな」

最後にぼそりとつぶやいたレインの言葉にキリトが顔を引きつらせることしかできなかつた。

「おい」

キリトがげんなりとした気持ちで少し前のことを思い出していると、レインが声をかけてきた。

意識を昔から現在に戻すと、いつの間にか迷宮区の出口についていたようだった。

「ああ、わるい。えっと、例の洞窟はあっちだ」

キリトの案内によつて二人は迷宮区でないとはいえ、最前線の層のフィールドを立つた二人でいつも通り難なく目的地であるドヴェルグの鍵をはめるとおもわれるくぼみのところまでやつてきた。

一見ただただの汚いくぼみでしかないが、よく見ればドヴェルグの鍵がはめれる形なのがわかる。

「よくこれが鍵をはめる場所だつてわかつたな」

「これでもゲーマーの端くれだからな。ただのオブジェクトに見えても怪しいものぐらいわかる」

胸を張つて言うキリトだが、胸を張れることなのかは怪しいところだ。

アスナであれば、呆れて何か一言を言うかしてくれるのだが、レインが特に何か言うことはなかった。

「何かいえよ……」

さすがに恥ずかしくなったので催促するとレインはアイテムストレージからドヴェルグの鍵を出しながら返事をする。

「普通にすごいとおもうぞ。知識があるのとないつてはその時点で差が出るからな」

至極まともに答えられてしまったキリトは驚いて何も言えなくなってしまう。

キリトが無言なことを気にするはずもないレインは鍵をくぼみにさっさとはめてしまった。

何かするときにはせめて一言ぐらい言ってくれとキリトは思いながらも何が起きるのか成り行きを見守る。

二人して無言で立っているとじわじわと地鳴りが聞こえ始め、どんどん大きくなり、洞窟自体も揺れ始めた。

「いでっーな、なんだ?！」

急な大きな揺れに対応できなかったキリトはしりもちをつく。

立って耐え切るレインは真剣な表情で視線を巡らせている。

しばらくすると地鳴りもなくなり、揺れも収まり洞窟に静寂が戻った。

ドンッ

「えっ?！」

「なっ」

鈍い音が聞こえたと思った瞬間、キリトとレインが立っていた地面は消え去っていた。

「うわああああああああああ?!」

「っ?!」

突然のことに二人とも反応することはできず、重力によってその見えない穴に二人して落下していった。

二人の攻略 E P. 2

「ぐえっ」

「ん」

ほぼ垂直に等しい下り坂になっていた落とし穴の底についた二人は、方や綺麗に着地を決め、方や綺麗に着地を決めた。

顔面着地を決めてしまった彼のために明言するのは避けるが、どちらがどちらの着地を決めたのかはいわなくてもわかるだろう。

数十秒弱にも及ぶ落下後、二人が着地したのはあいも変わらず洞窟の中だった。

しかし、落下速度と落下時間から考えるにかなり下のほうまで落とされたのは間違いないだろう。

システムによって保護されたのか、顔面着地をしたキリトも綺麗に着地したレインのHPも全く減っていないのは不幸中の幸いだ。

キリトが生きていることを確認したレインはあたりを見回す。

半径十メートルほどで天井までの高さはさほど高くない開けたところだった。

そこから伸びている道は一つしか見えない。

洞窟内は壁にぼんやりと発光する石のようなものがあるおかげで決して明るくはないが、全く見えないほど暗がりというわけでもなかった。

「ここはどこだ？」

顔を抑えながらのろのろと立ち上がるキリトに問いかけると、キリトも周りを見回して状況を確認する。

「隠しダンジョン的なものだとおもう……」

キリトはぼりぼりと頭をかきながら一つだけの道の奥を見つめる。

ぼんやりと瞳が光っているのをみるに、暗がりでも見やすくなる何かなのだろう。

「進むしかないのは間違いないだろうな」

「そうだな」

特に合図するでもなく、二人はその道にむかって足を進める。

二人の足取りには恐怖という感情は見受けられなかった。

それから二人はここが一応最前線の層のダンジョンだと思わせないほどに順調に足を進める。

途中にモンスターが出なかったわけではない。

二人がただ重度の戦闘狂なだけなのだ。

レインのレベリングも兼ねて基本的にキリトがサポートに周りレインがメインアタッカーとして動くことは変わらないまま、遭遇したモンスターはほふり続ける。

二人が進んだ道は曲がりくねってはいたがほぼ一本道だったため迷うことはなかった。

ただただ長く大して広いわけでもない道を二人は淡々と進んだ。

「ああ、料理が美味しい店に行つてたらふく食いたい」

小一時間、一本道を歩き続けたところでキリトがげんなりとした顔でぼそりとつぶやく。

レインもその気持ちはわからなくもない。

夜通し戦い続けたあと、本来であれば街に戻つて朝食を食べている頃だ。

元の世界で旅をはじめた頃から徹夜が多かったり、食べない日が多く続いた事もあったが、地球にやって来る直前あたりではシルヴィアの所でまともな生活を送っていたし、組織に捕まっていたときもなんだかんだ旅をはじめた最初の頃に比べるとまともだったので、キリト程ではないだろうがレインも多少空腹を感じていた。

アインクラッドに来てからは仮想世界ということもあり食べ物も最小限で寝るのだけだつて寝る気になつたらという暮らしをしていた。

たまにがつつり食べたり気がついたらやたら寝てたりもするが、それでもレインはま

ともとは言えない暮らし方をしていようだろう。

しかしである、地球に來た時は十五歳だったのでそちらで通しているが、レインも日数的にはすでに十六歳。

どちらにしろ育ち盛りであることは間違いない、今日は最前線でお金も稼ぐことができるので、久しぶりにちゃんとご飯を食べようと思っていたのだ。

それがこんな形で先延ばしにされてしまっているのだから多少はげんがりしている。

しばらく考えたあと、レインはいつも持ち歩いている軽食のパンを二人分だして、一つをキリトに差し出した。

「いいのか？」

「さすがに自分一人だけ食うなんてことはしない。隣でぎやーぎやー騒がれたり、空腹のせいで足でまといになられても困るしな。ちなみに、これ以上持つてないから後は我慢しろ」

「えつと、いただきます」

顔を引き攣らせながら受け取ったキリトはもそもそとパンを食べ始める。

安全地帯ではないが、この先安全地帯があるとも限らない。

早くここから出たいということもあるので、二人はパンをかじりながらも歩き続けた。

「つていうか、お前よく食べ物なんて持ち歩いてたな」

軽食ではあるが、多少腹が満たされたことで元気が出たのかキリトは喋り始めた。

わかりやすいやつだなと思いつつもそれをレインは口に出すことはなく、会話を続けることにする。

「基本的に軽食は持ち歩いているんだ。気が向いたら街に戻るようにしてるから外で夜を明かすことも多いしな」

「お前、そんな生活してんのかよ」

薄暗いとはいえ、多少の明かりはあるうえに、暗がりには目が慣れたこともあり、キリトの呆れた顔もはつきりと見えている。

そんなキリトにお前も人のことを言える立場なのか、と聞きたくなる。

昼間は数時間とはいえ毎日のようにレインの様子を見に来るし、だからといって攻略をサボっている様子もない。

そしてこうして数日に一度ではあるが夜中にレインを最前線に連れ出してくれるのだ。

キリトのほうかふざけた生活を送っているのではないのか、とレインは率直におもう。

結局、第三者からみればどんぐりの背比べでしかなく、どちらとも大して寝ていない

し休んでいないのが現実だったりするのだが。

互いに人のことを言えない生活を送っているのは自覚しているので、相手にとやかく言うことはないの言い争いになることはなかった。

その後さらに小一時間、安全地帯は一切なかったが、ようやく道ではなく開けた場所に二人は出た。

薄暗さは先ほどもまでの道と変わらないが、闘技場レベルの広さを有しているその場所は明らかに何かがあるだろう。

そして、二人がいるの丁度対角線上のところに道があった。

二人はぎりぎりまだ道といえる場所で立ち止まってその広場の様子をうかがう。

「嫌な予感しかしない」

「俺もだ」

「でも、いくしかないよなあ」

「お前の経験的には何かあると思う?」

げんなりとした様子のキリトはレインの問いにしばらく考えたあと、眉間にしわを寄せる。

「たとえば、ダンジョンボスみたいなのができて取り巻きもたくさん、とか?」

キリトのたとえばはたった二人で対処するにはかなり厄介なことこの上ない例え話

だった。

その例え話を聞いたレインは小さくため息をついて顔をしかめる。

「それが当たったら、お前のせいだから街に帰ったら飯の代金、八割お前持ちな」

「え?! 何で俺のせいなるんだよ!」

「なんとなくだ」

仏頂面のまま広場に向かって足を進めるレインをキリトはあわてて追いかける。

薄暗い中、見えにくい二つの黒い影が丁度広場の真ん中あたりに来たとき、ガシャ
ンツ、と音が響いた。

お約束なその展開にキリトは後ろを振り返り、レインは目の前を見据えた。

「通路がふさがれたみたいだな」

レインはつぶやくようにいいながら剣を抜く。

その後ろでキリトも剣を抜いた。

先ほどまでふざけていた二人の姿はそこにはなく、二人の黒の剣士が背中合わせにどこから敵がやってきてきてもいいように待ち構える。

しばらく待っていると、地下に落ちたときのように地響きが聞こえ始める。

いまさら地響きにうろたえるわけもない二人は動くことなく周りに集中した。

徐々に大きくなる地響きが何なのかレインが考えているときに、足元が少し盛り上

がった。

勢いよく地面を見たレインはすぐに叫ぶ。

「下だ！」

叫ぶと同時に中心から飛びのいたレインと少し遅れてキリトも飛びのいた瞬間、地面からでかい何か飛び出した。

それが飛び出した衝撃で、空中で体勢を崩したものの、すぐに立て直したレインは起用に空中で体をひねって飛び出したものと向かい合う。

その何かの反対側からキリトの間抜けな叫び声も聞こえるので無事なのだろう。

薄暗いうえに何か地面から出てきたことによつて土煙が立ち込めているのでなかなか、それが何なのか見えてこない。

「見えるか？」

反対に飛び退いたキリトが隣まで来たのを確認したレインは声をかける。

「いや、ただでかいことしかわからない」

それから無言で二人は土煙が無くなるまで待ち、土煙がなくなり始めて白い身体が見え始め、ようやく全容が見えたときキリトが隣で息を呑む音が聞こえた。

直径十メートルはあり全長五十メートルはあるであろう白くでかい芋虫がレインとキリトの前に姿を現したのだ。ぶよぶよとした質感に、ところどころ発光している模

様の気持ち悪さにキリトが息を呑むのもうなずける。

それが上半身なのかわからないが、半分体を起こしている芋虫を注視するとその頭上に赤黒いカーソルと《Dvergr The Fairy》と表示され、五本ものHPゲージもその横に表示される。

その巨大さと気持ち悪さに二人が動かないでいると、芋虫の周りに何かポップするときのエフェクトが幾つか光る。

目を凝らしてみると、ここに来る間もポップしていたドワーフだった。

「おい、キリト。わかってるな？」

「う”っ……」

先ほどキリトが予言したことが現実となったので、レインはやりと笑いながら先ほどの約束をキリトに確認する。

全く妖精には見えない芋虫たちの周りにいるドワーフが近づいてきたと同時にキリトは地面を蹴って叫んだ。

「ラストアタック決めたほうが八割！」

「言ったな？」

先に駆け出したはずのキリトをあつさりとはいたレインは十体ほどわいているドワーフを全て無視をして芋虫の背中まで飛び上がって背中を剣で切り裂いた。

今までの敵と比べると芋虫ということもあつて身体が柔らかく剣や盾でガードされることもないので剣の耐久値はさほど減る様子はなかった。

しかし、表面がぬめぬめとしているので下手に切りかかるだけではと斬ることすら難しい。

敵の上に立つことすらできないのでドヴェルグの周りにいるドワーフのところに行くしかなくなる。

なかなか面倒な敵だと認識したレインは舌打ちをして、ぬめぬめの芋虫の体をすべつて降りる。

下では先ほど無視したドワーフが下で待ち構えているのだが、ぬめぬめしている芋虫を蹴つて飛ぶことはできない。

地面に足がついた瞬間に蹴りだしてドワーフたちの間をすり抜けていく。決して避けられない攻撃ではないし、相手をするだけ無駄なのだ。

最小限の動きでドワーフ達からの攻撃を避けたレインは敵が密集していないところに到着するともう一度飛び上がって芋虫に剣を突き刺した。

そして剣を抜くことなく滑り落ちることで芋虫の背中を切り割っていく。

「お前順応すんの早すぎだろ！」

どこからかキリトが喚いているのが聞こえた。

再び地面に足がついたレインは芋虫からもドワーフからも離れてHPゲージの減りを確認する。

予想通りというかなんというか、ほとんどわからないほどしか減少していなかった。その間にキリトもドワーフたちの間をすり抜けながら芋虫の側面を切りつけていく。自分よりもはるかにレベルの高いキリトの攻撃ですらゲージの減りは微々たるものようではなかな減らない。

その様子に眉間にしわを寄せたレインは一度芋虫から離れてドワーフの相手をし始めたキリトのそばに駆け寄った。

「キリト！どんな敵にも弱点はあるのか？」

レインも一緒にドワーフに切りかかりながらキリトに声をかける。

「基本的に、アインクラッドのモンスターに弱点がないやつはいない。逆に打撃に強いとか斬撃に強いとかもあって、それはどんなものでも覆せない。あの芋虫は見るからに打撃系の攻撃は効かないだろうな」

「なるほど。じゃあ、敵に刺したままの武器は消えたりするか？」

「へ？まあ、武器を敵に取られても取り返せたりするから消えることはないと思うけど」
「それだけ聞ければ十分だ」

会話中も斬り続けていた一体のドワーフの首を切り落として消滅させた後、再びレイ

ンは芋虫に向かって駆け出した。

キリトがドワーフの相手をしてくれているおかげで芋虫の周りにドワーフはいない。今までになく力をこめて飛び上がったレインは芋虫の起き上がったっている体に剣を突き刺した。

しかし、今回は地面に垂直方向ではなく、並行に突き刺していて、そのうえ斜め下向きに刺したことで簡単に抜けることはない。

剣の根元まで食い込ませたレインは器用に剣の柄に足を乗せて、それを土台に再び飛び上がる。

起き上がったいた芋虫の身体よりも上に飛び上がったレインは、今まで見えていなかったそれを見つけた。

起き上がったいた芋虫の身体の先端についている明らかに弱点であろう小さな二つの目。

そのの片方に向かってレインは右手の指をそろえてソードスキルを発動させ、右腕の根元まで容赦なく突き刺した。

次の瞬間、口があつたのか、と思うほどのさき悲鳴をドヴェルグはあげる。

あまりのうるささに空いた片手で耳を片側だけ塞いで顔をしかたレインは素早く腕を引き抜いてその場から飛び退く。

剣は芋虫に突き刺さったままだが、他にも予備はたくさんあるので問題は無い。

綺麗に着地をきめたレインは右腕についた芋虫の体液を振り払う。

現実世界では服まで湿ってかなり気持ち悪いことこの上ないだろうが、仮想世界だと思つた以上に振り払うことができる。

それでも服は体液に塗れているので多少の差でしかないのだが、レインが気にするわけもなかった。

レインがそんなことをしている間にドワーフ達を蹴散らし終えたキリトが顔を引き攣らせながら駆け寄ってくる。

「お前、よくそんなこと出来るな」

「これは帰ったら風呂だな」

ちらりと芋虫をのHPゲージを見るとそれでも五つあるゲージのうち一本目の一割削れたぐらいだった。

目をつぶせば一番ダメージを食らわせることができるが目は二つしかない。

キリトのダメージ量も微々たる物でしかないのかかなりの長期戦が予想される。

どうしたものかと考えていると、ひとしきり暴れたドヴェルグは全身を横たえてこちらに身体を傾け始めた。

「キリト！ 走れ！」

レインは走り出したと同時にキリトに声をかける。

何事かと疑うこともなく、レインと同じ方向にキリトも走り出した。

それとほぼ変わらないタイミングでドウベルグがレインとキリトをつぶそうと転がり始める。

「つぶされるなよ」

「あんなのにつぶされて死にたくねえよ!!!」

「あのやわらかさだ。意外と大丈夫かも!?!?!」

「やわらかくても巨体につぶされたら圧死確定だろ?!」

「だろうな」

軽口を叩きながらも走る二人の目の前には壁が迫ってきている。

最前線では一撃でも食らえば即死だから絶対に攻撃を受けるなどキリトに言われており、後ろから迫っている芋虫も同様であることは間違いない。

「レイン! よかれるか!?!」

こちらを向いて不安そうなキリトの顔を見てレインは不敵な笑みを浮かべる。

「俺のことは気にするな。キリトはこの後にできるはずの隙を狙って奴の目をつぶせ」
「わかった」

芋虫の身体のだ真ん中にいたレインよりもキリトは先端に近い場所にいたのですば

やく横に掃けて芋虫の巨体が通るであろう場所から抜け出した。

それを確認したレインは目の前の壁に集中する。

岩壁に足がかりになりそうな場所を見つけたレインは高さが5mはあるそこに向かつて跳躍する。

どうにか足がかりに両足を着地させたレインは再び飛びため足に力をこめる。

転がってきた芋虫と入れ替わるようにそこからとんだレインは芋虫の上を身体を捻りながら飛び越える。

芋虫が壁に当たったときの衝撃で跳躍距離を伸ばしたレインは先ほどとは反対側の芋虫の横に着地した。

壁に直撃した芋虫は一時とまる。

そうしてできた隙にキリトは地面に近づいた芋虫の目をソードスキルを使って斬りつける。

悲痛の叫びを上げながら暴れ出す芋虫からレインとキリトはいったん離れて合流した。

「相変わらず無茶な奴だな！」

合流したとたんにキリトに怒鳴られたレインは顔をしかめる。

「できたんだから無茶じゃない。そんなことより、これからどうする？弱点の目はなく

なつたぞ」

ウインドウを操作して予備の片手剣を出しながらキリトに問いかける。

一瞬レインをにらみつけたキリトは暴れるドヴェルグに視線を戻す。

「あれ系のモンスターはたぶん——」

キリトが言い終わる前に、果物が弾けたような音が聞こえ、目が合ったところから何かが飛び散った。

「——また目が生えるんだよ」

再び状態を起こしたドヴェルグが目をこちらに向けると最初は二つだったぼんやりと光る目が五つに増えていた。

そして、一度は全て消滅させたドワーフが先ほどよりも多い数で出現する。

「なるほど」

「レイン、俺がドワーフを全部仕留める間、さつきみたいに飛び上がって目をつぶしてくれ」

のろのろと中心に戻ってくる芋虫とその周りにいるドワーフから目を離さずにキリトが敵の倒し方を説明する。

この世界の敵の動きは現実とは違ってかなり読みやすいので、この世界で生きてきたキリトにはあの芋虫のことも予想できるのだろう。

「そのうちまた転がり出すとおもうからそれはちゃんと避けるよ」
「わかった」

剣を構えなおした二人は合図するでもなく同時に巨大な敵に向かって再び駆け出した。

それからドヴェルグが消滅したのは二十時間以上たったころだった。

というのも、目をつぶし終えるたびに増える目とドワーフの量が尋常じゃなかったのだ。

途中からキリトだけではドワーフを相手しきれなくなり、レインも加わったがレベルが低いせいで一体仕留めるのにも時間がかかる。

それでも、二人で対処できるものだったが、ドヴェルグ自体のHPゲージの減りも少ないので無駄に時間がかかる。

十二時間過ぎたあたりで、さすがに二人とも集中力が切れ始めたので攻撃さえ仕掛けなければ動かないドヴェルグと目を全てつぶさなければ復活しないドワーフの特徴を利用して小休憩を挟んだこともあり、これだけの時間がかかったのだ。

本来、ドワーフを対処するパーティーを数組を配置し、身体を切り刻んで弱ってきた

ドヴェルグが身体を倒し、その隙を狙って弱点の目を総攻撃し、転がったらタンクが防御する、という攻略方法なのだろうが、何しろ二人だったためそんな悠長なこととはできなかった。

レインが起き上がっているドヴェルグの目をふぎけた方法でつぶせたおかげでも二人でも何とか攻略できたといっても過言ではない。

ドヴェルグが光の粒子となり消滅した瞬間、二人は喜ぶでもなくその場に座り込んだ。

黒い服のせいでわかりにくいのが、攻撃を食らわすたびに撒き散らすドウベルグの体液のせいで二人ともすでに全身べたべたになっている。

「全身気持ち悪いし眠いし疲れた」

少しはなれたところでぶつぶつと文句を言い始めたキリトをあきれた様子でレインは一瞥して立ち上がった。

「ならさつきといくぞ。ほら立て。戻って風呂はいつて八割お前が驕りの飯食いに行くぞ」

「ああ……そうだった。お前のほうが攻撃力低いのになんでラストアタック取れたんだよ」

「それはお前が馬鹿だからだ」

「俺のほうにゲージ削ったし、ドワーフだって俺のほうに仕留めてたしここは半々で……」

「これからの帰り道お前がメインで戦ってくれるならいいぞ」

レインの言葉にしばらくキリトは思案し始める。

今までだって稼いで過ごしているはずのキリトは大量のドワーフとダンジョンボスであろうドゥベルグを倒したことでそれなりのアイテムが手にはいり、換金すればそれなりの大金になるだろうになぜそこまで考えるのか不思議でしかない。

実際はただキリトが浪費家だからなのだが。

しばらく考えていたキリトは小さくため息をついて立ち上がった。

「わかったよ。俺が前衛すればいいんだろ」

キリトは一人でさききにずんずんと進んでいく。

その方が早く帰れるのは間違いないのはキリトもわかっているのだろう。

レインは自分の弱さを感じつつもどこか楽しんでいる自分に気づくことなく、キリトの後ろをついて行った。



それから二人が洞窟を出られたのはさらに二十時間以上たった頃だった。

最終的には二人共バーサクに近い状態で途中で出てくるドワーフを仕留めていた。

メインアタッカーとかのポジションもなく、とにかく仕留める、というものに変わり、その間二人に会話はなかった。

何故それほどにも長くなったのかというのは、ただ単にそれだけ長い洞窟だったのだ。

一本道なのは変わらなかったのだが、とにかく長い。

出るまで階段もなかったことから、ほとんど分からないほどの緩やかな坂道になっていて落ちた分を上がってきたのだろう。

洞窟に落ちてからほぼ二日が過ぎ、まだ朝方で夜が開けきっていない空を見て長かったような、全く時間がたっていないような不思議な感覚になる。

先程まで気が狂ったように戦っていたこともあり、自分から何かが無くなったような感覚にも襲われ、それまですっかり忘れていた空腹と睡魔が二人に襲いかかる。

「主街区まですぐそばみたいだからがそこまで耐えろよ」

素早くマップを確認したらしいキリトはウインドウを表示しながら歩きはじめた。

その足取りは重いもので、疲労が溜まっているのがよく分かる。

レインも普段はしっかりと伸びた背中をほとんどわからない程度ではあるが少し曲げてキリトの後を黙ってついて行った。

そして三十分もかかることなく、無事に主街区までたどり着いた二人は足早に一番近い宿屋に向かう。

「飯はどーする？」

「寝ながら食うことになりそうだから俺は寝る」

酷い形相のキリトは今にも人を殺しそうな顔でレインに言い返す。

二人とも服の耐久値もそれなりに減ってきていることもあり、所々ほつれていて、ほぼ二日間に及ぶダンジョン攻略を強制的にし続けてきた直後なので、まだ街に人が出歩いている夜に帰ってこれたのは不幸中の幸いだろう。

そそくさと同じ部屋に宿をとった二人は部屋に入った瞬間、全ての服を着替えた。

たとえば、データの世界で服はすでに乾いているといっても、芋虫の体液を浴びた服で寝るのは二人共嫌だったのだろう。

キリトはハーフパンツにTシャツというラフな格好でレインはいつもと変わらないような服装だった。

「お前、もうちよつと変えないのか？」

「変える必要性がない」

あつさりと言ったレインは部屋に置かれていた二人掛け程度の大きさのソファに寝転ぶ。

「お前がベッドを使え」

一言だけ言ったレインは有無を言わせないためにすぐに目を閉じた。

ぶつぶつと文句を言いながらもベッドに入るキリトの様子を音で確認したレインはそのまますぐに眠りについた。

二人の攻略 E p. 3

すつと静かに目を開けたレインは寝惚けるでもなく体を起こした。

小さい頃から父親に寝起きだけはしっかりしろと教えられていたこともあり、レインの寝起きはかなりよく、寝ぼけることはない。

きよろきよろと当たりを見回し、ベッドで熟睡をしているキリトを確認して寝る直前までのことを思い出して顔を顰める。

時計を見れば昼過ぎで睡眠をとらなかったにも関わらずあまり寝なかったなど他人事のように思ったレインは立ち上がってキリトをたたき起こす。

「起きろ。風呂行つて飯食うぞ」

「んあ？」

目を開けたものの、まだぼんやりとしているらしいキリトにレインはなにをするでもなく見続けた。

まだ寝ていたいという気持ちが変わらなくもないからなのだが、基本的に無表情の彼がただ見ているだけでもそれなりの威圧感があり、キリトは勢いよく起き上がった。

「な、なに？」

「風呂と飯」

簡潔にそれだけ言ったレインにキリトは顔を引き攣らせながらも、この層に備え付けられている風呂場に案内するためにベッドから這い出た。

「別に一人で行けばよかつたのに」

寝るときよりは外向けになってはいるが、一見攻略組とは思えないラフな服装に着替えたまだ眠くて目がしつかりと開いていないキリトはこの街に唯一ある銭湯に向かいながら、隣を歩くダンジョンでも街でも変わらないラフな服装のレインにつぶやくように声をかけた。

一瞬だけキリトに視線を向けたレインはすぐに目線を前に向ける。

「この世界の風呂の入り方がいまいちわからん」

「はあ？ いや、まあ確かに蛇口をひねったりシャンプー出したりするのもアインクラッドじゃウインドウ操作だからわかりにくいっちゃわかりにくいけど……」

キリトが怪訝な顔でこちらを見てくるがレインは特に何かを言うでもなく視線を受け流す。

レインの言うこの世界とはもちろん地球ということになる。

組織では不思議な箱に入れば綺麗になったし、それから数日歩き回ったときは元々お風呂に毎日入るといふ習慣がすんでいた世界ではなかつたので必要性も感じなかつた

ということもあるが、風呂に入る方法もわからなかったというのがお風呂に入るということをしなかった大きな要因であるのは間違いない。

現実世界では一応、清潔を保つために服も体も魔法を使って清潔を保っていたので、小汚くなることはなかった。

そして、仮想世界に来てからは入ったことすらないし、ぶっちゃけどんなものなのかよく分かっておらず、蛇口とは何だ、というところから入ってしまう。

一応異邦人だということのを隠しているのでそんなことを言えるわけもなく、無言を貫くという強硬手段でその場を乗り切った。

なぜこの層の主街区には温泉があるのだろうかとキリトは不思議におもっていた。

第一層でアスナがキリトの止まっていた宿にお風呂目当てでやってきたときのことを思い出しそうになり、無理やりそれを頭から追い出して、この層の温泉に頭を戻す。今までの層ではINNと書かれた宿じゃない宿にお風呂が着いていることは多かった。

だからなのかは分からないが主街区には温泉というものはなく、あってもシャワーを浴びる程度のものしかなかった気がする。

しかし、この層は主街区のほほど真ん中に宿でもないのに大きめの温泉があり、お風呂目当てにくる人が多かった。

別にこの層のテーマというわけでもないのに置かれているその温泉があるのは割と謎だったのだが、昨日までの体験でなんとなく予想がついた。

毎日風呂に入る日本人からしたらたとえデータで風呂に入らなくても汚れも自然になくなって服だつて清潔にできるといえど、あのグロテスクな見た目の生き物の体液を浴びれば誰だろうと風呂に入りたくなる。

おそらくそのためのこの施設だったのだろう。

アルゴの情報がなかったことから自分たちがあの隠しダンジョンに初めていったのだろう。

自分とレインだからこそあのダンジョンを二人で切り抜けたので、あれに他の人が数人で行ってしまったら生きて帰れるかは正直怪しい。

最悪な場合の事が起こってしまったてはいけけないので、キリトは温泉について服を脱ぐためにウインドウを操作するついでにアルゴに注意するように連絡をいれておく。

まあ、無茶をしたことに関してアルゴに何か言われるのは間違いないだろうが仕方がない。

しかし、少し前までやっていた無茶のことと、レインの事もあつてかなりうるさそう

なことが予想されて、思わずげんなりとしてしまう。

「どうかしたのか？」

「いや、アルゴに——」

不意にレインに視線を向け、キリトは思わず言葉を失う。

温泉のある建物の入り口に受付があり、そこでは腰に巻くアイテムが配られていたの
で、レインもそれをつけるものだという認識を持っており、お風呂に入るために全てを
脱いだものの、腰にタオルを巻いている。

それは普通だ。むしろ、隠されていて良かったとおもう。たとえ男同士といえど、キ
リトは自分以外のソレをどちらかといえばみたくない質だったので本当に良かったと
おもっている。

がしかしである。

隣に立つレインの体の筋肉の出来上がり具合がすごいのだ。

筋肉をつけすぎているわけでもなく、程よくついていて無駄な肉は一切見受けられな
い。

高身長もあいまって男のキリトですらかっこいいとおもってしまうほどの肉体だっ
た。

スポーツ選手特有の競技によって偏った筋肉の付き方ではなく、自身の全身を円滑に

無駄なく動かせるような、本当に満遍なく無駄なく、無さすぎず、あり過ぎずという感じだ。

美術館にあるような、リアルな肉体美ではないし、だからといって二次元のような理想を詰め込まれたような肉体美でもない。

それはレインの身体だからかっこよくて美しく、彼の癖や戦い方の特徴に合うように鍛え上げられた唯一無二の美しさと言えよう。

バキバキに割れてるでもないが、それなりに割れている腹筋に、瞬発力を重視された脛脛に太ももの筋肉。剣を振り回して鍛え上げられたのか、胸筋も腕の筋肉も常人よりは鍛えられているが、それは動きの邪魔にならない程度になっている。

これほどにも無駄のない身体をしている人物がいるだろうか。
いや、この世界にいないだろう。

基本的にゲーマーしかいないこの世界では太っているか痩せすぎているかに偏っている。

キリトはまだ子供ということもあってそこまでの偏りは無いが、どちらかと言えば細身だし、筋肉だって大してついていない。

この世界のNPCだって、所詮デザイナーが作り上げた理想の人間だ。

可愛い子もかっこいい人もいるが、そこはやはりどこか作られたという違和感が生じ

る。

しかし、目の前の男にはそれが一切なかった。

究極の肉体美とは目の前の男の持ち合わせているものの事を言うのではないのか。だがしかしである、目の前の男は自分と同年代だ。

まだ成長過程の現在でこれだとしたら二十歳になった時にはいったいどうなる。

身長だってまだ伸びそうだし、それに合わせて身体の筋肉の付き方だって――

「おい」

「はっー」

レインに声をかけられてようやく我に返ったキリトは自分が男の身体をじろじろと見てしまっていたことに気が付き、なんとも言えない気持ちになる。

「ぼうつとしてどうかしたのか？」

とくに見られていたと思っていられないらしいレインにほっと胸を撫で下ろす。

男の身体をまじまじと見ていたと知られて、変態扱いされるのは困る。

「いや、アルゴにあのダンジョンの事とか送ってたんだけど、なにか伝え忘れたような気がしてさ。思い出すのにぼんやりしてたんだ」

「思い出せたのか？」

「んー、まあ、思い出せないなら大したことじゃないだろうしいいかな」

口から出た出任せを信じてくれたらしいレインに感謝しつつ、キリトもさっさと服を脱いで腰にタオルを装備する。

腰タオルはズボンと同じ分類に分けられていることに少し面白みを感じつつ、脱衣場を後にした。

脱衣所も日本風ではなかったことから想像できたが風呂場はどちらかといえばローマを髣髴とさせる内装になっていた。

「貴族の風呂みたいだな」

「貴族？」

「………豪華だな、と」

歯切れの悪いレインに珍しいさを感じつつも、シャワーやシャンプーなどの使い方を教えたキリトはさっさと全身を洗って湯銭にはいつて体を伸ばした。

最近は攻略とレインの世話を並行して行っていたせいでのんびり過ごすという暇がなかったのだが、その間に蓄積されていたらしい疲れが全て消えていくような感覚になる。

ここに来る間に少しだけ食べたこともあつて空腹も多少は収まっているおかげでのんびりと温泉につかることができた。

慣れていないということとでようやく体を洗い終わったレインはキリトから少し離れ

たところに腰を下ろした。

水の表現はむずかしいせいで現実のそれとは多少違和感があることに一瞬眉間にしわを寄せたレインだったが、肩までつかるとほっと一息をついた。

水にぬれていることもあつておとなしくなっている髪型と目をつぶって穏やかな表情で温泉を満喫しているレインからは普段の頼もしさや勇ましさなどは微塵も感じず、どこかそわそわとしてしまう。

風呂を満喫しているらしいレインにキリトは声をかけるといふこともできず、二人は静かにお風呂を満喫した。



いろんなことを思い出しながらレインとキリトは食事中にやって来たアルゴにここ二日の出来事を話していた。

話している間もスプーンや箸をとめることのない二人にアルゴは呆れ顔だったが、それまで限界を超えて空いていたお腹が食べ始めたと同時に機能を回復させたようで、とめることができなかつたのだ。

「二人ともほんと人間じゃないよナ」

そんなことをじつとりとした目を向けられながらアルゴにいわれ、それまで食べ物にがつついていた二人の手が同時に止まる。

キリトはアルゴに対してそうじゃなきゃ前線ですべていけないと言いつ返しているが、レインは少し考える。

異邦人の自分はこの世界で本当に人間と呼べる分類に当てはまるのか、と。

「どうかしたか？」

スプーンをとめていたレインの顔をキリトが覗き込む。

「いや、別に」

それだけいったレインは再びスプーンを動かし始める。

いまだキリトの弁解は続いていたらしく、キリトは言葉を続ける。

「とにかく、レインに関しては同意だが、俺は今までの戦闘でレベルが上がって、パラメータの数値だってそれなりにあるからちよつと人間離れしてるだけだ」

「まて、なぜ俺に関しては同意してるんだ」

キリトの言い分に思わずレインは言葉を挟んでしまう。

異邦人だということは言っていないはずなのになぜ同意されなければいけないのかわからなかったのだ。

そんなレインの心境をしらないキリトは怪訝な顔でレインを見る。

「そりや同意するだろ。大してパラメータが上がってるわけでもないお前のあの意味不明な跳躍とか意味がわからないし」

「つていうカ、レインのレベルで最前線で敵と戦ってる時点で人間離れしてるとおもおうヨ」

「ほんとそれな」

「……それは、俺が元々鍛えてたからだろ」

異邦人だからといえるわけもなく、仏頂面でレインは適当に返し、再びスプーンを動かして食べ始める。

それでも、元の世界では自分よりも強い人はまだまだいるとおもっているレインが本当の意味で人間離れするのは数年後のお話。

フエアリーダーダンス編

妖精の国へ

目を開けたレインの視界に広がったのは無機質な白い壁だった。

囚われていた組織の部屋を彷彿とされるその壁はレインの四方を取り囲み、窓もドアもないせいでかなり圧迫感がある。

一辺が十メートルもない真っ白な部屋に佇む黒は異様に目立っている。

レインは自分が寝ているのではなく、立っていることを疑問に思う。

現実世界に戻ったのであれば、ベッドで目を覚まし、頭にはナーブギアがはめられているはずだ。

そして、着ている服がアインクラッドで着ていた服だということに気がついたレインは盛大に顔をしかめる。

この異質な部屋と自分の着ている服などこの事を考えるに、ここはまだ仮想世界ということになのだろうか。

試しに右手を降ってみる

しかし、すでに見慣れたウィンドウが出てくることはなかった。

一体どういう事なのだろうか。

先ほど、崩れゆく世界のまえで茅場晶彦は、じきに目覚めるの言っていた。

目覚める前にこの部屋には来るものなのだろうか。

にしては、世界観が違いすぎる気がしなくもない。

あれほどの世界を作り上げた男が、最後の最後にこれほどにもしらけてしまうような

ことをするだろうか。

いや、彼はしないだろう。

でなければ、最後にあんな場所では話をするとは思えない。

レインはなんとなく嫌な予感がし、立ったまま眉をひそめた。

「君が手に入って僕は幸運だったよ。異邦人なんて最高の研究材料じゃないか」
にやりと醜い笑顔をさらして妖精王は言う。

「今僕らが君にできるのはこの世界のGM、オベイロンから君への干渉を遮断することと、君の知り合いのところに転移させることだけだ。これだけ遅くなつたのにこの世界から助け出せなくてすまない」

現実世界から仮想世界にいる自分を助けようとしてくれている男がすまなさそうな顔をする。

「お前は無茶をしすぎだ！少しは俺を頼れ！」

違う仮想世界で共に戦つた少年が怒る。

「私にはあなたの心を癒すことはできませんが、せめて寄り添わせてもらえないでしょうか？」

彼女に似た小さな少女が優しく微笑む。

レインは死ぬ事はない仮想世界で現実世界と同じ痛みを感じながらも恐れることなく剣を振るう。

己がこの世界から脱出するために。

囚われている人達を救うために。

自分の代わりに囚われた少女を救うために。

堕ちた黒い妖精の戦いが始まる。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

飛べない妖精

レインはアインクラッドで着ていた黒い服を身に着けて、ヴァンパイアマスターであるシルヴィア・ローゼンバーグと何時間もの間、相対していた。

すでにレインは左腕は深く切られている。仮想の身体ということもあり、血が流れていたりすることは無いが痛みがあるせいで、だらりとぶら下げられていて、使い物にならない状態だ。

この仮想世界ではHPも設定されておらず、現実の身体でもないので酷使しても死ぬ事はないが、毎日何時間も戦い続け、傷ついた身体を癒すこともできないレインは肩で息をしていて立っているのもやっとといったところだった。

そんなレインと相対している彼女は細い腕に不釣り合いな大剣を両手に握り、こちらの出方をうかがっている。

彼女の表情は、レインとはじめて戦った時のように凛々しくはなく、何の表情も現れていなかった。

それもそのはず。

目の前にいるシルヴィアは見た目と動きこそ彼女と変わらないが、中身は何もないた

だのデータでしかないのだ。

レインのように痛みを感じることもないようで、全く疲れている様子はない。

彼女と戦わされ始めてからレインの認識はシルヴィアの姿をした不死身の生き物だということになっていく。

傾国の剣を構えたまま、シルヴィアがどう動いてきてもいいようにレインは集中を切らさないようにする。

ゆらりと動いたシルヴィアは一步でトップスピードにのり、瞬時にレインの目の前に現れる。

アインクラッドのときと比べると、思ったとおりに動く身体のおかげか、レインは振り下ろされた右手の大剣を傾国の剣でどうにか受け止める。

骨にまで響くような衝撃を感じつつも、追撃で横からきた左手の大剣は受けた剣をうまくずらすことでどうにか剣で受け止める。

しかし、踊るような彼女の追撃がそこで終わることはなく、綺麗な長い足がレインの胴体に吸い込まれるように見事にとらえた。

まともにくらったレインはなす術もなく吹き飛んでしまう。

不可視の壁に激突したレインは、地面に倒れそのまま意識を手放した。

そんな彼の背中には見慣れない、黒い羽が生えていた。



レインが目を覚ましたのは、水で満たされた人一人入れる大きさの水の中だった。

木の内側に入っているような壁に囲われ、どういう原理になっているのかは分からないが、ガラスがあるわけでもないのに水は宙に浮き、その中にレインはとらわれている。

この中で動かすことができるのは目とぼんやりとする思考だけ。なぜか身体を動かすことができないので逃げ出すことは不可能だ。

そのことはすでに一ヶ月半の間ここにいるためレインにとって当たり前前のことになっていた。

この中にいる間は体の痛みを感じないのがせめてもの救いだらう。

レインの視界に入るところに、アインクラッドで唯一参加したボス戦が終わったと共にレインの手から消えた傾国の剣が置かれている。

思考をシステムによって遮断されているレインはただぼんやりと、愛剣を見ることしかできない。

この部屋には扉がなく、目の前にはこの部屋の大樹の枝と葉であろうものが見え、その奥に広がる空が見えるだけだった。

たまに小鳥が飛んでいるのが見えるが、こちらに来ることはない。

そんなレインの耳に聞きなれた何かが這いずる音が聞こえる。

しばらくして真正面の入り口から入ってきたのは二匹のナメクジのような生き物だった。

見た目こそ化け物ではあるが、中身は人間らしいということとは、この水の中で聞いた二人の会話を聞いていて知っている。

彼らはたまにくるオベイロンといわれる人間の配下らしく、現在レインの研究を任ざれている人物でもある。

レインの入っている水の横に置かれている操作盤をいじり、天井から手枷をおろし、じつとレインを見てからレインを水の中から出すボタンを押した。

突然の重力に逆らうことなくレインは水のなかから落ちる。

「うあつ………」

思考と痛みを強制的に遮断されていたレインは急に動きだす思考と全身の痛みのおせいでまともに着地もできず地面に崩れ落ちる。

痛みを耐え、立ち上がろうとする前に両手首に枷がはめられる。

手枷によって膝立ちになるぐらいまでに吊り上げられ、ようやく思考がまともに動き出し始める。

そして、一番最初におもうのは情けないということだった。

すぐに傾国の剣のもとに走り、ナメクジ共を切り倒し、逃げ出すことのできない自分がとてつもなく弱いと感じる。

「さて、そろそろお前さんの身体の在り処を教えてほしいんだが」

一人のナメクジがレインの瞳を覗き込む。

レインはそれを睨みつけた。

「おお、こわっ。まあ、ほぼ毎日の実験とずっと入ってる特殊な水のおかげで最初のころみたいに暴れられることはないのはわかってるけど、あの暴れっぷりを知っているとやっぱり怖いね」

うねうねと身体を動かしながらナメクジはそう言うが、レインにはそいつが本当に思っているのかはわからない。

少し離れたところにいるナメクジはなにやら傾国の剣を見ているようだった。

傾国の剣がふわりと光った気がしたがぼやける視界のせいでそれが本当なのか判断はできない。

「俺、最近ここに来たばかりなんでそのことよくわかんねえんすよねえ。教えてくださいよ、先輩」

見た目では全くわからないが、一人は新人らしく、傾国の剣のそばから離れたそいつ

は興味津々というふうには、レインのことをじろじろと見る。

先輩と呼ばれたナメクジは、先輩と呼ばれたことが嬉しかったのか気分を良くして話し始める。

「どうせ、こいつ身体のある場所言わねえし暇つぶしに話してやるよ」

レインも口を開くことなく、この日々の始まりを思い出した。

アインクラッドを眺めながらの茅場晶彦との会話が終わったレインが目覚めた場所は、現実世界で捕えられていた組織を彷彿とさせる無機質で扉も窓もない部屋だった。

てつきり現実世界で目を覚ますと思っていたのだが、目の前に広がるそれと、自身を着ている服がアインクラッドのままなのをみるに、まだ仮想世界にいるらしいことを察する。

試しに壁を全力で殴ってみたが、紫の文字が浮かび上がり、破壊することはできそうになかった。

手元に傾国の剣が現れた時のように、右手に集中して呼びかけてみたが、そう簡単に出来るわけもなく、傾国の剣が現れることは無く、右手を振ってもウィンドウが出てく

ることはない。

仕方なく何かが起こることを待つことにしたレインは、壁に持たれて浅い眠りについた。

「おい、起きろ」

そんな声に目を開けると、先ほどの部屋とはうって変わって、なにやら機械が多く置かれている場所が目の前に広がっていた。

レインから少し離れたところにどこの貴族だと言わんばかりの金髪の男が立っていた。

王である証なのか、ちやちな冠をかぶり、背中には透けている羽が付いているようだった。

「もつと大暴れしたり叫んだりするかと思えばあっさり眠りやがって。なにもデータが取れないだろ」

明らかにイライラしているその男はぶつぶつと独り言なのか、それともレインに対して言っているのかよく分からない喋り方をしてくる。

こちらを見ながら言っているということは喋りかけてきているのだらうと思ったレインは口を開いた。

「そんなことを言われてもな」

この場所の無機質な白い壁は、レインがこの世界にきた瞬間に現れた組織の建物の内部に似ているとは思っていた。

しかし、現実世界であれば、魔法でも盛大にぶちまけてここから立ち去ることもできなかっただろうが、仮想世界ではそうはいかないだろう。

システムによって保護されているものを破壊出来ないのはアインクラッドで学んでいる。

組織について行ったのは利益があると思ったからだ、目の前にいる馬鹿からはなにも得るものはないのは明白なので、正直さつきとこの場から立ち去りたい。

「研究材料といっても、この世界じゃなにもできんと思うが」

「まあ、本当は君の現実の身体ごと欲しいんだけどね。どうも見つからなくてさ」
「それもそうだろう。」

何せ剛達がレインの身体を管理しているのだ。

そう簡単に見つかるとは思えない。

「できれば、君の身体の場所を教えて欲しいんだけど」

「残念ながら知らん。日本の土地名も知らんからな。ナーブギアというものを被った場所のことを教えろと言っても無理だ」

実際、レインは剛とイヴについて行ったのだけなのであの場所が日本のどこにあるの

かというのとはわからない。

地名を覚えようとするのもなかったので尚更だ。

「異邦人のくせにナーブギアを手に入れたり、日本語を理解しているくせによく言うよ」
ふんつと鼻を鳴らしながら吐き捨てるようにオベイロンは言うが、ナーブギアを手に入れたのは剛達だし、日本語が理解できるのは組織の技術のおかげだ。

レインが個人でどうにかしたわけではない。

だが、この勘違いをうまく使えるのではないかとレインは考える。

とくに利用する予定も無いが、誤解したままでいてくれると剛達という第三者の存在をオベイロンから隠すことはできる。

SAOはクリアされ、囚われていた人達は解放されているだろうし、未だ仮想世界から帰ってこないレインを不審に思った彼らが現実世界からどうにかしてくれるかもしれない、レインは考えた。

が、同時に他人に頼っている自分の思考にうんざりする。

だが、システムなどの機械に関してレインはどうにもできないのもまた事実だった。

自分一人でこの場から立ち去る方法が無いのかとレインが考えている間の沈黙を、オベイロンはただレインが黙秘しているだけと捉えたようで一瞬怒りを見せたが、すぐにやりとわらった。

「まあ、いいよ。君の身体の在り処を吐くまで君の脳を直接いじるだけだからね。君の記憶を元にいろいろ試すのもいいなあ」

にたにたと楽しそうに笑う男を前にしてレインは表情を変えることなく見据えるだけだった。

知らぬ間に記憶を見られているのは不愉快でしかない。

「そうそう、君のこの世界での設定も考えないとね」

「設定？」

「ああ。私は現実世界では会社員だが、この世界では妖精王のオベイロンだ。まっ、僕はこの世界を管理しているから当たり前だね。せつかくだから君の設定も考えないと」

目の前の男は楽しそうに考え始める。

その間、レインはどうやってここから出るか考える。

しかし、仮想世界について詳しくないレインがコンソールを使ったログアウトの仕方など分かるわけがなく、目の前の男をどうにか脅して出る方法しか思い浮かばない。

現実世界で捕らわれていた時に比べると、仮想世界は不安要素が多すぎる。

システムに保護されているものは壊すことは出来ないし、人が痛みを感じることもない。

そして、目の前の男はHPが仮想世界で死ぬ事はないと思われる。

ほとんど八方塞がりな状況なのは間違いないだろう。

しばらく黙っていたオベイロンは、そうだ、と声を上げた。

「墮ちた妖精という設定はどうだい？妖精でありながら別種族のヴァンパイアに加勢し一つの軍を壊滅させた黒い妖精をこの私、妖精王オベイロンが罰を下して、飛ばない妖精にしたというのは」

その設定にレインはピクリと眉を動かした。

妖精という言葉を使っただけはいるが、別種族のヴァンパイアに加勢し一つの軍を壊滅させたのは事実、レインが元の世界でしたことだったからだ。

レインが睨みつけると、オベイロンは一瞬恐怖に顔を染めたが、すぐにいつものようにとした醜い笑顔に戻った。

「そんな怖い顔をしなくてもいいだろう。そう、これは君の記憶から考えた設定だ。この記憶を見たから君が異邦人だと気がつき、こうして君にアバターを提供してあげたのさ。まあ、まだ半年分ぐらいしか見れていないからそこから前のことはまだ読み取れないんだけどね」

「なら、俺の記憶から俺の身体の場所を探ればいいだろう」

レインが吐き捨てるようにいうと、オベイロンは顔をしかめた。

「僕もそうしたいのはやまやまなんだけど、所々読み取れない部分があるんだよ。とく

に君が日本にやってくる直前あたりからはほとんど読み取れていない。本当に厄介だ」

おそらく、剛達がなにかをしているのかもしれない、とレインはおもった。

彼らが自分の拠点がばれるようなミスはしないだろう。

「読み取れないものは仕方ないから君に聞くことにしたつてわけさ。にしても、君の記憶のヴァンパイアたちは実に美しいね。捕らえて私のものにしたいたいぐらいだ」

にやにやと厭らしい顔で笑うオベイロンをレインは盛大に顔をしかめて睨みつける。

それを見たオベイロンはさらに笑みを深くした。

「もし、君がいたに行けたらぜひとも彼女たちを僕のものにしたいね。そして、君の前で犯してやるのさ。仮想世界にいる君は彼女たちを助けることはできない」

そこでレインはまだ何か言っているオベイロンの言葉は聞こえなくなっていた。

レインは不思議と自身に魔力があふれてきているのを感じる。

「剣よ」

つぶやいたレインの目の前にはスカルリーパーとの戦いのおとぎに現れた傾国の剣が出現する。

手に取ったレインは鞘から剣を抜き、無造作に、しかし力強く剣を振った。

突然のことにオベイロンと他にもいた研究員であろう人たちは硬直するが、何もなかったの空気を切っただけのレインをあきれた視線を送ろうとしたが――

パアアン

——レインとオベイロンたちの間にあったはずの壁が不可視の斬撃によって破壊された。

ふわりと、レイン自身にも青いオーラが纏う。

仮想体であるはずのレインに魔力が注ぎ込まれていた。

どういう原理なのかはわからないが、傾国の剣から魔力が流れてくるのを感じる。

本来は傾国の剣に力を吸い取られているはずなのに逆に力をもらっている感覚を不思議に感じる。

これならここから出られるかもしれないと、レインは足を進めた。

しかし、レインは目の前にいるオベイロンが本当の意味でこの世界の管理者であることを知らなかった。

「し、システムコマンド！レインのペインアブソーバーをレベルゼロに！」

オベイロンが叫び、にやりと笑う。

そして、右手を前に出して指を鳴らす。

次の瞬間、レインの頭上で何かが光、そこから出現した雷がレインに直撃した。

「ぐっ」

まともに食らったにも関わらず、叫び声をあげなかったレインだが、痛みに片膝をつ

く。

「どうだい？現実の痛みは」

勝ち誇ったようにオベイロンはにたにたと笑う。

仮想世界で感じたことのない痛みにどうということなのかとおもうが、だからといって止まるレインではない。

むしろ、現実味が増したこの世界にレインの魔力を増し、冷静さも取り戻させる結果になった。

しびれるような痛みを感じながらも立ち上がったレインはもう一度オベイロンを見据える。

「何の小細工か知らんが、痛みがあろうと何も変わらないぞ」

「同じ人間とは思えないね」

顔をゆがめながらオベイロンは再び指を鳴らした。

今度は彼の周りに火球が数個浮かび上がり、レインに向かってすごい速さ飛んでくる。

レインは表情一つ変えず剣を振るい、全ての火球を剣腹ではじき返した。

それは四方にとび、部屋の壁にぶち当たって消失する。

本来、避けることすら困難な魔法をはじき返したレインを見てオベイロンはようやく

レインの認識を変えた。

「おい、今すぐこいつを強制スリープさせろ！」

叫ぶように指示を出すオベイロンにあわててレインは斬りかかるために駆け出した。

一瞬でオベイロンの目の前に移動したレインは大上段に剣を振り上げ――

――そこで突然意識が途切れた。

次に、目を覚ましたときにはすでにあの身体が動かなくなる水の中だった。

それからはことあるごとに今のように身体の在り処を聞かれるか、シルヴィアの形をした敵と戦われるかのどちらしかない。

あれ以来、攻撃を受ければ現実と変わらない痛みを感じるようになり、癒す暇もなく戦わされているレインは見た目こそ傷はないが、すでにぼろぼろだった。

「そんなことがあつたんすか」

「こそ。あの後数週間かけてあの水のシステムを作ったってわけ」

ナメクジ達の会話は続く。

「じゃあ、こいつの記憶ってどこまで読み取れたんすか？」

「それがな、あの後すぐに全く読め取れなくなつたんだよ。何も無いところから意味わからん剣を出したやつだし、なんでもありなんだろうさ。仕方なく、異邦人の脳波を調べるために、記憶から取ったデータをもとにあの大剣二刀流美女を作つて戦わせてるつてわけ。どれだけ痛めつけても身体場所ははかねえしな。ペインアブソーバーがゼ口で現実と変わらない痛みを感じてるはずなのに、こいつはいろんな部分でいかれた野郎だ」

「いかれてんのは平気でそんなことをしてるお前たちだろう」

そんな眩きをもらす新人らしいナメクジを思わずレインは見た。

しかし、人間ではないその顔がどこなのかもわからず、表情は全く読み取ることにはできない。

先輩には聞こえていないようで特に気にした様子はなく話は進む。

「にしても、須郷さんも変わつてるよな。ただの実験体なのに設定通りのアバターにしてるんだから」

「設定通りのアバターつかか？」

何事もなかつたように後輩も会話を続ける。

「鳥かこの姫さんと同じようにこいつにも設定があるのさ。さつき話した堕ちて飛べなくなつた妖精もそれなんだが、HPを設定しないのは永遠に生きる苦痛を味合わせるた

めに妖精王の下した罰ってことらしい。ただ単にこいつが簡単に逃げられないようにフライトエンジン切つて、実験に邪魔なHPを設定してないだけなのにな。そこに立てかけてある剣もこいつの読み取った記憶から作ったらしいし」

「じゃあ、この人の背中についてる羽は？」

「それも須郷さんが面白がつてつけてるだけ。羽があるからつて飛べるわけじゃないから服と変わらんさ」

「こんなの、レインには似合わないとおもうんだけどなあ」

「今なんて——」

後輩の発言について先輩が聞こうとしたところで突然ブザーが鳴り響いた。

あわてて先輩がウィンドウを開いて状況を確認し始める。静かに後輩はそれを見ていた。

「くそつ、どつかからハッキング受けてるらしい。俺はいったん落ちる。異邦人は水の中に戻しとけ」

それだけ言い残した先輩はその場から消えた。

「りよーかい。つていうわけないんだけど」

ポツリとつぶやいたナメクジはのろのろとこの部屋の操作に使うウィンドウの前に移動して操作をし始める。

また思考もままならない水の中に戻されるのかと、レインはおもっていると、突然両手首から手枷がはずれた。

突然のことと、今もなお痛む体のせいでレインは体勢を整えることはできずに身体は傾いた。

そのまま地面にぶつかるかとおもったが、途中でふわりと受け止められた。

「おい、無事か？」

「レイン！」

何事かと顔を上げると、そこには久しく見ていなかった坂崎という男の姿があった。

そして、その後ろには今にも泣きそうな白い翼を生やした少女——元の世界でいつもレインの近くに出没していたシエルファがいた。

二人の後ろではナメクジがのろのろと動いている。

「あんたがなんで……」

「僕が君とあった組織にはもともとスパイで入ってただろ。この会社、というか須郷の、えつとオベイロンってお前には名乗ってたやつね。とにかく須郷のチームにも僕と同じようなやつがいたってわけさ」

そういえば、とレインは思い出す。

この坂崎という男は元々、レインが最初に捕らえられていた組織でレインの管理をし

ている人物だった。

組織から得るものはなにもないと判断して出て行こうとしたときに、坂崎が間諜だと知り、なんだかんだで一緒にその場から出て行くことになったのだ。

そして、仮想世界に入る元凶となった剛たちの仲間でもある。

ちらりとシエルファをみると、我慢できなくなつたといわんばかりにレインに抱きついた。

「よかつた。ほんとによかつた」

「あんたもどうやって……」

シエルファはもともと実体がなかつたはずだ。

そんな彼女がナーブギアをかぶれるわけがない。

「レインの身体を通して魔力をここに送り込んでいるの。傾国の剣が何度か反応しているのを見て私もやってみただけ」

シルヴィアとの決闘のときに神として崇められてもいると言っていただけの事はあつてやりたい放題な人だと、思わず苦笑してしまふ。

「僕は来ないほうがいいっていったんだけど、とめる方法なんてないから着いて来ちゃつたんだよ」

「坂崎さん、早くしないと。こっちに気がついて」

レインに言い訳するような坂崎をナメクジがせかす。

「わかった」

坂崎とシエルファに支えられながらも、どうにか立ち上がったレインはいつの間にか傾国の剣を持ってきていたナメクジから剣を受け取る。

「時間がないから手短かに説明するよ。今僕らが君にできるのはこの世界のGM、オベイロンからレインへの干渉を遮断することと、君の知り合いのところに転移させることだけだ。ログアウトさせることはGM権限が必要みたいで僕らにはできない。今から転移させる君の知り合いは、僕らと同じようなことをしようとして一人動いている子だから、その子についていけばログアウトできるようになる・・・はずだ。それと、その魔剣にはオベイロンからの干渉を遮断するシステムを入れてあるから絶対に手放さないでくれ」

「わかった」

「これだけ遅くなったのにこの世界から助け出せなくてすまない」

坂崎がすまなさそうな顔をする。

やはりこの男に間諜は向いていないと思う。

「いや、むしろ自力で帰れなくてわるかった」

レインは傾国の剣の姿をしているだけの剣を腰につける。

「相変わらず、お前って一人でどうにかしようとするよな」

へへつと笑うナメクジにレインは怪訝な視線を向ける。

「ああ、いつてなかつたな。こいつは剛だ」

間違いないく人選を間違えているだろうと、レインは眉間にしわを寄せた。

それを気にすることなく、坂崎がポケットに入れていた荒削りをしたような結晶をレインの手に強引に持たせる。

「これは君の知り合いのところに行けるアイテムだ。転移、と一言言えば使える」

「お前たちはどうするんだ？」

「僕たちは普通にログアウトするだけだ。何の心配もいらぬ」

「私は魔力でこっちに来てるだけだからそれをやめたら普通に帰れるわ」

安心させるために微笑むシエルファは、村を出てから姿を現すようになっただけのこととあり、レインのことを良く知っている。

「結局、君が自力でこの世界から脱出することになってしまつて本当にすまない。僕たちは君の帰りを待っているから」

レインは一度だけうなずく。

そのとき、鎧を着込んだ兵士とオベイロンが部屋に駆け込んできた。

「やっぱりこゝか」

レインの記憶から読み取られた形だけの傾国の剣の柄に転移結晶を持っていない手をそえるレインをシエルファがかばうように前に立つ。

同じようにナメクジの姿をしている剛もレインの前に立つが、坂崎だけはレインの後ろに隠れるあたりいつもどおりでどこか安心してしまふ。

あわててきたらしいオベイロンは乱れていた髪の毛を整える。

「なるほど、現実世界に仲間がいたのか。ここまで入り込めるといふことは、その研究材料のバックアップをしている人たちかな？」

次の瞬間、シエルファからオーラがあふれ出した。

「許さない」

シエルファが怒っているのは誰からみてもわかる状況だった。

何をする気なのかシエルファは右手をオベイロンに向ける。

「変なことをするな」

叫ぶようにいいながらオベイロンが指を鳴らす。

それと同時にレインの首に黒い帯が出現し、レインの首を締め上げながら宙に浮かせる。

「かはっ」

呼吸のいらぬこの世界では苦しいとおもうことはないが、遠慮なく締め上げる帯が

首に食い込む。

朦朧とする意識の中で視界の端で坂崎と剛がオベイロンの何かの操作によって消えたのが見える。

「さて、そこのお嬢さんもしかして異邦人なのかな？」

オベイロンの卑しい顔を見てレインは首の帯を引きちぎろうともがく。

彼女まで捕らえられては意味がない。

しかし、システムによつてその帯が千切れることはなく、レインの抵抗を諸共せずつぎりぎりとは締め上げ続ける。

消えそうになる意識のなか、再びブザーが鳴り響く音が聞こえたとおもうと、突然首の帯が弾けて消え、宙吊りにされていたレインは重力にしたがつて落下するが、シエルファアが受け止めた。

「転移！」

レインの手に握られていた転移結晶に触れてシエルファアが叫び、結晶が反応してレインを光が包み込み始める。

「逃がすか！」

それに反応したオベイロンが再び指を鳴らす。

途端にレインとシエルファアを囲むように透明なガラスの箱が現れ、二人を閉じ込めよ

うとこちらに迫る。

彼女だけでもその箱から逃がそうと突き飛ばすために動こうとしたが、その前にと
ん、と優しくシエルファに押される。

華奢な彼女の腕から想像もできない力で押されたレインはガラスの箱が閉まる前に
その箱から逃れることができた。

その代わりシエルファはその箱の中にとらわれてしまう。

痛む身体を無視して、転移のために包まれる光を無視してレインは地面を蹴ってシエ
ルファに向かって手を伸ばした。

しかし、その手は届くことなく、微笑みこちらを見るシエルファを視界にとらえなが
らレインは完全に光に飲み込まれ、その場所から姿を消した。

再会

羊のような角をはやした巨大な悪魔が腕を振るつたと同時に人が飛ぶ。

飛ばされた人の命は刈り取られてすぐに命の灯火になってしまふ。

その理不尽な姿に恐れた人々は三々五々に逃げ出すが、悪魔がそれを許すわけもなく、逃げ惑う人々を飛び超えて退路を絶つ。

容赦なく人々を屠る姿は悪魔そのものだった。

「いやあ、戦った戦った」

身体を伸ばしながら悪魔の姿から本来のスプリガンのキリトの姿に戻ったキリトは身体を伸ばす。

キリトが現在いるのはアルヴ Heim オンラインというゲームの中のルグルーという街の前の橋だ。

なぜ、SAOから開放されたキリトが今度はALOという仮想世界に来たのかというと、この仮想世界にまだ目覚めることのないアスナがいるらしいからだった。

再びナーブギアをかぶっていざ仮想世界に來ると、いきなりバグで変なところに飛ば

されたり、SAOでのデータが引き継がれていたりしていたが、急ぐ旅ということもあるので文字化けたアイテムを捨てた以外はそのままだったりする。

もはや、ビーターどころではなく、チーター同然だ。

お陰でユイと再会することも出来たのでマイナスなことはないの無い。今のところ誰にも不審がられてもいないので問題は無いだろう。

ALOにはいつてから、一番最初に出会ったシルフ族のリーファのお陰で迷うことなく世界樹に向かうことができているので運がいいとしかいえない。

つい先程までは何故かあとを付けられていたサラマンダーのパーティと戦っていた。一時は負けそうになったものの、ユイに言われた通り魔法を使った結果、悪魔の姿になり圧勝。

そして現在に至ることになる。

ボスを攻略するような陣形をとられたり、こちらもモンスターの姿になったりで、なかなか楽しい経験だったのは間違いないだろう。

キリトから少し離れた所では旅の仲間のリーファが襲ってきていたサラマンダーの一人に事情を聞くために剣を向けていた。

それでは彼から情報は聞けないだろうとおもったキリトは、リーファの前で座り込んでいるサラマンダーの横にしゃがみこんだ。

「ナイスファイト！俺一人だったら負けてたな」

コミュニケーション能力は低いと自負するが、今回はそんなことを言っていられない。
い。

フレンドリーな奴を演じきるためにキリトは笑顔を作る。

SAO時代では考えられない行動だ。

「ちよつと、キリト君？」

「まあまあ」

怪訝な顔を見せるリーファを適当になだめてキリトはなれない左手でウィンドウを操作して、先ほどサラマンダーを倒したときにドロップしたアイテム一覧を可視化して情報を聞き出すために生かしておいたサラマンダーに見せる。

「ものは相談なんだが、このさっきの戦闘でドロップしたものなんだけど、もし質問に答えてくれるなら、全部君に上げようとおもうんだが、どうだい？」

綺麗な笑顔でそんなことを言うキリトを凝視した後、他のサラマンダーが残っていないか周りを確認してからサラマンダーは声を発した。

「……マジ？」

「まじまじ」

キリトとサラマンダーの男は笑顔で頷きあい、交渉は成立した。

リーファとユイの視線を感じるが気にしてられない。早くアスナを助けるためにも手段など選んでいられないのだ。

サラマンダーから大方の事情を聞いたキリトとリーファはルグルーの街に入るために橋を歩いていった。

下つ端だったせいで大した話が聞くことはできなかつたが、サラマンダーたちから二人が狙われているのは理解できた。

さすがに須郷がキリトの動きに気がついてサラマンダーを回してきてるとは思えない。

どういふことなのかと思考を張り巡らせていると、リーファがこちらを見ていることに気がついた。

「どうした?」

「えつと・・・さっきのキリト君なんだよね?」

さっきの、というのはおそらくサラマンダー達を蹴散らしていた悪魔のことだろう。

「んー、たぶん・・・」

「たぶん?」

自分でもあいまいな答えだなおもぅが仕方がない。

「たまにあるんだよなあ、戦ってる間にブチ切れて記憶が飛ぶこと」
「え、それやばくない？」

やばい奴を見る目を向けられるが、キリトは気にせず話を進める。

「まあ、さっきのはなんとなくだけ覚えてるよ。ユイに言われたとおりに魔法つかつたら、自分がなんかやたらでかくなつてき。剣がなくなったから仕方なく手づかみで……」

「ぼりぼりかじつたりもしてました」

そういえばそんなこともしたような、と曖昧な記憶をさかのぼっていると、どん引きしているリーファが視界に入った。

「まあ、モンスター気分を味わえて楽しかったよ」

「その……味とかしたの？」

引きつった顔で聞いてくるリーファにまともに特に味はしなかったといっても面白くはないなと考えたキリトはにやりと笑った。

「焦げかけの焼肉のような風味と歯ごたえが……」

「やつ、やつぱりいい！言わないで！」

その反応を見てキリトのいたずら心に火がついた。

すばやい動きでリーファの手をつかむ。

「がおうー！」

そんな声とともにキリトはリーファの手にかぶりついた。

このとき、きちんと相手が女の子だということを理解していればキリトはこんな行動をとることはなかっただろう。

古参らしいリーファの飛ぶスピードが速いのと同様、キリトの顔を引っぱたくために振るった手の速さもすさまじいものだった。

「いやあああああ!!」

パアアアン

リーファの叫び声とキリトの頬の音が綺麗に合わさる。

叩かれたときのヒットエフェクトでキリトの視界が白く光った。

「うげっー！」

頬に感じるしびれるような不快感とヒットエフェクトの眩しさに目を瞑る。

「ヒットエフェクト眩しすぎ」

「違いますパパ！後ろですー！」

ユイの鬼気迫る声にあわてて後ろを向くと、青く光る球体がそこにはあった。

S A Oで見慣れた転移エフェクトのそれに近い。

リーファとユイを後ろにかばい背中におさめていた剣の柄に手をかける。

眩しさに目を細めつつもしつかりとそれを見据える。

光が収縮すると共に、何か影が見えてくる。

それがだんだんと形になってきた時にユイが声を上げた。

「パパ、中に人がいます！このプレイヤーIDは……レインです！」

「なに?!」

ユイの言葉に光など無視して目を凝らす。

光もどんどん収縮して徐々に人物が見えてくる。

自分と同じように黒い服を着て、腰にはごつい剣を携えた男——アインクラッドの姿と変わらないレインが現れた。

あまりに突然のことにキリトは動くことができなくなる。

後ろのリーファも何も言えずにいることは似たような心境なのだろう。

レインはヒースクリフとの戦いの際、キリトとアスナを守ってHPを全損させている。

その後、ヒースクリフを倒し、崩れゆく浮遊城を目の前で茅場本人としゃべったときにレインは生きているというのは聞いていた。

しかし、レインの話を聞いていたのもう会えないだろうとおもい、悲しくなったのは嘘とはいえない。

完全に光が消えたと共に、少し浮いていたらしいレインはすたつと着地した。

相変わらず謎に包まれている奴だとおもいつつ、何を聞けばいいのかわからないキリトは口を開けないでいた。

レイン本人も眩しかったのだろう。閉じていた目をゆっくりと開けた。

視線が交じり合う。

それと同時にレインは剣の柄に手をかけた。

あわててキリトは両手を上げて敵意がないことを示しながらもレインを止める。

「ちよっ!? 待てレイン！ 俺だ!! キリトだ！」

キリトの言葉にレインは眉間にしわを寄せつつキリトの顔を凝視する。

それもそうだろう。今のキリトのAvatarはアインクラッドのときとはちがう。

動きは止めてくれたものの、剣の柄からは手を話そうとしないレインにどう信じてもらおうかとキリトは頭をフル回転させる。

異邦人だと知っているといえればわかってもらえるだろうが、リーファがいる前であるわけがない。

アインクラッドでの話をして、リーファにSAO帰還者と知られてややこしいことになることは間違いない。

「レイン！」

どうするか悩んでいると、ユイがキリトの後ろから飛び出してレインの目の前までとんだ。

それまで今にも切りかかってきそうだったレインの鋭い目は一瞬で柔らかくなった。

「……………ユイ？」

「はいユイです」

まさか、ナビゲーションピクシーの姿から元の姿に戻るのではないかと一瞬不安になったが、さすがにそれはしないようだったので安心する。

しばらく、じつとユイの姿を見たレインはようやく剣から手を離れた。

「なるほど。俺の知り合いというのは、キリトのことだったのか」

「一体何を」

「キリト君……………知り合い？」

一瞬のことではあるがすっかりリーファのことを忘れてしまっていたキリトがあわてて後ろを振り返るとリーファは困った表情をこちらに向けていた。

レインが謎の出現の仕方をしたことと、リーファにどう説明すればいいのかという問題がキリトの頭を悩ませる。

まずはレインに事情を聞こうと向き直ると、レインは膝をついていた。

今にも倒れそうなレインをユイが小さな身体で必死に支えようよしているが、さすが

に支えられないようにキリトが駆け寄り、ユイの代わりにレインを支える。

「おい、どうした?!」

「すまん。問題はないんだ」

問題しか見受けられないのをレインは分からないのだろうか。

頑なに人を頼ろうとしないところをみるに間違いなくこいつはレインだと認識させる。

呆れるキリトにユイはリーファに聞こえないように耳打ちをした。

「パパ、レインのプレイヤーデータを見たんですが、ペインアブソーバーがゼロに設定されています」

「なに?!」

キリトはユイの言葉に耳を疑う。

ペインアブソーバーというのは、痛みを制御するシステムのことだ。

普段、モンスターに切られても痛くないのはこのペインアブソーバーというもののおかげで、不快感を感じるだけですんでいる。

それがゼロというのは、現実で感じる痛みと同じということだ。

レインの顔をよく見ると仮想世界ということで汗はかいていないが、顔色がすこぶる悪い。

ペインアブソーバーがゼロだということ、今のレインの様子を見て、キリトは背中に汗をかく感覚におそわれる。

「おまえ、まさか怪我してるのか？」

怪我ですめばいいのだが、と思う。

レインはすこし考えた様子を見せてから口を開いた。

「そんなことはどうでもいい。ここは洞窟か？どつちにいけば出られる？」

無理やり立ち上がろうとするレインをどうにか支える。

今まで見たことのない弱り様に是が非でもとめなければいけないのは明らかだった。

「今のお前を放っておくことはできないから言えない」

「答えろ」

今まで自分に向けられたことはない底冷えするような冷たい目を向けられる。

《タイタンズハンド》のときや《笑う棺桶》のときにみたあの目。

ブチギレてるときの目だ。

その目を向けられた瞬間、キリトは目を逸らしかけたがどうにか見返して絶対に教えないことを伝える。

レインはすつと目を細め、次にリーファをみる。

「つ！えつと……」

「わかった。脅すようなことをしてわるかった」

明言はしなかったリーファだが、指をさしたか目線で教えたのかしたのだろう。レインのあの目を向けられてしまったのだから仕方がないとおもう。

支えているキリトを押しかけてレインはルグルーに入っていこうとする。

あわてて止めようと手を伸ばしたキリトだったが、振り返ったレインが自分の伸ばした腕をつかんだとおもった瞬間には宙に浮いていた。

「うぐっ」

背中を地面に叩きつけられ、横をレインが通っていくのが見えて、ようやく自分がレインに投げられたことを理解した。

現実世界であれば、今の衝撃で肺の中の空気が全て出てまともにしゃべれるようになるまで時間がかかっただろうが、ここは仮想世界だ。呼吸すら必要ではない。

「待てレイン！どこに行くつもりだ！」

無視されて行ってしまうとおもったが、予想外にもレインは止まってくれた。

「これは俺の問題だ。お前には関係ない」

「お前は無茶をしすぎだ！少しは俺を頼れ！」

明らかに心身ともに疲弊しているレインが一人で全てを解決しようとする姿にキリトは叫んでいた。

キリトの声と同時にユイがレインに向かって飛ぶ。

再び歩こうとするレインの目の前に躍り出たユイはレインの胸に小さな手を触れる。それまでの冷たい瞳ではなく暖かい瞳になったレインはつらそうにユイをみた。

「頼む、行かせてくれ」

「嫌です！だってレインの身体は——」

ユイに続きを言わせないようにかそつと優しくユイにふれる。

先ほどまでの表情とは打って変わってレインは優しくユイに微笑みかける。

「ごめん。でも行かないといけないんだ」

それでも一番レインの状態をわかっているユイが引き下がるわけもなく、じつとレインを見つめて行かそうとはしなかった。

基本的に女の子に弱く、とくにユイに関しては誰かと似ているらしく、それ以上に弱いレインがユイを押しつけていくことができるはずはなかった。

小さくため息をついたレインは全身から力を抜いたのか再びその場に倒れそうになる。

あわててキリトが駆け寄って支えた。

「すまん」

「ちゃんと説明してもらおうからな」

「……わかった。ただ、今は少し休む」

それだけ言ったレインは静かに目を閉じた。

「休むって……気絶の間違いだろ」

完全に力の抜けたレインをキリトはどうにか背負いなおす。

ユイが心配そうにレインの顔を覗き込んでいるが、事態についていけないリーファになんて説明したらいいのか、キリト頭を悩ませた。

まず、アルヴヘイムに転移というシステムがないのでレインの登場の仕方の説明すら難しい。

レインの、人が適当に作った設定に合わせない、というのもあるので下手にリーファに作り話で誤魔化しても、レインのせいで無駄になる可能性の方がかなり高い。

「えっと、あとで説明するから先に街に入ろうぜ」

「あ、うん」

秘技、後回しを使ったキリトはリーファと共に街に入っただけだった。

すぐに聞いてこなかったリーファには感謝しかできない。

とりあえず、ルグルーの宿屋に入ったキリト達はレインをベッドに寝かせる。

一つしかない椅子をリーファに譲り、キリトは壁にもたれかかった。

穏やかとは言えないレインを観察すると不思議な点が多すぎる。

まず、見た目を最初に上げるのであれば服装だろう。アインクラッドで着ていたものと寸分違わないそれは目に馴染み過ぎていてアインクラッドではないここで見ることに違和感しかない。

そして、そんなレインに背中に生えている羽。

洞窟内で飛べないということもあり、キリトとリーファは羽を出していない。

まず、飛ばうも意識して出すものということもあるので意識のないレインが出しているのはおかしいのだ。

「あの、キリト君。そのNPCの人のこと何か知ってるの？」

「NPC？」

「えっ、違うの？HP表示もないし……」

リーファの言葉にキリトはレインを注視してフォーカスしてカーソルを出す。

彼女の言うとおり、レインのHPは存在せず、カーソルの色は今まで見たことのない白色だった。

アスナやほかの目覚めないSAO帰還者となにか関係があるのだろうか。

いや、ここまでおかしいレインの様子を見るに関係あるだろう。

「にしても、すごくつらそう……一体どうしたんだろう」

一人で思考の海にはまりかけていたキリトの返事を聞くこともなく、今も苦しそうに

顔を歪めながら眠るレインの横までリーファは移動する。

ユイはSAOのときから変わらず、レインに対してどこかキリトやアスナとは違う特別な感情を抱いているようで、仰向けで寝ているレインの胸の上にちよこんと座っている。

そんなユイにリーファが聞く。

「ユイちゃん、この人に治癒魔法かけたら効果あるかな？」

その言葉に少し考えたユイは不安そうな表情のまま答えた。

「やってみないとわからないというのが現状です」

ペインアブソーバーのことをキリトに伝えてきたことから察するに、おそらくユイはレインのプレイヤーデータをのぞいていろいろなことをすでにわかっているはずだ。

しかし、それを話さないのはキリトとは違い、アルヴヘイム・オンラインというゲームを楽しんでいるだけのリーファのことを考えてのことだろう。

レインのプレイヤーデータをのぞいたユイですらわからないということとは、かなりややこしい。

そんなことを考えながら、キリトは成り行きを見守る。

「効いてくれたらいいんだけど……。スー・フィツラ・ヘイル・アウストル」
リーファの周りの空気がふわりと動く。

魔法によるエフェクトがレインを優しく包み込んだ。

レインの様子を三人は息を呑んで見守る。

そして、エフェクトが消えるころにはレインの表情は穏やかなものになっており、全員がほっと一息ついた。

痛みがなくなっただけであれば時期に目を覚ましてくれるだろう。

心に余裕ができたキリトはふと少し前のことを思い出した。

「そういえば、リーファ。へんなメッセージ来てなかったっけ？」

「ああ、そういえば。レコンから来てたなあ」

どこか嫌そうな顔をするリーファに思わず苦笑いをしてしまう。

「なんか慌ててたっぼいし、リアルでも知り合いなら一回落ちて連絡とってきたらどうだ？こいつが目を覚ますまで時間かかりそうだし」

さりげなく厄介払いのようなことをしてしまっていることに少し罪悪感を覚える。

しかし、ことがことだけにただのプレイヤーであるリーファをSAOのことに巻き込むのも悪いと思ってしまうのだ。

しばらく考えたリーファは小さくため息をついた。

「そうさせてもらうよ。ごめんね。できるだけ早く帰ってくるから」

リーファは手早くウィンドウを操作してログアウトしてしまった。

それを見届けたキリトはレインの寝ているベッドに腰をかける。

「ユイ、レインのことどれぐらいわかる?」

振り返ったユイは今にも泣きそうな顔をしていた。

その様子にすでに不安しかない。

「すみませんパパ。ほとんどわからないというのが今の状態です。ただ、先ほど伝えたようにペインアブソーバーはゼロに設定されていて、ログアウトもできないようです。さらにフライトエンジンも使えない状態みたいですね。HPがないでこの世界で死ぬことはありませんが——」

「問題はない。体も現実世界と変わらないぐらいには、いや、むしろそれ以上に動くしな。死なないだけさ。身体の痛みも今はない」

いつの間にか起きていたらしいレインが起き上がりなが泣きそうなユイを安心させるために微笑みかけていた。

そんな説明で納得できるわけがない。

しかし、リーファが戻ってくるまでにレインのことを聞かないといけないのもまた事実だった。

「とりあえず説明をしてくれると嬉しい」

キリトが真剣な面持ちで話を切り出すと、レインもいつのも無表情に戻った。

「俺は……さつきまでいた場所のことはわからない。ただ、アインクラッドから出たあと目を覚ましたらこの仮想世界にいてすでに囚われていた状態だった。それでさつき、囚われていたところに現実世界の知り合いが助けにきて、お前のところに転移してきた」

明らかにさつきいた場所について言う気がないレインに呆れる。

「じゃあ、お前のペインアプソバーがゼロだったりする理由とかがってわかるか？」

キリトがそう聞くと、レインは顔をしかめた。

「どうやらできれば話したくない部分らしく、口を開く様子は見受けられない。」

しかし、ユイが黙っているわけがなかった。

「教えてください」

一瞬で妖精の姿から元の人間の姿に戻ったユイはベッドに座っているレインの膝の上になんか座ってお願いをする。

困った顔をして頭をかいたレインは小さくため息をついて、彼には珍しく目線を逸らしながらぼつりぼつりと答えはじめた。

「……実験の一環だそう。詳しくは知らんが、俺は異邦人だからどこまで痛みに耐えられるか気になるらしい」

レインの言ったことにキリトもユイも言葉を失う。

そして、キリトはレインはS A Oに来る前も現実世界で謎の組織に捕えられていたとも言っていたのを思い出した。

レインが自身でその組織とやらは壊滅させることが出来たらしいが、システムによって制限の多い仮想世界ではそうすることは出来なかったのだろう。

レインよりもシステムについて詳しいキリトにはすぐに理解できた。

「俺の記憶から作り出した女性と連日戦わされてな。その人は俺に魔法を教えてくださいな。魔法込みで戦えばさすがに負けるかもしれない人なんだが、さすがというか、強いんだ。だから無傷とかは無理だった。剣の技術も一流だからな」

「自力で逃げるのはやっぱり無理だったのか？」

できなかつたから知り合いに助けてもらったのだろう。

それがわかつていても、強くなるために自らそこに留まったと、もしそういう理由ならと、キリトは思うしかなかったのだ。

そして、そんな小さなキリトの望みの碎かれる。

「無理だった。一度逃げ出せそうだったんだが、強制的に意識を奪われてな。次に目が覚めた時には嚴重に管理されていた」

いつもと変わらないようできて、いつもよりも希薄な表情が意味するものをキリトにはわからなかった。

何も言えなくなり、沈黙が続く宿屋の一室に人がログインしてきた時のエフェクトが光る。

リーファが戻ってきたのだろう。

「ユイ」

キリトが声をかけると、ユイはすぐにナビゲーションピクシーの姿になった。

その直後にリーファがエフェクトの中から現れる。

不審がられていないか不安になったが、そんなことが気にならない程度にリーファは慌てている様子だった。

「ごめんキリト君。私行かなきゃ」

レインのことも重要なのは間違いないが、だからといってリーファを助けない理由にはならない。

「じゃあ、道すがら話を聞くよ。こいつも連れていくけどいいか？」

そこでようやく、レインが目を覚ましていたことにリーファ気がついたらしい。

「あつ、起きたんだ！よかった。急ぐことになるけど問題ないならいいよ」

「レイン、紹介する。この子は俺に道案内をしてくれているリーファだ」

「道案内？」

そういえばと、自分がここにいる理由を全く説明していなかったことを思い出す。

「俺はこの世界で人を探している。その人はたぶん世界樹っていう木の上にいるんだ」
考えるような仕草を見せたレインはベッドから立ち上がった。

「わかった。俺とお前の目的地は同じだろうから着いていく」

「目的地って何か世界樹に目的があるのか？」

身体を二通り伸ばしてからレインはいつもの特に感情のこもっていない表情で言う。

「俺はたぶんその世界樹とやらから来た」

「え?!」

「え?!」

思わず、キリトとリーファは固まる。

フリーズした二人にレインは怪訝な顔を向ける。

「急ぐんじゃないかったのか？」

「そうだった!!」

レインの言葉で慌しく三人はルグルーをあとにした。

グランドクエストの鍵

軽く食事をとる暇もなく、レインとキリトはリーファから事情を聞いていた。

彼女がいうにはシグルドという名の男がリーファが属しているシルフの領主を裏切り、今出かけている領主のところにサラマンダーという種族が襲うために向かっているらしい。

この世界のことをあまりわかっていないので種族間の問題や、グランドクエストという全ての種族が攻略しようとしているクエストについてもどんなものかわからないレインだったが、リーファという少女が属している種族が危ないということはわかった。聞くところによれば、身体の痛みをなくしてくれたのも彼女が魔法を使ってくれたかららしいので、レインにとってリーファを助けるのは決定事項になっている。

つかまつたシエルファのことも心配だが、彼女のことだ。オベイロンに好き勝手されることはないだろう。

当たり前のようにこのまま、キリトも一緒にリーファを助けるものだと思っていたのだが、リーファはそう思っていなかったようで少し声のトーンが落ちる。

「これはシルフの問題だから、二人が一緒に来てくれる理由はないよ」

キリトとリーファの後ろを走って着いているレインは成り行きを見守る。

「会場にいったら大勢のサラマンダーと戦うことになって生きていられないとおもうし、レインさんはどうなるかわからないけど、私とキリト君はスイルベーンから出直しになつちやうしね」

走りながらもうつむいたリーファをレインは後ろから見続けた。

「むしろ、君たちが世界樹を目指すならサラマンダーについていったほうがいいとおもう。だから私をここで斬って行つちやっても」

とうとう立ち止まってしまったリーファは俯いたまま、服の裾をぎゅつと握る。

結構なスピードで走っていたので、レインは止まったリーファを少し追い抜いて、キリトの隣あたりまで来てしまう。

そんなレインに見向きもすることなくキリトはリーファをみていた。

しばらくの沈黙の後、キリトの静かな声が響いた。

「所詮、ゲームだから何でもありだ。普段の自分とは違う自分を味わえるロールプレイなんだから普段できないことをしたい。人から物を奪ったり、殺したり。現実世界じゃないのに真つ当に生きて馬鹿みたい。そんなことを言う奴とは嫌つていうほどでくわしたよ」

真剣に一言一言いうキリトをリーファは俯いていた顔を上げて、しつかりと聞いてい

る。

「二面ではそれも真実だつて昔は俺も思つてた。でも、仮想世界だからこそ守らないといけないものがある。俺はそれを大切な人に教わつた。この世界で欲望に身を任せれば、それはリアルな人格にかえつてくる」

ふわりとした笑顔に変えたキリトは言葉を続けた。

「俺、リーファのこと好きだよ。友達になりたいって思う。だから、どんな理由があつたとしても、君を自分の利益のために斬るようなことは絶対にしないよ」

「キリト君……」

話は纏まつたかと思つていたレインが思ったが、次はレインの番だといわんばかりにキリトとリーファはレインに視線を向けた。

一瞬眉間にしわを寄せた後、レインは小さくため息をついた。

「俺は俺が守りたいものを守るだけだ。そのためなら同じ種族の奴だつて敵に回す。現に俺はヴァンパイア達と一緒に俺と同じ種族のやつらと戦つたことだつてあるしな」

「ばっ?!」

「ば、ヴァンパイア……?」

「あっ」

現実世界の地球ではヴァンパイアは空想上の生き物だつたと思ひ出したときにはす

でに遅かった。

説明を丸投げするべくキリトに視線を向ける。

俺?! という顔をするキリトだったが、レインが真顔で見続けると観念したようで適当に理由をつけ始めた。

「ほら、NPCだし。そういう設定なんだよ。たぶん」

「でも、知り合いたいだし……」

「えつと……ほ、ほら!!俺、リーファと会うまで迷子だって言っただろ?そのときに一回会ったんだよ!」

先ほどまでの真剣な空気はどこに行ってしまったのか。

あわてるキリトとそんなキリトをじと目で見るリーファに、元凶なのに我関せずなレイン。

そんなときに助け舟のようにキリトとリーファの前に通知が来る。

レインのところに通知がないのは、もともと聞くウィンドウすらないからだろう。

「なんだ?運営から?」

どうやら運営からのメッセージらしく、話を逸らすのにはうつつけだとキリトはそれを聞く。

嬉々としてそれを聞くキリトをレインはみていたが、読むにつれてキリトの表情は険

しくなっただけだった。

「どうかしたのか？」

「レイン、これ読んどけ」

すばやく可視化したウインドウをキリトはレインの前に出す。

リーファも気になったようすで読み始めた。

首をかしげながらそれを読んだレインは盛大に顔をしかめる。

『グランドクエストの鍵、ついに実装！』

いつもALOを遊んでいただけありがとうございます。

このたび、グランドクエスト攻略の助けとなる“グランドクエストの鍵”を実装いたしました。

グランドクエストの鍵。

それは、妖精王オベイロンから罰を受けて飛べなくなった妖精、通称“堕ちた妖精”のことです。

“堕ちた妖精”はこのALOの世界にたった一人しか存在せず、その妖精を連れて行けば、ガーディアン達が堕ちた妖精を排除すべく、ターゲットの大半がそちらに行きま

そんな彼を連れて行けば攻略が楽になることは間違いないでしょう。

HPも設定されていないので死ぬことはありません！

ただのNPCとの見分け方は簡単。

HP表示のない白いカーソル。

そして、”墮ちた妖精”という名にふさわしい黒い容姿！

グランドクエストの鍵を捕まえて連れて行きましょう！』

これは明らかにレインのことを言っているのだろう。

他にも、敵であるはずのヴァンパイアに加勢して同種族を倒したということや、世界樹から逃げ出したことなども設定として書かれている。

これなら適当に突っ立っているだけでも誰かが世界樹まで連れて行ってくれるだろう。

「これってレインさんのことだよね……?」

リーファが恐る恐るといった様子で聞いてくる。

それに対してレインは特に変わらない表情で返す。

「俺のことだろう。ただ、先にリーファのほうの問題をどうにかしよう」

正直なところ、この通知が来たからといってレインとしてはどうでもいいことだっ

た。

どちらにしろシエルファを救うためには世界樹にいかなければいけないのだ。

「そうだな。ユイ、出口までのナビ頼めるか？」

「お任せください！」

ユイが可愛く敬礼して、キリトの胸ポケットに入った。

「レイン、全力で走るぞ」

「わかった」

「では、お手を拝借」

「え？」

リーファの手をキリトがきちんと握った瞬間、レインとキリトは全力で走った。

突然のことに驚いたリーファの叫び声が洞窟内で木霊する。

洞窟の道案内はキリトの胸ポケットに入っているユイがしているのでレインはキリトの後ろをついてはしった。

キリトに手を握られているだけのリーファは地面と並行して宙に浮いてしまっている。

もう少しまでもな持ち方はなかったのか、とレインも思わざるを得ない。

そんなことを考えながら走り続けていると、突然リーファがレインの前に飛び込んで

きた。

「きゃあああ!!」

「ん」

叫ぶリーファを何とか受け止めて横抱きにする。

ぞくに言うお姫様抱っこというものになるのだが、そういうことに対して大してどうも思わないレインはそのまま走る。

しかし、顔の整っているレインにお姫様抱っこをされているリーファは顔を赤くして、無言になってしまう。

急に叫ばなくなったリーファに首をかしげながらもレインは特に気にするでもなく、キリトの横に並んだ。

「悪い悪い」

「悪い悪い、じゃないわよ! あんなスピードで走り出したくせに手を滑らして離すなんて!」

騒ぎはするものの、暴れはしないリーファは暴れたら落ちてしまうことを理解しているのだろう。

どこかニナという女性に似ていて思わず微笑んでしまうが、キリトとリーファがそのことに気がつくことはなかった。

そして、二人がモンスターも無視して走り続けたおかげですぐに出口が見えた。

最初は眩しくてよく見えなかったが、近づくにつれて出口はすぐ向こうは崖になって
いるのか道が途切れていた。

「キリト」

「わかつてる。そのまま飛ぶだけだ」

こいつは俺が飛べないの知らなかっただろうか、と思う暇もなく、すぐに出口から二人は飛び出し、空中に飛ぶ。

リーファとキリトは羽を出現さしてそのまま飛ぶが、飛べないレインは落下するしかない。

地面から二人を確認しながら走るしかないか、と思つて着地体勢に入ったレインだったが、急に誰かに抱きとめられて上昇した。

「すまん、わすれてた」

レインの胸を抱え込んでいるキリトが笑いながら謝ってくる。

「走つてついてくだけだから別によかったがな。むしろ、男に抱かれてるのが屈辱的だ」
「急いでるんだから少しぐらい我慢しろ！」

「仕方ない。この距離ならリーファに聞かれることもないだろ。お前はなんでこの世界に
にいるんだ？」

密着している理由でもなければやってられないので、話を聞くためにこの体勢になっているということに無理矢理する。

一瞬、レインを抱くキリトの腕の力が強くなった。

人が空を飛び、幻想的な風景が広がっているにも関わらず、先程まで明るかったキリトの周りは色を失っていく。

「クリアした後、俺は現実世界で目を覚ましたんだけど、アスナは目を覚ましていない。そんなアスナがこの仮想世界にいるかもしれないんだ」

キリトの声は震えていた。

怖いのだろう。大切な人を失うことが。

レインはとくに考えることもなく口を開いていた。

「生きているなら、大丈夫だ。それに、お前が助けに行くんだらう？」

「でも、早く助けないとアスナは他のやつと結婚するんだ」

「それだけのことでお前達の気持ちは離れるのか？」

どこをみるでもなく、レインは独り言のように言う。

自分を変わらないと断言できる。フィーネへの気持ちは天地がひっくり返ろうと、世界が変わろうと、たとえ自分も死んだとしても絶対に変わることはない。

「離れたりしない」

しばらく黙っていたキリトはしつかりとした声で断言する。

キリトの周りの空気は色を取り戻していた。

「なら問題ないだろ」

「……………ありがとう」

ぼそりとつぶやくようにいうのは恥ずかしからなのだろう。

誤魔化すようにキリトは話題を無理やり変える。

「ところで、お前はなんでログアウトしてないんだ？お前が捕まってたところに仲間がきてお前を助けるなら普通転移じゃなくてログアウトだろ」

「よく分からん。GM権限というものがないとだめらしい。あいつらはお前がこの世界にいるのも、所在も目的もわかってる感じだな。俺の知り合いのところに転移させるからそいつについていけ、僕らと彼の目的は同じだろうからついていけば君もログアウトできるだろう。っていわれたんだ」

それが本当なのであれば、アスナは自分と同じようにオベイロンに囚われているのだろう。

キリトの言う、もしかしたら、ではなく、本当にこの仮想世界にアスナがいるということになる。

「あと、俺の変わりに捕まった女性を助けないといけない。だから、たとえ今すぐログア

ウトできるとしてもしないさ」

「いや、でもログアウトしなくてもお前の身体は大丈夫なのか？」

キリトの言葉でレインはすっと目を細める。

正直、ここまで長く仮想世界にいるとはおもってなかったので身体のこと是一切考えていなかった。

今いる仮想世界に来てからどれぐらいたったのかはわからないが、アインクラッドの頃から計算すると仮想世界に入ってからすでに一年はたっているだろう。

一年間も寝たきりの身体がずっと同じ肉体のはずはなく、それ相応に衰えているだろう。

まあ、また鍛えなおせばいいだけのことだ。

いまさら少しもとの世界に帰るのが遅くなってもどうということでもない。

戻ったら同じだけ時間が進んでいるかもしれないし、向こうでは全然進んでいないかもしれないし、逆に何百年も進んでしまっている可能性だってある。

「生きてるなら問題ない」

そう、生きていればいいのだ。

どれだけ傷を受けようとこの世界では死なない。

ならむしろそれは――

「だからってこの世界でお前が傷付いていいってことにはならないからな」

キリトのそんな言葉にレインは一瞬、思考が停止する。

「俺にHPはあるけど、ここじゃ全損しても死なない。HPが全部無くなってもセーブ、ってわからないか。えつと途中で記録した場所に戻るだけなんだ。それに俺はお前と違って痛みだつてない。だから、俺のことを変に守ろうとはするなよ」

自分を抱きかかえるキリトのほうを振り向くがキリトは前を向いてあまり顔が見えない。

その後、レインはキリトからユイの説明を、リーファからはアルヴヘイムという世界について説明してもらったことで大体の把握すぐにできた。

それと同時に、そんな人が楽しむための世界の誰も知らないところで非人道的なことをしているオベイロンにレインは憤りを覚える。

たとえ現実世界でも非人道的な実験を許していいということにはならないが、それは結局その世界の一部でもある。

しかし、このアルヴヘイムはゲームとして、娯楽として作られている。中には非道な人間もいるかもしれないが、それはあくまでも遊びだ。

そんな仮想世界に現実世界の実験を、しかも明らかに許されない実験をしているというところが、レインは許すことができない。

「パパ、前方に大集団のプレイヤー反応です！サラマンダーの強襲部隊だとおもわれま
す！さらにその向こうに十四人。こちらはシルフ及びケットシーの方々になるとおも
います。双方が接触するまで五十秒です」

AIというデータの中で生きているというユイの正確なナビゲーションにレインは
関心しながらどうするべきか考える。

ここまでで聞いた話ではサラマンダーはグランドクエストである世界樹攻略を目指
しているらしく、そのためにシルフとケットシーの領主を狙っている。

それを阻止するために自分たちが向かっているところだが、そこに自分が突入してよ
いものかと考える。

なにせ、オベイロンによって自分はグランドクエストの鍵にされてしまったのだ。

キリトとユイはレインのことを知っているのでNPCではないことを知っているが、
他の人からすればただのNPCだ。

実際、リーファにもレインのことはオベイロンから罰を受け、飛べなくなってしまう
た堕ちた妖精、という設定のNPCだとおもわれている。

いろいろとややこしい事情もあり、急いでいることもあるので元々誤解を訂正する質
でもないレインはそれを肯定をしているわけでも否定しているわけでもなく、誤解させ
たままにしている。

この世界を聞いたときに、世界樹にいたから地上のことを良く知らない、といつてどうにか聞き出した。

キリトから聞いても良かったのだろうが、この世界のこととはリーファのほうが良く知っているようで、キリトも一緒に聞いていたので、なんだかんだリーファに聞いてよかったのだろう。

リーファにいろいろ聞いたおかげで、グランドクエストの鍵というものに設定されてしまった自分はサラマンダーにとつては喉から手がほしくなるほどのアイテムだということもレインにもわかった。

そんな自分が三種族が集まりつつある場所に飛び込むとさらにややこしくなることは目に見えている。

「キリト、いい案はあるか？」

「あるにはある。だけど……」

ちらりとキリトが自分を見たのでレインはすぐに口を開いた。

「俺を使うなら使え、邪魔なら降ろせ。今は事体を收拾させることだけを考えろ」

レインが口早にそういうとキリトは少し悩んだ顔をした後、決意したように顔を前に向けた。

「俺があそこに猛スピードで突っ込んでどうにかする。お前はサラマンダーがどこかに

「いったら来てくれ」

「わかった。降ろすのはここから手を話すだけでいい。俺が高所からの着地ができるのはお前も知ってるだろう」

ぎゅつとキリトが自分を抱く力が強くなり、不安なのが伝わってきた。

「ユイ、レインに付いていって道案内を頼む」

「わかりました」

ユイは可愛く敬礼をするとキリトの胸ポケットからレインのマフラーの隙間に移った。

「リーファはシルフとケットシーへのフォローを頼む！」

「了解！」

四人は視線をあわすとうなずきあい、キリトはレインから手を離して今まで飛んでいたスピードとは桁違いの速さで飛んでいった。

それを落下しながら見ていたレインは、自分の不甲斐なさに眉間にしわを寄せる。

本当に、自分は無力だとおもってしまう。

「レイン、今は着地に専念してください」

そつと優しく、レインの頬に手を添えたユイが優しく声をかけてくる。

小さく頷いたレインは近づく地面に視線を変えた。

眼下には森が広がっていて真下も木が密集していて、枝でする傷ができるのは考えなくてもわかることだった。

この世界では現実とほとんど変わらないようにとオベイロンがレインの身体を設定している。

おかげで、とっていいのかわからないが、オベイロンの謎のこだわりのおかげでエクシードに似た何かを使えるようになっていた。それもあって、ヴァンパイアの並々ならぬ筋力を持つシルヴィアとも戦っていたのだ。

魔法を使えばさらに喜べるのだが、それはさすがに使えないにはしてくれなかった。

レインは枝を切るために剣を抜き、それと同時に着地に備えて足にエクシードを集中させる。

「ユイはマフラーの中で隠れていてくれ」

「はっ」

レインはぐつと傾国の剣を空中で構える。

本来であれば、自分の中にある魔力を傾国の剣に流し込むのだが、この世界では構えるだけで発動してしまう見えない斬撃による遠隔攻撃を剣を思い切り振ることで地面に向かって放った。

ある程度地面に近づいてから放ったそれが地面に当たったと同時に轟音が鳴り響いて空気を揺らす。

地面に近づいたこともあって、レインはその衝撃をまともに受けるが、それがレインの狙いだった。

自分が作り、受けた衝撃によってレインの落下スピードは少しではあるが減少する。

今度は剣を構えることなく無造作に振り、ごうごうと立ち込める土煙をはらう。

クリアになった視界にはレインの斬撃によって倒れた木とそれのおかげで少しではあるがレインが着地するに十分な開けた場所が入った。

一応ユイがいる辺りを優しく手で多い、レインは静かに着地をした。

両足に多少の衝撃を感じつつも久しぶりの地面にほっと胸をなでおろす。

自分で飛んでいないということもあるのだろうが、ずっと空を飛んでいるのはやはり落ち着かないのだ。

剣を鞘に収め、きよろきよろとあたりを見回しながら、アインクラッドのときから使っていてすでに感じ取ることに慣れた仮想世界では希薄な気配が周りに無いことを確認したレインは、マフラーの端をつかんで引っ張った。

「ユイ、出てきていいぞ」

声をかけたと同時にユイはレインのマフラーからするりと出て、ピクシーの姿から

リーファの前ではさらすことの無い、アインクラッドではじめて出会ったときの白いワ
ンピースを着た本来の姿のユイになった。

「いいのか？」

「はい。私も回りに注意を配っているので誰かが来たらわかります」
につこりと微笑みながらユイはレインの左手をぎゅつと握った。

一瞬困惑したものの、レインは優しく微笑んで手を握り返した。

「頼もしいな」

ふふんと鼻を鳴らしながら胸を張るユイはとても可愛かった。

レインとユイは手をつないだままキリトたちのところへのんびりと歩きながら向か
う。

その間に何度か敵に遭遇したが、レベルの無いこの世界ではレインのかすむようなス
ピードで振られる重たい剣で全て一撃でほふり、特に時間がかかることは無かった。

上空ではなにやらキリトがプレイヤーと戦っているらしく、剣と剣がぶつかり合う音
が時々聞こえる。

「レインは……. どうしてそんなに強いんですか？」

ぼんやりと空を見上げていると、ユイが戸惑いながら聞いてきた。

それに対してどう答えるべきなのかレインが考えていると、ユイは話しくそくに、

しかしはつきりとした声で再び口を開いた。

「私は元々SAOではメンタルヘルスプログラムとして存在していました。今もその機能はほとんど変わりません。はじめてレインと会ったとき、あなたの感情に触れた私はあなたをひとりにはいけないと思ったんです」

その言葉をレインは静かに聞く。

「レインはなんでもないような顔をしていましたが、ずっと悲しみと後悔、そして自分への怒りであふれかえってました。それは今も変わってません。なのにあなたは人に優しくして強い意志をもっています」

今にも泣き出しそうなユイの顔をレインは自然となでていた。

そして、言葉も自然と口から出ていた。

「ユイが悲しむことじゃない。俺はこれでいいんだ」

「レインのことを知らない私にはあなたの心を癒すことはできませんが、せめて寄り添わせてもらえないでしょうか？」

悲しそうでいて、継るようすで、こちらのことを案じていて、そして暖かいユイの言葉と瞳に、レインは固まる。

自分だけが幸せになるのは間違っている。

一番最初に思ったのはそれだった。

次に思ったのはこれを断れば、彼女に、フィーネに似ている目の前の少女が悲しむということだった。

「君が……ユイがしたいようにしたらいい。俺には返せることができないかもしれないけど」

そう言うことしかレインにはできなかった。

それでもユイは喜んでくれたらしく、満面の笑みを咲かせてレインの手をぎゅっと握った。



飛ぶことを前提として作られているらしいこの世界で、飛べないというのはこれほどまでに面倒なのかと、崖をよじ登りながらレインはおもっていた。

もう少し段差でもあれば跳んでいけるのだが、ほぼ垂直になつている崖はさすがにそんなことはできない。

それが大変なのかといえば、別にそうでもないのだが、とにかく時間がかかって面倒なのだ。

「サラマンダーの方々が飛んでいきました」

あと少しというところでユイにキリトたちの情報をもらおう。

キリトたちがいるであろう頂上はすでに目と鼻の先で、ここからならとレインは両手と両足に力をこめて飛び上がった。

ぎりぎりで届いた頂上の端をつかんだレインはぐつと腕に力をこめて体を持ち上げる。

這い上がって一息ついたレインは疲れた様子を見せることはなく、まだ自分が上ってきたことに気がついていないキリトたちのところに向かった。

キリトがなにやら集団の中心にいるせいもあり、怖気づいて待っているはずもないレインは堂々とその集団の中心に向かって足を進める。

その場にいた人たちは突然現れたレインに驚きながらもレインのかもし出す空気になにも言わないものの、ひそひそと話したりレインが何なのか探るような視線をレインに注ぐが、レインがそれを気にするわけがなく、堂々と足を進める。

モーゼが海をわつたがごとく、自然と人がレインに道を開ける。

「キリト」

きやいきやいと女性二人に腕を組まれて楽しそうにしているキリトにレインは何の遠慮もせず声をかける。

勢いよくレインに向いたキリトは助かったと言わんばかりの安堵の表情をレインに

向けて、二人の女性の腕からするりと抜ける。

「やつときたか」

「サラマンダーが飛んでつてからそんなに時間かかってないとおもうぞ」

「こ、細かいことは気にするな。そんなことより、また飛んでいくけど——」

「キリト君」

キリトが無理やり話を変えようとしていたときに、女性のうちの一人がさえぎった。

緑色の服を来た女性は先ほどまでキリトで遊んでいたときのふざけた様子ではなく、真剣な表情でこちらを見据えている。

「えっと、何か？」

「それは鍵、であっているかい？」

それといいながら女性はレインを指差す。

NPCとしてこの世界では突き通すとキリトとの話で決まっているので、物扱いされたとところでレインは大して気にすることはなかった。

事実として、レインの希薄な表情は人間のそれとはかけ離れていて下手をすると機械に近い。

なにやら答えにくそうなキリトに変わってレインが女性に返事をする。

「俺が鍵であっている。俺のような者があなたたちのような人の前に現れるのは申し訳

ないとおもっていたんだが、キリトに用があつたので姿を晒させてもらった」

「そんな言い方……」

リーファがなにやら悲痛な表情だが、レインは女性と向き合った。

「もし、あなた方が俺を無理やり手に入れようとするなら俺は全力で抵抗する。俺はキリトと共に行動すると決めているからな」

静かにはあるが、しっかりとしたレインの言葉に女性は一度目を閉じて、次に開いたときには穏やかな表情をしていた。

「いや、申し訳ない。あまりにも突然君が現れたから驚いてしまったんだ。それ、だなんて言葉を使ってすまなかつた」

「こちらは無礼をはたらいてしまつて申し訳ない」

ぺこりとレインが頭を下げると、興味津々と言つた様子で獣の耳としつぽの生えた女性が見え、レインの顔を覗き込んでくる。

「この子が鍵ねえ」

じつと見つめられるが、気にすることなくその目をレインは見つめ返す。

しばらくそうしていると、不意にぐつと腕を引っ張られた。

「す、すみません！俺たち急いでるんで！」

何事かと振り返ると、あわてた様子のキリトが視界に入る。

そんなキリトに反して、緑の服の女性がくすりと笑う。

「まあまあ、そんなにあわてなくていいよ。私たちは君に助けてもらった恩もあるからね」

「それに、サラマンダーの連中はどうかかわからないけど、世界樹攻略にその鍵君を使うつもりはないよ」

そんな二人の言葉に、レインとキリトはきよとんとする。

二人のそんな様子に、今度は女性二人とリーファが笑う。

レインとキリトは一体なんなのかわからず、眉間にしわを寄せることしかできなかつた。

「キリト君、その子はほんとに鍵なのかい？君の兄弟にしか見えないんだが」

笑いながら緑の女性が言った言葉にレインは盛大に顔をしかめて、キリトはげんなりとした。

リーファも同じ意見らしく、隣でこくこくとうなずいている。

気持ちを切り替えるためにレインは一度咳払いをしてから口を開いた。

「すまない、自己紹介がまだだったな。俺はレインだ。俺はともかく、キリトは普通のプレイヤーだから兄弟なんかじゃないぞ」

レインの様子に緑の女性と獣の耳の女性はなにやら驚いた様子を見せる。

「あまりにも見た目も似ていたものでな、すまなかった。私はシルフの領主、サクヤだ。隣にいるのはケットシー領主、アリーシャ・ルー。にしても、最近のNPCはほとんど人と変わらない受け答えをできるようになったんだな」

サクヤの言葉にピクリとキリトが反応する。

まあ、レインはNPCではないので人と変わらない受け答えができて当たり前だ。

しかし、レインはNPCと突き通すためにレインは無言を突き通す。

ちらりとキリトをみてみると、どう答えるか悩んでいるようであわあわとしている。

レインもNPCのやつぱりどこか人と違うというのは感じた事があつたし、そこに住んでいるNPCは外の世界のことを認知した言動をしないというのも知っており、プレイヤーという言い方もしないだろう。

まあ、NPCじゃないとバレたところで詳しい話をしなければいけないだけだと思ってるレインはキリトのように慌てることは無い。

仕方ないという様子でレインは口を開いた。

「俺は高性能だからな」

無表情でそう言ったレインに誰も何もいえなかつたのは言うまでもないだろう。

優しすぎる彼

再びキリトはレインを抱えて飛んでいた。

S A O から引き継がれている筋力値のおかげで人一人を抱えて飛ぶのはキリトにとって造作もないことで、多少スピードが遅くなる程度だった。

しかし、レインはこの状況がよほど嫌らしく、サクヤとアリシヤにキリトの所持金を渡した後に移動するとなったときに、自分は地上を走っていくとうるさかったが、ユイとリーファの説得でどうにか納得してもらった。

抱きかかえていることもあって、レインの後頭部しか見えないが、あのときのかなり不機嫌な顔も今も継続中なんだろうなということを考えて思わずげんなりとしてしまふ。

「パパ、レイン、敵反応多数です」

ユイはのんびりとした様子で警告する。

それからすぐに六体の飛行型モンスターが進行方向にいるのが見えた。

本来であれば、キリトはレインを抱えているせいで両手がふさがっており、レインも抱きかかえられてる状態ではまともに戦えないだろう。

とてもリーファだけで相手できる数には見えない。

しかし、四人には焦っている様子は全くない。

「レイン」

早くも剣を抜いたレインにキリトが声をかける。

「いいぞ」

二人が交わす言葉は最小限だったが、アインクラッドからの付き合いである二人は言葉がなくても特に問題はない。

相手が何をどうするのか、大体わかるのだ。

それに、四人が飛行しているときに敵と遭遇するのはこれがはじめてというわけでもない。

現にリーファは今から行われようとしているもはやチートにしか見えないそれを感じとりとした目でほんやりと見る。

そんなリーファの視線に気付くことなく、キリトとレインは行動をおこす。

抱えていたレインをキリトは何のためらいもなく離し、落下するレインは剣を握っていないほうの手をキリトに伸ばした。

その手を両手でしっかりと握ったキリトは力任せにレインを上に向かってぶん投げる。

キリト達よりも上に投げ出されたレインは空を飛べないにも関わらず、器用に空中で体をひねって体勢を整え、剣を構えて遠隔攻撃のモーションを起こす。

静まり返っているその場にレインが剣を振る音が鳴り、しばらくすると斬撃の直線状にいた飛行型モンスターの二体がパーティクルになって四散した。

もちろん、レインがそこで終わるはずもなく、剣を振る勢いも使って空中で体を回転させながら器用に残りの敵を殲滅するために剣を振るう。

その姿は本当に空を飛べないのかと疑うほど、鮮やかなものだった。

レインが鞘に剣を収めると同時に進行方向にいた敵モンスターは何をしたわけでもないのに全てパーティクルになってしまう。

落下を始めたレインを見て、背中についている羽に飛ぶ機能はないということを出してキリトがレインを受け止める。

「お疲れ」

「ずっとお前に運んでもらっているだけなのも申し訳ないしな。これぐらいはする」

さらつとそんなことを言うレインは自身がとんでもないことをしている自覚はないようだった。

まあ、ドスキル性のMMOということもあり、技術はこの世界の誰よりもあるであろうレインなのだからむしろできて当たり前ということなのかもしれない。

「でも、そろそろ休憩、っていうか落ちないといけないかな。リアルは夜中になるし」
グランドクレストに関わるNPCだから、という理由でレインの規格外な強さに疑問を抱いていないリーファが二人に向かって告げる。

タイムイングよく、近くに村のようなものも見えてきた。

「あそこに見える村に行こう」

リーファの言葉にレインとキリトはこくりとうなずいた。

ユイもリーファの頭の上でうなずく。

そうして四人は特に警戒することなく、地面に降り立とう体勢を整えたあたりで、レインが声を荒げた。

「まってっ！」

突然のことにキリトとリーファは止まったが、すでに遅く、村だとおもっていたそれは四人を飲み込むためにこちらに口を開けていた。

四人を村に擬態していたモンスターが吸い込む風を襲う。

「きゃっっ！」

レインを抱えてはいたが、かろうじて抜け出せそうだったキリトの耳に小さな叫び声
が聞こえた。

その声がユイだとわかると同時にキリトは思い切りレインに突き飛ばされる。

「ユイ！」

普段、冷静なレインからは想像もできないほど慌てた様子でモンスターに吸い込まれるユイに向かって飛び込んだ彼にキリトは戸惑い、一瞬動きを止めたが、すぐに我に返った。

「くそっ！リーファ！飛び込むぞ！」

「わかった！」

この中に飛び込んで生きて帰って来れる保証はない。

それでも二人は迷うことなく、開かれる口に向かって飛び込んだ。



目の前の小さな少女が、将来を誓い合った人と重なる。

自分の死が近づいているはずなのに逃げてと叫んだ少女と、自分のことよりもレインのことを助けようとした少女の姿と重なる。

これで何度目になるだろうか、思うこともなくレインはキリトの手から無理矢理抜け出してユイに向かって手を伸ばしていた。

ユイはフィーネと違うと分かりきっているくせに、反応してしまう自分に対して呆れつつも小さなユイを両手で包んだままレインはモンスターの体内に抵抗することもなく吸い込まれる。

モンスターの体内に入り、おそらく食道と言われる器官をずると移動させられながら、元の世界も含めて今まで魔獣などに食べられたことはなかったなので、新鮮な体験をしているな、とすでに冷静に戻ったレインはどこか他人事のように思う。

剣で切り裂いて抜け出すことも考えたが、両手はユイは抱えているので塞がっている。

体内でも広い場所に出ればなにかしらできるのだが、と思いながらも、レインは窮屈な体内をずると移動させられ続ける。

レインはユイを抱えたままただ、ぬるぬると気持ち悪い感触が続ぎ、突然広い空間に放り出された。

突然開けた視界に動揺することなく、そこが体内ではなく外だと気がついたレインはすぐに体勢を整える。

それなりの高さからの落下ではあるが、アインクラッドで一番最初に落下した時と、少し前にキリトから降りた時と比べると低く、地面も雪が積もっているので問題はないだろう。

レインは吸い込まれるように積もっている雪に突っ込んだ。

ぼふつという音と共にレインは頭の前まで雪に沈んだ。雪に穴が空いただけで上から雪が覆い被さら無かつたのは不幸中の幸いだらう。

仮想世界ということで、水の表現が難しいと教えられたことがあったが、雪も同じらしくどこか違和感のある感触に包まれる。

「ユイ、大丈夫か？」

さすがに両手が塞がっているのは上に這い上がることができない。

「レインが守ってくれたので大丈夫です」

手の中からひよこつと頭を出したユイにほつと胸をなで下ろす。

自分が無事なのだからユイも無事なのは当たり前なのだが。

手を上に伸ばしてユイに先に雪の中から抜け出してもらい、レインも難なく雪の中から這い出た。

大して雪が身体につもっているわけでもないが、思わずはらってしまったっていると、短い叫び声が二つと何かが落ちる音が二つ背後で聞こえる。

それがなんなのか予想せずともわかったレインは顔に不機嫌を貼り付けて振り向いた。

「ふはっー」

可愛らしい声で雪に埋まってしまっていたらしい頭を引き抜いたリーファとおそらくそれはキリトが作ったので、あろう見事な人形の雪穴がレインの背後にあった。

小さくため息をついて、声をかけるでもなくレインは二人を静かに見据える。

ようやくその様子のレインに気がついたらしいリーファがほっとため息をついた。

「無事でよかつた〜」

そんなリーファ自身のことを考えていないセリフにレインは思わず反応してしまう。

「無事でよかつたじゃない。俺は死なないから問題はないが、お前たちはHPがなくなればセーブとかいうので記録したところに戻るんだろう。俺のことなんか放っておいてお前たちは先に——」

「放っておけるわけじゃないじゃない〜」

レインが全てを言い終わる前にリーファは力いっぱい叫んでいた。

元々強気な少女だとは思っていたが、もう我慢できないといわんばかりにこちらを睨んできているリーファに眉をひそめた。

その様子から怒っているのはわかるが、何に対して怒っているのかさっぱりわからな
い。

「リーファの言うとおりだ」

いつの間にか雪の中から這い出たらしいキリトがリーファの隣に並んだ。

いまだに何に怒られているのかわからないレインは罰が悪そうに頭をかき、何もいえないでいるとキリトは小さくため息をついた。

「まあ、レインが変わるとも思つてないけど。リーファが怒つてる理由も分かつてないと思う」

あきれながらそういうキリトは苦笑してリーファを見た。

リーファはしばらく膨れっ面のままだったが、レインの様子がまったく変わらないのを見てあきらめたのか、小さくため息をついて全身から力を抜いた。

「本当にわかつてないみたいだし、とりあえずここから出ることを考えましょ」
「え？あ、わかった」

急速に変化する二人の様子にレインはついていけず、柄にもなく戸惑つてしまう。

そんなレインの頬にユイが手を触れてレインに向かって微笑む。

自分だけが置いていかれている感覚にレインは不思議と嫌なものはなく、困つたように苦笑いをしてしまう自分がいた。

雪の世界

リーファは小さな洞窟の中でレインと二人きりになっていた。

キリトとユイは、周りの様子を見に行つてくれている。

学生だからログアウトするべきだと言われて、自分の意思で彼らとともにアルンに向かつているといまだに思われていなかったと思つた瞬間に、涙が流れてしまった。

それをみかねたキリトが早くここから出るために危険を承知で一人で取り合えず周りの様子を見に行つてくれてるのだ。

そんな四人が落ちたのは最近実装されたばかりのヨツンヘイムという場所。

ここでは空を飛ぶこともできない上、邪神级モンスターがうじゃうじゃといるため、下手に動き回るとはできない。

運がよければヨツンヘイムに来ていた人たちと遭遇できるだろうが、ただでさえ最近実装されたばかりで人が少ないのでかなりの運が必要になるだろう。

ぼんやりと、リーファはここに来て何度目になるか分からないため息をついた。

ため息をつく回数を増やしているのは先ほどのキリトはとの会話とヨツンヘイムに来てしまったこと以外に、隣で目を閉じて微動だにしないレインの影響も少なからずあ

る。

グランドクエストの鍵と呼ばれるNPC。

しかし、言動も行動もNPCとは思えない。

唯一それらしいのは特に変化しない表情だろう。

詳しいことは知らないが、脳から直接信号を受け取っているアミスフィアは些細なものすら拾ってくる。

なので、涙をこらえるのだって一苦勞な仮想世界にもかかわらず、これほどにも感情を出さないのはそれこそアミスフィアを改造して、その信号だけ遮断させるぐらいしないと無理だろう。

それでもやつぱりどこかNPCとは思えない自分がいる。

ユイを助けるために飛び込んだときのレインの表情を——必死で、慌てていて、今にも泣きそうだったあの表情をNPCができるだろうか。

強いていえば、リーファはALOでみたことがない。

「どうかしたか?」

いつの間にかレインのことを見ていたらしく、突然目を開けてこちらを見たレインとばつちりと目が合った。

デザインされたのでたろう精悍な顔立ちのレインに思わずドキツとしてしまう。

「いや、そのっ」

正直、いままででは慌ただしかったこともありレインとちゃんと話すのは初めてだ。そんなこともあつてきよどつてしまう。

何をどう言えばいいのか悩んでいると、先にレインが口を開いた。

「君は、俺のような奴といていいのか？」

明らかに自分を蔑んだ言い方をするレインに、むかつとしてしまう。

それと同時に、自分を見下すように設定されているのだろうかと思う。

堕ちた妖精ということもあり、それはそれで設定通りではあるのだが、それでもどこかレインの物言いに癪に障る自分があるのだ。

「私が誰と居ようと私の勝手よ。私は君とキリト君と一緒に行動するって決めたの」

「しかし、キリトはともかくリーファは普通のプレイヤーだろう？」

「なんでキリト君は良くてわたしはダメなの？」

リーファは反射的に聞いてしまっていた。

「キリト君が男で私が女だから？それともレインさんに関係するクエストを受けてないから？私は邪魔？」

先ほどの事もあつて言いすぎてしまった、と思った時には遅く、彼には珍しく戸惑っている様子だった。

そして申し訳なきように、目を伏せる。

「そんなつもりは無かった。すまない。キリトが隠したがっているから俺から詳しく説明することはできないが、俺達には色々複雑な事情がある。その一端を語るなら俺がNPCじゃないということだろう」

「っ!!」

冷静に淡々とレインはいったが、リーファはやつぱり、という言葉と、なぜ、という言葉しか出てこない。

何も言えずにパクパクと口を開けたり閉じたりをしていると、一瞬ではあったが珍しくレインが優しく微笑んだ。

おかげで出てきそうだった言葉が霧散してしまう。

「事実は小説より奇なりという言葉がこの世界にはあるだろうか？」

にやりと不敵に笑うレインに一瞬でも見惚れたなんて言ったら彼はなんとというだろうか。

「ただ、君はやつぱり一般プレイヤーだから深く巻き込みたくないんだ」

先ほどとは違って優しい表情で言うレインが本当にリーファの事を思っ言っているのが伝わってくる。

普段はほとんど表情を変えず、無愛想なものにも関わらずこんな時だけ優しい顔をする

のは反則ではないだろうか。

「私は巻き込まれてる気分なんだけどなあ。まあ、いいわ。レインさんとキリト君が私に話してもいいって思えたらでいいからいつかはちゃんと話してね？」

レインに負けじと不敵な笑みを作ってみる。

いままでそんな顔をしたことが無いので出来ている自信はないが、それでもレインは優しく微笑んだまま承諾してくれた。

そこから二人の間にあつた壁はほとんどなくなり、リーファが一方的に話すという形ではあつたが、会話が弾んだ。

二人の会話が剣術などの女の子らしい会話じゃないあたり、彼女もこの仮想世界で戦士としてそだっているからなのだろう。

先ほど、レインがNPCではないということを知ったからか、実の兄である和人は違うが、兄のような存在に変わった彼の本質はきつとこの仮想世界でも現実世界とは同じなのだろうとが特に深く考えるでもなくわかってしまった。

他のプレイヤーのようにロールプレイをしているわけではない、というそれだけでリーファは彼といると安心することができる。

これが、なぞに満ちているレインに対して和人と同じような感情に変わっていつてしまふのかは誰にもわからない。

それからどれぐらいたったのかは会話が弾んでいたの二人にはわからなかったが、体感的にはそんなにたたずずに、キリトが帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえりー。どうだった？」

一瞬、なにやらきよとんとした表情でレインとリーファを見比べたキリトだったが、ぼりぼりと頭をかいてすぐに普通に戻った。

急に二人の壁が無くなったのでどこかキリトにも感じるところがあつたのだろう。

「いやあ、出口までは遠そうだ。ぱっと見プレイヤーも見当たらないし」

疲れた様子でそういうキリトはレインの横にどっしりと座った。

仮想世界でもなんとなくは歩き疲れるという感覚はあり、ヨツンヘイムは雪に覆われているので普通よりも疲れたのだろう。

ふうつと一息ついたキリトの胸ポケットからユイがするりと出てきてレインの膝の上が定位置と言わんばかりに座った。

なにやら複雑そうな表情でそれをみてるキリトをレインはしれつと見返す。

「ああ、そうだ。俺がNPCじゃない事、リーファに教えたから」

「はあ?!」

そんなに叫んだら邪神モンスターが、とリーファが言う前にレインはなんてことは無

いように話を続ける。

「言ったのはそれだけで、深くは話してない」

「騙してるみたいで罪悪感があったからだろうけど、俺の方はともかく、お前の問題は巻き込んだらややこしすぎるだろ」

そんなキリトの言葉にリーファは首を傾げる。

先ほどのレインの話ではキリトがメインで問題を抱えていて、それにレインも関係している感じではなかっただろうか。

しかし、今の話だとキリトの問題とレインの問題は別物みたいな言い方だ。

もやもやと頭を働かせはじめたリーファは、レインがずっと目を細めて、それ以上喋るな、というオーラをキリトには対して出したことに気がつくことは無かった。

そんなとき、あたり一帯がずしんと揺れた。それと同時に、なにかのモンスターの咆哮も聞こえる。

一番早く反応したレインが小さな洞窟の入り口に駆け寄って外の様子を伺う。

「邪神か？」

レインに続いてキリトも入り口に駆け寄った。

先ほどまでのふざけた様子の二人の黒衣の剣士の姿は幻だったのかと思うほど、突然真剣なまなざしになった二人にそんな場合ではないのにきよとんとしてしまふ。

「そうみたいだな。お前が馬鹿みたいに騒いだからだろうな」
「いや、それはお前がとんでもないこと言うからだろ」

真剣な表情のくせに先ほどまでと変わらない調子で話す二人をみて、なぜか安心してしまい、邪神に倒されてスイルベーンに戻るなんて事はないだろうかと、不思議と思えてきてしまう。

しかし、邪神モンスターがどこかにいつてしまったわけではないので危ないことには
違くない。

外をのぞいたままのレインがぼそりとつぶやくようにキリトに声をかける。

「なあ、おかしくないか？」

「確かに」

「どうかしたの？」

本当であればすぐにでも崩れそうな小さな洞窟から出て逃げるべきだろうが、一向に動かない二人が眉をひそめて外の様子を伺っているだけだったのでリーファも二人のそばにいつて外の様子をのぞいた。

のぞいた先には邪神モンスターが二体いた。

本来であれば、その時点で逃げるか誰かが囷になるかと話し合いになるのだろうが、レインが先ほどいったように様子がおかしい。

モンスター同士で戦っているのだ。

今までのプレイでそんなものは見たことがない。

しかし、目の前では人形で怖い邪神级モンスターにくらげのような象のような可愛い邪神级モンスターが実際に戦っている。

見た目の影響もあるのか、可愛い方がいじめられているようにみえる。

実際、可愛い邪神が不利なように防戦一方だ。

「どうする？」

「この隙に逃げるのが得策」

「助けてあげて!!」

レインが言い終わる前にリーファはレインの腕を掴んで叫ぶように言っていた。

条件反射でしかなかったが、それでも助けたいと思ってしまったのだ。

キリトはどちらかといえば効率厨で聞いてくれそうにはなく、レインに言ったあたり、自分に対してずる賢いやつだなあ、と思うがやってしまったものは仕方が無い。

少し前にキリトと言ひ合いになって気まずいというのもあるのだが。

じつとレインを見続けると、困った様子のレインは小さくため息をついた。

「どつちを？」

「可愛い方！」

リーファの指定にぎよつとしたレインは確認するように邪神モンスターを見比べ始める。

「えつと、足の多い白いヤツでいいか？」

「うん」

「で、キリト。何かいい方法はないか？」

完全に蚊帳の外になっていたキリトにレインが話を降ると、キリトはげんなりとした様子でレインを見返す。

「レインって、わりと俺に任せるよな」

「ゲームの世界はややこしいからな。現実世界なら自分でどうにかするんだが、仮想世界はお前に任せた方がいい」

さらっと流したレインに対してなのか、勝手に可愛い方の邪神モンスターを助けることになったからなのかわからないが、キリトは小さくため息をついた。

象とクラゲ

キリトは頭を抱えた。

何とかしろとはなんだ、と言ってやりたい。

リーファのことはよく知らないということもあるのですが、レインの事はよく知っているのでなんとでも言える。

こいつだって考えればすぐにでも打開策を考えつくだろう。

それだけの戦闘センスも技術もあるのだ。

「お前も考えろよ」

思わず言ってしまう。

相変わらず謎の多い彼ではあるがアインクラッドでの付き合いもあるので遠慮などはない。

キリトの間に、レインはとくに顔を変えることはなく、レインの肩に乗っていたユイを優しく手で包んでキリトの肩に乗せた。

「じゃあ、行ってくるから待ってろ」

「まてまてまてまて!!」

「いやいやいやいや!!」

躊躇うこともなく出ていこうとしたレインの腕をキリトとリーファは掴んであわて止めた。

同時に掴まれたレインは見慣れた不機嫌顔で振り返る。

「なんだ。俺にはHPがないんだぞ？例えどれだけ相手が強かろうが俺が死ぬ事は無い」

「ま、まあ、確かにそっか」

そう言ってあっさり腕を離れたリーファを見て、レインがリーファにあれを言っていないのだろう事を察した。

レインがNPCではない事をリーファも知ってしまったのであれば、今さらその事について隠す必要性はないし、むしろレインの無茶を止めることが出来るのであればリーファに教えるという選択肢を取るしかないだろう。

「リーファ、こいつがNPCじゃなくて、俺たちと同じプレイヤーだって聞いたんだよね？」

「え？うん。詳しいことは聞いてないけど」

「おい、キリト」

頭のいいレインの事だ。キリトが何を言うのかすぐに分かったようで、キリトの口を

塞ぐために手を伸ばした。

その伸ばされた手を空いていた手で掴んで止める。

アインクラッドから変わらなず、筋力値はキリトに軍配が上がるようで、ぎりぎりとして合う形にはなっているが、レインの手がキリトの口に届くことはなかった。

「リーファ、よく聞いてくれ。こいつはちよつと話せないタイプの裏社会的事件に巻き込まれてるせいでチートみたいにはなっているが、その代わりに現実と変わらない痛みを感じてる。最初に会ったときにこいつの様子がおかしかったのも、仮想世界のせいであらうからなかったけど、全身傷だらけだったからなんだ」

そう伝えてから少し固まったリーファだったが、キリトの真剣な表情とレインの不機嫌というよりは困った顔を見て本当の事だと分かってくれたらしく、離れた手を再び掴んだ。

まあ、最初のレインの苦しそうな顔を思い出せば分かってくれるだろうとキリトも分かったから言ったのだ。

キリトの筋力値に勝てないということもあるが、女の子であるリーファの手を振り払える質ではないレインはため息をついて力を抜いた。

「お前が俺も考えろと言ったんだろう」

「もつと安全面を考慮しろ」

「十分安全だと思っただがな」

その安全の中にレインの安全が含まれていないのをキリトは知っている。

確かにレインは強い。

しかし、彼の戦い方はほとんど防御せずに基本的には攻撃メインだ。

実際、彼に攻撃はほとんど当たることはないのでできる戦法なのだろうが、それはまるで死に急ぐように見えなくもない。

「何にしても、君が一人で邪神モンスターに挑むのはダメ！」

リーファが必死な様子でレインを止める。

少し前まではどこかぎくしゃくしていた二人はキリトが外の探索に行っている間に完全に打ち解けていた。

それはいい事であるのは間違いないだろう。

問題が全て終わった時にはアインクラッドでのシリカとの関係のようなものになればいいと思える。

しかしである。

キリトの目からはそのようなものに見えないというのが素直な意見だ。

どちらかといえば、もっとう男女の間に芽生えそうなそれに近い気がしなくもない。

自分のことに関しては何で朴念仁であるキリトだが、自分が関係していない色恋についてはそれなりに察することが出来るあたりタチが悪い。

結局のところ、リーファの気持ちにすら気がついていない。

一抹の不安を感じながらもキリトは頭を邪神に切り替える。

「とりあえず、俺が考えるから少し待つてくれ」

だから最初からお前に考えろといったのに、というレインの眩きを無視して、とキリトは邪神モンスター二体を見た。

リーファの言う可愛いについてはわからぬが、レインが足の多い白いヤツと言っていたので、象とクラゲが混ざったような邪神モンスターを助ければいいのだろう。

なぜあの邪神モンスターが圧されているのか、それは個体値の差だろうか。

いや、象クラゲの邪神モンスターはどちらかといえば動きにくそうで。

そこまで考えたキリトはもしかしたらいじめられている可愛い方を助ける術を思い付く。

「ユイ、近くに水辺はあるか？」

「………はい、ここから少し離れたところに池のようなところがあります」

「ありがとうございます」

予想以上に早いユイの返答に驚きつつも、頭をなでながらお礼を言うと、嬉しそうに微笑んでくれた。

キリトは腰ポーチに入れていたアインクラッドでもよく使っていたピックを一つ取り出して三つも顔が突いている人型の邪神モンスターに照準を合わせる。

「走るから着いてこいよ」

一言告げるだけ告げて、詳しく説明することもなくキリトはなれた動作でピックを投擲した。

アインクラッドで鍛え上げられ、ラグーラビットさえ仕留めたそれが外れるなんて事はなく、キリトの投げたピックは吸い込まれるように三つ顔邪神の中心の顔にクリーンヒットする。

そんなことをしてタゲがこちらに向かないわけもなく、すぐさまに三つ顔はこちらを向いた。

「走れ！」

「えっ?!ちよつと?!キリト君?!」

タゲられているキリトは残された二人よりも危険性があるのですぐに走り出した。

「まってよ!うわっ!れ、レインさん?!」

リーファの声を聞く限り、レインが担ぐか何かでリーファを運んでくれているのだろ

う。

レインのスピードがあれば何の心配もない。

安心したキリトはユイが案内するとおりに走った。

「パパ！今は凍っていますがこの平らな部分の下が池になっています！」

ユイの言葉でキリトは急ブレーキをかける。

キリトがようやくやく止まったあたりで、レインもすぐに隣に並ぶ。

そんなレインにリーファが抱きかかえられているのを確認すると、キリトはこちらに向かつてくる三つ顔に向き直る。

隣のレインはリーファを抱きかかえたまま成り行きを見守っているだけだった。

三つ顔が池の範囲に入り、すぐにミシツと氷にヒビが入る音が聞こえてきてキリトは狙い通りのことがおきて内心ほっとする。

氷が予想以上に分厚くて思ったとおりにならなければ全員ここであいつにやられるしかなかった。

そんなことを思っている間にも三つ顔の重さに耐えれなかった氷が盛大な音を響かせながら割れて、三つ顔は池にはまる。

その様子にほっと一息をつこうとしたが、沈むのを途中でやめた三つ顔が氷を強引に割りながらこちらに向かつて進み始めた。

「いざというときはこいつを抱えて逃げろ」

不意にリーファを渡されたキリトは突然のことにレインに変わってリーファを抱きかかえる形になっていた。

レインはというと、三つ顔とキリトたちの間に入っている。

「レインー！」

「びゅるるるるる」

キリトがレインの名前を呼ぶのと、像クラゲが叫びながら三つ顔に襲い掛かるのが同時だった。

巨大な邪神モンスターが水辺で暴れ周り、近くにいたキリトたちが何にも被害を受けないわけもなく、碎ける氷や冷たい水が三人に降り注いでくる。

「うわっー！」

足元の氷も二体が暴れる影響でぐらぐらと揺れ、キリトはリーファを守るようにぎゅつと強く抱きしめる。

あわててレインをみると、彼は剣を片手に三人に振り注ぐ氷の塊を切っていた。

氷の上ということもあってただでさえすべるといふのに揺れている不安定な足場だといふのに、そんなことを感じさせないほどレインは三人に当たるであろう全ての氷を見事に剣で時にははじき、時には切る。

その様子をキリトはリーファを抱きかかえながらみることしかできなかった。

全てが収まったときにはレインはずぶ濡れで二体の邪神も水の中に沈んでいった。

小さく息を吐きながらレインが剣を鞘に収めたところで、ようやくキリトも全身から力を抜いた。

しかし、次の瞬間、巨大なバケツから水を流したときに出るような音を出しながら水が急に持ち上がり、中から像クラゲの邪神が出てきたせいで再びキリトは全身に力をこめた。

レインはというと警戒などせずにはぼんやりと像クラゲを見ていた。

そんなレインに向かって像クラゲの鼻がのびる。

「レイン！」

再びキリトがレインの名前を呼ぶ。

しかし、レインは振り向くどころか近づいてくる像クラゲの鼻に自ら手を伸ばした。

「助けてくれてありがとう」

レインが素晴らしいながら鼻に触れると、像クラゲは嬉しそうにびゅるつと小さく鳴いた。

「パパ、安心してください。あの子は怒っていません」

キリトの身体がまだ緊張していたのを察したのか、ユイが優しく教えてくれた。

象クラゲはというと、レインに甘えるように鼻を擦り寄せていた。

「レインさんって本当にNPCじゃないんだよね？」

腕の中のリーファがぼけつとレインと象クラゲを眺めながらつぶやく。

「あ、ああ。俺たちと同じプレイヤー……のはず」

彼が本当にプレイヤーなのか少し不安になる光景であるのは間違いない。

アインクラッドからの知り合いであるキリトも不安になっている。

異世界の話も全部どこかのデザイナーが作り上げたAIで、彼の肉体が本当はどこにもないのではないのかと、そんな気がし始める。

それほどに、ただのMobと戯れるレインは常識から外れていた。

そんなことをぼんやりとおもっていると、象クラゲの鼻がレインに巻きついて持ち上げる。

「え?!」

抵抗することもなくレインは持ち上げられて象クラゲの頭の上なのか背中なのかは分からないが頭上まで持ち上げられ、キリトとリーファの視界からは見えなくなった。

次に象クラゲの鼻先が見えた時には、レインの姿はなかった。

「レイン??」

「……だ。どうやらどこかに乗せていつてくれるらしい」

象クラゲの頭の上から顔を覗かせたレインが声をかけてくる。

それを証明するかのようには象クラゲが今度はキリトとリーファに鼻を巻き付かせて持ち上げた。

思わず、リーファを抱きしめていた腕に力がこもる。

そんなに長くなかっただろうが、気が張り詰めていたせいで浮いていた時間は長く感じる。

やつとの思いで象クラゲの背中に足が付き、ほっと一息をついた。

「なにかのクエストか？ いや、でもクエストフラグの表示はないし」

「たぶん、イベントじゃないかな。ところでキリトくん。その、そろそろ離してほしいんだけど……」

腕の中で聞こえるリーファの声に我に返ったキリトは慌てて手を離れた。

「ご、ごめんー」

「いや、まあ守ってくれててありがとう」

何となくぎくしやくしてしまふ。

「ところで、キリト。どうしてきっきの作戦を思いついたんだ？」

相変わらずどうでもいいところでは他人のことを気にすることないレインが話を切り出した。

この時はそれに有難味を感じつつ、キリトは答える。

「こいつの見た目だよ。象とクラゲが混ざったようなこいつはもしかしたら水辺のほうがいいやすいんじゃないかなって思ったのさ」

「ああ、なるほど。キリト君って実は頭いいんだね」

「実はってなんだ、実はって」

リーファの言い分に思わずむっとして言い返してしまう。

アインクラッドからのキリトを知っているレインに弁解してもらおうとそちらを向くとレインは顔を顰めていた。

「どうかしたか?」

「いや、やはり知識不足だな、と」

「どこが?」

たしかに、システムに関して疎いところがあつたが、アインクラッドの中盤では既にほとんどシステムのことを理解していたはずだ。

戦いに関しても自分よりも機転がきき、とんでもないことをしてきたレインがこれぞ知識不足だと言ったので思わず聞き返してしまう。

しかし、レインがさらりと言ってしまう言葉にキリトは酷く後悔をすることになった。

「俺はゾウとクラゲとやらを知らない」

「はあ？」

「ん、ん、っ!!」

誰でも知っているような生き物について知らないというレインにリーファが眉間にシワを寄せてあんぐりと口を開けている隣で、キリトは口を開けることも出来ずに声が出たせいでよく分からないものが出た。

異邦人であるレインが象とクラゲを知らないのは当然だということをしるやいなや、気がつけなかつた自分を殴りたいとキリトが思ったのは言うまでもない。

エクスキャリバー

二人の反応を見て、ああ、やってしまったなとレインは思う。

レインの元の世界では魔獣は基本的にいたので、今乗っている邪神モンスターといわれるこいつに関しても、そういう生き物ではない。

鳥や馬などの動物がないわけではないのだが、キリトの言うゾウとクラゲについての知識はない。

水辺で戦うのが得意というキリトの話を聞くにどちらも水中に生きている生物なのかもしれない。

ということを考えながらも、レインはごまかすためにため息をついてから口を開いた。

「さつきキリトが、俺は裏社会的事情でここにいるということを知っていたらどう」
後はご想像にお任せする。といわんばかりにそこで言葉をとめる。

間違ったことは言っていないし、変に言いすぎて墓穴を掘るのもあほらしい。

リーファは顔を引きつらせ、キリトはなにやら言いたそうな顔をするが、レインは完全に無言を決め込み、その話はここまでだ、と意思をこめてその場に座って目を閉じた。

巨体なのにも関わらず、大した足音を立てない真つ白な邪神の歩き方はきつと滑らかなのだろうかと思ひながらレインは、冷水をかぶったせいで冷たさで痛い身体から意識を逸らそうとする。

しかし、律儀に現実を再現されているのか、地味に布が凍り始めていることに気がついたレインはマフラーだけでもと脱ごうと手をかけた。

「あ、もしかして凍結してる?」

白い邪神の毛並みを堪能していたリーファがこちらの様子に気がついたようだった。

「そうみたいだ。魔法が使えればいいんだが」

現実世界であれば炎の魔法を微調整して乾かすのだが、それはここではできない。

仮想世界の不便さには相変わらず悩まされる。

「スー・フィツラ・レイズ・ヴィンド」

どうしたものかと思っていると、リーファの声がその場に響いて自身の体がほんのりと温かくなった。

それと同時に、じんわりと固まってきていた服が溶け始める。

MPというものを知らないレインは魔力を使わずに何かしらの言葉を言うだけで魔法が使えると、シルヴィアが知つたらなんと言うだろうかとふと思う。

呪文の詠唱すら必要としない彼女のことだ。むしろ、めんどろね、と一蹴するかもし

れない。

「どう?」

何も言わなかったレインにリーファが心配そうにこちらを見てくる。

「暖かいし服も元に戻ったみたいだ。ありがとう」

「痛むところとかはないのか?」

真剣な顔でそういつてくるキリトはリーファもレインの現状を知っているということもあいまって遠慮なく聞いてくる。

「問題ない」

実際は先ほどの冷たさから来る痛みが少しではあるが残っているものの、体もリーファのおかげで温まっていて、その痛みもすぐになくなるだろう。

これ以上の痛みも経験してきているレインにとってこの程度は大した痛みではない。

本当に大したことでもないのに、キリトがいまだに疑いの目を向けてくるので小さくため息をついてしまう。

この程度のことを気にされては面倒でしかない。

「俺だつて好き好んで痛い思いをしたいわけじゃないぞ」

「でもお前つて危ないことするときほど何も言わないじゃないか」

「それはお前もだろ。クリスマスよのきの無茶話、俺も知ってるんだからな」

あれはアルゴに愚痴のように聞かされた話だ。

レインはあのとときのキリトにそっくりだと。だからキリトもクラインも自分もレインを放つてはおけないのさ、と言われた。

レインの言葉を聞いたキリトは苦虫を噛んだような顔で押し黙ってやけくそのようにその場に座る。

話についていけないリーファもどこかよそよそしくその場に座る。

静かな世界でぼふぼふと白い邪神が雪を踏みしめる音だけが小さく聞こえる。

「リーファ」

沈黙を破ったのはキリトだった。

彼の真剣な表情をみて、レインは目を閉じる。

白い邪神がどのように歩いているのかを、音と振動で感じ取るという意識の逸らし方でレインはキリトがリーファに謝っているのを聞き流す。

世の中には聞いてほしいことと聞いてほしくないことがあるものなのだ。

「レインさんは何かいい名前ない？」

「名前？」

急に話を振られたので意識を二人に戻したレインはゆっくりと目を開けながら聞き返した。

「そう。この子の名前付けようって話になったの」

「そういうことか」

実に女の子らしい発想だなとおもう。

さてどうするか、と思つたが、自分の名前の由来を思い出して顔をしかめてしまう。

自分の名前をつけた父親の血を受け継いでいる自分がまともに名前をつけられるだろうか。

「トンキー」

そう思っていると、キリトが一言だけ口に出した。

おそらくそれがキリトの考えた名前なのだろう。

「それって絵本の?」

「お、リーファも読んだことあるのか」

「あるけど……縁起悪くない?」

なにやら何かの絵本に出てくる何かの名前らしい。

「ゾウっていう鼻の長い動物の話なんだ。そいつは人間の勝手な理由で食べ物に毒入れられてころされることになるんだけど、それに気がついたらしいそいつはご飯をたべないんだ」

話についていけないレインに気がついたキリトが説明をしてくれる。

「でも、結局餓死で死んじゃうんだけどね」

リーファが付け加えるように言ったことで、縁起が悪い、という意味を理解できた。確かに縁起が悪い。

しかしである。

「頭の良い名前じゃないか。俺は好きだな」

「でもなあ」

「このトンキーと出会ったのは俺たちだ。その絵本の非道な人達とはちがう。俺のこの使っているのは剣は、この一本だけで国を滅ぼしたと言われて傾国の剣と呼ばれて忌み嫌われているが、俺が使っている限りそんなことはしない。つまり、それ自体は悪くはなくて、それに関する周りが悪いだけなんだ」

アインクラッドの最後の戦いで姿を現し、この仮想世界に來た直後も姿を現し、そして今はオベイロンからレインを守ってくれているらしい傾国の剣にそつと触れる。

「おい」

キリトに声をかけられて何事かと思うと、キョトンとした様子の子のリーファがいた。

「そういう設定の剣なんだ」

この誤魔化し方はさすがに雑すぎだろうか、とも思ったが、無理矢理と言った感じではあるものの、眉間にしわを寄せながらもリーファはどうか理解してくれたようだった

た。

それからしばらく他愛のない会話をユイも含めた四人でする。

それはリーファが初めて空を飛んだ時の話だったり、キリトが初めてモンスターを倒した時の話だったり、キリトとリーファの出会いの話だったり。

もともと自分の事を語らないレインは、語れないことが多いということも相まってほとんど聞いているだけではあつたが、楽しいと思える時間を過ごした。

「あれはなんだ？」

ヨツンヘイムの中心に向かっていたらしいトンキーに乗っていたレインの視界に天上から垂れ下がる無数の曲がりくねっている筒が見えた。

「あれは世界樹の根よ」

「世界樹」

ぼそつと呟いたキリトを横目でちらりと見ると、彼がアスナのことを想っているのがよく分かるほど、真剣でいて恋焦がれる表情をしていた。

その様子にリーファも気がついたようどこか心配そうにキリトを見ている。

「空を飛べたらすぐにでも世界樹に着くんだけどなあ」

キリトが自分の本心を隠すように苦笑いでそう言う。

「ほんとにね。トンキーからは降りれないしどうなっちゃうんだろ」

されるがままにトンキーに乗っているのはキリトとリーファがトンキーの背中から降りることが出来なかつたからだ。

邪神モンスターであるトンキーはなかなか大きく、ここから飛び降りようものなら落下ダメージは避けられない。

彼に乗っていれば邪神に狙われることは無いというのもあるので甘んじて乗っているが、目的地はさっぱりだ。

ただ、川沿いに北に向かって進んでいるということしか分かっていない。

いつになったらこの先の見えない放浪は終わるのだろうかとぼんやりとおもっていると不意にトンキーの動きが止まった。

「トンキー?」

心配そうにリーファが上からトンキーの顔をのぞき込む。

前方に何かあったのかと確認すると、断崖絶壁の崖があった。

のぞき込んでも底は全く見えない。

「底、あるのかあれ」

「私のマップデータには底の定義は存在していません」

「底なしの崖ってことね」

リーファとキリトは顔を引き攣らせながらトンキーの背中を中心まで戻った。

おそらく、落ちないためだろう。

「なにかイベントか進むのか？」

そういえば、トンキーに乗った直後に二人がそんな話をしていたのを思い出す。

「イベントってなんだ？」

「報酬も何も無いお話だけのクエストみたいだよ。ハッピーエンドかバッドエンドかは最後まで付き合わないとわからないの」

私も参加したイベントで散々な目にあつたわ、と付け加えたりーファはその時のことを思い出したのかげんなりとする。

「ひゅるる」

トンキーが急に小さく鳴くと、モゾモゾと身体を動かし始めた。

こんな底のない崖の近くで動き出したこともあり、キリトとリーファの顔は面白いぐらい血の気が引いていたが、崖に落とすためだけにわざわざこんな所まで運ばれるとは思わない。レインは静かに成り行きを見守る。

ようやく、動きが止まると、歩き出した時よりも高さが低くなっており、キリトとリーファでも降りれそうな高さになっていた。

レインたちのはトンキーから降りて彼の様子をみると、長い足と鼻を内側にしまい込んで雪玉のようになっていた。

「おまんじゅうみたい」

おまんじゅうとはなんだろうかと思うが、もう墓穴をほるつもりのないレインは現実世界にいつてからおまんじゅうについて調べておこうとぼんやりと思った。

「どうする？」

完全に沈黙してしまつたトンキーが動く気配が全くない。

ミュールゲニアで魔獣がこのような行動を起こすとしたら、使役されてる者であれば自分の主に自らを捧げるためだったり、そうでなければさらに強くなるためだったりするのだが、それがこの仮想世界に当てはまるのかは分からない。

まあ、友好的だったトンキーのことなので、突然襲つてきたりなどはしないだろう。

「さすがに、このまま放っておけないよ」

だいたい予測した返事がリーファから帰ってきたので思わず微笑んでしまう。

「ま、ここじゃどうすることも出来ないしこのイベントに最後まで付き合うさ」

仕方ないなという空気を出しているつもりだろうキリトだが、楽しんでるのが伝わってくる程度には困つた顔の中に笑顔が出ているのを本人は気がついていないのだろう。

穏やかな空気が流れていたが、キリトの胸ポケットに入っていたユイが突然とびだして崖とは反対側を警戒して注視した。

「パパ、こちらに近づくとプレイヤー反応があります」

「数は？」

「二十八です」

それなりの人数を告げたユイの言葉でその場に緊張が走る。

通常であれば、一緒に行動させてもらい、ヨツンヘイムから出れるのだろうが、レイ
ンたちはトンキーと共に行動をしている。

二十八人という数から察するにそのパーティは邪神を狩っている人たちだろう。

そして、そんな彼らの狙いは後ろにいるトンキーなのは深く考えなくてもわかる。

「二人は隠れてろ。戦わないようにどうにかする」

トンキーを助けたときのように言い合いをしている暇もないのをキリトも理解して
いるようで、すぐにリーファの手を引っ張って近場の雪が多く積もっているところに隠
れた。

それを確認したレインは今から来るパーティを待ちつつ、トンキーにそつと触れる。

触れた部分はほんのりと暖かく、たとえば作られた世界のデータと呼ばれるトンキーも
生きているのだと感る。

「あんた、もしかして噂の鍵か？」

やってきたパーティのうち一人にそんな風に声をかけられ、とりあえずは思惑がスミーズに動いてくれそうなことにほっとする。

「そうだ」

レインはトンキーから手を離すことなくパーティの方を向くと、全体的に水色で統一されている人たちがいた。

何の種族かは知らないが、おそらくどこかの種族のパーティなのだろう。

「こいつも狩るのか？」

「まあ、もちろんそうしたい。で、鍵は俺たちと一緒に来てくれないか？」

「遠慮する。俺は他人とつるむつもりはない」

レインが即答すると、隊長格らしいやつが眉間にしわを寄せ、仲間となにやら相談し始める。

そういえば、NPCとの会話はある程度わかりやすい言葉を選ばないといけなかったり、決められた言葉を言わないといけないことを思い出した。

おそらく、レインをNPCだとおもっている彼らはどういう風に話を進めればレインを連れて行けるのか話し合っているのだろう。

こちらからはあまり何もしないほうがいいかもしれないとおもったレインは彼らの話し合いが終わるのを黙って待った。

五分ほど待ったところでようやく話が終わったようで隊長らしい男性がこちらに向き直る。

「えっと、その邪神モンスターをどうにかしたらいいのか？」

「いや、何もなくていい」

「じゃあ、俺たちも一緒にその邪神が動き出すのを待つのはだめか？」

「だめだ。俺はこいつを見守ると決めたが、あんたたちをこいつが襲わないとも限らない。あんたたちの安全のためにもここから立ち去ってくれ」

地味にしつこい目の前の男にレインは顔をしかめないように意識して会話を続ける。

「こいつを見守った後のあんたの予定はなんだ？」

「……特にないが、あんたたちと行動することはありえないし、そろそろどこかに行つてくれないだろうか。正直邪魔だ」

さっさと諦めてどこかにいってくれと思っていると隊長格のやつが小さくため息をつけて腰につけていた険をすらりと抜いた。

「やっぱりこいつは強制的に連れて行く系のNPCみたいだ」

彼のその言葉を聞いたメンバーも剣や杖を構える。

穏便に済ませようと思っていただけのレインは眉間にしわを寄せる。

「戦うつもりはないんだが」

「俺たちはあんたを連れて行きたいんだ」

話を通じないとは相手のほうがむしろNPCではないのかと思ってしまったのも仕方がないだろう。

どうやら目の前のやつらは蹴散らさないといけないらしく、戦わないようにするといったのにも思いつつもレインは剣を抜いた。

「抵抗はさせてもらうぞ」

ふと、キリトたちはどういった反応をしているだろうかと思っただが、隊長格が支持を飛ばしているのを見て、すぐに戦闘に意識を戻した。

隙の多いうちにといわんばかりにレインは地面を蹴り、一瞬で隊長であろう人物の眼前の飛び込む。

「なっ!？」

隊長が驚きの声を上げているのをかすかに聞きながらもレインは容赦なく剣を一閃する。

余韻なのか、それともレインの速さについていけなかったのか、ワントンポ遅れてから隊長は粒子となり、その場に隊長がいたことを伝えるように小さな炎が残った。

しかし、そこでレインが止まっているわけもなく、隊長がリメインライトになっている間にもう一人を切り終わっている。

「っ!!全員距離をとれ!こいつの強さは邪神レベルだ!どんな攻撃パターンがあるかわからないが、それぞれ連携を意識して動け!」

隊長がやられたのにもかかわらず、大して崩れることはなく統率の取れているパーティを見て、レインは気を引き締める。

「メイジ隊、魔法準備!」

誰かの号令が聞こえたレインは周りのやつらの相手をしつつ、どこからか飛んで来るのであろう魔法に警戒する。

相手の攻撃がこちらにあたることはないが、人数が多いのと連携が取れているせいで、かなりの戦い辛さを感じる。

「発射!」

その号令と共に、レインの周りにいたメンバーがレインから距離をとった。

本当に連携が取れてて面倒だ、と内心で悪態をつきつつ、レインが魔法詠唱が聞こえていた方角を向くと、こちらにいくつかの氷のつぶてが雨のように飛んできていた。

「そんなもので俺を仕留めれるとおもうな!」

自分を鼓舞するようにそう叫ぶと、レインは飛んで来る氷に向かって剣を振るう。

トンキーと三つ顔の邪神が暴れていたときに飛んできた氷よりももちろん速度が速いが、レインにとってそんなことは些細でしかない。

こんなものよりも速い攻撃と、現実世界では触れ合ってきていたのだ。大上段に構えたレインは勢いよく剣を振り下ろして一つ目の氷を切る。

その動きから剣を振った遠心力も使って時にはバック宙をするように、下からの切り上げで氷を剣でくだき切り、一振りと同時に二つの氷を切る。

相手に通用しないことを見せ付けるために、レインはわざわざ氷を避けることなく全て剣で切り刻んだ。

レインの周りではきらきらと砕けた氷が光り、その中で踊るように剣を振っているレインにその場にいた誰もが彼に見とれてしまっていた。

しばらく続いた氷の雨はレインがはじいた氷が最後の氷に直撃して砕け散り、そこでようやく止んだ。

「終わりか?」

一息つくことなく、レインは口を開く。

正直なところ、こちらも必死で全ての氷を叩き切ったのだが、余裕があるように見せないという意味がない。

さつさとどこかにいってくれという気持ちしかないのだが、うまくいかないということは良く続くことは稀にあり、今回もそれだった。

「くそっ、次の作戦に変更だ!」

今回ばかりはレインもため息をつくしかない。

諦めるといふ言葉をこいつらは知らないのか、と世界樹攻略の鍵であるレインはげんなりとしながら思う。

「何をされようと俺はあんたたちと——」

「メイジ隊、攻撃開始！」

またか、とレインは再び飛んで来る魔法のほうに向かって視線を向けるが、炎の魔法や氷の魔法の軌道はレインではなかった。

その魔法の目的がわかったレインはすぐに魔法の着弾地点に——いまだうずくまっているトンキーの元に駆け寄った。

魔法とトンキーの間に滑り込んだレインはすぐさま魔法を剣で相殺するためには振るった。

しかし、守るトンキーの大きさと、飛んで来る魔法の量をレイン一人で捌ききれぬわけもなく、半数以上の魔法がトンキーに直撃する。

そして、トンキーを守ることが徹しているレインに当たらないわけもなく、何度も当たるとてもレインは気にすることなく降り注ぐ多種多様な魔法を剣でできる限り叩き切り続ける。

後ろでトンキーの悲痛な声も聞こえるが、レインだけではこれ以上どうすることも出

来ない。

「お前ら一体?!」

「なんだ?!」

突然ざわめき始めた場所に意識を向けると、キリトとリーファがメイジ隊と呼ばれていた魔法を使う人たちに斬りかかっていた。

正直なところ助かる。

二人のおかげで徐々に減りつつある魔法を先程までよりも自身のスピードをあげて自身とトンキーの急所に当たる魔法だけ切っていく。

「化物かよ」

誰かがそう漏らすのが聞こえたが構うことなど出来なかった。

そこまで長い時間ではなかっただろうが、体感的には長い時間が過ぎた当たりでキリトたちが反撃にあっているのが視界に入ってくる。

「くそっ」

自分の弱さに悪態をつく。

魔法を使えないだけでこうなってしまう自分の弱さに耐え難くなる。

「ひゅるるるるる」

背後でトンキーが今までになく力強く鳴くのが聞こえて、飛んでくる火球も無視して

振り返る。

たとえ背中当たったとしても痛いだけだ。なんの問題もない。

振り返ると同時に美しい光とその中で力強く翼を広げるトンキーがいた。

思わず微笑んでトンキーを見ていたレインに向かって飛んできた火球は、まるで何でもないかのようにトンキーが腕を一本振るってかき消す。

「助けてくれたのか」

レインの言葉に反応するようにひゆるると嘶いたトンキーは、最初のときのように長い鼻をレインに伸ばし、甘えるようにレインの頬に鼻先を擦り付けた。

すぐにそれをやめてしまったトンキーの視線がレインではなく、周りの敵に向けられたのを感じ取ったレインは、敵に向き直って剣を構える。

目に見えて恐怖を見せる水色の敵にレインは不敵な笑みを向けた。

「さあ、後半戦だ」

レインの言葉に反応してひゆるると力強く嘶いて腕を振り回す。

「まじかよ」

「か、勝てるわけねえ」

「全力で逃げろ!!」

叫ぶように走り回りながら三々五々に逃げ始めた人たちを見て、レインはようやく

か、と息をはいた。

トンキーのおかげで殲滅するまで戦うことはなくなつたが、結局自分は何度か攻撃を受けたせいでキリト達に何か言われるのは決定事項だ。

かなりめんどくさい。

どうしたらキリトの小言を回避できるか考えている間に完全に敵は視界から消え去った。

「レイン！」

「レインさん！」

警戒を解いて鞘に収めた瞬間、ユイとリーファが駆け寄ってくる。

どうやら余程心配されていたようで、二人共今にも泣きそうな顔をしていた。

「心配かけてしまったようですまないな」

「身体は痛くない？」

「またレインは無茶をして！」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ二人に思わず微笑んでしまう。

本当に彼女達は優しい子達だ。

レインは微笑んだままそれぞれの頭を優しく撫でる。

「ありがとう。だが、俺はそれなりに痛みには慣れてるしこの程度ならかすり傷みた

いなものだからそんなに心配しなくていい」

「とりあえず、魔法で痛みが消えるみたいだからリーファ、頼んでいいか？」

「うん！」

助け舟と言わんばかりにキリトが珍しく小言を言ってこないことにレインは不思議に思った。

「どうやら、それが表情に出てしまっていたようで、キリトとリーファに魔法をかけてもらっているレインと目が合うと、小さくため息をつかれた。」

「さすがに、今回のはなんも言わない。あいつらがしつこすぎたんだ。仕方ないさ」

「なんだ、意外にも寛容なんだな」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ」

「口うるさいガキ」

「なっ！ お前とほとんど年齢変わんないじゃないか！」

「精神年齢と見た目はお前のほうがガキだろ」

いつも食ってかかってくるキリトが面白くてついつい言い返してしまう。

「治癒終わったよ」

「ありがとう」

そういつて確認するように全身を伸ばすと、完全に痛みは消えていた。

一体どういう原理になっているのかはさっぱり分からないが、痛みが消えるのはいいことなので深く考えることをやめたレインは、ようやく、といった様子で一息ついているユイに微笑みかける。

「ところで、トンキーがすごいことになったみたいだけど……」

「そういえばそうだったな」

あわただしだったこともあり、翼が生えた程度しか確認できていなかったレインはもう一度ちゃんとトンキーをみる。

一回りほど大きくなっただろうか、と翼とそれぐらいしか見た目ではわからない。いつものように伸ばされた鼻に触れると、毛並みも良くなっているのがわかった。

そんなことをおもっていると、ぐるりと鼻が三人を同時に巻き取って持ち上げられる。

さすがに苦しさを感じるが、少しの辛抱だと思つて我慢していると、すぐにトンキーの背中に足がついた。

それからあっさりと鼻は離れて、トンキーが羽ばたき始める。

「まさか飛ぶのか？」

キリトがつぶやくように言った瞬間、ふわりとトンキーの身体は持ち上がった。

「そのようだな」

底のない崖の上へと飛んでどんどん上がっていかうとするトンキーにどうすることもできない三人は、再びトンキーの背中に乗って行き先のわからない旅に身を任せることにする。

現実世界では深夜らしく、キリトはかなり眠いようでごくりごくりとふねをこいでいる。

レインは寝ないこともあつたし、寝付けない日もあるので問題はないが、キリトだけではなく、リーファも眠そうに欠伸をしている。

二人のためにも早くログアウトできるところに行きたいのだが、トンキーはというとどんどん上についていくので今更降りるなんてことができるわけもなかった。

世界樹の根もすぐそこにあるほど高くまで来てしまっている。

どうしたものか、と思いつながらふと世界樹の根元を見ると何かがつついていた。

「なんだあれは」

逆ピラミッドのようなものが見える。

そしてその先端をとくみると、黄金に輝く剣が突き刺さっていた。

レインの声に反応したリーファがレインのすぐ横まで来て、レインの視線の先を見る。

「もしかしてエクスキャリバーじゃない？」

「エクスカリバー?」

「それって伝説的なあれか?」

いつの間に覚醒したのかリーファとは反対側のレインの隣で興奮気味でキリトも覗き込んでいた。

伝説的な、という言葉聞いて自身の持つている傾国の剣のように有名なものなのだろう。

しかし、残念ながら見た目が黄金ということもあつてレインの趣味ではない。

が、キリトはかなり気になるようでそわそわとしている。

アインクラッドでもすぐに使えない剣を買っていたキリトに、そういうところがガキだと思いつつもいわないのは、レインの優しさなのだろう。

トンキーが進む方向を見てみると、あの剣が刺さっているところにいけそうな道が見え、そしてそれよりも先の壁にも道があるのが見えた。

壁にある道はおそらく上へと続くのだろう。

どちらかしか選べないのには目に見えていて、いかにも遊びという感じだ。

「キリト、地上とあの剣、どっちか選べ」

そういいながら二つの道を指差して教える。

「お、お前は興味ないのかよ」

「残念ながらお前みたいな浮気性じゃないんでな。今はこいつがいるから他に興味はない」

「う、浮気性って」

「あと、身の丈にあつた武器を持つことも勧めておこう」

めんどろで今まで何も言わなかったが、キリトの背丈にはかなり不釣合いな両手剣とも言えそうな剣が背中に背負われている。

どうせ、重い剣を好むキリトのことだから重量重視で選んだせいであんなことになったのだろうが、先ほどちらりと見た彼の戦いでは彼の持ち味であるはずのスピードが損なわれていた。

「仕方ないだろ。急いでたし、重いほうがいいし」

子供がすねるようにぶつぶつといい始めるキリトは、エクスカリバーと地上に続くであろう道を交互に見比べる。

「早く選ばないと、エクスカリバーに続く道を通り過ぎちゃうよ」

あきれた様子でリーファが追い討ちをかけるように言うときリトはぎゅつと目をつぶつてから地上へと続く道を見た。

「リーファ、またここにはパーティ集めてこよう。それまであれのことは秘密で頼む」

「はいはい」

そういういつつももう一度ちらりとエクスカリバーをみたキリトはまだ未練があるようだった。

「今のお前には先にすべきことがあるだろう」

レインが静かにそう告げると、キリトは力強くうなずき、もうエクスカリバーのほうを向くことはなかった。

不思議で不可視で不可解な

レインは一人で小一時間前に到着したアルンを歩いていった。今、この仮想世界にはプレイヤーたちがいない。

システムも止まっているようで夜なのにも関わらず明かりがついておらず、突然世界から人々が消えて自分だけが取り残されてしまったような状況だ。

しかし、この世界樹の上ではシエルフアがつかまっついて、キリトによればアスナも囚われている。

のんびりと上につづくアルンの街をレインは上っていく。

静かな世界でレインだけの足音が響き、オベイロンのいる場所の真下であるここだと、すぐに彼に見つかるかもしれない。

現状だと見つければログアウトする方法はレインは知らないので避けなければいけないのだが、アルンに着てからずっと呼ばれている気がするのだ。

本当に声が聞こえているわけでもないので確証はないが、感じたものは大体意味があると今までの体験からもわかっていているレインはただ、呼ばれるがままに足を勧める。

しばらく歩いてたどり着いたのは、両脇に巨大な像が立っている、大きな扉のある広

場だった。

その扉が、世界樹の根元についているということは、これが世界樹の上に行くために受けなければいけないグランドクエストへと続くものなのだろう。

そして、その扉の前にぼんやりと何か光っているのがみえた。

その光にどこか見覚えがある気がしたレインは警戒をしつつも近寄る。

「レイナー！」

突然光から聞こえた声にレインは驚き、そしてほつとした。

「シエルファか」

聞き覚えのあるシエルファの声にそう返すと、光がどこか嬉しそうに揺らめいた。

「捕らえられているわけじゃないのか？」

一番気がかりだったことを聞くと、光は輝きを減らした。

実にわかりやすい変化に思わず微笑んでしまう。

「私の中核はまだ箱の中にあるわ……一度透明な箱が開きかけたときに出ようとしたんだけど、すぐに閉じられてしまったの。今ここにあるのはそのときに箱から出すことができた私の欠片よ」

彼女はもともと実体がないので捕まえていることができているだけ逆にすごいと思ってしまう。

「なら、俺が君を助けに行こう。もともとそのつもりだったしな」
「ほんとに!？」

突然光を増したシエルファの欠片に驚きつつもレインはうなづいた。

「レインが私を助けてくれるなんて、最初は捕まっちゃって情けないと思ったけど、捕まってよかつたわ!」

欠片をきらきらと輝かせているということはそれほど嬉しいのだろう。

心配してしまっている自分が馬鹿らしく思えるほどに、彼女には余裕があるようだった。

「必ず助けに行く」

「ええ! たとえ逃げれそうでも待つてるわ!」

そんなことを言うシエルファにレインはただ微笑むことしかできなかった。



レインは閉じていた目を、ゆっくりと開けた。

いつものように寝ぼけることはないレインはここでシエルファとしばらく話し込んだのち、彼女に寝るように勧められて、彼女を一人ここに残していくのも嫌だったレイ

ンはそのままここで眠りについたことを思い出した。

ドアから少し離れた柱にもたれて座りながら寝ていたレインの隣で楽しそうに揺らめいている光に視線を移した。

「おはよう」

鈴のように綺麗な声で挨拶をされ、気持ちのいい朝を迎えられたなど、口に出すことはないがレインは思った。

「おはよう。あんたはずっとおきていたのか？」

「ええ。私は寝なくても平気だし、レインの寝顔も見なかったの」

光なので表情が見えないはずなのだが、満面の笑みで言っているのであろうことはだいたい察しがつく。

男の寝顔を見て何が楽しいのか全くわからない。

どう反応しているのかわからず、ごまかすように立ち上がったレインは身体を伸ばす。

ふと、眼下に広がるアルンの街に意識を向けると、昨日の夜のような静けさがなくなっており、キリトたちが言っていたメンテナンスというものが終わっていることを理解した。

ということとは、宿屋からレインが消えていてももしかしたら騒いでいるかもしれない。

まあ、どうにかなるだろうし、自分が行くところは世界樹の以外にないのはキリトが分かっていられるから大丈夫だろうと勝手に納得したレインはキリトがここに来るまで待つことにした。

変に動いたほうがややこしい事になる。

その前に、とレインはシエルファの欠片に向き直った。

きらきらと輝いている彼女が上機嫌なのはすぐに分かる。

「あんたの、その欠片はどうなるんだ？」

「レインについて行くつもりよ。移動出来なくはないもの」

となると、こんなシステム外のもの連れ歩くということになる。

それはキリトとリーファがうるさい気がしなくもない。

というか、説明するのがめんどうだ。

だからといって彼女を置いていこうにも、勝手についてくるだろう。

ならば隠し持つか方法はないのだが、その方法が一つしか思い浮かばない。

しかし、それを男である自分が女性に提案していいものだろうか、思ってしまった。
う。

たとえば彼女が好意的に思ってくれているが、おそらく嫌がるだろうな、と思いつつもレインはその方法をおずおずと提案し始めた。

「その、あんたはこの世界じゃイレギュラーで目立つからできれば人目につかせたくない。それで一つ提案なんだが……俺の中に入って隠れることはできるだろうか？」

レインがそういった瞬間に、光が急激に動きを停止させてしまったので慌てて言葉を付け加える。

「いや、他に目立たない方法があればそれでいいんだ！俺には他の方法が思いつかなかっただけなんだ。嫌だろうから他の方法を——」

「ほんとにいいの？」

いまだ動きのない光に戸惑うが、レインは小さくうなずいた。

こちらとしては何の問題もない。

むさくるしいおっさんや、常にこちらの命を狙っている奴であればこちらから願い下げではあるが、相手は美人でレインのことを助けようとしてくれたこともある。

「あんたなら俺は何の問題もない」

レインがそういった瞬間、爆発かと思うぐらいシエルファの欠片である光が発光した。

あまりの眩しさにレインは目を隠した。

「お、おい！大丈夫か?!」

「ご、ごめんなさい！」

何かがあったのかと心配したレインだったが、シエルファの思いの他、元気そうな声が聞こえたのでほっと一息つく。

そして、すぐに光は収まり、ゆらゆらと揺れる光にもどった。

「その、悪気はなかったの。思わず光つちやったというか……えっと、早速だけど、レインの中に入るわね！」

今までになくたどたどしい彼女の様子に疑問を抱きつつ、レインは自分の体の中にもろりと入ってくる光を受け入れた。

光が入ってきたときの感覚は特になかったが、ほんのりとした暖かさ、多少の魔力を感じた。

「もし、痛みを感じたりしたら出てくれないからな」

「結局のところ欠片でしかないから何も心配はいらないから、安心してちょうだい」

どこか楽しそうな声を聞いてレインは微笑んだ。

「こんなところにいたのか」

シエルファに気をとられていたということもあって、突然声をかけられたことに多少は驚いたが、それが聞きなれた声だったのでレインは何事もなかったように声の主のほうに向いた。

「遅かったな、キリト」

リーファの姿がそこにはなく、あせっている様子のキリトを見るに何かあったのだろう事はすぐにわかった。

先ほどもでのシエルファとの一部始終を見られたのではと懸念したが、あの様子では見られていないだろう。

「どうかしたのか？」

「アスナが……アスナがいた。ユイが見つけて呼びかけたら世界樹の上からアイテムじゃないものが落ちてきたから間違いない」

苦しそうに顔を歪めたキリトは扉の前に足を進めた。

一人ででもグランドクエストを攻略する気なのだろう。

グランドクエストの全容もよく分かっているというレインではあるが、今までどれほどの大人数が押しかけてもクリアできていないということは知っているので、一人で乗り込むことがどれほど無謀なことかはわかった。

表情を変えることもなく、ため息をつくこともなく、レインはそれが当然のようにキリトの隣に並んだ。

「いいか、ここからは俺のことを気にするな。それでも現実世界で何度も生身で戦ってきた。痛いだけで死にはしない。お前はアスナを助けることだけを考えろ」

「でも——」

「でもじゃない。どうせ俺はGM権限とやらがないと現実世界には戻れない。それが何なのかはわからんが、もしアスナが俺と同様なら彼女もGM権限がいるはずだ。俺が現実世界に戻るためにもお前には進んでもらわないと困るんだ」

「……わかった。だけどできるだけ無茶はしないでくれ」

「しなくていいならな」

「どんなときでも軽口を叩き合っていた二人には珍しく、それ以上は特に言葉を交わすことなく、巨大な扉をくぐった。



二人の視界に広がったのは円柱状に高く伸びた室内だった。

それは間違いなく世界樹の中だと分かるほどに広く高い空間で、壁には木の中だということを連想させるようにか蔦のようなものが貼りめぐられていた。

そんな部屋にレインは眉間にシワを寄せる。

「おまえ、これどうするんだ？」

「……まあ、どうにかするから、お前は飛んでいけばいい」

ぶっちゃけ、どうにかするしかないのだ。

「お前の事だからどうにかして上まできそうって思えるから不思議なんだよな」

ぼそつと呟いたキリトは羽を広げたと思ったら、すごいスピードで上昇していった。

レインもそれに続いてどうにか上に行くしかないのだが、現状で思いつく方法は壁を走って登るぐらいしかない。

どうやって上まで行くか考えていると、壁の装飾だと思っていたガラスのような所から騎士を模した敵が続々と出現し始めた。

それは尋常な数ではなく、間違いなく先に上に向かったキリトだけで対処できる量ではない。

もちろん、レインですら難しい量だ。

すぐにでも加勢に行きたいが、と悩んでいると半数以上の騎士が一斉にこちらに向き、弓兵は容赦なくレインに向かってこれまた尋常じゃない量の矢を放ち、その合間を縫うように数十人もの騎士達がレインに向かって急降下してきた。

「レイン！」

「気にするなど言つたはずだ！」

すぐに戻ってこようとしたキリトに一喝したレインは剣を振りかぶって斬撃を飛ばした。

騎士達はそこまで硬いわけではないらしく、今まで同様に一撃で四散する。

これなら問題は無いと判断したレインは一番近場にいた空中を飛んでいる騎士に向かって跳躍した。

格好の的だといわんばかりに剣を振り下ろされるが、レインには予想の範疇でしかない。

羽があるわけでもないのに空中で身体を捻ったレインはその振り下ろされた剣をもつ腕をかすむ様なスピードで掴むと思いつきり下へと引つ張った。

キリトほどの筋力値ではないものの、規格外なステータスと現実世界で磨いてきた技術を持っているレインはいとも簡単に騎士を自分よりも下に引き摺り下ろす。

しかし、地面に叩きつけるわけではなく、今度はその騎士からあっさりと手を離し、いつ抜いたのかもわからない剣を振りおろして胴を風ぐ。

あっさりと上下真つ二つになってしまった騎士の頭を踏むとレインは足に力を込めて再び近場の騎士に向かって飛び込んだ。

騎士を斬っては踏みつけて上に跳ぶ。

もちろん、出現している敵が踏み台用の騎士だけなわけがなく、踏み台を仕留めている間も他の騎士たちがレインに向かって斬りかかったきいている。

それを感じさせないほど、レインはそれらを簡単に処理しながら次々と騎士を踏みつ

けて上へと飛んでいった。

しかし、雄たけびを上げながらも突き進んでいくキリトにはなかなか追いつけない。飛べるのとはやはり勝手が違うせいではなかなかに進めない。

「くそっ」

いまだに出現し続けている騎士の半数以上がレインのほうにやってくるといっても、キリトが上に行くにつれて出現する量が増え、ただでさえ厳しい状況が今まで以上に厳しくなっていく。

「ぐあっ」

大きくもないはずのキリトの声がレインの耳に届いた。

斬りかかってくる騎士を逆に斬りつけながらもキリトのほうを思わず振り向いてしまふ。

そこには背中から大剣に貫かれているキリトがいた。

ここはアインクラッドとは違う仮想世界で、たとえばHPがなくなっても死なないと聞いても血の気が引く。

動きの止まったキリトはすきだらけになり、に次々と剣が突き刺さる。

それでも尚、キリトは天井に見える扉のようなものから視線を離さず、アスナがいる方向に向かって手を伸ばし、そのまま四散した。

今までモンスターを倒したときや、ヨツンヘイムで襲い掛かってきた連中を自らの手で斬り倒してみてきたはずの人だったものの欠片が異様に目に飛び込んでくる。

どこか他人と割り切ることができないそれに——守りたい人を、救いたい人を守ることも救うこともできずに四散したキリトに自分を重ねてしまったレインは、彼には珍しく、雄たけびを上げながら剣を振り始めた。

鬼神のようにそれまでよりも剣を振るい、次々と騎士を踏み台にして上るレインだが、まだかすかに冷静さを残してたおかげで、まずはここからキリトをつれて逃げ出さなければならぬと判断していた。

『レイン！』

自分の中からシエルファの声が聞こえる。

断じて聞こえていないわけでも、無視をするつもりもないのだが、半数以上の騎士でさえ多かつたのにもかかわらず、キリトに向かつていた騎士たちもこちらに来てしまったせいで、さすがのレインも言葉を返すことができなかつた。

そんなレインのことをわかっているのかわかっていないのかは定かではないが、レインが何の反応を示さなくてもシエルファは悲痛な声でレインに言葉をかける。

『お願いだから、無茶しないで』

今にも泣いてしまいそうな少女の声に、レインはどうか騎士たちの相手をしながら

も言葉を返す。

「泣かないでくれ。あの馬鹿の残り火を掴んだらここから出るつもりだ」

『でも、レインの身体がっ』

そう言われて、わざわざ意識の外にやっていた自分の状態に顔をしかめた。

人間離れたした動きをし、騎士たちを一撃でほふりながらも彼らを踏み台にして上つていくレインだが、無傷というわけがなかった。

彼の身体には無数の切られた傷跡があり、全身に無数の矢が突き刺さっている。

それはあまりにも痛々しく、シエルファが悲痛な声で叫ぶのも納得ができる。

だからといって、どうにかキリトを助けられないといけないのも事実だ。

「大丈夫だ。これぐらいならまだ動ける。それに、やつがいないとシステムについてわからない俺じゃこの世界から出ることができない。情けない話だが、あいつは俺が出るためにも必要なやつなんだ」

レインはそういういながらも新たに背中に何十本も矢を受け、切りかかってくる騎士を切り倒し、矢を放ってくる弓兵には斬撃を飛ばす。

しかし、尋常じやない数のせいではなかなかキリトのところに向かうことができない。

『レイン、空を飛べるように変わる？』

「え？」

『私を誰だと思っているの。たとえ欠片といつても私の魔力の欠片でもレインについている羽を使えるようにするぐらい簡単よ』

それはまるで自分に言い聞かすように聞こえたのはレインの思い過ごしではないだろう。

元々魔力など存在しない、いや、入り込めない世界に無理やり魔力をねじ込んでいるような状態で容易に使えるわけがない。

レインとて、何度か傾国の剣の魔力を感じ、行使したがほとんど勢いのようなもので使おうとしても使えるものではなかったのだ。

しかし、とレインはすぐに考えを改めた。

魔力だけで機械を使わずに仮想世界にやってきている彼女にとってはそれはたやすいことなのだろう。

「頼む」

システムが全てを掌握し、それらのせいで理不尽なことを幾度となくレインを苦しめてきたが、そのシステムすらガン無視しようとしているシエルファに、レインは不敵な笑みで答えた。

『さあ、レイン。何かに縛られているあなたはもう見飽きてしまったわ。自由に空を飛びなさい』

次の瞬間、レインは踏み台にするために踏んでいた騎士を思いきり蹴り飛ばし、弾丸のように飛び上がった。



視界が無彩色に包まれ、蘇生可能時間なる数字が視界の端で着々とその数を減らしている。

先ほどまで高ぶっていた気持ちは冷静さを取り戻し、結局はシステムから逸脱のできない自分に、何の力もない自分にキリトはただぼんやりと、自分をさげすんでいた。

多すぎる敵のせいで見えないが、剣と剣がぶつかる音や、敵が消滅するときの音が聞こえるのでレインがいまだ自分よりはしたのところで戦っているのを理解している。

きっと彼のことだ、飛べなくせにどうにかここまでやってきてキリトを助けようとしているのだろう。

しかし、それはあまりにも無茶だ。

飛べるキリトですらここで負け、死んでしまった。飛べないレインがここまで来れるわけが――

そこまで考えていたキリトを裏切るように突然、ガーディアンの群れから黒い光が一

直線にキリトのリメインライトに向かって飛んできた。

その突然の速さに、ガーディアンたちが慌てて追いかけるが、なかなか追いつける速さなわけもなく、その黒い光はキリトの元にたどり着いて急停止した。

その光は、やつぱりというか、当然のようにレインで、今までずっと垂れ下がっていた羽を広げ空中で停止している。

『レイン、まだ慣れていないし、あなたの身体のこともあるから飛べるのはせいぜい一分が限界みたい。大見得きつたのにごめんなさい』

どこから聞こえているのかさつぱりわからないが、きれいな声が響く。

「一分あれば十分だ」

体中に矢が刺ささつていて、それだけで明らかに満身創痕にしか見えないレインはキリトのリメインライトを左手で掴むと、すぐに急降下し始めた。

いったい何が起きているのか、どうして飛んでいるのか、さつき聞こえた声は何なのか聴きたいことが多いのに、キリトはただの残り火でしかないので声を出すことすらできない。

戸惑うキリトを放置してレインは再び騎士の群れの中に飛び込んでいった。

初めて、というわけでもないレインの戦いをキリトだったが、間近でみるそれは本当にレインが人なのかと疑いたくなるようなものだった。

キリトのリメインライトを片手がふさがっているが、それすら感じさせないほどレインは次々に敵をほふっている。

見えていないはずの背後からの敵の攻撃も避け、はじき返した剣を別の敵をしとめる。

今まで出すら空中なのにもかかわらず、自由自在に動いていたレインは、空を飛べるようになったおかげで今まで以上に自由に、滑らかに身体を捻り次々とガーディアンたちを蹴散らしていた。

それでも、レインは斬られ、矢を受けているのはガーディアンの量が尋常じゃないからだろう。

レインの周りには壁のようにガーディアンが群れを成している。

本来であれば、あきらめてデスルーラするところだが、死ねないレインはそれができない。

「キリト君!!レインさん!!」

突然聞こえた声にレインとキリトは声のする方向を慌ててみると、そこには今にも泣きそうなりーファの姿があった。

しかし、それは間違いなくレインの隙となり、すぐ近くにいた騎士は深々とレインの剣を持っていた片腕を切り、レインから切り離された腕は四散した。

「っ！」

現実世界と同じ痛みを受けているはずのレインの表情は苦痛にゆがむ。

悲鳴を上げないあたり、レインの精神力は計り知れない。

『剣を離してはだめ！』

再び聞こえた鈴のような声が響いた瞬間、レインの周りに突如魔方陣があらわれ、その中から何本もの鎖がレインに向かって伸びてきた。

「くそっ」

ただでさえ全身を痛めつけられていたレインは腕を切られたせいで著しく動きが鈍り始めた。

そんなレインが何千もの騎士の猛攻を避けながら無数の鎖を避け続けることなどできらわけもなく、鎖に絡め取られるまでそう時間はかからなかった。

レインの動きを封じるように巻きつく鎖がきらりと光った瞬間、雷が落ちた。

「がああ!!」

痛みを感じないキリトには計り知れないが、レインの目が見開かれ、腕が切られても悲鳴すら上げなかったレインが声を上げて苦しんでいるというだけで、その雷の威力がすさまじいものなのを理解する。

『いやあ!!』

どこからか聞こえる鈴の音が悲鳴が悲痛な声を上げる。

ようやく雷が収まったころには、すでにレインの意識は途絶えていた。

それでもキリトのリメインライトを手放さないレインにキリトは胸が締め付けられる思いを抱く。

どうすることもできない自分にいらだつてしまう。

鎖に絡め取られたレインがどうなってしまうのかとキリトが思っていると、いまだに不思議でしかない声が聞こえた。

『この私がレインを連れて行くことを許すと思っているの!!』

その言葉が聞こえた瞬間にレインが動き始めた。

「その泣きじゃくってるあなた！レインの落ちている剣を拾ってこのドームから逃げなさい！」

レインから女性の声が聞こえてきて、キリトはリメインライトながらにぎよつとしてしまう。

「汚い鎖はレインから離れなさい！」

そうレインではないであろう誰かがレインとして叫んだ瞬間に何の力かわからないかレインに巻きついていた鎖が弾け飛んだ。

それはシステムを無視した何かなのだろうことは何が起きているのかわからないと

いうことでキリトには理解できた。

「ほら!! さっさと動く!」

「は、はい!!」

女しゃべりのレインに驚きすぎてしまったのか止まっていたリーファが慌てて動き出して落ちていた剣を拾いに飛んだ。

「邪魔な兵共も道を空けなさい!」

素晴らしい放った瞬間、先ほどの鎖同様、不可視の何かによってレインと出口の道までの間にいた騎士が吹き飛んだ。

リメイナイトながらにキリトはただ、それを見てため息をついたのはレインが異邦人だということを知ってしまったているからなのだろう。

あまり、緊張感に包まれずに悠々と扉から出たレインに掴まれたままだったキリトは、いまだ混乱気味のリーファにアイテムを使ってもらって蘇生して、一息をついた。

本当であれば、再び扉を潜って特攻したい所ではあるが、先にレインをどうにかしなければならぬのは明らかだ。

リーファから剣を受け取って慣れない手つきで鞘におさめているレインにキリトは意を決して声をかけた。

「えっと、俺はキリトって言うんだが、あんたは誰だ?」

「ごめんなさい、元々レインからは隠れてろって言われてたから名乗るつもりはないし、こうやってレインの身体を動かしたのも内緒にしてくれないかしら」

中にいるのであろう女性が微笑むわけだが、身体はレインなので、滅多に動かない表情な精悍な顔つきの彼が全てを包み込むように微笑むと、男であるキリトですらドキツとしてしまう。

「だめかしら?」

「さすがにきついですね。あんな状態から逃げ出すなんてリメインライトだった俺は論外だし、リーファも無理だ」

「あら、そう。なら仕方ないわね。君の飲み込みの早さにレインがどこから来たのか知ってるのよね?」

可愛く微笑むレインに違和感しか感じないし、むしろ恐ろしいとまで思っているキリトは引き攣りそうな顔をどうにか正常に保つ。

間違はなくリーファは戸惑っているが、詳しく説明するか否かはレイン次第なのでこちらからは何も言えないのが心苦しい。

「二応知ってる。あいつが本当の意味で剣士なのも、どれぐらい強い奴なのかも知ってる」

「なら話は早いわね。私の本体は、えっと誰だったかしら。す、すごう? たしかそんな人

に捕えられているのよ。まあ、自力で逃げられるんだけど、レインが助けてくれるって言うから待つてるの」

さらりととんでもない事を満面の笑みで言われるのでたまったものではない。

「まあ、私は逃げられてもレインを助けられないなら意味が無いっていうのもあるんだけどね。でね、今からここにある私の欠片を全部レインがずっと飛べるようにするんだけど、その代わりに意識はこちらに飛ばせなくなるからレインによろしくお願いね」

「一体なにを」

何を言っているのかさっぱりで、聞き返そうとするも、静かに目を閉じたレインはぐらりと身体を揺らしてそのまま身体から力が抜けて倒れ始めた。

「うお?!」

慌ててキリトはレインを抱く形で受け止める。

完全に意識のなくなったがレインに対してキリトはため息をつくしかなかった。

「えっと、キリト君」

戸惑った様子でこちらをみるリーファにキリトはどうしたものか、と思ったが、とりあえず治療してもらわねばならないことを思い出す。



目を開けた時に視界に入ってきたのはユイの顔だった。

てつきり水の中に戻ると思っていたが、なぜだか分からないが助かったらしい。

「心配をかけたようだな。悪かった」

むくりと身体を起こしながらユイに優しくふれる。

斬られた右腕もとに戻っていて、身体にも痛みがないことからレインのすぐ隣で居心地悪そうに座っているリーファが治癒魔法をかけてくれたのだろう。

「お前な、ほんと無茶しすぎだから」

リーファの隣に胡座で座っていたキリトが呆れた顔で言ってくる。

「暴走列車顔負けで突き進んでたお前には言われたくないな」

「………仕方ないだろ」

「リーファ、ありがとう」

「え、あ………うん。えっと、どこも痛くない?」

どこかたどたどしいリーファに首を傾げると、キリトが微妙な顔をした。

「痛くはないが………どうかしたのか?というか、どうやってあの状況から逃げる
ことが出来たんだ?」

あの鎖は間違いないくオベイロンが用意していたものだろう。

グランドクエストの鍵としてこの場所までやって来たレインが痛めつけられて剣を離したら発動するようにされていたのは、剣がレインから離れてしまった瞬間に発動されたことから分かる。

この世界の王と名乗り、多くの理不尽をレインに行使してきた彼が差し向けたものをたかがプレイヤーにどうこうできるとは思えない。

アインクラッドで生き延びたキリトであればとも思えるが、彼は残り火になっていたし、自分達を助けることができたのは実質リーファしかいない。

レインの問いに気まずげな表情した二人にレインは眉間にシワを寄せる。

「ああ、それがな」

頭をかきながらキリトが言い難くそうに口を開いた。

「よく分からない女の人だレインの身体を動かし始めてよく分からない力で、なんというかゴリ押しというか、チートみたいな事をして、あっさり逃げれた」

その言葉を聞いたレインは盛大に顔を顰めた。

リーファの前でもその話をするということは、彼女もそれを見たのだろう。

なるほど。それなら納得ができる。

「でな、あんまり説明もせず、欠片のとやらをレインを飛べるようにするとか、意識をこっつちに飛ばせない的なことを言ってたぶん、消えた」

「……だいたいわかった」

あの場から逃げられるだけのことをしたのだ、欠片に残っていた魔力を相当使ったのであろう。

それでもなお、レインを飛べるようにするだけの力があるのだから、魔力の欠片なのにも関わらず凄まじいものだと感心してしまう。

「飛行時間については何か聞いていたか？」

「たしか、ずっと飛べるようにするって言ってたはずだ」

さらに、それが。

彼女のことは全くもって計り知れない。

「レイン、俺は——」

「わかってる。さっさと行くぞ。俺も飛べるのであればさつきとは違う結末になるはずだ」

「……ああ。俺もさつきよりは冷静になった。個々では無理だったが、二人ならいける」

ほとんど同時に立ち上がったレインとキリトを追うようにリーファが慌てて立ち上がった。

「二人共待つてよ！私、よく分かってないけど、それでもやっぱり無茶だよ！私、キリト

君のことも、レインさんのことも本当に大切で……だから！」

ほとんど叫ぶように言いながら、レインとキリトの服の裾を掴んで引き留めようとする。

その手をキリトは優しく両手で包み込み、レインはそつと優しく触れた。

「リーファ、本当にここまでありがとう。リーファに会えなかったらここまでこれなかった。全部が終わったら必ずお礼をする。でも、ここまでだ。ここから先は俺の、俺達の問題だ。君にまで付き合わせてしまうことじゃないんだ」

穏やかな表情でそう言うキリトはレインから見ても優しいただの少年だった。

「そんなにも君はその人に会いたいの？」

「会いたい。今すぐにでも彼女に、アスナに会いたい」

キリトがそう言った瞬間、ピクリとリーファが反応したのを触れた手から伝わってきた。

「今、なんて？」

アスナのことを思い出し、恋焦がれているキリトは気づいていない様子だったが、リーファの声は震えていた。

何やらおかしい様子に、レインは首を傾げる。

「ごめん、名前言ってなかったっけ。俺の探しているこの世界樹の上にいる人はアス

ナっていうだ」

上を見上げ、辛そうでいて、しかし愛しむような表情で世界樹の遥か上をみているキリトは、驚愕に顔を染めているリーファに気が付かない。

「うそ、でもその人は……」

レインの手からも、キリトの手からもするりと抜けた手で、リーファは自分の口元を覆った。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんなの？」

上を見上げていたキリトはその言葉に目を見開きながら振り返った。

「スグ?……直葉?」

しばらく黙ってリーファをみたあと、ようやく出した声は掠れていた。

事情を知らないレインはただ成り行きを見守ることしか出来ない。

「こんな酷いこと、ないよっ!」

「まって、スグ!」

慌ててキリトが手を伸ばしたが、それは遅く、リーファはログアウトしてその場から姿を消してしまった。

残されたキリトは伸ばした手をそのままに完全に固まってしまっている。

「キリト」

静かにレインが声をかけるとキリトはビクリと身体を跳ねさせてからレインのほうを向いた。

「リーファが、俺の現実世界の妹だった……」

困った様子で俯いて、呟くように言った彼からは剣士キリトの姿は一切見受けられない。

ただの少年な彼はどうしたらいいのか考えているのだろう。

「俺は兄弟がいらないからお前の気持ちを実に理解することはできないが、大切な妹なんだろ」

「ああ、もちろん大切だ」

「なら行け。ここで待つといてやるから行ってこい」

レインがそう言うのと、キリトは驚いた顔を一瞬こちらに向ける。

しかし、すぐに意を決したようにで左手を振ってウィンドウを開いた。

「悪い」

一言だけ告げたキリトもその場から姿を消した。

キリトがログアウトすればユイも必然的に消えてしまうようで、広場にはレインだけがとりのこされた。

世界樹の攻略、そして現実世界へ

特にすることもないレインは、先ほどの騎士達の戦闘思い出し、いつものように身体を動かしてキリト達を待っていた。

少し慣れてきた羽を使って空中で身体を器用に回転させながら剣を振るい、時にはその場から急発進をし、そのまま突然バック宙のような動きをする。

それは間違いなく常人から逸脱している動きなのだが、レインはまだ飛行に慣れていないあたり、彼の戦闘センスと成長スピードは計り知れないものだというのがわかる。

したくない空中戦闘に適應するべく、飛び回っていたレインの視界の端に、キリトが出現してくるのが見えた。

静かに動きを止めたレインはきよろきよろと辺りを見回してレインを探しているの
であろうキリトの元に向かう。

「早かったな」

着地をしながら声をかけると、キリトは無理やりといった感じではあるがへらつと笑う。

「まあ、な。スグ……リーファとは兄妹だから一緒に住んでるし」

「話は済んだのか？」

レインの問いにうつむいたキリトの様子から察するに、そういうわけではないのだろう。

そこにはレインの知らない、ただの少年であるキリトの姿しかなく、自分の背中を任せることのできる剣士キリトの姿はない。

「キリト、これはお前がどうかしないといけない問題だ」

「わ、わかっている」

「なら、さっさとどうにかしろ。今のお前は世界樹の上に行くにはただの邪魔だ」

冷たくそう言い放つと、キリトは一瞬驚いた表情をしたが、すぐに困ったように笑った。

そんな表情をされるつもりなんてなかったレインは眉間にしわを寄せる。

「お前、なんだかんだ優しいよな」

「さっきの言葉からどうしてそうなる」

「だって、うじうじしてる俺に喝を入れてくれた上に、待っててくれるんだろ？」

にやりと笑いながらそう言うキリトに対して盛大に顔をしかめたレインは気まずげに視線をそらしてしまう。

「……お前と行った方が勝率が上がる。それだけだ。遅いと思ったら一人で行く

からな」

キリトのことを一切見ていないレインにはキリトがどんな表情でレインのことを見ているかはわからない。

「わかった。ちゃんとリーファと話し合ってくる。それからアスナ達を助けに行こう」

いつものどこか悪戯で、しかしその中に間違いなく真剣なものも含まれている笑みで力強く言ったキリトは、リーファと約束した場所があるから行つてくると告げ、その場から飛び去っていった。

あとはリーファ次第だろう。

だが、彼女はかなり動揺していたし、この世界に戻ってこない可能性だってある。

キリトがこつちに戻ってきたのは現実世界でケリをつけてこれなかったからなのか、それとも彼らにとつてはこの仮想世界でのほうが語り合いやすいのか。

そんなことを考えていると、キリトが出現した時と同じものが目の前で光り始め、中からリーファが現れた。

「うわあ?!」

レインが目の前にいるとは思っていなかったのだろうリーファは声を上げて驚き、フランスを崩した。

「驚きすぎだ」

大音量に眉を擡めながらレインはこけそうになったリーファの腕を掴んで支える。
「バ、バ、めん」

意外にもごく普通のリーファだったので、レインは逆に眉間のしわを深くさせた。
体勢を整えたリーファは無理やりという感じでへらつと笑う。

「私ね、もうこの世界に来るのをやめようと思うの」

「君はキリトの妹なんだよな？」

「え？あ、うん」

レインは苦しそうに仮想世界に来ることをやめると言ったりリーファをみて、思わず口を開いていた。

それと同時に、ガラじゃないなと思いつながらも、言葉を止めることはやめなかった。

「ならあいつが命をかけて戦ってきた世界の事を知っているだろう。俺はその時に知り合った戦友みたいなものだ」

レインの突然の告白に、リーファが驚いてぽかんと口を開けたが、レインは気にせず言葉を続ける。

「二人の戦士として、俺はキリトを信用している。常に危険な所であいつは戦っていて、飄々とした様子で過ごしてはいたが、無理して明るく振舞っている様子だった。いつも周りのヤツがいつか突然死んでしまうんじゃないかと怯えていたんだろう」

それはきつとアスナだけではなく、クラインやエギルもキリトから感じていただろう。

だからこそ、彼をかげながら心配し、そして見守っていたのをレインは知っている。「俺という時は、俺のほうがあいつより無茶をしていたらしいからぎやーぎやーと横でいつもうるさかったがな」

何故か顔を引き攣らせているリーファを無視してレインは話を続ける。

「そんなあいつがここでは本当に楽しそうに笑っていたんだ。まあ、俺のことに関しては変わらざるさかつたけどな。俺はアインクラッドでは飄々としているあいつしか知らなかったが、こここのあいつの方がキリトらしいと思えた。あれだけ楽しめていたのはリーファ、君のおかけだと俺は思っている」

「でも私……」

「リーファちゃん!!」

突然響いたレインは聞いたことのない声に優しい顔をすぐに顰めた。

しかし、リーファは知っていたようで、聞こえた瞬間は突然のことにビクリと驚いていたが、すぐに意味がわからないという表情をして声のした方に振り返った。

「レコン?!なんでここに?!」

「どうにかこうにかリーファちゃんに追いつくためにやって来たんだ!」

どうかこうにか、という雑な説明なものにも関わらず、リーファが引き攣った顔をしているので、彼がどういふことをしたのかなんとなく察しているのだろう。

「つてあれ？そこの真つ黒の人、あのスプリガンとは違う人なんだね。つていうか、あいつはどうしたの？」

一瞬、スプリガンとは誰のことかと思つたが、リーファの表情が一変して暗くなつたので、おそらくキリトのことなのだろうと察する。

「私、あの人に言つちやいけない事言つちやつたの。だから——」

「リーファちゃん！」

突如現れたレコンと呼ばれる少年が、突然でかい声を出してリーファの両手を掴んだので、リーファはぎよつとして言葉を止めた。

「僕、いつも元気なリーファちゃんに勇気を貰つてた。だから、笑つてない君は見ていられない。だから……だから、僕が君の笑顔を守るよ！リーファちゃんの、直葉ちゃんの事が好きだから！」

一見、弱々しい風貌の少年が、レインがいるのにも関わらず大声で告白したことに、レインは少年を見直した。

が、戸惑っているリーファに向かつて口を突き出してキスをしようとし始めたのをみて、ただの馬鹿だということをすぐに理解し、レコンの頭に無言で手刀を落とした。

「いでっ!」

「れ、レインさん?!」

「何奴?!」

先程までの空気が一変してしまったのと、レコンの馬鹿さ加減に思わずため息がでる。

「何奴、じゃない。女の子にいきなり何してるんだ」

「なにつて、ここはあとには僕の勇気だけって場面で、いでっ!」

先程よりも強めの手刀を再びレコンの頭にお見舞いする。

レインがNPCに設定するさされているからか、それなりの強さだったのにも関わらず犯罪防止コードが出ることは無かった。

「お前のことをよく知らんが、馬鹿だということにはわかった」

「初対面の人にバカって言われる筋合いはないんですけど!! っていうか誰なんですか!」

「うるさい」

ただでさえややこしい状況なのでレインは視線もつかって無理やり黙らせた。

言葉も出てしまっているのは珍しく彼ももやもやとし始めているのだろう。

緩んでしまった空気を変えるかのように、レインは真剣な面持ちでリーファをみた。

「ただ、こいつの言うことも全てが間違っているわけじゃない。あいつに帰れと言われて言い返していた君はどこに行った。俺をNPCだと思っていた時でさえ言い返してきた君はどこに行った。あの真つ黒のバカは真正銘の馬鹿だからハッキリ言ってやらんとわからん奴だぞ。それに、兄妹が向き合わずに他に誰と向き合うというんだ」
ガラでもない。

そんなことを思いながらも口から出たのはリーファの背中を押すような言葉だった。

リーファが驚いているような表情をしているのを見て若干後悔をしたが、口に出したことを無かったことにする性質でもないので、ただリーファがどうするのか答えを待つ。

少し俯いたリーファだったが、すぐに顔を上げたときにはいつもの調子に戻った様子でにっこりと笑う。

「二人共ありがとう。私ちよつと行ってくる!!」

いつもの調子に戻ったリーファはすぐに飛びたって行ってしまった。

「リーファちゃん?!」

追いかけてようとしたレコンの襟をため息をつきながらレインはむんずと掴んで止める。

「ちよつと! あんたさつきから何なんですか?!」

「ただの腐れ縁でここにいるだけだ。とにかく、あんたは邪魔にしかならんからここで大人しく俺と待っている」

「いやいやいや！よく分からないん．．．．．ってその白いカーソル．．．．．もしかしてグラウンドクエストの鍵?!え?!なんで?!あだっ!」

レインは再び何も言わずにうるさいレコンの頭に手刀を落とす。

先程までとは違う意味で、さっさと戻ってこいと願うレインだった。



「．．．．．なにやってんの?」

「お前達が帰ってくるのを待っていただけだ」

一応気配で帰ってきたことを知っていたレインはごく普通の様子で、キリトと共に帰ってきたリーファの問いに答えた。

「それを待っていただけと言えるお前の思考がわからないんだけど」

よく見ればどこか似ているげんなりと表情の二人を見て、レインは兄妹だということとを再認識する。

「さて、遊びは終わりだ」

何事もないかのように振舞っていたレインは、あなたに反撃してやる、と言い出してからずっとレインを殴ろうとしているレコンの攻撃を避けていたの止めて、あっさりとしてレコンの頭に手刀を落とした。

「あだっ!」

表面に衝撃をというより、中に衝撃を与えてくるレインの攻撃を知っているキリトはふらふらとその場で倒れるレコンを哀れな目でみていた。

「で、どうするんだ?」

二人の様子からきちんと仲直り出来たことを理解したレインはさっさと話を進める。

「世界樹を攻略する」

「ええ?!」

キリトの発言に声を上げたのはレコンだった。

意外にもしぶとい奴のようでレインはめんどくさいと言わんばかりに顔を顰める。

「もちろん私とレコンも一緒にね」

「えええ?!」

不敵な笑みでリーファが言うと、いつの間にか頭数に入れられてしまっていたレコンはさくらにうるさく喚く。

「こいつが役に立つとは思えないんだが」

「大丈夫よ。私とレコンは基本的にあなた達のサポートするから。残念だけど、二人があんなにもやられたガーディアンに私一人が加わっても意味は無いだろうしね。だから私とレコンは二人の治癒魔法に専念するつもり」

まあそれなら、とレインはしかめっ面のままではあるが納得する。

「こいつも根性だけはあるようだしな」

「つていうか、この人グランドクエストの鍵なんでしょ？治癒魔法いらんじやない？死なないんでしょ？」

レコンのそんな言葉に、キリトとリーファは顔を引きつらせ、レインは呆れ顔になった。

馬鹿だとおもって放置していたが、変に頭が働くようで、説明するのも億劫なところをついてきたのだがから三人の反応は当たり前前だろう。

「ユイ、いるか？」

どうにか話を逸らそうとキリトがユイに声をかけると、キリトの胸ポケットから勢いよくユイが飛び出してきた。

「うわ！それナビゲーションピクシー？はじめてみる！可愛い、っ！」

ユイに詰め寄ったレコンの語尾がにごったのは、リーファとレインの手刀が頭にクリーンヒットしたからなのと言うまでもない。

あまり無駄話をするレコンがうるさいと判断したレインたちはさつさと世界樹の中に入っていた。

キリトとレインは剣を構え、リーファとレコンは治癒魔法の準備を始める。

「さつきと同じように半数以上が俺のほうに来るだろうが、お前は気にせずに進め」
「あの鎖が出たときはどうする」

鎖、という言葉聞いて、剣を離れた瞬間に現れ、自分を捕らえた鎖を思い出して顔をしかめる。

「あれは俺が剣を離しさえしなければ出てこない。たとえあれにつかまっても世界樹の上に移りもつかつて戻されるだけだ」

なら、苦勞してこのドームを攻略しなくてもいいのではないかとも思うが、オベイロンのところに言った瞬間、システムに全てを支配されて完全に身動きは取れなくなるし、下手をするとキリトの邪魔になる可能性だってある。

「できるだけ、そうなることは避ける。だが、もしもあれが出てきたとしても俺にかまうな。俺達じゃどうにもできないやつだ」

キリトは一瞬苦しそうに顔をしたが、すぐに真剣なものに変わって上を見上げた。

他に交わす必要がないと判断したレインも上を見上げる。

「準備できたよー!」

リーファの声を聞いた二人は、合図をしたわけでもないが、完全にシンクロした動きで飛び上がった。

一度目の特攻から短期決戦に持ち込まなければ、あの尋常じやない量の騎士達を掻いて潜って天井までたどり着けるとは思えないため、レインは遠慮なくスピードを上げた。

しかし、上げば上げるほど、騎士達の量は多くなり、真ん中あたりまでたどり着いたときには周りを囲まれ、頭上には壁のような量の騎士に埋め尽くされていた。

そんなことになってしまつては、さすがにレインもキリトも足を止めるしかなくなつた。

完全に進めなくなつてしまつた二人は、互いに騎士達を蹴散らしていく。

斬撃を飛ばして同時に何体もとめながらも、剣では一撃でほふるレインと、自身の身長ほどある大剣をかすむようなスピードで振り回し、時には体術で騎士の頭を吹き飛ばすキリトの動きは間違いなく人間の域を超えている。

そんな二人の動きでも周りを埋め尽くすほどの騎士を掻いて進めない。

レインは斬撃を飛ばしながら舌打ちをする。

本来の傾国の剣であれば、自分の魔力で斬撃の威力を変えることができたのだが、シ

システムに過ぎない今のこいつではそこまでの威力を發揮することができない。

そのとき、ふと自分の中にある魔力を思い出した。

シエルファが自分を飛べるようにするために残してくれた魔力だ。

これを元にか魔法を使うことはできないか考え始める。

いつも突然現れる、本当の傾国の剣の魔力にシステムによる鎖さえもどうにかしてしまつたらしいシエルファの魔力。

この世界で魔力が使えないわけではないのだ。

ただ、自分が使おうと思つても自由に使えないだけで。

「パパー・飛行時間の残りが少なくなってきましたー！」

敵を蹴散らすことに集中していたから知らぬ間にそれなりの時間がたつてしまつていたらしい。

事実、レインもできるだけかわしてるとはいえ、何度か身体を切られては治癒魔法をかけてもらつていた。

時間がないが、どうにかシエルファの残してくれた魔力を元に本当の傾国の剣をもう一度この仮想世界に出現させるためには時間がある。

キリトに時間稼ぎを頼みたいところではあるが、二人でようやく均衡を保っている状態でそんなことをするのは愚行だということぐらい考えなくてもわかる。

「戦いながらやるしか——」

気合を入れるためにわざわざ口に出そうとした瞬間、下のほうから炎が巻き上がり、キリトとレインの周りにいた騎士を何体かに直撃した。

突然のことに思わず下を向くと、竜に乗った人や甲冑を身にまとった多くの人が出た。

何事かとリーファをみると、彼女の隣には領主と名乗っていたサクヤとアリーシャがリーファに声をかけている。

このタイミングに見事駆けつけてくれたらしい。

キリトを確認すると、彼も状況を把握したようだった。

「キリト……少しでいい、集中するから援護頼む！」

これだけの人がいればたとえ自分に向かってくる騎士の数が多くてもどうにかなると考えたレインは、キリトがうなずいたのを確認すると、傾国の剣を下段に構えて目をつぶり、全力で魔力を手繰り寄せる。

強く求めたときに来てくれたのだ。

自分の中のものを爆発させた時に来てくれたのだ。

レインはふわりとどこか懐かしく、力強いそれを感じ取った瞬間、目を開いた。

「来いっ!!」

叫んだ途端、溢れかえる魔力を自分の中に感じる。

それを懐かしむこともせず、すぐさま青いオーラを纏い、ブウウウウンと羽虫が飛ぶような音を立て始めた傾国の剣に自身の魔力を注ぎ込む。

「キリト！俺の隣まで来い！」

レインの様子に一瞬戸惑ったキリトだったが、さすがアインクラッドの最前線で戦ってきただけの事はあつて切り替えは早く、すぐにレインの隣に着いた。

「どうしたらいい」

「今からありつただけの力を飛ばして半数以上削る。ただ、これをした後はさすがの俺も動きが鈍る。できるだけ俺もスピードを出して飛ぶが、遅かったときは引つ張つてくれ」

「わかった」

理解の早いキリトに感謝しながらレインは上を見据える。

「はああっ!!!」

彼には珍しく、声を上げながら剣を力強く振った。

ゴオオ、という音を立てて振られた剣に、何事かとその場にいた全員が気をとられ、静寂に包まれた。

その静寂は嫌に長く続いたが、何かが頭上の騎士の群れにあたり轟音を立てて騎士を

紙切れのように吹き飛ばし、そこに風穴を開けた。

システムによって斬撃が飛んでいる瞬間が見えるものではなく、何も見えずただ突然に襲い掛かる斬撃。

これこそが傾国の剣による遠隔攻撃の本来の姿だ。

それは、システムによる攻撃ではないためか、データそのものに直接ダメージを与えているようで、遠隔攻撃の余波を受けただけの騎士達も動きをとめ、四散していく。

先ほど身体に溢れさせた魔力の大半を今の攻撃に費やしたレインはぐつと倦怠感に襲われるが、先ほどの現象にぼけつとしていているキリトに声をかけて気合を入れなおす。

「いくぞー！」

「あ、ああー！」

いまだ何が起こったのか理解できずに固まってしまっている人たちを残し、二人はありったけのスピードでレインが空けた風穴に突っ込んだ。

雲のようになっていた騎士の群れを抜けた先の扉に着地した二人は、たどり着いても一向に開かない扉に剣を突き立てた。

「何で開かない！」

「パパ！これはクエストフラグで閉じられていません！管理者権限によってロックされています！」

ユイの言葉にキリトの表情が苦々しいものになったのをみて、待つていれば開かないということがわかったレインが再び剣を構えた。

「俺のこれならこじ開けられるかもしれん」

ましになったとはいえ、いまだに身体には倦怠感が残っているが、気にしている暇はない。

いまでも騎士達は出現し、レインとキリトを阻むべく飛んできているのだ。

「いや、待て、まだ手はある」

何かひらめいた様子のキリトはポケットから小さな板を取り出して、ユイに差し出した。

「ユイ、これ使えるか？」

「やってみます！」

そつとその板に触れたユイの腕に何かが流れるように光る。

「パパー！レイン！アクセスコードを転写するので私に触れてください！」

言われるとおり、レインはこちらに伸ばされたユイの手に手を伸ばす。

そして、二人がユイに触れた瞬間、三人の姿はそこから消えた。



転移が終わったのを感じ、目を開けると、ある意味では見慣れた白い壁に覆われた廊下に立っていた。

隣にはキリトとなぜかピクシーサイズではなく、白いワンピースを着た人間サイズのユイもいるので無事に世界樹の上にこれたということだろう。

「……………なんだこっちは」

「こっちはもともと俺が捕まっていたところだ。実験のために戦わされてた場所と同じ壁だから間違いないだろう」

ここから逃げることでできなかつた自分の不甲斐なさにレインは顔をしかめた。

「ユイ、アスナの場所はわかるか？」

隣でキリトがどこに行くべきなのかユイに聞いているが、レインは違う声に耳を傾けていた。

アルンに着いたときにも聞こえたシエルファの呼ぶ声だ。

自分の中にあるシエルファの魔力も彼女の本体に反応しているのか、ざわざわとしているのを感じる。

これなら迷わずにシエルファの元にたどり着けるだろう。

「レインはどうするんだ？」

不意に声をかけられたが、レインはシエルファがいるであろう方向から目を逸らすことをしなかった。

「俺は彼女を助けに行く。俺のGM権限に比べれば楽に助けられる相手だから——」
「俺達も一緒に行く」

つつきりアスナのところに直進すると思っていたキリトの発言に、レインは目を開いてキリトを見た。

悪戯な笑みを浮かべてこちらを見ているキリトにアスナとのところに行けと言っても無駄なのはすぐにわかったので、レインは小さく息を吐いた。

「わかった。できるだけ急ぐぞ」

そういいながらも、ユイのスピードにあわせてゆつくりと走るレインをキリトが微笑ましく見ているのを、レインが気付くことはなかった。

壁をぶち破って進む気だったレインは、ユイが次々に壁に隠されていたらしい扉を開けていく様子を見て、目の前の少女がいてくれて本当に良かったと心から思った。

世界樹の中で己の中に入れた魔力は現在も存在し、傾国の剣も見た目だけではなくなっている。

これであれば、遠隔攻撃でシステムに守られているはずの壁を壊すことができるの

は、はじめてオベイロンと出会ったときに透明な壁を壊したこともあるので知っている。

しかし、そんなことをすれば轟音をたて、自分の場所を知らせているようなものなので必ず何か警備的なものがやってくるというのは不可避だった。

ユイのおかげでそんなこともなく進んでいるのだから、感謝しないわけない。

ぼんやりとそんなことを考えながら進んでいると、何個目かになる扉をくぐった瞬間、急にシエルファの魔力を強く感じ始めた。

「ハイ」だ」

扉のすぐ横の壁を見て、レインはつぶやく。

レインの真剣な様子に、ユイは何も言わずに壁に触れて移動する。

そんなユイにレインもキリトもついていくと、何も無いようなところでユイは歩みをとめた。

「あけます」

先ほどまで、壁に触れては何も言わずに開けてきたユイが、意を決したようにレインに告げた。

システムについて詳しい彼女だ。中から感じるものに対して彼女なりに何か思うところがあるのだろう。

「たのむ」

優しくユイの肩に触れてお願いすると、ユイはこくりとうなずいて重そうに扉を開けた。

「レイーン!!」

扉が開いた瞬間、シエルファの声がレイーンに届いた。

反応の速さにレイーンは苦笑いをして木の中のような部屋の中心に鎮座する透明な箱に閉じ込められているシエルファの元に駆け寄った。

「遅くなってすまない」

「いいえ、レイーンが助けに来てくれただけで私は幸せだから」

満面の笑みでそういうシエルファに、どう返していいのか変わらないレイーンはとりあえず微笑みだけを返す。

「じゃあ、壁を壊すからちよつと離れてくれ」

素晴らしいながらレイーンが剣を構えると、シエルファは満面の笑みのままおとなしく離れてくれる。

大丈夫そうな場所まで彼女が移動したのを確認したレイーンは、大上段から剣を振り下ろし、まもなくして透明な壁はあつけなくはじけとんだ。

「レイーン!」

我慢できなかったといわんばかりに飛び込んできたシエルファをレインは抱きとめ、空いた左手で頭をなでる。

「すまん。現実世界に戻ったらこの続きをするから、とりあえずあんたは現実世界に戻ってくれ」

助かったという安堵感に浸りたいという彼女の気持ちを察しつつも、レインはどうかシエルファを自分から引きはがした。

ふとシエルファの顔を見ると、心配そうな表情をしていたのであわてて言葉を付け足す。

「俺もすぐに戻るから」

「………わかったわ。現実世界で待っているわ」

実に嫌そうにシエルファはレインから離れた。

徐々に消え行く彼女の姿から現実世界に戻り始めたのを理解したレインはほっと一息をつく。

「その少年。レインのことお願いね？」

そう最後に残したシエルファは完全に姿を消し、現実世界に戻っていった。

ここで感傷に浸っている暇はないとわかっていているレインがキリトのほうを振り返ると、ぽかんと口を開けて突っ立っていたので、小さくため息をついた。

その横でユイもぼけつとした顔で並んでいる様子が、親子にしか見えない。
「キリト」

レインが声をかけると、びくりと肩を跳ねさせて、キリトは我に返った。
「えつと……」

「話はアスナのところに向かいながらするから先を急ぐぞ。ユイ、アスナまでの道案内をよろしく頼む」

「は、はい！」

ようやく我に返ったユイは、キリトの手を引つ張りながら入ってきた扉の向かいにあった扉のない出口に向かって走っていった。

ちらりと、部屋の隅に押しやられた宙に浮いている水を見たレインは一瞬だけ顔をしめかめたが、すぐにキリトたちを追いかけた。

開け放たれていた出入り口から外に出ると、そこはやはり木の幹の上だった。眼前には見知った空が広がっている。

レインはそれを一瞥してすぐにキリトたちに追いついた。

「さっきの子だが、俺のいた世界の人だ。俺の周りで姿を現したり消したりする人でな。魔人と呼ばれる種族らしいんだが、実体を持っていないようなんだ。俺も詳しいことを知らんが、無理やりこの世界にはない力でここまでやってきたらしい」

レイン自身も彼女のことを詳しく知っているわけではないのでぎっくりと説明する。

「じゃあ、さつきからお前がシステムガン無視でぶっ放してるやつもその、この世界にない力つてやつか？」

「そうだ。俺もさつきまで使えなかつたし、今もそれなりに意識しないとすぐになくなる」

「よくわからないけど……それがあればある程度システムを無視できるって事か？」

なんとなく話を通じたような、通じていないような微妙な顔をしたキリトは、眉間にしわを寄せながら聞いてくる。

まあ、気になるのは当たり前だろう。

今喧嘩を売っているのはこの世界を支配している王で、都合のいいシステムがあるのはレインは体験済みだ。

「物を壊すことに関してはシステムを無視できる。だが、あいつは一度俺の意識を強制的に止めてきた。この剣にあいつからの干渉を阻むシステムがあるから今は大丈夫だろうが、これを手放したらどうなるかはわからん。あの鎖が飛び出してくるかもしれんし、意識を無理やりとめてくるかもしれん。だから、基本的に俺には何も期待するな。ここじゃ枷が多すぎる」

もし、オベイロン本人が出てきたとすると、自分は足手まといになる確立のほうが高い。

真剣な面持ちでキリトに伝えると、彼も真剣にうなずいた。

しばらく木の枝でできた道を走り続けると、鳥かごが見え始めた。

それが視界に入った瞬間、ユイの走るスピードが上がったので、そこにアスナがいるのはすぐにわかった。

三人が家族であることを知っているレインは少し走るスピードを下げる。

家族の感動の再会に自分は邪魔だと思ってしまうから、レインの行動だった。

キリトもアスナに気を取られているから、レインが徐々に離れていることに気がついていない。

十メートルほど離れて、レインは走るのをやめてのんびりと歩き始めた。

急いでいるとはいえ、三人の再会を少しでものばすためだった。

しかし、それが悪手だと分かったのは、少し離れたところで再会を果たす家族を微笑んでいるレインの耳に、嫌に響く指を鳴らした音が聞こえたときだった。

その音を聴いた瞬間、レインは駆け出そうとしたが、それはすでに遅く、レインの首に何かが巻きついてぎりぎり締り始められた。

「ぐっ……かっはっ！」

久しぶりに感じる、容赦のない痛みにはレインは膝をついた。

ぎりぎり締めてけるなにかを破壊するために剣に手を伸ばす。

「させるわけないだろお？」

嫌にねつとりとした声が聞こえた瞬間、身体に衝撃を感じたレインは受身を取ること
もできずその場に倒れこむ。

「苦労させるだけならまだしも、貴重なサンプルを逃がしてくれるし、へんな虫もつれてくるし」

朦朧とし始める意識をどうにかつなぎ止めながら突如現れた男——オベイロンを一瞥した後、キリトたちを確認すると、それなりに距離が離れていたせいでこちらの異変には気がついていないようだった。

ここは自分がどうにかしなくてはいけないと、無理やり身体を起こす。

首が絞まっているだけだ。この世界で呼吸いらぬ。

キリトたちに声をかけられないのはいたいが、異変を伝えられないわけではない。

「ん？お前一体何を——」

「はあ！」

レインは今までになく全身に集中してオベイロンでは絶対にとらえられないスピードで剣を抜いて斬撃を飛ばした。

その斬撃はキリトたちのいた鳥かごに直撃して騒音を立てた。

おかげで、キリトたちはこちらの様子に気がつき、キリトが慌てて剣を抜いた。

「レイン！」

「くそつ、無駄な足掻きを」

オベイロンは再び指を鳴らす。

次は一体何を、と思っている間に、妙な感覚が身体に走り、世界が暗転した。

一瞬、気を失ったのかと思つたが、首に締め付けられている感覚がいまだにあるので、ただ自分達がいた場所が一面が黒に塗りつぶされた場所に移動させられただけだということを理解した。

「さて、異邦人の彼には罰を与えないとね？」

「そんなことさせるか!!」

離れたところからキリトがこちらに向かって駆け出したのが視界の端で見える。

「邪魔しないでくれるかなあ？」

明らかに苛立っている様子のオベイロンが指を鳴らした瞬間、キリトは何かを押しつぶされるようにその場に倒れこんだ。

「これはね、今度のメンテナンスで追加する予定の重力操作の魔法だ。なかなかだろ？」
べらべらとしやべりながらオベイロンはキリトに近づいていく。

キリトから少しはなれたところではアスナも苦しそうに身体を地面にべったりとついているので、彼女もその重力操作の魔法を受けているのだろう。

今動けるのは自分しかいないと判断したレインは、地面を蹴って剣を持ち上げた。

「君がそうするのは分かっているんだよ」

そういながらオベロンが指を鳴らすと、剣を離れたときに出てきた鎖が出てくる魔法陣があらわれた。

すぐの中から鎖は出現し、動きの鈍っているレインを簡単に絡め取る。

一度経験したレインは全身に力を入れて衝撃に供えた。

「うぐっ！」

予想したとおり、電撃による衝撃が全身に走る。

意地でも意識を手放すものかと思っていたレインだが、いつまでたっても終わらない痛みに絶えれず、気を失うまでそんなに時間はかからなかった。



がつくりと首を落としたレインに視線を奪われていると、突然不快感を背中に感じる。

「あがつ！」

それが、自分が持っていたはずの剣をいつの間にかオベイロンが取っていたようにそれを背中に刺された気がついたのは少し時間がたってからだった。

「システムコマンド、IDキリトのペインアブソーバーをレベル六に」

「……うあつ?!」

「キリト君！」

冷たい須郷の声が耳に聞こえた瞬間、今まで感じたことのない傷みをキリトを襲った。

あまりの痛みに声は出ず、心臓を鷲掴みにされているような感覚に全身が固まる。

「安心したまえ。まだ六だ。あのサンプルに比べたら痛くないさ。まあ、徐々に下げていくがね」

そういわれた瞬間、不思議と急激に痛みは薄まっていった。

彼は全身を斬られても、雷にうたれても、片腕を失っても、何があっても全力で抵抗していた。

ならここで自分が折れるわけにはいかない。

立ち上がるためにキリトは両腕に力をこめる。

「まだ抵抗できるのか。システムコマンド、IDキリトのペインアブソーバーをレベル

四に」

嫌に冷静な須郷の声が耳に届いた瞬間、さらに痛みが増した。

今まで感じてこなかった本当の痛み。しかしそれは本当よりもまだマシなもの。

そう思っても、キリトの腕の力は弱まり、どれだけ力を入れても持ち上がらない。

「実はね、そのサンプル君の身体の場所が分かったんだよ。だからね、君達がここに来たからって別に怒るつもりはないのさ。むしろ、彼をつれてきてくれてありがとう、と言いたいところだよ。でも、アスナ君を連れて行こうとするのはいけないことだから罰は与えないとね」

にやりといやらしく笑う須郷がキリトの視界に入る。

そんな彼が、アスナの元に向かった瞬間に、嫌な予感しかしなかった。

必死に声を上げながら、腕にも足にも力を込めるがびくりともしない身体に、自分の弱さに、あきれる。

アインクラッドではアスナと共にヒースクリフを倒し、アルヴヘイムではレインと共に世界樹を攻略した。

そのとき、自分は何ができた？

アスナはシステムで動けなかったはずの身体を動かしてかばってくれた。

レインはシステムを無視してこの世界にはない力を使って道を切り開いた。

自分は、一体何をした？

何もできていないではないか。

なら――

『君も彼らを救うためにシステムを超えてはどうかね？』

そんな言葉が頭に響いた瞬間、キリトは不思議と全身に力が入り、立ち上がることができた。

痛みが消えたわけでもない。自分を押しつぶそうとする重力が消えたわけでもない。それでもキリトは立ち上がった。

「なっ?!」

先ほどまでシステムを無視するレインを捕らえたことにより、システムに抗えないはずのキリトたちしか残っていないと余裕だった須郷は、突然起きたイレギュラーに硬直してしまう。

もし、彼がレインを知らなければ、システムに抗えるものなどないと一蹴して何かできたかもしれない。

もし、彼が冷静さを持っていなければ、すぐに何か行動を起こすことができたかもしれない。

しかし、無駄に冷静だった須郷は固まったまま頭を回転させ始めてしまう。

もちろん、頭を働かせたところですからすぐにイレギュラーに対応できるわけなどなかった。

「システムログイン、IDヒースクリフ」

知らないはずのパスワードを口に出しながら、これも結局のところ誰かの力を借りているのではないか、と思う。

『いや、私が貸すのはIDだけだよ、キリト君。今、立っているのは君自身の強さによるものだ』

嫌に冴える頭に静かに低音の効いた響く心地よい声を聞き流しながら、未だに固まっている須郷を見据えた。

二人の視線が混じりあったことで、ようやく須郷は動き始める。

「な、なんだそのIDは!!」

「システムコマンド、IDオベイロンのペインアブソーバーをレベルゼロに」

完全に余裕を失った須郷は喚き始めるが、キリトはただ冷たく見据えるだけだった。

ヒースクリフのIDが使えるということを知り、この世界が茅場が作り上げた異世界から色々の盗んでできた世界ということがわかってしまったからかもしれない。

どこかぼんやりとした視界にこちらを心配する様子のアスナが入って、ようやくキリトは自分の中の色を取り戻し始めた。

「キリト君」

「すぐに終わらせるから待っていてくれ」

優しく微笑んだキリトは先程までは冷たく見ていた須郷を今度は怒りを込めた目で見た。

大切な人を苦しめていたことからの、本当にあそこにあつた異世界を汚されたことからの、誰よりも強く優しい相棒を傷付けたことからの怒りだ。

知らぬ間にコマンドを使って出現させたらしい剣を片手に立つ須郷は怯えた様子でこちらをみている。

現実世界に戻ればただのガキに戻る自分になぜそこまで恐れているのかと、思わず笑えてしまう。

キリトは足元に落ちていた剣を拾い須郷にむけた。

「さあ、決着を付けよう」

キリトから出た声が思いの外低く、重みのあるものだったことに気が付いたのは、彼のことよく知るアスナだけだった。



誰かに呼ばれた気がした。

急に浮上し始めた意識についていけず、レインにしては珍しく、ぼんやりと目を覚ます。

「レイン！」

呼ばれるとともに抱きつかれ、まだはつきりとしめない意識のせいで何が起きているかわからないレインはとりあえず、抱きついてきている人物の頭を優しく撫でた。

「レイン、大丈夫か？」

ようやくまともに視界に入ってきたのはキリトの顔だった。

おかげでぼんやりとした頭が働き始める。

「……アスナは？」

「無事だ」

「一番最初に出る言葉が人を気にする言葉ってところがレインさんらしいわね」

キリトの横からひよっこりと笑顔のアスナが顔を出したのでほっと一息をついた。

ということは、横になっている自分の上に乗る形で抱きついているのはユイなのだろう。

「助けに来たと言っても俺は何も出来ていないがな」

実際、ただ心配をかけただけだ。

ようやく、頭がしつかりと動き始めたので自分に抱きついていているユイを器用に支えながら身体を起こした。

「身体はどうだ？」

キリトに言われて身体に痛みが一切ないことに気がついた。

気を失う前にかかなりの苦痛を感じていたはずなので、何事かとレインは静かに眉間にしわを寄せた。

「一応、お前の痛覚の部分を正常に戻したんだけど、痛むか？」

レインが眉間にしわを寄せたのを、痛みによるものだど勘違いしたらしいキリトが心配そうにレインの顔を覗き込んでくる。

「いや、大丈夫だ。不思議なぐらい痛くない」

「よかった」

辺りを見回すと、鳥かごの場所まで戻ってきているようで、オベイロンの姿はどこにもなかった。

「全部終わったよ」

完全に安心していているキリトを見るに、彼がどうにかしてオベイロンを倒したのだろうことはわかった。

これ以上は異邦人である自分が立ち入る部分ではないだろうと判断したレインは、意

識をいまだ抱きついて離れないユイにかえた。

「ユイ」

優しく声をかけると、涙で顔をぐちゃぐちゃにしたユイがこちらを見上げてきた。

そんなユイの様子に微笑み、優しく涙をぬぐってあげた。

自分のためにこんなにも泣いてくれて、本当に優しい子だと思う。

「レイン、本当に心配しました」

「悪かった」

「無茶し続ける限り許しません」

「………善処する」

戦いで無茶をしないという選択肢はレインの中ではないのでそう言うしかない。

納得していないようすのユイには悪いが、レインは話を進めた。

「キリト、俺はログアウトできそうか？」

「問題ない。俺が今GM権限を持つてるからいつでもログアウトできるぞ」

自慢げに言ってくるキリトに、いつの間にかそんなものを、という視線を送るが、やはりシステムについて理解しきれないレインはすぐに考えるのをやめた。

「じゃあ、頼む。さっさと帰らんとするさいやつもいるからな」

「ああ、あの美人さんね」

シエルファがキリトの中でどんな立ち位置になっているのかはわからないが、どこかじつとりとした目をしたので、どこかぶつ飛んでいる少女、とても思っているのだろう。キリトが右手でウィンドウを操作していると、徐々に自分の周りが光り始める。キリトとリーファがログアウトするときに見たものだ。

「あ、そうだ」

こんなぎりぎりに思い出すなんて、と思いつながらレインは慌ててキリトに声をかけた。

「すまんキリト。もし、アインクラッドで俺のことを知ってる奴や、この世界であった人たちが俺のことを聞いてきたら適当に答えておいてくれ。べつに異邦人だということ言ってくれてもかまわん。特にリーファにはお前の判断で教えてやってくれ」

「それぐらい自分で言えよ」

「悪いが、現実世界に戻ったらできるだけ早く元の世界に帰ろうと思っている」
レインがそう告げると、三人とも寂しそうな表情をする。

当たり前だろう。

住んでいる世界が違うのだ。再び会える可能性はないに等しい。

「なに、俺が帰ったところで今までのことは消えない」

ほとんど視界が白色に埋め尽くされ始めて、ログアウトの時間が近づいてきているの

がわかる。

「それじゃあな」

それだけ最後に告げたレインはユイの頭をふわりと撫で——
完全にレインの視界が白に埋め尽くされた。



ぼんやりとすることなく目を開けたレインの視界に移ったのは、透明な何かとその先のある天井だった。

透明な何かが、アインクラッドに行くときにかぶったナーブギアの一部だと気がついたのは、久しぶりにエクシードや己の魔力を感じてからだだった。

ナーブギアを雑に脱ぎ捨てながら身体を起こして、自分の身体がどれほど変化したのか確認すると、思っていた以上に退化している自分の身体にレインは顔をしかめた。

しばらく、自分がどれほど動けるのかをベッドから降りて歩いたりし、一通り確認してから、ようやく異変に気がついた。

特に自分が注目されているかと思っっているわけではないのだが、自分が目を覚ましたのにも関わらず、誰も来ないのはおかしい。

レインが帰ってくるのを待っているといったシエルファさえも周りにはいない。

何か問題が起きているのだろうかとおもったレインは、久しぶりにエクシードを探る。

仮想世界に来るときに比べると、どこかやりやすくなったそれのおかげで、少しはなれたところで戦闘が起きているのがすぐにわかった。

どうやらシエルファもそこにいるようで、彼女にしては珍しいな、と特にあせった様子もなくレインはぼんやりと思った。

別に歩けないほどでもないし、魔力やエクシードを使えないわけでもない。

それを確認したレインは、ベッドの横にあった自分の服を着て、仮想世界で何度も助けてくれた傾国の剣を腰につける。

その重みで徐々に現実世界に返ってきた実感を感じ、落ちた筋力をエクシードで補いながら、レインは戦闘が起きているところに向かって足を踏み出した。

少年、レイン

時は流れ、五月。

一月に起きたALLOを舞台にした事件に盛大に巻き込まれたレインは未だに日本にいた。

特に深い意味はない。

レインの身体を目当てにやってきたオベイロンこと須郷伸之の手下達が剛やイヴが所属する組織のアジトに攻撃を仕掛けに来たときに、一番暴れたシエルファと目が覚めたばかりのくせに戦闘に参戦したレインが壊したアジトの修繕費分、ここで働くためだ。

おかげで帰る目処がたったのにもかかわらず、レインは五月になっても元の世界に帰れないでいる、という訳だ。

そして、現在もお仕事の真つ最中で、黒のワイシャツと黒のズボンを着こなしているレインは不機嫌な顔でビルからビルへと飛び移って移動していた。

もちろん、腰に傾国の剣が帯剣しているわけはなく、剣を袋に入れて背中に担いでいる。

別に危険があるとかいう話ではなく、レインにとつては持つていて当然のものであるだけだった。

銃刀法違反間違いなしの彼ではあるが、何ヶ月もこの世界に留まり、仮想世界でシテムに触れたレインがこの世界に馴染まない訳がなく、今している行動が見つかればかなりめんどくさくなることぐらいはわかっている。

そんなレインのことを把握したように、ズボンのポケットに入れていたスマートフォンが振動しはじめた。

ただでさえ不機嫌だったレインは、眉間のしわを深くする。

仕方なく、足を止めたレインは誰もいない路地裏に着地して、鳴り止まないスマホを慣れた手つきで操作して耳に当てた。

「なんだ」

『なんだじゃないから?! 偶然街に出てた仲間からお前がビルの上を移動してるって連絡来たんだけど!!』

「仕方ないだろ。街中を歩いたら声をかけられて面倒なんだぞ」

「……………イケメン滅びろっ!!!」

少しの沈黙の後に突然叫ばれたレインはスマートフォンから耳を離し、ぐだぐだと続く小言を無視して通話をきった。

すぐさま通話相手だった剛の電話番号を着信拒否に設定して、続いてマップを開いた。

その様子はごく普通の青年にしか見え、狂人的な肉体と魔法というこの世界にないはずの力を使う異邦人には見えないだろう。

路地裏から何事もなかったかのように出たレインは、今度は道路をつかつて目的地に向かつて足を進め――

「そこのお兄さん！モデルやらないかい？」

だからビルの上を移動していたんだ、と一瞬不機嫌顔になったが、すぐにさわやかな笑顔に変え、声をかけてきたスカウトと顔を合わせた。

「すみません。今から知人の職場に荷物を届けたいといけなくて」

それだけ告げたレインはその場からすばやく駆け出し、人ごみに入った瞬間に気配を消して走り去った。

その後も何度か声をかけられたレインはコンビニに寄ってマスクを購入し、ただ普通に流していた髪の毛をぐちゃぐちゃにかき乱してようやくまともに進むことができた。

スカウトや逆ナンから走って逃走を繰り返したこともあり、目的地である坂崎の勤め先をスマホで確認した。

逃げながらも坂崎の勤め先の方に向かっていたこともあつてか、後十分もかからない

であろう場所まで来ていたらしく、レインは面倒から逃げるように足早にその場から移動した。

小走りで移動したこともあつてか、五分とかからず坂崎の勤め先である学校にたどり着いたレインは無遠慮に門を潜って構内へと入っていった。

間違いなく部外者でマスクをしているし髪の毛はぐちゃぐちゃ。さらに全身真っ黒のレインをその学校の生徒が不審に思わないわけがなく、ぎよつとした様子でレインをみているが、レインの異様な空気に誰も声をかけることはしなかった。

当のレインは他人を気にするわけもなく、エクシードで感じ取つてどこにいるかわかっている坂崎に彼が忘れたスマホを届けたらすぐに修練場に戻ることしか考えていなかった。

「坂崎」

扉を開けながら目的の人物の名前を呼ぶと、何かが倒れる音とそれに続いて物がたくさん落ちる音が聞こえた。

そして、ばたばたとあわただしく目的の人物である坂崎は白衣が着崩れたままレインに駆け寄ってきた。

「君はもうちよつと場所を考えるとかできないのか?！」

「スマホを忘れたあんと、それを俺に届けさせた剛がわるい」

さらりと流したレインはポケットに突っ込んでいた坂崎のスマホを白衣のポケットに雑に突っ込んだ。

「いや、まあ……っていうか土足?!ちよつとまつて。あのく、スリッパの場所知りません?」

「まて、俺はすぐに帰——」

「教員室に突然現れて先生方を困惑させたんだ。修繕費代に含んであげるから今日はここで少し手伝って行きなさい」

ふと、坂崎の背後をみると、こぼしたコーヒートを拭く人や落とした書類を拾い集める人が見えたので、レインは小さくため息をついて靴を脱いだ。

それからレインは先生方から頼まれる事柄を淡々とこなした。

といつても、邪魔になつてゐる木の枝を切つたり、校舎の壁のペンキ塗りだったり、重い荷物を運んだりと大したことはしていない。

たとえばそれが、極太の木の枝でも、校舎の四階部分の外の壁でも、パソコンの本体が五個ほど入つたダンボールでも、レインにとっては大したことではない。

最初は先生方から、それは無理だ、危険だと止めが入つていたが、放課後に差し掛かるころには、

まあ、彼なら

という不思議と納得し始めてしまっていた。

そして、現在は坂崎に頼まれ、彼と同行しながら授業で使うらしい何かの部品が大量に入ったダンボールを運んでいた。

「もう放課後だし、これが終わったら帰ってもらっていいよ」

につこりと笑いながらそう言った坂崎はなにやら楽しそうで、逆にレインは眉間にしわを寄せる。

しかし、ぐちゃぐちゃにした髪の毛で目元は隠れ、口元もマスクで隠れているので坂崎にはレインの表情が全く見えていない。

おかげで坂崎はレインのことを気にせず話を続ける。

「実はレインがまた来てくれないかって言われててね。来るかい？」

「来るわけないだろ。何をするにも人が集まってくるし来たくない」

レインは何をするにも人が集まって実に居心地が悪かったのを思い出してしかめ面をする。

「坂崎せんせい」

背後から突然聞こえた声にレインはぎよつとし、髪の毛の隙間から坂崎を睨むと、彼はにっこにここと笑っていた。

そこでようやく、この面倒な今日が全て仕込まれていたことに気がついたレインは内心でため息をついて全力で自身の空気を別人のものに変えた。

そんな様子のレインにくすりと笑った坂崎は足を止めて声をかけてきた生徒のほうに振り向く。

「なんだい、桐ヶ谷君」

「いや、実は今日の授業の……って俺邪魔でしたか？」

間違いないくこちらに興味を示し始めているのは、背中に受ける少年の視線から伝わってくる。

「あの人って誰なんです？もしかして、今日みんなが騒いでたお手伝いさん？」

「そうそう。僕の知人でね、学校に来たついでにいろいろしてもらったんだよ」

背後から感じるそれに、関わったら間違いなく面倒なのは目に見えていたのでレインは我関せずを貫き通して事前に聞いていた荷物を置きに行く教室に向かって進み始めた。

「ちよつと、どこに行くんだよ」

「……」

「レインってば」

返事を返せば、声を出さずになると思ったレインだったが、それが間違いだったと

認識したのはわざとらしくわざわざ名前を呼んできた坂崎の声が聞こえてからだ。そこで走り出せば逃げ出せたかもしれない。

だが、レインはそこで足を止めてしまった。それはしまったと思ったからか、坂崎のわざとらしさにむかついたからなのかはレインにもわからない。

ただ、なぜかレインは足を止めてしまったのだ。

その隙に、坂崎に声をかけた少年はレインの前に回りこみ、髪とマスクに隠された顔を覗き込んでくる。

「……レイン？」

目の前で疑惑と期待の目でこちらを見てくる少年をみて、やつぱりこいつだったかとおさくため息をもらしたレインはぐちゃぐちゃにしていた髪の毛を整え、マスクをはずした。

「久しぶりだな。キリト」

アイコンクラッドでみた彼よりも少し成長したらしいキリトにレインは不機嫌な顔で言葉を交わした。



キリトこと桐ヶ谷和人は昼ごろからざわめく学校に何かかと思いつつも特に興味は示さなかった。

やれ木の太い枝をサバイバルナイフ一振りで切り落としたお手伝いさんがいるのだの、やれ命綱なしで四階の壁を修繕しているお手伝いさんがいるのだの、ダンボールが歩いてただの、どれも信憑性にかける話題だったからだ。

なんだかんだ、リアリストである和人はきつとS A Oで非現実に触れてきた生徒が現実が退屈に感じ始めて面白半分で流したデマだろうと思っていたのだ。

なので、興味を示さなかったし、深く詮索することをしなかった。

しかしである。今日のオフ会の前にどうしても坂崎という教師に聴きたいことがあったために、放課後になってから校門前に明日奈を待たせてまで来て見れば、そこに無駄に現実世界に馴染んだレインがいたのだ。

最初は、坂崎先生の隣になにやら真っ黒でぼさぼさの男がいるなど思った程度だった。

見慣れないその姿に、今日学校を騒がしているお手伝いさんはこいつか、と観察していると、そそくさどこかに行こうとしたそいつを坂崎先生が『レイン』と呼んで呼び止めたのだ。

その瞬間、目の前の真っ黒の背中と、アインクラッドとアルヴヘイムで見慣れ、すで

に遠い過去になってしまった頼もしい真つ黒の背中がぴったりと重なり合った。

あわてて回り込んで顔を見れば、髪とマスクでほとんど顔が見えなかったが、完全に一致し待っている姿に意識せずにも名前を読んでいた。

そして、目の前の男は片手で重そうな荷物を抱えたまま、空いた片手で髪の毛を整えてマスクをはずし、もう見ることはないと思っていた顔で感動などクソもない挨拶を交わされた。

目の前を歩くレインと坂崎の後ろをぼんやりと思い出した和人は、昼からの騒ぎが目に映るように想像できた。

「で、お前は何で着いてくる。さっさと用事を済ませてさっさと帰れ」

急に振り返って実に冷たい言葉を投げかけてくるレインに和人はあいつも変わらず、無表情だな、という感想しか出てこない程度には彼の冷たい態度には慣れてる。

いや、むしろこっちの方がさらに無表情ではないだろうか。

「……………おい」

ぼけつとレインをみていると、これも見慣れた不機嫌な顔でレインは和人のことを見ている。

「残念ながら俺の用事は更新されたんだ」

「だからって俺についてくる必要性はないだろ」

「いやいや、あるんだなこれが。実は、この後アインクラッドの知り合い何人かと集まるんだよ。そこにあんたも連れてくつもりだ」

和人がにやりと言くと、面白いぐらいにレインが顔をしかめた。

隣では坂崎がにこにことしているので、もしかしたら彼がわざとこのタイミングでレインをここに呼んだのではないかと疑ってしまう。

なにせ、異邦人であるレインの現実世界での知人だ。間違いなくいろいろと裏のある人物なのだろう。

裏社会的ななにかには巻き込まれたくはないので、坂崎については深く知らないでこうと決めつつ、レインに視線を戻した。

「……俺は行かないぞ」

「でも君、この後なんも予定ないよね」

にこにこしながら坂崎がすぐにレインの逃げ道をなくしていく。

「それと、桐ヶ谷君についていったら、僕の独断で修繕費をチャラにしてもいいよ」

修繕費と聞いてピクリと反応したレインを見るに彼がまだこの世界にいた理由がなくわかってしまった和人は顔を引きつらせる。

「……今回だけだからな」

それなりに長い時間悩んだレインは苦渋の決断といわんばかりに顔を顰めながら承諾してくれた。

全力で拒否する場合はあの手この手で無理やり連れて行く気だったので拍子抜けだったが、あつさり承諾してくれるならそれはそれでいい。

「よっし。じゃあ、その荷物運んだらさっさとこうぜ！明日奈を門で待たせてるし、ささと頼む！」

「いや、後は僕が運んでおくから行つといで」

「やっばりお前わざとだな？」

「なんのことかな？」

笑顔の坂崎と不機嫌なレインが互いに無言で顔を合わせた後、レインはため息をついて床にダンボールを置いた。

「後で騒いでも手伝わんからな」

それだけ言い残したレインはそれまでは普通にしていた髪の毛を再びぐしゃぐしゃにかき乱してマスクをつけ、すでに学校の構内図を把握しているらしく、迷うことなく校門の方に足を進めた。

「せんせつ！ありがとうございます！」

「いやいや、彼があんなだからお節介もしたくなるのさ。じゃ、楽しんでおいで」

笑顔でそういう彼が裏社会に関わっているようには全く見えないなど重いながら人はあわててレインを追いかけた。

そのとき後ろで、おもっ?!ちよつと、レイン!やっぱり待つて!という情けない声が聞こえてきたが、気のせいだろう。



「ねえ、何でレインはそんな髪の毛乱してマスクしてるの?全身真っ黒でそんなだと不審者にしかみえないんだけど……」

突っ込めずにいた和人の変わりに明日奈が少し聞きにくそうにだがレインに聞いた。和人と明日奈とレインは、エギルが経営しているダイシーカフェに向かって歩いている。る。

まるで付き人かのような和人と明日奈の後ろを歩いていたレインに明日奈が声をかけたのはあと十五分もすればダイシーカフェに着く、というあたりだった。

マスクと髪の毛のせいでレインの表情はわかんない。

「こうしないとまともに道を歩けないだけだ」

「もしかして、絶賛命狙われ中……的なの?」

「違う」

須郷に異邦人だからという理由でつかまっていたレインだから命を狙われてもおかしくないと思つた和人だったが、以外にもそうではないらしく、即答で否定された。

「じゃあ何だよ……後ちよつとでエギルの店につくし普通にしたらどうだ？」

「……まあ、あとちよつとなら大丈夫か」

何が大丈夫なのか分からないが、マスクを取つて髪の毛を整えたレインはどうやら周りを気にしているようだった。

きちんとレインの顔を見ると、仮想世界から変わらず嫌がらせのように整つた顔をしている。

身体つきもほとんど変わっておらず、黒のワイシャツに黒のパンツのせいどころかのホストに見えなくもない。

「ほんとにあの時姿のままなのね」

感心するように隣で明日奈が呟いた。彼女も同じようなことを思っていたらしい。

「そりやそうだろ」

「明日奈が言いたいののは」

「すみませーん」

お前の嘘みたいなイケメン顔が本当だったんだなつてことだ、と言おうとした和人の

言葉を遮ってスーツ姿の女性が声をかけてきた。

視線を見るにレインに声をかけているらしい。

それに対してレインは小さく息をはいた。

「申し訳ないが俺は今から用事がある。声をかけるなら他をあたってくれ」

どこかげんなりとした様子でなにも言われていないのにレインは喋りかけてくることすら断った。

これ以上喋ることはないと言わんばかりに和人と明日奈の肩を掴んでさっさとその場から立ち去ろうとするレインはどこか慣れている様子だ。

ぐいぐいと進んでいくのかと思いきや、明日奈がまだりハビリ中だと知らないはずのレインは明日奈の負担が大きくなるようにしているらしく、そこまでスピードを上げることは無かった。

「だから顔を隠してたんだ」

声をかけてきた女性が追いかけてこないと判断したレインが二人の肩から手を離して、ぼそりと漏らした。

「どこか疲れた様子のレインはそそくさとマスクを付け直す。

「しよつちゆう声かけられるのか？」

「まあな。そんなにもこの世界ではモデルとやらが人財不足なのか？鬱陶しくてしかた

がない」

「それはご愁傷さまで……」

眉間のしわがいつもよりも増して深いあたり、かなり苦労したのだろうことはわかった。

「あの、お姉さん。少し話しいいですか？」

「えっ、私？ いや、あの」

「少しですから」

「でも」

和人とレインが話している間に声をかけられて困っている明日奈を二人はじつとりとした目でみて、同時に深くため息をついた。

右肩にアスナを担いでいるレインは、先を行くキリトを追いかける形で走っていた。さつさとエギルの店に逃げ込むためだ。

全力ではなく小走りなのは、そこまで切羽詰った状態というわけではなく、ただ単に歩いているよりは走っているほうが声をかけられないだけだったりもする。

「やっと着いたー！」

小走りとはいえ、大して運動をしていないらしいキリトは息を切らした様子で、やはり仮想世界とは違った少年でしかなかった。

担いでいたアスナを丁寧に地面に立たせる。

「雑な運び方で悪かったな」

「大丈夫。むしろ、あんな運ばれ方ってきれいなから面白かった」

くすくすと笑うアスナは元気そうにしているが、持ち上げたことでわかったがかなり軽かったので万全というわけではないことはわかる。

それでも楽しそうで元気なのはキリトという存在が彼女を支えているからなのだろう。

「誰にもレインがくるって伝えてないから絶対驚くぜ」

にやにやと悪戯を仕掛ける子供のようには笑うキリトだが、レインは逆に彼が驚かされるようとしているのをエクシードで感じている。

なにせ扉の向こう側では数人がわくわくとした気持ちで待ち構えているのだ。

何かされないわけがない。

しかし、それを教える義理はレインにはないので、何も言わずにさりげなくキリトとアスナが先に入るように促した。

何も知らないキリトが得意げな顔で扉を開ける。

「「「キリト！SAOクリアおめでとー!!」」」」

クラツカーの音とともに祝福されたキリトは先ほどまでの得意げな顔はなりを潜めて、ぽかんと口を開けていた。

こうなることをアスナは知っていたようで、そんなキリトの様子をみてくすくすと笑っている。

「ほら、はいってください」

「いつまでぼけっとしてんのよ」

「お兄ちゃん、驚きすぎだよ」

中から聞こえる声に、レインは誰がいるのか大体把握して、かすかに微笑んだ。

ぼけっとしたまま女性陣に引っ張られる形で入っていったキリトとその後ろをにこにことしながらついていったアスナに続いてレインも特に気にすることなく店の中に入っていった後ろ手で扉を閉めた。

「すまん、俺も邪魔するぞ」

さすがに一声かけなければいけないかと、思ったレインが声をかけると、にぎわっていた店の中が嘘のように静かになり、全員がレインのほうを向いた。

そこでようやく我に返ったキリトが女性陣の輪の中から抜け出して、レインの隣に並んだ。

「そうそう、今日学校でレインに会ったからつれてきた！」

ぼけっとしてしまっている店内を見回せば、シリカやリズ、リーファだけではなく、クラインや他にもあまり知らない面子もいる。

「本当に俺はきてよかつたのか？」

「そりゃ、アインクラッドを騒然とさせた知られざる天才剣士兼謎のPKKを連れてきて悪いわけがないだろ。シリカとリーファだっているし」

「いや、まあそうだが……」

完全に止まってしまった空気をどうにかすべく、レインは仕方なく知人に声をかけることにした。

「シリカ、リズ、リーファ。久しぶり」

リズとも知り合いだったのかよ、となにやら騒いでいるキリトは無視する。

ようやく状況が飲み込めてきたらしい三人は本当にそこにレインがいるのかと確かめるようにべたべたとレインを触り始める。

なんだ、この状況は。という感想しかないが、されるがままにしていると、シリカとリーファの目から涙が出始めた。

「お、おい」

「もうレインさんに会えないと思ってたあ」

顔をぐずぐずにしながら泣くシリカ。

「私、私、お兄ちゃんからレインさんのこと聞いて、すごく心配してたんだからあ」
アルヴヘイムとは違い、切りそろえられた黒髪のリーファは必死で涙をこらえている。

「あんた、女の子泣かすんじゃないわよ」

いつものごとく、小言を言ってくるリズベット。

もう一度会うつもりなどなかった人たちは、自分のことを気にしてくれたいらしいことが伝わってくる。

「その、なんだ。とりあえず二人とも泣き止んでくれ」

あいもかわらず、女の子には弱いレインは二人をなだめるのに苦労したのはいうまでもない。



太陽はビルの間隙から見えることもなくなり、半分以上を闇が支配する時間帯。

レインはこっそりと店から抜け出していた。

ドア越しにも賑わいを感じる。

決して楽しくなかったわけではない。

シリカにピナという飼猫がいたり、リズベツトとキリトが知り合いだったり、リーファの本当の姿が思っていた以上にキリトに似ていたり、クラインが以外にも大人だったり、エギルはまともな店をもっていたり。

アスナはおしとやかでしつかりしているし、キリトも少年らしく笑っていた。

知らなかったことや、知ろうともしなかったことを知った。

仮想世界で見てきた戦士としての彼らも彼らではあるが、やはりここで平和に楽しく暮らしている彼らのほうが本来の姿だと思えた。

しかし、自分は違う。

戦場に身をおいて戦い続ける戦士だ。

強くならなくてはいけない。

レインは最後に騒がしいエクシードを感じとり、微笑んだ。

優しい黒衣の異邦人はただ願う。彼らに平和が続くことを。

そして、レインは誰にも声をかけることなくこの世界から姿を消した。

フアントム・バレッド編

強さを求める二人の出会い

十一月も半ばに入るところ、白い息が出るにはまだ少し早い。夜はすでに肌寒く、自分が住むアパートの近くにある公園でたまたま朝田詩乃も例に漏れず厚手のパーカーを羽織ってマフラーを巻いていた。

華奢ではあるもののそれで事足りるのだが、異様なほどに視界に入ってきた見知らぬ男のせいで、体感よりも少し寒く感じてしまうのは、見ているだけで寒くなる、というあれだろう。

公園のベンチに座り空を見上げる一人の男。あげている顔は暗がりのせいもあって見えにくい。ただ、そこだけが異様に暗いせいで視界に入ってきたのは、彼が全身真っ黒な服を着ているからだろう。

それだけならばただ視界に入ってきた男ですむのだが、見た目が寒い。

先ほども述べたとおり、今は肌寒い十一月。

にもかかわらず、男は半そでのVネック。ベンチに立ってかけられている棒状の何かに巻きついている布は着ていた上着なのかもしれないが、それにしても間違いない季節は

ずれだ。

不審者以外の何者でもないのに、そんな彼に見入ってしまったのは、闇に溶け込んでいながらも間違いなくそこいるというのがわかるほどの存在感のせいだろう。

「そんなに見られたらさすがに気になるんだが」

突然投げかけられた言葉が、真つ黒な男が発したものだど気がついたのは、顔をこちらに向けられてからだった。

思っていたよりも若い青年はまるで絵画から出てきたような精悍な顔立ちで静かにこちらを見てくる。

「聞こえてないのか？それとも通じないか？」

流暢な日本語の癖に通じないのかと聞いてくる青年は不思議な空気をまとっている。

「あ、いえ、通じてます」

「それは良かった。で、女の子がこんな夜に何してるんだ？この世界は平和だが、だからといって安全じゃないだろ」

確かに日本は戦争をしているわけでもないし、治安もそれなりにいいが彼の言うとおり完全に安全とはいえない。

時刻はすでに夜中の十二時を回っているので、昼に比べるとさらに安全ではないだろ

う。

「まあ、そうなんですけど……」

夜中の散歩を始める前に見た夢を思い出し思わず口ごもってしまった。

過去に本当にあった事を夢に見るのはなにも今日ばかりではない。むしろ同じ夢を見ては起きるのは良くあることだ。

「なんかわけありというやつか。なら仕方ないな。俺もここに着いたばかりで動く気にならんし、話し相手ぐらいならなつてやらんこともないぞ？」

ふわりとした優しい声で言ってくる青年だが、やはり自分は女で相手は男だと思うと簡単にその言葉に乗ることはできない。

しかし、今から帰ったとしても寝ることはできないだろう。

それに、目の前の青年と少し話したいと思っっている自分も少なからずいるのだ。

「俺が不審者に見えて怖いなら別に無視してもらってもかまわん。ただ、夜道が危ないのは変わらんからさっさと帰ってさっさと寝ろ」

暖かくもあり冷たくもある言葉をきいて、青年が本当に暇つぶし程度に詩乃に声をかけてきたのが伝わってくる。そして、見知らぬ詩乃の事を気にかけてくれているらしいことも伝わってきた。

どこか不器用な青年がなんだか面白くてくすりと笑った詩乃は、特に何も言わずに青

年から少し離れてベンチに座った。

「なんだ、結局来るのか」

「誘ってきたのはお兄さんじゃないですか」

「まあ、そうだが。俺としてはこんな不審者にもほいほいつられるあんたが心配になる」

「悪い人なんですか？」

「さあな。悪い人のつもりはないが良い人ともいえないかもしれん」

間近で見た不敵に笑う青年の横顔は思ったよりも若く十八歳ぐらいにしか見えない。

しかし、彼のかもし出す不思議な空気とすっかりとした体格のせいかな年齢不詳だ。

「寒くないんですか？」

「寒いな。さすがの俺でも寒さは感じる。ただそれが平気か平気じゃないかというだけだ」

何が、さすがの俺、なのかはわからないが、寒いというわりには全く寒そうにはしない。

「なんで寒いのにそんな格好でこんな所に？」

気がつけば、自分から質問を投げかけていることを不思議におもう。

自分はこんなにも簡単に他人と言葉を交わす性質だっただろうか。

「こんな格好なのは、上着をそいつを隠すのに使ったからだ」

「そいつ、といいながらぐるぐる巻きにされている棒状の何かを指差す青年は少し困った顔をして肩をすくめる。」

「で、こんな所にいるのは、成り行きみたいなものだ。本当は少し休憩したら帰るつもりだったんだが、ここが懐かしくなったのと、あわただしく俺のところに向かつてきてる奴らがいるから、おとなしく待ってやってるのさ」

ざつくりとしすぎていて何を言っているのか詩乃にはわからない。

ただ、どこか楽しそうに笑う青年が嘘を言ってるわけではないのがわかる。

「というか、あんたは見たところまだ学生ぐらいい見えるが、明日は学校ないのか?」

先ほどまでなにやら異空間に紛れ込んだような会話から突然現実味のある質問を投げかけられたのできよんとしてしまふ。

しかし、すぐに我にかえった詩乃は不思議な青年をじつとりとした目で見た。

「明日は日曜日だから普通の学校なら休みですよ。曜日感覚ないんですか?」

「ああ、日曜日なのか。ちなみに、曜日感覚どころか今が何年の何月かもわかってない。肌寒い感じから冬だろう事しかわからんな」

なぜかドヤ顔でそんなことを言い出すものだから、やはりこの人と話し始めたのは間違いだっただかもしれないと思ってしまうのは仕方がないだろう。

「記憶、ないんですか?」

流暢な日本語を話すことと、黒目黒髪から日本人なのだろうことはわかるが、曜日感覚がないだけではなく、何もわかっていないということは記憶がないぐらいしかすぐには思いつかない。

しかし、すぐに返ってきたのは否定の言葉だった。

「ちよつと前までこのことを忘れてたからそれまでは記憶喪失だっただろうが、今は思い出してるから記憶喪失ではないな」

あえていろいろとぼかしながら話すのが楽しいのか、不敵に笑う彼は感情豊かどころと表情を変えるのを見てるだけで飽きない。

悩みも暗い過去もなさそうな彼がうらやましいな、と思つて見てしまふ。

敏感にもその視線に気がついたらしい青年は先ほどまではこちらを見ずに話していたくせに、急にこちらをむいた。

「どうかしたのか?」

ああ、これか。

微笑みながら優しく包み込んでくれるような声に詩乃は確信した。

この優しさが、不審者極まりない青年としゃべりたいと思つてしまった原因なのだと。

「あなたは一体何なの?」

「そうだなあ」

適当に答えられると思いきや、意外にも真剣な顔つきで考え始めた青年は、しばらく考えた後、にやりと不敵な笑みでさらりと答えた。

「世界最強の男だ」

そんなふざけた答えに詩乃は思わず笑ってしまふ。

青年も一緒に笑うので、真剣な顔してどれだけおかしなことを言おうか悩んでいたの
だろう。

「いまだき、そんなことというのは十五歳前後の中学生ぐらいじゃない？」

「失礼だな。それでも俺は二十歳だぞ」

「うっそ。あんたどう見ても十八ぐらいにしか見えないわよ？」

「俺はイケメンだからな。若く見えるのさ」

髪をかきあげて不敵に笑う青年がかっこつけているのが妙に様になっているのが癪
に触る。

「さて、俺のお迎えがそろそろやって来るんだが、お前の家はどこだ？見送ってやる」

「ありがと。でも、すぐそのアパートだからいらないわ」

なんだか気分が良い詩乃は立ち上がって体を伸ばし、巻いていたマフラーを取って自
称世界最強の男に差し出した。

「私も帰るわ。あんた、見てるこっちが寒いからこのマフラーあげる」

青年は面を食らったような顔をしたがすぐに笑顔に戻った。

「いや、どうせ俺は——」

「返してもらわなくてもいいのよ。あんたと話していい気分転換になったし、そのお礼だと思って受け取って」

困った表情で頭をかけた青年は丁寧にマフラーを受け取った。

「そういうことなら受け取らないわけにはいかないか。そうだ、かわりといつては何だが、まじないをかけてやろう」

そういつて立ち上がった青年は思っていたよりも背が高く、百八十はありそうで、彼が自分よりも年上らしいことを納得させられる。

見上げようとする顔を押しさえつけるように頭の上に手を置かれた。

男性特有のごつごつした手にどきりとする。

「目をつぶってくれ」

あっさりと言葉の言うとおりにしてしまふ自分を不思議に思いながら詩乃は静かに目を閉じてしまふ。

一体何をされるのかと思っていると、ただ、優しく頭をなでられた。

「あんたに何があったのか俺は知らんがな、どんなときでも笑ったほうがいいぞ。特に、

お前みたいなの子はな」

自分の顔が赤くなるのが手に取るようにわかった。

恥ずかしさと照れで、頭から手が離れた瞬間に何か言つてやろうと目を開いて青年見たが、

——まるでそこには最初から青年がいなかったかのように忽然と姿を消していた。

彼が座っていたベンチを見れば、上着に包まれていた棒状のものもなくなっている。

幻覚でも見ていたのかと思つたが、自分の首からマフラーがなくなり、頭には彼に触れられていた感覚がまだ残つていて、幻覚ではなかったと理解する。

終始不思議だった青年とはもう会うことはないだろう。

不思議な出会いにくすりと笑つた詩乃は家に帰り、その日の夜は悪夢で飛び起きることもなく、ぐっすりと寝ることができた。

「あんたつてほんとふざけたやつね。そのくせ勝てないからほんとむかつく」

強さを求める少女と出会い

「え?!うそだろ?!ほんとにお前なのか?!」

共に戦った相棒と再会し

「絶対に殺してやる」

殺し損ねた奴に遭遇する

成長した自称世界最強の彼が鉛の弾が飛び交う世界に今降り立つ。

t o b e c o n t i n u e d

自称天才の男

十一月が終わるころ、ガンゲイル・オンラインは二つの騒動が起きたせいで騒然としてた。

一つは、死銃を名乗るマントの男の出現。

彼がモニター越しに打った有名プレイヤーが苦しみ、強制ログアウトしたのち、姿を現さなくなったという。

こちらはただの偶然、おふぎけ、とまともに受け取る者はおらず、ネタ程度の事柄だ。もう一つは先の死銃なるものよりも目立つ騒動で、今や知らない人はいない。

それは、化け物の出現だった。

最初、その化け物はチーターだと騒がれた。

なにせ化け物は、初期装備でフィールドに繰り出し、基本銃で戦うGGOで肉弾戦を行い、それなりに名の通っていたスコードロンを一人で壊滅させたのだ。

チートと疑われても仕方が無いだろう。

しかし、今ではそんな彼をチーターなどと呼ぶ者はおらず、合法チート、バーサーカー、冷徹脳筋、など呼ばれている。

というのも、彼のアバターが他のゲームからコンバートされてきたものだということ
が広まったのと、チーター撲滅のために集められた計百人ものプレイヤーをそれもまた
肉弾戦で征したからだ。

そのときの戦いが、チートのものでなく、彼自身の格闘センスと技術によるものだ
というのが誰からみても明らかかなもので、百人ものプレイヤーもそれを認め、彼はチー
トではなかった、となった。

そんなこんなでたった一週間で有名になった前代未聞の筋力値全振り脳筋プレイ
ヤーの名前は――

「脳筋ゴリラのくせにっ!」

「はっ。残念ながら俺は脳筋ゴリラではなく、ただの天才だ。そんな俺に勝とうなんて
十万年早い」

「あんたってほんとふざけたやつね。そのくせ勝てないからほんとむかつく」

GGO内にあるバーで両手を握り締めたまま机にたたきつけたシノンは少し前の決
闘を思い出して悪態をついていた。

そして、全身を黒衣に身を包んでいる本人を前に言ったものだから、クソほど癩に障

る返しつきだ。

その本人の口調は楽しげなものにもかかわらず、ほぼ無表情のせいで本音なのか何なのかは全く読み取れないのだが、リアルでも知り合ってしまったているシノンには、こいつが本気で言っているのを知っている。

長身であることは変わらないが、リアルではがっしりとした体格の彼とは違い、瘦躯なアバターから繰り出される拳の威力を思い出したシノン盛大に顔を顰める。

「うるさいわね！肉弾戦用の装備とはいえ対物ライフルの弾丸を殴り飛ばすやつを脳筋ゴリラ以外のなんていえばいいのよ」

「天才」

かっこつけた仕事をしながら無表情で言う彼にシノンが愛銃のヘカートⅡの銃口を男に向けてしまったのは仕方が無いことだろう。

「それ以上言ったら脳天ぶち抜くわよ」

「ほほう。ぜひともしてみてもらいたいな」

これもまた無表情で返されるが、シノンにはリアルでは表情豊かな彼の不敵な笑みがちらつく。

そのせいでつい先ほどまでの彼に向けてではなく、弱い自分に対してのイラつきが急に冷めてしまう。

戦意の削がれたシノンには息を吐いてヘカートIIを机に立てかけなおした。

「あんたの表情のせいでやる気なくしたわ」

「ああ………また無表情だったか？」

「気付いてなかったの？ いい加減そのバグ、どうにかしなさいよね」

「いいんだよ、これで」

そう言った彼の表情は無表情ではなく、リアルと同じように不敵な笑みになっていた。

ランダム生成のAvatarなはずなのに、リアルとは大差ない精悍な顔立ちの彼にそんな表情をされると本来であればどきりとするだろう。

シノンをはじめてその顔をされたときはどきりとした。

しかし、傲岸不遜な態度を重々知っているシノンにとってそれはいつもの彼でしかない。

変わり者な彼に苦笑をもらしながらも時計を見ると時刻はすでに夜の十時を回っていた。

明日は普通に学校があるのでさすがに寝支度を始めなければいけない時間だ。

「今日はもう落ちるわ」

「そんな時間か」

彼の視線がシノンからはずれ視界の右上にあるであろう時計に動く。

「まだ筋力値上げたいが、今日は俺も落ちるかな。明日は仕事あるし」

「あんた仕事してたの？」

まだ筋力値を上げようとしている脳筋ゴリラっぷりよりも、GGOにログインすれば必ずいて、リアルで外を歩いていてもふらふらと歩いている彼に遭遇することもあるため、仕事をしているということのほうに驚いてしまう。

「これでも一応な。俺の優先順位的にはGGOが上なんだが、俺をこき使いたがるやつがいてな」

二十歳らしいくせに仕事よりも優先順位がGGOのほうが上とはまたとんでもないことを平気で言うやつである。

「ここで稼いでくつもり？」

思わずそんなことを聞いてしまう。

GGOでは、ゲーム内のお金をリアルマネーに変えることが出来るため、少数であることは間違いないが実際にそれで生計を立てている人だっている。

彼の強さであれば不可能なことではない。

「んなわけないだろ。っていうか、俺は別に金があるわけでもないしな。数日なら寝なくても食わなくても平気だ。それに、面倒を見てくれるやつもいる」

いわゆるヒモと呼ばれる人種にしか聞こえない発言にシノンもはげめ面になるしかなかった。

「お前、なんか変な想像してないだろうな」

「今の発言ではない方がおかしいでしょ」

「まあ、それもそうか」

弁解するわけでもなくあつさりと納得してしまった彼は苦笑して立ち上がった。

基本的に名残惜しいなどの感情もなく行動の早い彼のことだ、ログアウトすると決めたからログアウトするのだろう。

「あんた、明日はインするの？」

「んー、どうだろうな。明日中に仕事を終わらせればいいんだが、俺が天才だからってめんどろな案件を超越してきたから無駄に時間がかかるかもしれない。下手をすると明日まで仕事かもな」

眉間にシワを寄せてかなり嫌そうな顔をするので本当に嫌なのだろう。

にしても、そんなにも続くという彼の仕事が一体何なのか気になる。

クリエイターのような仕事なのだろうか。

いや、普段の彼からすればそんな椅子にずっと座っているような仕事をする性質ではないだろう。

気にはなるが、元々謎しかない彼なので、今更彼の秘密を必死になつて知ろうとも思わない。

「仕事があるだけありがたいと思いなさいよ。今時は職につけなくて困つてる人だつて多いんだから」

立ち上がりながらそういうと、気軽に頭に手を置かれる。

「まともに仕事したつて無駄だからいいだよ」

そんなクソみたいな発言をしながらもシノンの頭を撫でる理由がわからない。いつもこうだ。

別れ際には必ず彼はシノンの頭を撫でる。

初めて会つた時も頭を撫でられた。

まるで恒例行事のようなそれにシノンはいつもどうする事もできない。

普段であればヘカートIIの銃口を向けてでも止めさせるだろうに、彼の手から離れることができない。

何も言えずにされるがままにされ、不意にその手が頭から離れる。

見上げれば、初めてあつたときとは違い、忽然と姿を消すことはしていない。

「じゃあな。気をつけるんだぞ」

何に気をつけるというのか。仮想世界は犯罪防止コードに守られているし、アミユス

ファイアも家で付けている。

気をつけなければいけない場面は特にならない。

そんなことを考えているシノンを放置して男はバーから出ていった。

「ほんとむかつく」

そんなシノンのつぶやきは脳筋プレイヤーの青年に届くことはなかった。



馬鹿高いケーキを貪り食うが、味は全くしない。

それは勿体ない行為ではあるのだろうが、味がしないものはしないし、ケーキを食べるほかない状況なのだ。

和人としても、おいしいケーキをちゃんと食べたいと思っている。

しかし、味がしないのだ

それは目の前でニコニコと笑う菊岡誠二郎がGGOの死銃なるものについての話が終わった後に持ち出してきた話のせいなのはまちがいないだろう。

「で、実際のところどうなんだい？」

「……いつも言ってるけど、俺も詳しいことわからないから」

菊岡誠二郎が和人に聞いているのは、一人のSAO帰還者であるはずの男の情報。

その男は、SAO帰還者の情報を管理している菊岡の所属する部署で知らぬ間に情報が削除された人物で確かに存在した、10001人目のプレイヤー。

もちろん、彼が途中参加してきたことを菊岡が把握していなかったわけもなく、件の彼の行動も特別体制でモニタリングされていた。

そんな彼の情報を英雄キリトである和人に聞いていなかったわけもなく、SAOから開放されてから会うたびに質問されている。

今も絶賛その真つ最中で、彼について知っている和人が誤魔化してケーキを食べているというわけだ。

「詳しいことがわからないっていうけど君、彼がログインしてからかなりの頻度で一緒に行動してたじゃないか」

「いや、まあ……なりゆきで行動はしてたけど」

「君みたいな人が途中参加者の話を本人から聞かないわけじゃないよね？」
もちろん和人は聞いている。

彼が何者でどうしてログインしてきたのかも知っている。

さらにいえば一度だけリアルでも遭遇した。

それ以来は全く会っていないし、おそらく彼はもういないであろうことも察している

し、彼の知人からもいなくなつたと聞いている。

それだけわかかっていても言えないのは、内容が濃すぎるうえにこちらとしても厄介ごとくに巻き込まれたくもないからだ。

彼については知らない、で通すしかない。

「いつも言ってるけど、あの馬鹿が教えてくれなかつたんだって。俺があいつについて知ってるのは、プレイヤーネームとふざけた大馬鹿野郎ってことぐらいだ」

彼に振り回された日々を思い出すだけでどつと疲れを感じるのは無茶をする彼を止めるのがそれなりに大変だったからだろう。

「あいつの戦闘センスは一流だし、俺だつて勝てないぐらい強いけど、まず基本的に無表情だし不機嫌だし無茶するしステータスだつて一定値からあげようとしないう意味わからないやつだし」

そんなことを口に出しながらも思い出すのは、微笑む優しい彼や頼もしい背中だったりするの、やはり彼を相棒だとおもっているからだろう。

しかし、そんな事をいえばさらに聞き込みが激しくなるのは間違いないので絶対に言わない。

変わりにできるだけ暴言を吐く。

「とにかく、あいつは馬鹿でだいたい苦勞させられたんだ。俺も会えるなら会つて一発ぶ

ん殴つてやりたいぐらいだよ」

そこまで言った瞬間、突如和人は頭をがっちりと捕まれた。

何事だ、とおもう前に後ろからぬつと顔が和人の顔のすぐ横から出てくる。

「黙つて聞いていければ、誰が無表情で不機嫌で無茶する大馬鹿野郎だつて？ん？しかも、そいつを殴りたいと？」

その声を聞いた途端、和人は頭を動かそうとしたが、わりと強い力で掴まれている頭
はびくりともしなかつた。

うろ覚えの記憶の声とすぐ横から聞こえた声は間違いなく同じ。しかし、覚えている
彼の喋り方にしては抑揚があるせいで本当に本人かどうか判断できない。

というか、後ろに人はいただろうか。存在感は全くなかつたし、途中で後ろに人が
やってきたらさすがに気がつくし、最初からいけばまず気付く。

混乱し始めている和人は何かいいたくても何も出てこない言葉のせいで水の中から
餌を食べようとする鯉のようにただ口を開閉させることしかできない。

「たしかに、昔の俺がクソガキであることは間違いない。だがな、お前にいろいろと言わ
れる筋合いはないとおもうぞ、キリト」

頭から手が離れ、先ほどまでは全く感じなかつた背後の人物が立ち上がる気配を感
じ、和人はあわてて後ろを振り向いた。

そこにいたのは相変わらず全身真っ黒で背が高く、精悍な顔立ちで不敵に笑う青年が立っていた。

「……………レイン」

「久しぶりだな」

どこか楽しそうに笑うレインに、基本無表情だった彼の面影はどこにもなかった。

戦友から助言のために

しまった。

そうおもったときにはすでに遅く、いれすぎてしまった力のせいで洞窟の奥底で戦っていたレインは洞窟を壊してしまうレベルで傾国の剣の遠隔攻撃を放ってしまった。

早く慣れなければと思っていても、強い相手を倒した後に手に入ってしまったその力を完全に使えるようになるのはもう少し先になってしまっただろう。

なにせ、レインには先に慣れなければいけない事があるからだ。

それにもやつと慣れてきたが、たまにできない時があるので、どうしてもそちらに気がいつてしまう。

こんなことなら先に力を制御できるようになっていればよかったと思うが、今そう思ったところでレインは瓦礫に埋もれるしかない。

瓦礫に潰されなかったためにレインはとっさにマジックシールドを張る。

魔法の詠唱を必要としなくなった彼にとつては造作もないことだ。

そして、不意に消えた足元にも本来であればすぐに反応しただろう。

実際、足元が無くなった瞬間にマジックシールドをといて降ってくる瓦礫を足場にしないでどうにか脱出しようと思った。

しかし、そうしなかったのはその先に見えた、見たこともない背の高い箱のような建物や、道走る箱に見覚えがあるような気がしたからだ。

見たことがあるが記憶にない。

妙に引つかかるものと、思い出したいという不思議な自分の思いに従った方がいいと判断したレインは自らそこに飛び込んだ。

世界が暗転し、意識がぐつとどこかに持っていかれる感覚に、レインは顔を顰める。

今意識を飛ばすのは間違いなくしてはいけないことだ。

唇を噛んでどうにか意識を保ち続ける。

まるで一瞬が引き伸ばされたような不思議な時間を経て、全てが収束したとき、レインは変わらず暗闇の中に立っていた。

しかし、洞窟のような暗がりでもなく、先ほどのような不自然な暗転をした暗闇でもなく、月明かりではないとおもわれる光が木々の隙間からぼんやりと見える。

「木？」

ようやくそこで、レインは自分が木に囲まれていることに気がついた。

なにか自分でも気づかないほど巧妙なトラップのような転移魔法でもおかれていて、どこかに転移させられたのだろうか。

真つ先に思いついたのはそれだが、転移する前にいた盗賊の住処だった洞窟に入ったのは昼間だ。

ちやちなトラップが仕掛けられていたが全て破壊しながら進んだので辺りが暗くなる程時間をかけてはいない。

意識も飛ばしたわけではないので、普通であればよくて夕刻だ。

つまり、ただの転移ではない。

なにかめんどくなものに巻き込まれたことは明らかで、レインは頭をかきながら顔をしかめる。

とりあえず、周りの様子を確認するためにすぐ近くにみえる開けた空間に向かって足を進めた。

何気なく、探るエクシードが今までに感じたことないものはずなのだが、どこか昔で感じたことがある覚えがある。

それが、今まで感じたことないはずの量のエクシードが密集していても、人では行けないはずの高さに多くあっても、それは知っているものだ、どこかで思っている自分がいる。

ならば、知っているのだろう。

ただ覚えていないだけで。

この不可思議なエクシードや夜を照らす月明かりではない光の正体を、自分の中にある引っかけりを頼りに忘れてしまったそれを思い出そうとする。

一応ではあるものの、警戒しつつ開けた場所に出たレインの視界に入ってきた世界をみて

——忘れてしまっていた世界を思い出した。



目の前でアホ面をさらす少年にレインは満面の笑顔を向けた。

再び日本にやってきて一ヶ月。

すぐに帰っても良かったのだが、レインは手に入れた力に慣れるよりも優先している表情をつくることに慣れるために日本にとどまっていた。

ミュールゲニアでは名前を名乗るのも嫌なぐらい知られざる天才剣士として有名になったこともあったので、一部にしか知られていないこちらで難なく表情を作れるまで過ごすことにしたのだ。

穏やかなこの世界であれば向こうよりも表情をつくるのには良いということもある。寝床確保のために適当に魔力を放って坂崎たちに自分の存在を教えたレインが待っている間に遭遇した少女と坂崎たち以外の知り合いとはわざわざ会うつもりはなかった。

理由は単純で、この世界が進んだと自分の世界が進んだ時間にずれがあつたからだ。仮想世界に飛び込み、キリトたちと知り合つたのは十五、十六歳のときだったが、今のレインの年齢は大体二十歳。

対してこの世界はあれから半年ほどしかたつていなかった。

見た目こそ十八歳から変わらないので適当にごまかせばどうにかなるかもしれないが、いちいち説明するのは面倒だということもあるし、結局はミュールゲニアに戻るのであつたところで何にもならない。

タダで泊めてもらうということも申し訳なく思つたレインは坂崎たちに頼まれる仕事をそれなりにこなしながら、日々バーなどに入り浸つては表情を作ることに慣れていった。

そんなレインが、豪華な店でキリトにわざわざ声をかけた理由。

それは、店に入ってきたキリトに気がついたレインが全力で気配を消してばれないようにしていたら、後ろに座つたキリトが散々自分を馬鹿にしていた——からなどではな

く、キリトの前に座る菊岡というらしい男にややこしい話を持ちかけられていたからだ。

GGOに関しては後で裏から適当に手を回せば良いと思っていたのだが、自分の話が出てきたとなつてはわざわざこちらから出向くしかない。

そして、散々馬鹿にしてくれたお礼とばかりにわざわざ気配を消したまま声をかけた、というわけだ。

いまだアホ面をさらすキリトを無視して菊岡に顔を向けると、彼もきよんとしていた。

「で、俺に何かようなのか？」

「あ、いや。特に用というわけではないんだ。ただ——」

「誠二郎さん、お久しぶりです」

菊岡の言葉をさえぎってレインの後ろから顔を出したのはレインをここに連れてきた坂崎だった。

なにやら知り合いらしい二人にレインは眉間にしわを寄せる。

「なんだ？知り合いか？」

「まあ。で、誠二郎さん、彼についての話は僕の顔に免じてなかったことにしてくれませんか？」

その言葉にちらりとレインをみた菊岡は少しだけ笑った。
「なるほど。それなら仕方ないね」

呆れたような顔をしながらもあつさりと受け入れてしまった菊岡に坂崎は笑顔で礼を述べて、その場はあつさりと解散になった。

腑に落ちないことこの上ない。

そのままレインは坂崎と共に帰る——わけでもなく、キリトと並んで歩いていった。

「で、ほんとにレインなんだよな?」

今日はこの後に何も予定がないので、言われるがままになんとなくキリトについて歩いているが、どこに向かっているのかはわからない。

キリト以外のアインクラッドとアルヴヘイムで出会った人達にはできれば会うつもりはないので、彼らのエクシードを感じたら逃げるつもりだ。

「疑い深いな。それともなにか? お前の頭は人の顔すらすぐに忘れるぐらい馬鹿なのか?」

「お前な、あんなに表情出さなかつたやつが普通のやつと変わらないぐらいころころ表情変えてるんだから疑いたくもなるだろ」

それもそうかもしれないと素直に思う。

表情を作り始めのは立ち寄った国で知り合った戦友とも呼べる青年に辛い時でも

笑ったほうがいいと言われたからだ。

数年もの間自分から抜け落ちた表情を作るのは強くなるよりも難しく、まだ常に意識していないと出てこない。

だから、キリトになんと言われようと表情を元に戻すことはしない。

「それに、お前成長しすぎだし」

「なにが？」

「なにがって、体つきとか全体的にだよ。半年ぐらいしかたつてないのになんでそんなに伸びるんだよ」

そう言われてどうしたものか、と考える。

こちらでは一年すらたつていないが、ミュールゲニアに帰ったレインは四、五年たつている。

一応、十八で肉体年齢は止まっているが、それでも誤差はある。

まあ、キリトが相手なのでごまかす必要はない。

「そりや、今の俺は二十歳だからな。そりや変わるさ」

「はあ？」

これが鳩が豆鉄砲を食らったような目なのだろう、とぼけつとあほ面を晒すキリトをみて思う。

「嘘じゃないからな。一回元の世界に戻ってから、またこっちに来たんだよ」
自分のヘマのせいでは明言しない。

思い出したからわかる。

異世界を渡ったのは普段は腰に付けていて、今は袋に包まれて担いでいる傾国の剣の力のせいだ。

つまり、盗賊を壊滅させた洞窟で力を暴発させてしまったのが原因で再びこちらに来てしまったということ。

帰るときも似たような感じで適当にやれば帰れるだろう。

「えっ。その見た目で二十歳?！」

そんなことを喚き出したキリトに思わずしかめっ面で見返す。

「お前どーみても十八歳ぐらいだよ?！」

まあ、間違いではないが。

デジャヴを感じつつもレインはしれっと適当に返す。

本当のことを言ったところで面倒なだけだ。

「お前、俺が十五のときは二十歳ぐらいに見えるって言ってたのに、二十歳の今は十八歳に見えるってなんだよ。お前の目は腐ってんのか?！」

「あの時は、表情ほとんど動いてなかったのと空気がそう思わせたんだよ」

しけた面をしていただけのクソガキの自分をどうみたら二十歳に見えるのか追求したくなるが、あれはアレで今のレインにとっては触れられたくない部分でもあるので、適当に話をすり替える。

「そんなことより、キリトはコンバートするのか?」

菊岡とキリトの話は終始聞いていたので把握している。

そして、目の前の彼はそれが危険だと分かっている、むしろそれが危険だと分かっているからそこ、飛び込むタイプの馬鹿だということもレインは分かっている。

「まあな。もし、本当に仮想世界での死を、現実での死に出来るやつがいるなら止めないといけない」

相変わらず、キリトの仮想世界好きは変わらないらしい。

実際、自分なら仮想世界で殺した相手に魔力やら何やらをぶち込んで現実世界の本体に流し込んで爆発でもさせれば、

「出来なくもないからなあ」

「え?!」

「ん?」

「出来るのか?!」

そこで、ようやく、そう言えば仮想世界で本当に人の命を奪うことは出来ないという

前提で話が進んでいたことを思い出した。

「俺は天才だからできるっただけだ。ほかの凡人共のことはしらん」

「天才ってほんとお前変わったな。で、なんでお前なら出来るんだ？」

微妙な顔をされたが、レインはそれをさらりと受け流す。

「簡単にいえば、俺が異邦人だからだな。アルヴヘイムで魔力が使えるのは知ってるし」

と言っても、もう使う気は無い。

今までは仕方なかったという部分が多かったので目をつぶるとしても、仮想世界で本来使えない力を使って戦ってもなんの意味もない。

使わないといけないのであれば、それはただ自分が弱いだけだ。

「ああ、あのチートか」

アルヴヘイムのことの思い出したらしいキリトは引き彎った顔になる。

「お前のよく分からない斬撃はまだ許容できたけど、美人さんがレインの身体をのつた時のやつはもうなんだよあれて感じてでしかなかったなあ」

「美人さん？」

そんな人がいたろうかと首を傾げる。

確かあの時は、と思い出そうとしたが、肝心なところがぼんやりとしてしまっただけでなにか思い出せない。

そこまで記憶力がないとは思えないのと、そこを思い出そうとすると頭が真っ白になるのは明らかにおかしい。

「ほら、お前が助けてた翼の生えた綺麗な女の人だよ。忘れたのか？」

その言葉に引つ掛かりを感じる。

その人を間違いない自分は知っていると考えた。

しかし、その人に関する事柄だけまるまるとくり抜かれたように思い出せない。

ここに帰ってきたことで全てを思い出したと思っていたがそうでもなかったらしい。

そのことに気がついたレインは顔を顰めた。

こちらだけではなく、元の世界でも所々記憶にモヤがかかる部分があるのでそれ関連なのは違いないだろう。

「そう言えば、そんなこともあったな」

キリトに本当のことを話したところで解決するわけでもないので適当に話を流す。

「で、あれを使えば殺せなくてもないってことは理解してたか？」

「じゃあ、今回の事件に異邦人が可能性あるかもしれないってことになるのか」

「どうだろうな。まず、異邦人が仮想世界にわざわざ行く理由がない。俺は強くなるために仮想世界に飛び込んだが他の奴がどうかは知らん。それに、人を殺すならリアルの方が手取り早いし、悪目立ちしたいならこの街を消し炭にするぐらいした方がいい

だろ」

魔法で隕石でも降せば広範囲をすぐにでも更地にできるし、傾国の剣の遠隔攻撃を放てば高層ビルもあつさり我真つ二つできる。

異邦人が悪目立ちしたいというのであれば、現実で思う存分力を振るうほうがおそらく早い。

目立ちするやつは力を見せびらかしたいやつがほとんどということもあつて、それが出来るだけの力ぐらいは有しているだろう。

「か、過激だなあ」

「ここが平和なだけさ」

社会の裏であれやこれやと繰り広げられてはいるが、寿命を全うできる人が大半のここは平和だろう。

暗殺から戦、王権争いなどが日常茶飯事のようなレインがもいた世界に比べれば間違いなく平和だ。

「ところで、一応お前について歩いてるが、どこに向かつてるんだ？」

「俺の家」

「帰る」

「まてまてまてまて！」

あつさり踵をかえしたレインの腕をキリトがあわてて掴む。

筋力値パラメーターによる補正もない現実世界で、しかも少し前にドラゴンと同等の力を手に入れたレインにとって、キリトに引つ張られてもさほど意味はないのだが、男を腕にくつつけたまま歩くのも趣味ではないので、仕方なく足を止めた。

「なんだ」

「なんだじゃないだろ」

「言っておくが、あと少しで元の世界に帰るつもりだし、ほかの連中と会う気はないぞ」
どうせその後は会えなくなってしまうのだ。

再び会って変に期待などさせたくはない。

「いや、レインのことだからそう言うのは分かってたし、俺も会わせるつもりはないよ」
「じゃあなんだよ」

「あんたの現実世界での動きが見たい」

「断る」

「即答だな?!」

逃げられまいとしているのか、レインの腕を掴むキリトの力が強くなる。

「別に力を見せびらかすために強くなってる訳じゃないんだよ」

「いや、分かっているって。ただ、やっぱり気になるというか」

そわそわとする少年の瞳の彼にレインはただ不機嫌な顔を向ける。

アインクラッドときはまだそんなに強くなかったり、異世界だからとか考えることもなくペラペラと喋った自分にも非があるのを頭の片隅のほうで理解しているレインは、仕方がないと息を吐いた。

「わかった。お前の家には行ってやる。ただ、あー、なんだその。今はちよつと力加減が上手くできないから、ちよつとしたもんだだけで我慢してくれ」

「ほんとか?!」

嬉しそうなキリトを見て、早くも後悔したのは言うまでもない。

変わったような変わっていないような

剣風が巻き起こる度、青い光が帯を作る。

それは本当に光がそこに残っているわけではなく、光が通った場所に残った残像ではない。

不意に、美しいとおもってしまうのは剣技のすごさだけではないだろう。

無駄な動きが完全に排除された動きは、アインクラッドでみた動きよりも、アルヴヘイムでみた動きよりも間違いなく磨きがかかっている。

「おい、見たいといいながらぼけっとしてるんじゃないぞ」

呼吸も忘れて見入っていた和人は、いつの間にか剣を鞘に収めていたレインに声をかけられて我に返った。

「悪い。にしても、なんだよその動き。それでちよつとなのか？」

道場の中心で剣を振り回していたレインを、危ないから離れとけと言うことで道場の出入口付近で見えていたキリトは、いかにもファンタジーな剣、レインの愛剣である傾国の剣を興味津々に見る。

抜けば青いオーラを纏い、ブウウウウンという羽虫のような音を発生させる魔法剣。

アルヴヘイムでレインが持っていたものだ。

ずっと何か担いでいるとは思っていたが、まさか銃刀法のある日本で剣を持ち歩いているなんて思っていなかった。

あれを持ち歩いている、というのとは一見平和な日本でも剣を使う場面があるのだろうかと考えてしまうのは仕方ないことだろう。

「うーん。まあ本気ではないな。いろいろあつて今は力加減が上手くできなくてな。下手をするとこの建物を壊すかもしれない」

さすがに言い過ぎだろう、と思うものの、レインが言うのであれば本当に道場が吹き飛ばすのかもしれないとも思ってしまうのが不思議だ。

自分の中にいる剣士キリトがレインの底知れない力を感じ取っているからだろうか。とは和人には分かっていない。

「なんか、ほんとお前は俺より長い時間を過ごしたんだな」

「まあな。って言っても俺はまだ傭兵やつてるし大して変わってないさ」

大人になり、強くなり、表情が出るようになり、発する言葉にも抑揚があるレインは、自分は大して変わっていないという。

和人からしたらレインはかなり変わったようにしか見えないのに、当の本人は変わっていないという。

アインクラッドとアルヴヘイムで彼とすごした時間はそれほど長くはないが、決して浅い付き合いではなかったため、レインが本気で自分は何も変わっていないと言っているのがわかる。

「お前がそう言うなら変わっていないのかもな」

「.....」

なにも言わないレインを不思議に思った和人はレインの方を見ると、彼はキョトンとした様子でこちらを見ていた。

「な、なんだよ」

「あー、いや。変わったたくせにとか言ってくると思つてたから」

「そりゃ、俺からしたら変わったように見えるけど、本人が変わっていないって言うなら変わっていないんだろ」

「ガキが生意気言つてんじゃねえよ」

「はあ?! お前が自分の事変わっていないっていったんじゃないか!」

「どうみても変わったようにしか見えないだろ。元からかつこよかつたがさらにかつこよくなつたし、今じゃ世界最強の男だぞ。数年前のクソガキ時代の俺と比べたら雲泥の差だ」

どや顔で言ってくるレインにイラツとするが、実際冷たい空気はなくなつたし、身長

も伸びているし、身体つきだつてさらによくなつてゐるし一つ一つの動きに無駄がないせいかちよつとした仕草すらもかっこいいと思える。

世界最強の男、という言葉も先ほどの剣技をみれば否定などできない。

非の打ち所のない目の前の男に何も言い返せない和人は直葉が帰つて来る前にさつさとレインを返してしまおうと道場から出るために背後にあつた扉に向き直つた。

「そんなことより、そろそろ——」

「お兄ちゃん」

レインに直葉がもうすぐ帰つて来るであろうことを伝えようとした瞬間に道場の引き戸は空けられ、引き戸の向こうには直葉が立つていた。

ここにレインを連れてくる前に言つたとおり、和人は誰にもレインの事を伝える気はさらさらなかつた。

レイン自身、嫌がるとおもつていたというものの他に、再びレインとあつたレインを慕う女性陣に変な期待をさせたくなかつたからだ。

ここに永住する、とレインが言うのであれば会わせたが、帰るといつている以上会わせるつもりはない。

にも関わらず、直葉は帰つてきてしまった。

どうしようと和人が悩んでいる間に直葉の視線が和人の後ろに行き、もうダメだと和

人は諦めた。

「あれ、明日奈さん来てたんですね。でも、なんで道場？」

「っ?!」

直葉の意味のわからない言葉に和人は勢いよく振り向いて後ろを確認する。

「お邪魔してます。道場つてそこまで見たことなかったからちよつと興味があつたの」

先程までレインが立っていた場所には、微笑む結城明日奈がいた。

何が起こりかけたのかわからない和人は頭を混乱させることしか出来ない。

それでも服装が彼女にしては珍しく真つ黒でラフな服装だなどという感想が出たのは明日奈のことが好きな和人だからだろう。

「そうだ。明日奈さんも晩御飯たべていきますか？つて言つても今から作るんですけど」

「うーん。お言葉に甘えちやおうかな。いいよね、キリト君」

「へ？」

「お兄ちゃんへの許可なんていりませんよ。そうと決まれば晩御飯の準備しなきゃ。明日奈さんはゆっくりしててくださいいね！」

和人の思考が復活する前に話はまとまってしまい、明日奈と晩御飯を共にすることになり、思わず突然現れた彼女をまじまじと見た。

「違和感なかったか？」

「へ?」

明日奈から出た口調に思わず固まる。

「馬鹿かお前は。いや、馬鹿だな」

眉間にしわを寄せて呆れた様子の彼女の表情と、先程までそこに居たレインの表情がかぶる。

「え、まさか。え?!レインなのか」

「それ以外に何が考えられるんだよ」

「なにもわかるわけないだろ!」

「これだから馬鹿は」

「……頼むから明日奈の姿で馬鹿にするのはやめてくれ」

それだけしか言えなかった和人が、その後も明日奈を演じるレインにそわそわとしてしまったのは言うまでもない。



暗くなってしまった夜道を和人とレインは無言で歩く。

和人はレインを見送る気など無かったのだが、明日奈を最寄り駅まで送っていかない

のは直葉に怪しまれるため、仕方なくこうして二人で歩いている。

すでに冬に差し掛かっていて肌寒いものにもかかわらず、先ほどは魔法で変装していたらしいレインはすでに明日奈の姿から本来の彼に戻っていて、薄手の黒いワイシャツしか着ていないくせに全く寒そうにしていない。

仮想世界であれば薄着に見えてもパラメーターで補正されていたりして、実は暖かいということはあるが、ここは現実世界であり補正などはない。

もしかしたら、魔法で防寒でもしているのかもしれないが。

「そっさいえば」

突然口を開いたレインの視線はまるで何も気にしていないように前を向いたままで、とくにそれを変えることも無く話を続けた。

「ユイは元気か？」

いかにも別に気にしてゐるわけじゃないんだぞ、というように視線はあくまでもどこでもないところを向いている。

それが逆に不自然なのは、レインがユイの事をかなり気にしているからなのだろう。

「ああ。元気だ。仮想世界にいけばいつでも会える。ユイもレインのこと気にしてるみたいだったぞ」

仲間内でレインの話が持ち上がることは滅多にない。

思い出したら寂しいとか、話すことのほどでもないとかいうわけでもなく、ただ単に話題に上げられるような人物ではないだけだった。

突然現れ、突然消えたレインに対して思っているものは各々違っていて、だれもそれを言葉にすることができないだけだ。

強く印象に残っているし、忘れられるわけもないがうまく言葉にできない人物。

そんな彼のことをユイはたまに空を見上げながら考えているのは、空を見上げながら何を考えているのか聞いたアスナとキリトしか知らない。

「そうか」

和人の言葉にそれだけ返したレインに和人は、変わったようでも変わっていない彼に、なんとなくレインの知り合い達の他愛のない話をすることにした。

またみんなと一緒に仮想世界でつるんでいることや、シリカが強くなったこと、それからリズベットの鍛冶の技量がさらに上がったこと、リーファがさらに速くなったこと。

そんなごく普通の会話をレインは駅に着くまで興味津々に、しかしまるで興味の無いような表情で聞いていた。

「お前、ほんとこの世界に馴染んでるよな」

駅に着き、スマホで帰路を調べているレインをみて思わず言ってしまう。

銀座から川越まで来る時も電車を使ったので、レインがICカードを使うことも知っ

ている。

「そりゃ、短期間とはいえここにしていることにしたからな。坂崎に変な仕事頼まれるときのためにもこの世界に馴染むことは当たり前だろ」

にしても、馴染みすぎではないかと思ってしまう。

なかなかアインクラッドのシステムに慣れなかったレインを知っているせいで尚更違和感しかない。

「あー、そうだ。GGOにコンバートするなら一つ忠告しておく」

「なんだ？」

「絶対に自分がいる場所を誰にも気取られるな」

よく分からない言葉に和人は首を傾げる。

GGOは銃のゲームだし、戦闘でのアドバイスなのだろうか。

遠距離が基本の戦闘になるだろうし、敵に先に自分の居場所を知られたら自分に風穴があくのは間違いないだろう。

「まあ、善処するよ」

レインが銃相手に戦ったことがあるのだろうことは、やばめの組織を壊滅させたことがあるという発言で察しはつく。

「一応忠告はしたからな。あとは知らんぞ」

そのまま別れの挨拶をすることもなく背を向けて歩き始めたレインに変わらない彼らしさを感じて、和人は苦笑してから自宅に足を向けた。

「ユイにはレインのこと教えとくか」

そのつぶやきは誰の耳に届くこともなく、夜の街の喧騒の中に紛れ込んだ。

ガンゲー無視の馬鹿たち

剛拳パラドックという名前のナックルをはめている右手を長身で細身な青年が風を巻き起こしながら目の前の男の腹部に向かって突き上げる。

ゴウツという拳の唸り声が聞こえ、少し遅れてから骨に響くドンツという音が聞こえた。

音が動きについていけなかったのか、それとも動きが音を置いていつてしまったのか。

ただ、あまりの速さのせいで動きと音にズレが生じたのは間違いない。

青年の拳をまともに食らった強面の男がきれいに弧を描いて飛んでゆく。

それはどこか漫画の一コマのようだった。



『スピードは筋肉にかなわなかった』

そんなキャッチフレーズで始まる記事のひとつをガンゲイルオンラインにログインしていたシノンはげんなりと一瞥だけして早々にウィンドウを閉じる。

内容は読まなくてもわかる。

どうせまた脳筋ゴリラ関連の記事なのだろう。

基本遠距離で戦うガンゲーでわざわざ接近戦をする馬鹿など一人しかいない。

「ただの馬鹿じゃないのがむかつくわ」

思わず声に出して言ってしまったシノンは顔をしかめた。

脳筋とはもともと頭を使わずに火力ゴリ押しで戦う人に対して使うものだ。

しかし、かの脳筋ゴリラは性質の悪いことに頭も使う。

もちろん物理的に頭を使う、という意味ではない。いや、実際物理的に頭を使ってくることもあるが。

今回述べている頭を使う、というのは中身のこと、つまりは頭脳だ。

きちんと相手の動きをみて、読んで、動く。

ハイドして奇襲をかけてくることだってあるし、相手の読みすら読んでくる。

筋力パラメーターに極振りしてるので、“脳筋”と言われてはいるが、実際には頭脳派。

まあ、戦い方は殴る蹴るの肉弾戦なのでゴリラだということには変わらない。

そして、ただの頭脳派ゴリラであればよかったとさらに思う。

それなら近づいてくる前に適当にマシンガンでもぶっ放せばしとめれる。

それすらできないほどに、あのゴリラは早い。

ほぼゼロ距離でも銃弾をよけてくる。

実際にはそこまで早くないのかもしれないが、ゴリラ曰く、

「無駄な動きをなくしたらそんなに敏捷。パラメーターをあげなくてもすばやく動ける。リアルでも動きの早い奴と遅い奴がいるだろ？あれは身体をうまく動かしているか動かしていないかとか、筋力だとかだけじゃない。無駄があるかないかも関係してるんだ。だから、ある程度の敏捷値しか上げていない俺でも銃弾の一つや二つどころか何百でもよけられるってわけだ」

ということらしい。

付け加えれば、

「弾道予測線があるのによけれないほうが意味がわからん」

とも言っていた。

こちらからすれば、よけるほうが意味がわからない。

弾のスピードがどれ程のものだと思っている。

距離があればもちろんよけるが、ゼロ距離だと弾道予測線など関係ない。

あいつの動きは尋常ではない。

あれを仕留めることができたなら、シノンは——詩乃は、

「強くなれる」

今までは出る必要性は皆無だと言ったのにもかかわらず、突然今度のB o Bに出るらしいゴリラに風穴を開けるために、シノン は総督府へと足を向けた。

「あのー、すみません。ちよつと道を……」

どうやってゴリラに風穴を開けるか考えていると、突然声をかけられた。

ガンベイルオンラインでそれなりに名の知れているシノンの性格が冷たいということも知れ渡っていることもあり、滅多に声をかけられることはない。

ここで声をかけてくるのはあのゴリラと友人であるシュピーゲルぐらいだ。

少し控えめに声をかけられたものの、先ほどまでゴリラのことを思い出していたシノンは眉間にしわを寄せたまま振り向いた。

視界に入った黒髪に一瞬ゴリラかと思ったが、背丈が自分ぐらいの長髪な女の子だとすぐに気がつき、顔の力を抜く。

「えつと、なに？」

現実世界でも仮想世界でも人付き合いが得意ではないシノンは口を開いたが、どこかそっけなくなつてしまったと少し思う。

気兼ねなく話せるシュピーゲルは男の人で、多少女の子らしくなくても気にしなくて

すむし、ゴリラにいたってはあいつの傲岸不遜な態度に口調は荒くなるばかりだ。

もう少し女の子の知り合いを作っていればよかったなどと、いまさら反省したところで遅いので、シノンにはできるだけ優しい対応になるように意識して、目の前の初期装備の少女に向かってもう一度口を開いた。

「……このゲーム初めて？どこに行くの？」

いつもは周りの男たちに舐められまいと鋭くする眼光をやわらかくして、すこしだけ微笑む。

慣れていない表情にぎこちなさを覚えるが仕方がないだろう。

ゴリラのバグ能面よりはましなはずだ。

「あー、えつと……」

なにやら目の前で百面相をし始めた少女が何かを言うのをシノンは黙ってまつ。

にしても、きれいなアバターだ。

女たらしであるゴリラと彼女が出会うようなことがあれば妨害しなければいけない。

そんなことを思っていると、意を決したように少女はシノンの目をしっかりと見た。

「はい、初めてなんです。どこか安い武器屋さんと、総督府つてところに行きたいんですけど……」

女の子にしては少し低めな声ではあるが、ガンゲーということもあるし自分や彼女の

ような容姿のほうが珍しいので大して気にするほどのことでもないだろう。

「総督府？何しに行くの？」

安い武器屋はまだ理解できた。

しかし、総督府など初めて来ていくような場所だろうか。

観光、というのも仮想世界ではどこか変な感じがするし、そもそも総督府よりもっと観光できそうなところはある。

「えっと、もうすぐあるっていうバトルロワイヤルのエントリーに……」

少し戸惑いながらもいう少女も自分が変なことを言っている自覚があるのだろう。

「今日ゲーム始めたばっかりなんだよね……？初心者が出ちやいけないってルールはないけど、その……ステータスが足りないかも……」

「いえ、それは大丈夫です！これ、コンバートしたアバターなんで」

コンバートという言葉にピクリと反応して、ドヤ顔のゴリラが頭に思い浮かんだ。

気がつけばずっと彼のことを考えてしまっている自分が、まるで恋をしているようではないかと思ひ、顔を顰める。

たしかに、あいつはここでもリアルでもイケメンだ。長身だし、なんだかんだいい奴ではある。

しかし、これは恋心などではない。

断じて違う。

ただ、自分が強くなるためにあいつは踏み台として必要不可欠なだけだ。

「あのお」

少女に声をかけられて我に返ったシノンは慌てて笑顔をつくる。

「あつ、ごめん。ちよつといろいろ思い出してただけなの。コンバートなら大丈夫ね。まずは安い武器屋に案内するわ」

「よ、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げた少女は、普段はショートヘアーなのか鬱陶しげに髪の毛を耳にかけた。

「コンバートって言ってたけど、前はどんなのしてたの？」

なんとなく、そんなことを聞いた。

たしか彼は、普通のやつ、と雑に答えていた気がする。

普通と言われても何なのか全くわからなかったが、言及しても答えててくれるとは思えなかったのだからそれ以上追求はしなかった。

「えつと、ファンタジー系のやつです」

彼のように分かりにくい答えではなく、少女はわかりやすい答えだったことに安堵する。

「ファンタジー系ねえ。そんなところからまたなんでこんなオイル臭いところに？」
「気まぐれ、というか気分転換というか……元々興味があつたし」

困つたように微笑んだ少女には何か言いづらい理由があるのだろう、と察しがつく程度には歯切れは悪かつた。

言いくいのであればこちらから無駄に聞くような事はしない。

シノン自身、人に言えるような理由でここにいるわけではないからだ。

「あなた、変わつてるのね。さて、ガンシヨップについたけど、使つてみたいのとかある？」

興味があつた、という事はそれなりに知識があるのかとおもつて聞いてみる。

「あく、銃についてよく知らないから……」

よくもまあ、そんなのでB o Bに出るだなんていったものだ、と少しあきれてしまう。

しかし、肉弾戦をする馬鹿もいるし、コンバートということは彼女も意外と戦える人なのかもしれない。

ここは先輩として少女のために一肌脱ぐところだろう。

「じゃあ、ステータスってどうなってる？」

「えっと、筋力優先で、次にスピード……かな」

筋力優先という言葉に反応してしまうのは仕方の無いことだろう。

「筋力優先って、極振りとかじゃないよね？」

「まさか！他の人よりも振ってるかも知れませんが、バランスはそれなりにちゃんと取ってますよ」

「よねえ。前やってたのファンタジー系って言ってたけど、肉弾戦とかする人いるの？」
自分でも馬鹿なことを聞いているのは自覚しているので、少女がきよんとしてしま
うのは仕方の無いことだろう。

「うーん。ほぼ皆無ですかね。咄嗟にとか、相手の不意を付くのに体術スキルを使うこ
とはあっても、基本的には剣とか槍とか魔法とかで戦いますよ」

「よねえ」

やはり、あいつだけがおかし——

—— かったらどれだけよかったか。

シノン は嬉嬉として光剣を購入している少女をじつとりとした目で見ていた。

武器を持っているだけマシだと思えるのは、接近戦をする前例がいるからだろう。

コンバートする人は頭がおかしいのだろうか。

いや、ただ単に前のゲームでの戦い方によってしまっただけなのだろうか。

実際、弾除けのギャングゲームで規格外な動きでクリアしてしまった少女ならば、

ある程度接近戦に持ち込むことは可能だろう。

目の前で、ファンタジー世界での剣技を披露した少女の強さがこのガンゲイルオンラインでも通用するのか、シノンも楽しみにおもったのだった。

バレットオブバレッツ

無事にエントリーを終えたシノンは小さく息を吐いた。

すっかり時間を忘れて少女に付き合つて買ひ物をしてしまつていたせいでエントリーに間に合わないかもしれないとおもつたときは本当に肝が冷えた。

彼女がバギーを乗りこなしてくれたおかげで間に合つたので感謝しかない。

「間に合つた？」

一応隣でエントリーしている少女に声をかけると、びくりと肩を震わせた。

「あ、はい。今し終わったところですよ」

「それは良かったわ。じゃあ行きましょ」

なにやら少し落ち込んだ様子だが、何かあつたのだろうか。

エントリーの際に打ち込む住所の間違ひに今気がついたとかそんなものかもしれない。
い。

そんな詮索をしたところで何にもならないので、シノンは思考を予選へと切り替えた。

今度こそ勝つのだ。

「ところで、君は何ブロックになったの？」

もし、途中であたることになってしまうと二人とも本線に進めなくなってしまう。

「えっと、Fブロックの三十七番ですね」

「同じブロックか。でも、その番号なら決勝まで当たらずにすみそうね」

逆に言えば、彼女が無事に進むことができれば予選トーナメントの決勝で当たること
ができる。

ギャンブルゲームで驚異的な回避術を見せ、操作が難しいといわれていたバギーの見
事によりこなした彼女と戦うことがすでに楽しみになっている。

出場者を全員倒して、後ろに着いてきている少女も倒して、そして誰よりも強いあ
つを倒す。

そして、強くなる。

緩んでいた気を締め直したシノン会場への扉をくぐった。

会場はすでに熱気にあふれていて、すでに武器を構えている人が多い。

ガラの悪い連中が多いこともあって、女二人で歩いているのは異様に目立ち、こちら
をちらちらとみってくるのが癪に障る。

初心者である少女は現状のような雰囲気慣れていないようで、怖がっているらしくギャンブルゲームやバイクを走らせているときのような豪胆な態度はなりを潜めていく。

彼女のためにもさっさと控え室に移動して着替えを済ませるのがいいだろうと判断したシノンには、特に何を言うでもなくずいずいと足を進めた。

そうしながらも、脳筋ゴリラの姿を無意識に探してしまっている自分に気がついたときは、思わずしかめつ面をしてしまう。

しかめ面のまま、今度は意識的に彼の姿を探す。

予選開始までそこまで時間がなく、当然あいつはいるものだと思っていたにも関わらず、ざっと見たところでは見つけることができなかった。

長身で細身に精悍な顔立ちのアバターだからすぐにわかると思ったが、そうでもなかったらしい。

予選はトーナメント戦なので同じブロックで当たることになってしまおうとできれば決勝戦で風穴を開けたいのにそれができなくなってしまうので、何ブロックなのかぐらいは聞いておきたい。

少女を引き連れたまま、控え室に入ったシノンはどしりといすに座った。着替え終わったら探すことにしよう。

にしても

「ほんとお調子者しかいないんだから」

あんな奴らばかりでは強くなれないではないか。

「えっと、あれがお調子者なんですか？」

「そうよ。メイン武器を始まる前から見せびらかして、対策してくださいって言うてるようなもんでしょ。あなたも、始まる直前の転移の時に装備することをおすすめするわ」

「は、はあ」

まあ、自分や脳筋ゴリラなどの有名なプレイヤーには関係ないことなのかもしれないが。

対策されたところで負けるつもりもない。

「さ、私達も早く着替えましょ」

そう言つてウインドウを操作して着ていた私服を外した。

「うわああ?!」

女子同士だが、さすがに堂々と装備を外すのは恥ずかしかったので背中を向けていたが、突然変な声を上げた少女に思わず振り返る。

「どうかした？」

振り向いた先には、両手で顔を覆っている少女がいた。

あれだろうか。同性でも、たとえこれが仮想の肉体でも他者である人の裸を見るのは苦手なタイプなのだろうか。

そんなことをのんびり考えていると、少女が敏捷値のあらんかぎりで腰を折った。

「黙っててごめんなさい!!私、じゃなくて、俺、こういう者です!!」

叫ぶように言った少女は実になれた手つきでウィンドウをこちらに見えるように滑らせた。

突然の自己紹介に驚きながらも、シノンは目の前の人の事が書かれているウィンドウに目を走らせる。

「へえ、キリトって名前なんだ。変わった名前ね。……えっ、メール?えっ?」

性別欄に書かれている『Maie』という文字を何度も確認して、目の前にいる少女——いや、キリトという少年とウィンドウを視線が何度も行き来する。

「男?!ほんとうに?そのアバターで?!」

キリトから否定の言葉は返ってこず、ただただ頭を下げ続けているので、本当なのだろう。

次の瞬間、シノンは自分の姿を思い出して顔が熱くなるのがわかった。

アバターだからといって、本当の自分の体ではないからといって、男に見られるのは

やはり恥ずかしい。

恐る恐る、といった様子でキリトが顔を上げた瞬間、シノン自身のアバターのステータスをフル稼働して叫びながら目の前の男の頬を叩いた。



「着いてこないで」

「いや、でも」

「着いてこないで」

「他に知り合いいないし」

「着いてこないで」

「どこ行けばいいか分からないし……」

不機嫌極まりないシノンはしつこく着いてくる「少年」キリトのほうに振り向く。

まるで少女のようなアバターの少年の頬にはくつきりともみじの形をした跡が残っている。

困ったようにこちらを見ているキリトを見て、シノンは小さくため息をついた。

「仕方ないわね」

ずうずうしさと全身真つ黒の姿に、いまだに姿を現さない彼となんとなく姿が重なった。

まあ、彼であれば、シノンの裸体を見たら謝ることなどせず、ご丁寧に感想を述べてくるか、特に気にする様子を見せないかだろう。

シノンは適当な場所を見つけて雑に予選の説明をキリトにする。

こちらは下着姿を見られたのだ。すこしぐらい適当にでも許されるだろう。

というか、コンバートとはいえ、B o B当日に初めてログインするほうがおかしいのだ。

下調べぐらいきちんとしてこいと怒ってもいいと思える。

「大体わかったよ。ありがとう」

きちんと礼を言ってくるあたり、ただの悪い奴ではないのはわかる。

「ちゃんと決勝まであがってきなさいよ。ここまでレクチャーさせたんだから最後の一つも教えないと気がすまないわ」

「最後？」

「敗北を告げる弾丸の味」

キリトをにらみながらそう言うと、彼はにやりと微笑んだ。

今までのきれいな笑い方ではなく、楽しげで悪戯をする少年のような笑い方が嫌に様

になっているのは、きつとこの憎たらしい彼のほうが素だからなのだろう。

「それは楽しみだな。君のほうは大丈夫なのない？」

「当然よ。予選落ちでもしたら引退する」

予選で件の脳筋ゴリラと当たらないとも限らないが、だからといって負けるつもりはない。

彼とは本戦で戦いたいと思うが、予選であたってしまったらあきらめるしかないのが現実だ。

強くなるためにこの世界で戦っているのだ。

「今度こそ、強い奴らを、あいつを殺してやる」

「物騒なことをいうもんじゃないぞ」

無駄に聞きなれた声が突然聞こえたとおもうと、ドスツと頭に衝撃が走った。

「ちよつとあんた！いきなりなにしてくれ……て？」

声のした後ろに向かって振り返ると、見慣れたように見慣れない脳筋ゴリラがいた。

普段の動きやすさが重視されている身体にぴったりとフィットした装備なのは変わらない。

変わっているのは普段は両手に装備されている剛健パラドックというナツクルはシノンの頭を叩いたのであろう右手つけられていないのを見るに、シノンを殴るためだけ

に外されていることぐらいだ。

しかし、そんな装備をしていないかしているかの違いなどよりも、いつもはセットされたのか、ただぼさぼさなのかわからない髪がきれいに整えられているせいで固まってしまう。

普段はちやらいようにしか見えない彼が、好青年のように髪の毛を整え、優しく微笑んでいるのだ。戸惑うに決まっている。

シノンが固まっている間に、彼の視界にキリトが入ったようで、すすすつとすばやい動きで隣にちゃっかりと座る。

容姿は好青年だが、女たらしな部分をどうにかするつもりはないらしい。

そんな様子の彼を見て、シノンはあえて何も言わずに成り行きを見守ることにした。

片方は人の下着姿をみた男で、もう片方は普段からやりたい放題の男。

男に口説かれて困ればいいし、男を口説いてげんなりとすればいいと思ったのだ。

「こんなむさくるしいゲーム内に可憐な人が現れるとは思いませんでした」

なぜかキリトの手を取って敬語を使う彼を不思議に思うが、面白そうなので放っておく。

キリトはといえば、かつこいいとはいえ、男に言い寄られて顔が引きつっている。

ざまあみる、とシノンはほくそ笑む。

「え、い、いや……可憐だなんてことは……」

「そんなご謙遜なさることはないじゃないですか。だって、男なのにそんな容姿なんですから。それはもう合法的にネカマプレイし放題でちゃっかりシノンの下着姿を見ちゃうことぐらい簡単ですもんね」

爽やかな顔でそんなことを言った彼に、キリトだけではなくシノンも固まった。

そんな二人のことを見てから、彼はいつもの不敵な笑みを見せる。

「で、キリトとシノン。お前達は何ブロックになったんだ？」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!! あんた達知り合いなの?！」

「ま、待て!! 俺はGGOに知り合いなんていないぞ! いたら最初から頼ってる!」

騒ぎ出す自分達のことを面白そうに彼が見ているのが癪に障る。

いつもそうだ。いつもこいつに振り回される。

「どういうことか説明しなさいよ!! レイン!!」

「レインだって?!」

面白いぐらいにさつと顔から血の気の引いたキリトと整えていた髪の毛をいつものぼさぼさに戻した不敵に笑うレインをみて、キリトも彼に振り回されてきたのをシノンはなんとなく察してしまった。

あんぐりと口を空けたまま固まっているキリトを見てレインはにやりと笑い、キリトに振り回されたらしいシノンに黙ったままというのも気が引けるので混乱しているシノンに手短かに説明をする。

キリトには後で適当に話せばいいだろう。

「前のゲームでの知り合いだよ。俺もコンバートしたって話したろ？」

「あゝ、そういうこと」

「っ！っていうかなんでレインがいるんだよ！」

ようやく我に返ったらしいキリトが騒ぎ出す。

予選が始まる直後ということもあり、会場も盛り上がっているおかげで目立つことはなかった。

「俺がどこにいたっていいだろ」

「いやいや、俺、GGOにコンバートするって言ったよな?!そのときに言ってくれても良かったじゃないか！」

「なんでいちいち教えなきゃならん。教えたらお前のめんどどうみることになるだろ」

「俺がお前の面倒見たこと忘れてない?!」

「いやあ、いったい何のことだか」

「お前な！」

さすがにうるさくなくなってきたのでレインは両手をつかってわざとらしく耳をふさぐ。レインが何も言わなくなったことで、キリトも口を開かなくなったがじつとこちらを見つめてくる。

見た目は女みたいではあるが、男に見られても何もうれしくはない。

「えっと、兄弟？」

「違う!!」

「違う」

何度目になるかわからないデジャヴを感じ、レインは眉間にしわを寄せた。

隣ではキリトがうなだれているので大体同じ心境なのだろう。

こういう時はさっさと話題をかえるにかぎる。

「そんなことより、お前達のブロックどこだよ。三人とも同じだったら本戦に一人行けないだろ」

「俺達は二人ともFブロックで当たるとしても決勝でらしいけどお前、俺達が途中で負けるとは思ってないのか？俺一応今日が初めてのログインなんだけど」

そんなキリトの言葉に、今度はレインが固まる番だった。

キリトの言う通り、自分は彼らが自分以外に負けな思っている。

それのどこに疑問を感じているのかわからない。

「負けるのか？」

「負けない！」

「負けないわよ！」

威勢よく言い返してきた二人にレインはニヤリと笑う。

「なら問題ないだろ。ちなみにだが、俺はCブロックだから安心しろ。ま、優勝するのは俺だな！」

優勝するためにB o Bに参加することを決めたわけではないが、参加するからには負けるつもりなどは毛頭ない。

「相変わらずね」

「ほんと変わったよな」

同時に反対の言葉を言った二人は顔を見合わせた。

キリトは昔のレインを知っていて、シノンは今レインしか知らない。

そんな二人だから正反対の言葉が出てきたのだろう。

「で、この人とはどういう関係で？」

キリトに、この人、と言われたのが気に食わなかったのか、シノンは顔を顰めながらウインドウを操作してプロフィールをキリトに見せた。

「シノンよ。あんたの脳天ぶち抜く人の名前だから覚えておいて損はないわ」

いつも以上に過激なシノンにレインは誰にもわからない程度に微笑んだ。

彼女が言いたいことを言うということは、それだけ相手に気を許しているということだろうからだ。

シノンにとつて気を許している相手はレインが知る中では自分とあと一人しかない。

そのもう一人はレインにとつては面倒な奴でしかないのです、できれば深く関わりたくはないのだが、そうおもっているときに限って、ということとはよくあることで。

自分たちのところに近づいてくる足音を聞いて、レインは隠すことなく、超絶めんどくさい、という表情を顔に貼り付けた。

「やつとみつけた！シノン、遅かったから心配したよ」

「こんばんわ、シュピーゲル」

レインとキリトの二人に対してのとげとげしい態度ではなく、やわらかい空気で挨拶をするシノンと、レインにはべこりと頭を下げただけのシュピーゲルにレインの眉間のしわは深くなった。

さつさとシノンからキリトを引き剥がして死銃の話をして二人でしとけばよかったと後悔してもすでに遅い。

「ちよつとそこの人の世話してたせいで遅れたのよ」

「どうも、その人です」

大人しくなつたキリトを見るに、おちよくりがいのありそうなシュピーゲルにイタズラをしようというという魂胆なのだろう。

「えつと、シノンのお友達さん？それとも、レインさんの知り合い？」

「レインの知り合いではあるみたいだけど、私の友達ではないわ。それとそいつ、男よ」

「お、男お?!」

「えつと、キリトです。男です」

へらりと笑うキリトをすつと目を細めてみた後、シュピーゲルはレインに説明を促すように視線を向けた。

おそらく、なぜシノンに男の知り合いを会わせたのか、とでもいいたいのだろう。

「言つておろがな、こいつらが知り合ったのに俺は関係ないからな」

こちらとて二人が出会つた経緯は知らないのです。そちらの説明を促されたところで答えられない。

そのあたりの説明はシノンからしてもらえばいいと判断したレインはキリトの腕を掴んで立ち上がった。

「おい、ちよつとー!」

突然の行動だからかキリトが声を上げるがレインはさも聞こえていないと言わんばかりに無視を決め込む。

「俺達のことに関してでは前のゲームでの知り合いでしかないから変な勘ぐりはするなよ」

予選開始までもう時間はないし、キリトとシノンが知り合ったせいで無駄に時間をくったので、キリトに話したいこともこのままでは話せなくなってしまう。

「じゃ、また後でな」

いつものようにぐしゃつとシノンの頭をかき混ぜてから、キリトを引っ張ってその場から離れた。

シユピーゲルからの視線を感じるが知ったことではない。

会場の中で誰もいないような場所までキリトを引っ張っていく。

「おい、なんだよ。なにか話があるのか？」

誰にも話を聞かれたいところまで来てから口を開いたキリトがこちらの意図を理解してくれていたらしい。

「話が早くて楽だな。死銃の件だがな、お前と銀座で会う前に一度俺は標的になってる」

「はあ?!」

さつきから騒いでばっかりだなと他人事ようにレインはさらりと流す。

「まあ、有名な奴ばっかり狙ってやがるみたいだし、俺が狙われて当然といえれば当然なんだが。そのへんの酒場で飲んでたらいきなり撃たれた」

「撃たれたのか？撃たれたら死ぬのにな？」

「ああ。撃たれる前から気がついてたんだが、圏内だったし、撃たれたらどんなもんか気になったからな。ま、それでも俺はこの通り生きてるからなんの問題もない。時間がなから手短かに話すが大人しく聞けよ？」

そう促すと、伊達にアインクラッドの時代で共に行動していたわけでもないキリトは真剣な面持ちで先程までの馬鹿のように騒ぐでもなく、こくりと頷いた。

「お前、今どこでログインしてる？」

「えっと、菊岡に用意された病院で看護師の監視されながらログインしてる」

「なら大丈夫だな。お前は撃たれても死なんから気にせず暴れる」

「レインは今回の事件のこともうわかってるのか？」

「ぼんやりとぐらいだがな」

時間を見ると開始まであと一分を切っている。

キリトの安全はわかったし、懸念はなくなった。

狙われたからといって自主的に解決しにいくつもりはなく、だからといって目の前で人が殺されていくのは気に食わないから邪魔をするつもりしかレインにはない。

「キャラネームはわからんが気配で判別できる。こつちから探すのも馬鹿みただから今は放置だ」

「じゃあ、お前がまた狙われることは？」

その質問にレインはキョトンとした表情でキリトを見返した。

真剣にこちらの事を心配している様子のキリトに不敵な笑みを見せた。

「問題ない。俺を殺せないとわかった時点であいつらは狙いにこないさ」

「お前がそう言うなら大丈夫だな」

呆れたように笑うキリトがこちらの言うことをあつさりと認めたことを疑問に思う。

そこまで信用されるほどのことをしただろうか。さすがに信用しすぎではないかと。

レインが、信用しすぎるな、と忠告しようとしたと同時に転移のための光が身体を覆い始めた。

どうやら、予選開始の時間になったらしい。

時間はもうないので開けた口で忠告しようとしていたことは違う言葉を選んだ。

「予選なんかで負けるなよ？」

「負けねえよ」

不敵な笑みを見せあつた二人の黒衣の戦士はこつんと拳をぶつけ合い、戦場に転移し

た。

予選

戦場への転移を待つ間、慣れた手つきでウィンドウを操作し、剛健パラドックという名前のナツクルを両手に装備したレインは自分が本来はいないはずの世界での問題に首を突っ込んでしまっていることに少し顔をしかめる。

もともと、GGOを始めたきっかけはSAOのときと同じく、剛に進められたからだ。魔法なしでのレインの銃撃戦を見てみたい、ということ、さすがに現実世界で銃撃戦を派手にぶちかますわけにはいかないのが、仮想世界で、ということになった。

律儀に剛の願いを聞かなくても良かったのだが、こちらの世界で自然な表情を作る間の良い暇つぶしになるということでSAOで使っていたデータをいつの間にかALOに移植していた過去のレインのデータをGGOにコンバートさせたのだ。

容姿はランダム生成でSAOやALOのように自身と全く同じになることはない。聞いていたのにもかかわらず、いざアミュスフィアを使ってログインしてみれば、ランダム生成のくせに見た目がほとんど変わらなかったときは、本当にランダムなのか疑いなくなくなった。

現実世界との差異といえば、貧相な体躯ぐらいだろう。

久しぶりの仮想世界を懐かしくおもいながら、不慣れな手つきでウィンドウを開くと、SAO時代に鍛えた数値らしいものがずらりと並んでいた。

これが当時の自分の強さと似た数値であるならば、弱い数値であることは間違いない。

適当に操作してみれば、当時ステータスをあげて途中でやめた名残りがあり、現状でも多少数値を上げることができるようだったので、とりあえず筋力値に全部振り分けた。

速さに関しては体の運びでどうにでもなる。命中率だって自身の技量の問題だ。防御力は攻撃に当たらなければ良い。運など自分で生み出すものだ。

その結果の筋力値への極振りという行為だった。

こちらの映像は現実世界で見れるようにいろいろいじったらしいので、特に何を気にするでもなくそのままフィールドに出たレインが、初期に配られる拳銃の装備をすっかり忘れたせいで肉弾戦をするしかなくなり、これはこれでいい修練になると肉弾戦しかなくなり、仮想世界でのほうが表情が作りにくいとわかってからというもの、ドラゴンスレイヤーになったことで超人的な肉体と半永久的な寿命を手に入れた彼が長時間GGOにログインしっぱなしになるまではそう時間はかからなかった。

その後、がむしやらに強さを求める少女——シノンと出会った。

理由は知らないが彼女が強くなるうとしてしている姿が他人事のように思うことができず、深く関わってしまったている。

そんな彼女が強くなるうとしてしている世界で卑怯な手をつかつて人殺しをしていることがレインには気に食わなかった。

正直なところ、元の世界であれば卑怯と揶揄される暗殺であろうと毒殺であろうと畏にはめることでさえも、それは一つの戦略であり、それに引っかけ死んでしまったほうが弱いだけだと一蹴する。

しかし、この世界は違うし、絶対に意識を戻すことができない状態の人間を何かしらの方法で殺すという行為は間違いなく卑怯だ。

自身の技量など関係ない殺しはレインは納得できるものでなく、一人の少女が強くなるうとしてしている世界でそんなことをするのを容認できるわけもなく、とことん邪魔をして痛い目にあわせてやろうと今回のB○Bへの参戦を決めたのだ。

実力者ばかりを狙い目立ちたがる死銃のことだ。こんな目立ちやすいB○Bに参戦しないなんてことはないだろう。

「とりあえず、今は目の前の戦いに集中するか」

ぐつと体を伸ばしたレインは、試合開始のカウントダウンがゼロになったと同時に、

控えの空間から戦場へと転移した。

転移が終わった感覚に閉じた瞼を開けると、岩肌が視界に広がった。

どうやら、この岩山谷間が今回のフィールドらしい。

岩山が主体となったこのフィールドには巨大な岩石もごろごろと落ちている。

両サイドは岩壁に囲まれているため、敵は正面か背後、もしくは所々岩壁にできている足場のような場所からレインを狙うしかない。

もつと複雑な地形、たとえば荒廃したビル郡のある場所であればもう少し幅を利かせた戦闘ができただろうが、そこは相手の運が悪かったとしか言いようがない。

後ろからくるか、前から来るか、上からくるか。

変に動いて相手と遠ざかったり、だからといっていつまでも相手を待ち続けるのも面倒だ。

無駄にログインし続け、フィールドで戦い続け、肉弾戦用の装備を見つけたこともあつて、今のレインの一撃はシノンのヘカートIIと大差ない威力がある。

つまり、一撃食らわせればそれで終わる。

本番は本戦なので、こんな所で無駄に時間をかける必要性は全くない。

ならばすることはただ一つだろう。

近場にあつた大岩の上に飛び乗ったレインは大きく空気を吸い込んだ。「逃げも隠れもせんからさっさと狙え!」

これでもかと大声を発するが、システムの影響なのか現実世界よりも遠くまで響いたようには聞こえなかったので相手が見つけてくれるか不安になる。

まあ、これだけ目立つところ立っていればそのうち来るだろうと、周りの気配を探りながらレインはその場で立つたまま相手が来るのを待つ。

目を閉じ、全神経を気配を探ることに集中させる。

あいかわらず、仮想世界でエクシードが読めるわけではなく、純粹で希薄な気配を探るしかなく、それなりに集中しなければならぬ。

それでもわかるのはせいぜい五十メートルが限界だ。

しばらくそのままだったレインが不意に首を前に傾けた瞬間、レインの頭があつた場所を銃弾が通り過ぎた。

「やつときたか」

まるで、待ち合わせ場所に友人が来たときのように緊張感など感じない眩きをもらしたレインは弾が飛んできた方向に向かって駆け出した。

レインが感じるどころができたのは飛んでくる弾だったので相手はそれ以上に遠い場所にいるということがすでにわかっている。

岩の合間を駆け抜けるよりも岩の上を飛んで移動したほうが速いと判断したレインは、身を隠すということもせずにはさまじいスピードで相手との距離をつめる。

対戦相手は無駄に乱射するタイプではなく、シノンと同じようにスナイパーらしく、的確にレインの額目掛けて一弾ずつ撃たれる。

しかし、すでに弾道予測線は見えているのでサイレンサーが付いていようと避けることは容易い。

最小限の動きで全ての弾を避け、相手との距離を詰めるレインの速さは変わらない。レインのシステム外スキルの索敵範囲に敵が入り、さらにスピードを上げると、今までの一本だった弾道予測線が突然何本もこちらに向かって伸びてきた。

それと同時に鳴り響く銃声に、相手が手段を変えてきたことを理解する。

一応不意打ちのつもりなのだろう。

いろいろな意味でレインは有名なので、レイン相手に普通に戦っても勝てないのは理解しているはずだ。

常勝無敗であるレインが相手と分かっているのにリザインせずに銃口をこちらに向けているだけでも根性がある奴だということになる。

しかし、

「この世界じゃ、数撃って当たれば勝ちってわけじゃないだろ」

一度だけ、現実世界で銃弾を受けたことがレインにはあった。

今でそこリアルで銃弾を受けたところで簡単に死ぬことはないが、普通の人間であれば一つでも直撃すれば死ぬことが容易い。

だが、ここは仮想世界で、HPという名の命の残量が全てだ。

しかも痛覚すら遮断されているのでデバフを食らわなければ動きが鈍ることはない。

そうなれば、レインのとる行動は実に単純になる。

弾道予測線の先を見据えたレインはそのまま直進した。

そのまま、雨のように降り注ぐ弾丸を、黒衣の戦士は踊るように躲していく。

HPの残量を視界の隅にうつしながら、当たってもいい弾と当たってはいけない弾を判断し、スピードを落とすことなく相手へと突き進んだレインは、その後一分もかけることなく、予選の一戦目を終わらせた。



「キリトの奴、ここをどこだと思って戦ってるんだよ」

試合を終え、次々と不戦勝を重ねたレインは呆れ顔を浮かべながらモニターを見上げていた。

視線の先には、銃で戦う世界で光剣を振り回す黒衣の少女——に見える少年、キリトが戦っている映像がある。

ここをどこだと思っている、というレインの発言に対して、GGOをしている全世界の人間がお前が言うなと口をそろえて言いたいだろうが、幸いというべきか、レインのつぶやきは誰の耳にも届くことがなかった。

不戦勝を重ねているせいでレインが残す試合は半数をきっているが、まともに戦っているほかの参加者はいまだに三割程度しか試合を終わらせていない。

キリトはコンバートしたばかりだし、レインのように理不尽なほど強いわけでも、ここでの戦いに慣れているというわけでもなく、ただ申し訳程度に片手に銃を持っているおかしな光剣使い、というように思われているだけのようで、始まった直後にリザインされるようなことはされていない。

本戦で戦う前にこの世界での戦いに慣れておく、という点で言えば丁度良いだろう。

「にしてもあいつ、ちよつと馬鹿みたいに突っ込みすぎじゃないか?」

「キリトもアンタだけには言われたくないと思うわよ」

今度のつぶやきは誰かに届いてしまったようで、レインは背後からの声に振り向いた。

「よっ。シノンも順調そうだな」

「不戦勝重ねてるあんたに比べたら苦勞してるけどね」

笑顔で言ったのにもかかわらず、シノンが返してきたのは仏頂面だった。

普段からレインと話すときは不機嫌そうな表情なのは常なのでいままさら気にするこ
とでもない。

「そんなに苦勞しとらんだろ」

「まあ、予選だし苦勞つて言うほど苦勞してないけど、決勝で当たりそうなアイツに關し
ては苦勞しそうよ」

アイツ、と言いながら、シノンは光劍で銃弾を弾いて無理矢理接近戦に持ち込んでい
るキリトをじつとりと見た。

「俺もキリトに光劍持ち出されたら獲物がないうときついが……」

そこでレインは言葉をとめた。

彼の視線の先には高野を駆け抜ける黒衣の少年が今も戦っている。

それはまさに鬼神と言っても過言ではないほどの強さだ。

それでも――

「あんな状態のアイツなら装備なしでも勝てるな」

どこか呆れたような、覚めたような視線をただ我武者羅に何かを振り払うように光劍
を振り回すキリトに向ける。

「……ねえ、キリトって普段からあんなふうに戦うの?」

突然の質問に驚いたレインはちらりと隣をみると、どこか心配そうにシノンはモニターに映るキリトをみていた。

レインは少し考えた後、口を開いた。

「もう少しまともに頭使って戦うぞ。本気でやばい時は本能で剣を振り回すみたいだが、もつとまともだな」

グリームアイズを相手したときは間違ひなく本能で身体を動かしていただろうが、基本的にはレインとデュエルする時のように頭を使ってキリトは戦う。

馬鹿そうに見えるが、あれでもSAOの最前線で戦い抜いた戦士なのだ。

ただの脳筋バカではない。

「そうなんだ……。一回戦終わったあとのアイツの様子見た時はてっきり初めての銃撃戦にびびってあっさり負けると思ったんだけどね」

その言葉に、レインは多少なりとも驚いた。

「キリトはそんなんでびびるようなやわな根性しとらんと思ってたが、平和ボケでもしたのか?」

「私に聞かないですよ。ただ、初戦から戻ったらキリトのやつ、凄く怯えた様子だったわ」
私には関係の無いことだけどね、と言いながらも立ち去ったシノンは、きつとわざわ

ざ伝えに来てくれたのだろう。

皮肉こそ多いが、本来は本当に優しいだけの少女なのだ。

だからなおさら、彼女が強くなるうと必死になっている世界を汚している奴らが
「気に食わんな」

そう呟いたレインの表情は、キリトが知っている少年時代のレインそのものだった。

線引き

「もし、その引き金が本当に人を殺すとしたら、それでも君は引き金を引けるか？」

Fブロックの予選決勝。

その様子をCブロックをあつさりと終わらせたレインはモニター越しに眺めていた。音声が届くまで聞こえた訳では無いが、口の動きで二人の会話を見たレインはすつと目を細める。

モニターに映るキリトがシノンに対してした質問はこの世界だからこそその質問だ。

魔獣だけではなく、名前も知らない人間も殺してきたレインからすれば、殺さなければならぬなら殺すしかない。

読書好きで虫を殺すことすら出来なかった少年がそのまま育っていれば、人を殺すことに躊躇いはあつただろうが、そうなることはなかった。

殺す必要がないやつは殺さないし、殺すしかないやつは殺すしかない。

そうレインは考えている。

しかし、いろいろ考えた結果、この世界ではできるだけ殺しはしないことにしていた。仕事として敵対組織を壊滅させろといわれたら壊滅させには行くが、どうしようもな

イクズ以外は殺していない。

まあ、後が面倒なのでこれでもかと脅して恐怖を植えつけたりはしているが。

そして、今回の死銃に関しても徹底的に邪魔をするだけしかないつもりでいる。

誰がやっているのかという目星すらもついているが、それをキリトに教えるつもりもない。

結局のところ、レインは本来この世界にいないはずで、関わるはずのない異邦人なのだ。

彼らは彼らの力で困難を乗り越えていくべきで、レインはそれをほんの少し手助けするだけ。

そうしなければ、きっとレインは元の世界にかえることが難しくなってしまうから。

この人間ではないということ自分を言い聞かせるための線引きとしての自らに与えた枷。

それは実にもどかしく感じるが、レインにとって必要なものなのだ。

「ま、あいつらなら大丈夫だな」

微かに微笑んだレインは人知れず会場から姿を消した。

眠りから覚めるような、自分の身体に意識が戻ってきたという感覚にレインは閉じていた臉を持ち上げた。

剛たちが拠点を構えているところとは違うが、それなりに広い一室。

少し古いせいでセキュリティが甘い代わりに家賃が安く普通のサラリーマンが一人暮らしするには十二分なアパートにレインはいた。

置いてあるのは備え付きの机と冷蔵庫、それからレインが持ち込んだ彼が寝転がれるぐらいの大きさがあるソファぐらいしかないその部屋は、広さが相まって寂しく感じる。

ここは、剛たちが用意してくれたレインのための家だ。

べつに剛たちの拠点でいいと言ったのにも関わらず、用意された場所。

家賃は組織が持つてくれているのでレインとしては困ることはないのだが、組織の拠点から徒歩数分の距離にあるので、わざわざここにレインの部屋を用意した意味が理解できない。

そして、このことを知っているのは組織の人間以外ではシノンとシュピーゲルぐらいで来客がある訳でもない。

ソファから起き上がったレインは冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出してぐつと飲む。ひんやりとした水が全身を冷やしていくのを感じながらポケットに

突っ込んだままだったスマホを手を取った。

時刻は夜の九時を回っていて、今から晩御飯を食べるといふ気にはどうにもなれない。

何かしらがあるのであれば多少は食べるのだが、基本的に冷蔵庫には水しか入れない。

何日も食にあり付けないのは元の世界の旅で慣れていたのでレインにとつては一食抜くなんてことは大したことではないのだ。

早々に食べることを諦めたレインは傾国の剣の入ったカバンを担いで家から出た。鼻歌交じりに向かうのは組織の施設の一つである地下修練場だ。

本当であれば人目につかないところで鍛錬したいのだが、如何せんこの世界は夜でも明るく、いい場所が見つからない。

力を暴発させてもとくに気にしなくても良いというのもあるので有難く使わせてもらっているしだいだ。

間違いなく本戦は忙しくなる。

狙われるであろう人物の特定はできてるのでそいつをみはつていけばいいだけだが、狙われているであろう数人のうち、みはつていない他のところに行かれたらめんどろ。

◆
レインは一人で動く計画を頭の中で作り上げながら修練にはげんだ。

少し早めにログインしたキリトは眉間にしわを寄せながら市街地を歩いていった。

笑う棺桶と聞いて思い出すのは、血の海の中に立つレインと、あの時に監獄に送ったラフコフのギルドのメンバーの憎悪や恐怖の表情。

そして、唯一殺した一人の男。

どれもいい思い出とは言えないものだ。

予選会場でラフコフの生き残りらしい人物に声をかけられた時、咄嗟に溢れ出た感情は恐怖だった。

大切な人を殺されるかもしれない恐怖、自分が死ぬかもしれない恐怖、再びレインに人を殺させることに対しての恐怖だ。

異邦人であるレインからすれば人を殺すことなど日常茶飯事だろうし、誰かを守るためならためらうことなく殺すだろう。

彼に人を殺して欲しくないというのはキリトの我儘だ。

本戦のためにログインする直前、人を救うために諦める命もあるという話を聞いたこ

とで、アスナを守るためにはアレが必要なものだったと思える。

だからといってまだできるか、といわれると正直できない。

その事を考えたことでレインとの差を感じた。

現実でも人外地味た動きをするレインと自分を比べることがおかしいとは分かっているが、どこかで自分は彼の相棒だと思っていたし、向こうもそう思ってくれていると思っていた。

だが、きつとそれは――

「なに湿気た面で歩いてんだ？」

その声に振り向くと、いつものように全身真っ黒で精悍な顔立ちをしたレインが立っていた。

先程まで考えていた内容と、成長した彼の姿も相まっていつもよりも大人に見える。

何も返事を出来ずにいたキリトに対してレインは小さくため息をつくと言と頭に手を置いた。

「ガキが何を背負い込もうとしているのか知らんがな、俺は今のままのお前でいいと思うぞ」

そんな、何もかもを察したような言葉を吐いたレインを思わずキリトは食い気味に見つめた。

「男に優しくするのは趣味じゃないんだが、今のお前は女に見えなくもないからサービ
スだ。いいか、キリト。誰にでも勝てる奴も人を殺せる勇気がある奴もこの世界じゃ確
かに強い人だと言われるのかもしれない。でもな、俺はそうは思っていない」

負けたところを見たことはないし、守るためなら躊躇うことなく人を殺すことができ
るだろうし、自身のことを世界最強だと言う彼がそんなことをいう。

「例えばだ、アスナは気が強いところがあるっちゃあるが、根は優しい。そんな彼女が誰
かに負けるからという理由で、何かに悩んでいるからという理由で弱いと言えるか？」

レインの問いに、キリトはすぐに首を横に振った。
説明するまでもなく、アスナは強い。

「なら分かるだろ。人の強さは個人によつてそれぞれだ。お前はお前の強さを磨いて、
そのあり方に自信を持てばいい」

不敵に笑いながらレインはぐしゃぐしゃとキリトの頭をかき混ぜ、手が離れてから顔
を上げると既にレインは歩き出していた。

目の前を行く背中はいつものように頼もしく感じ、それと同時に孤高に見えた。

それが彼が異邦人だからなのか、背負うものの違いなのかはわからない。

あれに並ぶことはできるだろうか。昔みたいに背中を合わせることができよう
か。

「なんでお前だけ成長しちまったんだよ」

どこか悔しいと、また並びたいと、背中を合わせたいと、キリトはつぶやき、ごく自然にレインの隣に駆け寄った。

「お前無駄に背が伸びてムカつくな」

「はあ？お前がチビなだけだろ」

「俺だつて二十歳ぐらいになればもつと伸びてんだよ!!」

「いやいや、成長期は二十歳までには終わるぞ??今伸びないとお前はそのままだな。さつきも今のままのお前でいいと言つたら」

「さて、そういう意味?!もつといい感じだったよな?!」

「ん?何のことだ?」

迷いのなくなつた黒衣の剣士と世界最強の黒衣の戦士が並んで歩く姿は、いつものように兄弟のようで、そしてどこか近寄り難いほどに何かを秘めているのが分かるものだった。

ぎやーぎやーと騒ぎながら試合会場に二人が入ると、その場にいたほとんどの人たちの視線が二人に集まつた。

当たり前のことだろう。一人は合法チートと騒がれる有名人でもう一人は光剣で弾

丸を弾き飛ばしながら対戦相手に接近して切りつけて倒すというバーサーカーだ。

黒という大して目立たないはずの色の服を着ている二人ではあるが、存在感は有り余っている。

元々豪胆な性質のレインが気にするはずもなく、キリトはアインクラッドでピーターとして豪胆に立ち振舞って来ていたこともあったのでこんな事で萎縮するような性質もない。

だからと言って可愛い女の子ならまだしも、むさ苦しい男達の視線を受け続けても嬉しいわけがない。

取り繕うことなく顰め面をしたレインは追い払うような仕草をする。

「じろじろ見んな。ただでさえむさ苦しい空間なのにさらにむさ苦しさを感じるだろうが」

「てめっ！ 普段からシノンちゃんと仲いいくせにキリトちゃんにも早速手を出しやがって調子乗るなよ?!」

どこからか飛んできた言葉は怒りよりも悔しさのほうが含まれた声音なせいで迫力が皆無だ。

「誰がシノンとキリトみたいになんちくりんに手を出すんだよ」

「なんちくりんで悪かったわね」

声のするほうをみると、眉間にシワを寄せたシノンが立っていた。

「よっ。今日も機嫌はいいみたいだな」

「どこをどう見たらそうなるのよ」

いつもと変わらない様子のシノンにレインは不敵な笑みを向ける。

「シノン、ちよつと聞きたいことあるんだけど、いいか？」

「なによ」

「えつと、本戦の内容聞きたくて」

その言葉を聞いて隠すことなく嫌な顔をするシノンを見て、レインはわからない程度に微笑んだ。

完全に三人での会話になったからか、外野の連中もレインたちから意識を外して、賭けやらインタビューやらに戻る。

「そんなの、案内届いてるはずでしょ」

「いや、まあそうなんだけど……他にも聞きたいことがあってさ」

「そんなのレインに聞けばいいじゃない。なんで私なのよ」

シノンがそういうと、キリトは気まずそうにちらりとレインを見た。

そんな顔を向けられる覚えがないレインが首をかしげると、キリトが眉間に小さくため息をついた。

「俺が聞きたいのって、今回のB o Bにはじめて参戦してる奴の名前なんだよ。レインがいつからガンゲイルをやったんのか知らないけど、どうでもいいやつの名前を覚える性質じゃないのは知ってる」

「失礼だな。確かに名前を覚える気はないが、ガンゲイルをはじめたのは十一月頃だからどつちにしろ答えられんかったぞ」

元々レインは異邦人でここに長居するつもりなどない。

ここで覚えている名前といえバシノンとシユピーゲルぐらいだ。

それに、とレインは言葉が続ける。

「それに、綺麗なお姉さんなら覚えたが、ここはむさい奴らしかおらんだろ」

真剣な顔でレインが言ってから少し間を空けた後、二人分の深いため息がもれた。

「どこぞの黒づくめの二人とこの三人ぐらいかしら」

適当に本線の説明をすませたあとに、どうやらこちらの質問が本命らしい初出場のプレイヤーの名前を上げると、キリトは真剣にその名前を見つめていた。

おそらく名前を頭に叩き込んでいるのだろう。そんなキリトの隣に座っているレインは話を聞いているのかいないのかわからないほどのんびりとすごしている。

「ありがとうシノン」

「にしても、なんでまたプレイヤーの名前なんて？」

シノンにとっては何のこともない質問を投げかけると、キリトは予選の時に見せた怯えたような表情を一週間前見せたあと、目を伏せた。

人をからかったり、飄々としている彼からは想像もできない姿だ。

その様子をレインは静かに見ている。

「この中に、昔、同じVRMMOをやっていた奴がいるかもしれないんだ」

再会を喜ぶ、という感じでもないキリトの態度にシノンは小首を傾げる。

「それって、仲間だった人とか？」

「いや、違う。やつらとは殺し合うはずだった敵同士だ」

敵同士ということは敵勢ギルドだった人だろうか。

それにしてもキリトの様子はおかしい。

敵同士だったからという理由でそこまで深刻そうなのがわからない。

シノンもスコードロン同士で戦ったりするが、険悪になるほどのことはない。

「ほう。軍とかあのあたりのやつか？」

それまで無言で話を聞いていただけのレインが興味深げに口を開いた。

彼はキリトと昔同じゲームをやっていたと言っていたし、レインがこの事を気にする

のに違和感はない。

「いや、違う」

「お前を敵対視してたの多すぎて絞り込めんど。どこのやつだ？」

「それは」

キリトはちらりとレインを見た。

その表情はいろんな感情が入り乱れているせいで形容するには難しいが、強いていえば、罪悪感だろうか。

キリトの顔に色濃く出ていたのはそれだった。

様子のおかしいキリトにレインは片眉を上げる。

少しの間沈黙が流れる。

キリトは静かに目を閉じてから口を開いた。

「ラフコフ」

その言葉をキリトが吐いた瞬間に、何を思う暇もなくレインの纏う空気が一変した。

傲岸不遜で何を言われようが、どんな卑怯な手で相手がこようが怒ることもなくただ笑いながら全てを蹴散らしてきた彼の表情は、バグのようにすべて抜け落ちていく。

バグで表情がなかったときがあるのだから彼の無表情に違和感を感じることはないが、今の彼からはそれだけではないものが感じられる。

このとき、初めてシノンにはレインのことを怖いと感じた。仮想世界では汗をかくことがないが、自身から汗が吹き出るような感覚を味わうほどにレインの纏う空気に気圧され、動けなくなる。

何もできずにいるシノンとは打って変わって、キリトは臆することなく、むしろ慌て始めた。

「ちよつと、レイン！落ち着けてー！」

キリトの言葉を聞いて、一度目を閉じたレインが次に目を開けたときにはいつもの空気に戻っていた。

「いや、悪い」

シノンがレインに怖がったことをすぐに理解したのか、彼の長い腕がシノンの頭に伸びてふわりと優しく撫でた。

それだけで、緊張していた身体の力が抜ける。

「そうか、あいつらか」

シノンの頭から手を離しながらレインは小さくつぶやく。

先ほどのほどの空気は出ていないが、それでもレインがラフコフと呼ばれる何かいい感情を持ち合わせていないのがわかる。

それについて聞いて聞いていいのかわからないうちにレインがすくりと立ち上がった。

「そうなら、これは俺の不始末だ。この世界のことだからと邪魔だけにとどめようと思っていたが、俺が殺し損ねたやつが関わってるなら話は別だ」

殺し損ねたという言葉でシノンはびくりと肩を振るわせた。

完全にシノンを置いていく形でレインとキリトの会話が進んでいく。

「待てって！それを言うなら俺だって——」

「キリト。あの世界での殺しは」

今度は意図して自身の空気を変えたレインが静かにキリトを見据えた。

「俺の役目だ」

言い切ったレインの目をキリトはしっかりと見返していた。

先ほどまでは恐怖や罪悪感が入り乱れていた彼とは打って変わり、レインを止めようとしているのがはっきりとわかる。

「だめだ。もうお前に何も背負わせたくない。俺だってあのときみたいに非力じゃない。仮想世界でならお前に頼るばかりじゃないはずだ」

「勝手に俺に何かを背負わせるな。この程度のこと俺からしたらなんでもない。日常だ」

「それでもだ！それでも俺の前でもうお前に手を汚すことをさせないって決めたんだ！」

静かに二人がにらみ合った後、レインが小さくため息をついた。

「仕方ないな。なら、序盤は最初の予定通りやつの邪魔をすることに徹底する。仕留めはせん。だが、お前が途中で負けたり、さっさと殺さないといけないと判断したら遠慮なくやる。それでいいだろ」

「……わかった。そうなる前に俺があいつをしとめる」

まるで現実かのように殺すというレインともうお前に殺しはさせないというキリトに疑問を抱く。

だってここはゲームの中なのだ。ゲームの中で人を殺すことができることなど――

「……っ！」

そこまで考えたシノンの中で一つだけそれが現実となる“ゲーム”が頭の中に浮かんだ。

ぐるぐると頭の中で今までのレインの言動や行動、キリトの言葉のピースがきれいはまっついていく。

「ああ、シノン、ほったらかしにしてて悪かったな」

いつものようにレインの手がシノンの頭に伸びてきたが、不意打ちだったせいでびくりと肩を震わせてしまった。

恐怖は皆無だった。むしろレインの知っている手は暖かさがあり、彼がたとえ人を殺

したことが本当にあつたとしても、それは彼が優しいがゆえの行動だと考えることもなくわかりきつたことだと言い切れる。

ただ他の事に気を取られていて、驚いたただけだった。

にもかかわらず、レインの手はシノンの頭に触れることなくピタリと止まった。

一瞬、ほんの一瞬、誰にもわからないだろうほんの少しだけレインがひどく傷ついた顔をしたような気がした。

「ちがつー！」

「気にするな」

へらりと笑つたレインは静かにその場から立ち去つた。

今度はキリトも止めることができず、ただレインの後姿を見るだけだった。

「違う、違うのよ」

もうこの場にはいない彼には届かないと分かつていても、言わずにはいられなかった。

「ごめん、物騒な話して。君の前で話すような事じゃなかったんだけど、レインには今回の敵の話をしたくないといけなかつたんだ」

申し訳なさそうにするキリトをみて、彼らと自分の間には大きな壁がある気がした。

だからなんだ。

彼らが無意識か何か知らないが作っている壁が気に食わない。

「構わないわよ。そんなどうでもいいことより他のことを考えてたのよ」

まるで言い訳のように聞こえてしまうかもしれないと思ったが、言う他なかった。

「あんた達の会話聞いて、もしかしてあなた達が前にやってたっていうのが、その、あのゲームなんじゃないかったのよ。あなた達がただの馬鹿でお人好しだつてことは知ってるし、今更怯えることなんてないわ」

驚きでか目を見開いてこちらを見ているキリトの目をしっかりと見返す。

そうしなければ、彼がきつと誤解したままだと思つたからだ。

しばらくした後、キリトはへらりと微笑んだ。

「ありがとう」

「礼を言われることでもないわよ。そんなことよりそろそろ待機ドームに移動しないと」

立ち上がつてさつきと歩き出したシノンだったが、キリトがついてこないの仕方なく振り返つた。

「なにぼーつとつたてんのよ。さつきと行くわよ」

「そうだな」

へらりと笑つたキリトが小走りで隣に並ぶ。

二人とも無言のまま、エレベーターに乗り込んでからシノンは口を開いた。

背中に当てられてるのは銃口ではなく指先だろう。

「あなた達がB O Bに持ち込んだ問題と私があなた達と戦う事は別の話よ。だから、私以外に撃たれるなんて許さないから」

「わかった。君に会うまで生き残る」

「もし、あのバカにも会ったら伝えときなさい。アンタを倒すのはこの私よつてね」

その言葉で、シノンもレインという戦士の強さに惹かれている一人であることが分かった。

何にも負けない彼の強さに憧れる自分と同じなのだ。

「会ったら伝えとくけど、先にレインを倒すのは俺だぞ」

「私にあんたも倒してレインも倒すんだからそんなこと知らないわよ」

「じゃあレイン倒すためにもシノンには負けられないな」

「おとなしく私に負けて私がレインに勝つところを見ていればいいのよ」

一人の剣士と一人のスナイパーの口論が繰り広げられながらも、着々とその時は近づいていた。

フアーストコンタクト

「頼む。俺はあの二人の戦いが見たいんだ」

敵を狙うシノンに背後から近寄り、銃口を向けたキリトは静かに告げる。

二人の間で交わされた約束のことを考えると間違はなくそれを裏切るような行為ではあるが、元笑う棺桶が関わっていたいて、本当に人が死ぬ可能性が高くなった現状でそんなことを悠長に言ってはられない。

「ちゃんと戦ってくれるんでしょうね」

「もちろんだ」

こちらに向けていた銃口をシノンが下ろしたのを確認したキリトはすばやくシノンの隣に寝転がり、懐から出した双眼鏡を覗き込んだ。

「そういえば、レインとは会ったか？」

まだ動きそうのない状況の合間をつなぐようにキリトは問いかけた。

双眼鏡をのぞいているが、隣でシノンがため息をついたが聞こえ、すぐに察する。

「会えるわけないでしょ。なによ、あの移動速度。車でもぶっ飛ばして乗り回してるの？」

「あく、それはないとおもう。あいつ車とか運転できないだろうし」

シノンの言葉にキリトは答えながらもあきれた様子でレインのことを思い出した。

十五分に一度あるステライトスキャンというのが行われ、プレイヤーたちがいる場所が配布されたアイテムで確認できるようになったいる。

キリトも死銃を探すためにももちろん確認している。

それを確認した際に、レインの異常な動きに気がついたのだ。

サテライトスキャンをしている間のプレイヤーの動きも表示されるのだが、レインのカーソルだけ尋常ないスピードで動いていたのだ。

彼が異邦人ということを知っているキリトはあれがただ走っているだけだということとがなんとなく察することができたが、普通であればバグにしか見えない。

というか、レインがわざわざ車を探して移動するということが想像できない。どちらかといえば馬のほうがまだ納得できる。

「来たわよ」

シノンの言葉でキリトは頭を現在に戻して双眼鏡で見ていた先に意識を集中した。

スコープで様子を見ているシノンのいうとおり、橋の向こうかペイルライダーがかけ
てくる。

対して待ち構えていたダイスがライフルを乱射するが、ペイルライダーは橋をアクロ

バテイツクな動きで縦横無尽に駆け回り、あっという間にダインを戦闘不能にした。

一連の動きだけでペイルライダーがかなり強いということはわかる。

あれだけ動き回られたら弾は当たらないだろう。

キリトは結局のところ避けることはなく光剣ではじいているだけだし、レインは致命的な弾以外は気にしている様子はない。

正直なところ戦ってみたい相手ではある。

「終わったけど、仕留めてもいいの？」

「ああ。ありがと」

ペイルライダーを見る限り、予選のときに話しかけてきたマントの男とは違う人物だろう。

彼か彼女かは服装のせいで分からないが、あの人は人殺しではなく戦士だと言える。

「え、何？」

緊張させていた身体から力を抜いた瞬間、スコープを覗いているシノンが驚きの声を上げるのを見て、キリトも再び双眼鏡をのぞき込んだ。

「シノンがやった……わけじゃないんだよな？」

「銃声なんて聞こえなかったでしょ」

「でも、なんでペイルライダーは」

「私以外の誰かがサイレンサー付きの銃で撃つたのよ」

なるほど、と思うと同時にDEADになったわけじゃないのに動き出さないペイルライダーを不思議に思つてよく見てみると左の肩に棒状の何かが刺さっていてパチパチと電気がはしっている。

「あの肩のやつはなんだ？」

「肩？あー、あればスタンね。でも珍しいわね。あんなの使う人なんて滅多にいないわ。対レイン用に持ち出した人も結構いたみたいだけど、当たらなくて無意味だったし」

思わずアイツはここで何をしているんだ、と思つてしまうのは仕方がないだろう。がつつりこの世界を楽しんでいるではないか。

脱線しかけた思考を戻すためにペイルライダーを撃つた敵を探すと、先ほどまでは誰もいなかっただけの橋のすぐ近くに人影を見つけた。

そいつは間違いなく、予選のときに声をかけてきたボロマント——死銃だった。

「あいつかしら」

「シノン、撃つてくれ」

「え？」

二人が会話をする間もボロマントは足を動かして片手に拳銃を握りながらペイルライダーに近づいていく。

おそらく、キリトが走っていつても死銃がペイルライダーを撃つほうが早い。ペイルライダーを救うにはシノンに撃ってもらうしかないのだ。

「頼む、やつを倒してくれ！」

「え、やつ？どっち？」

「ボロマントのほうだ！」

「わかったわ」

キリトの切羽詰った様子を見て、シノンは急いで、しかし冷静に照準を死銃に合わせる。

その間にも死銃は殺しをするときに必ずする十字をきる動作をして拳銃をペイルライダーに向けた。

「シノン!!」

キリトの声と同時にシノンがヘカートIIの引き金を引いた。

間に合え、と心の中で祈ることしかできないキリトはそのことを齒がゆくおもいながら双眼鏡を握る手に力がこもる。

ヘカートIIから発射された弾は死銃の頭へ吸い込まれるように一直線に飛んだ。

元々シノンの技量は高いのでさほど心配などはしていない。

これなら当たる。

そうキリトが確信した直後、死銃が少し身体をずらして弾丸を避けた。

「なんで?!」

「あのタイミングで弾をよけるってことは、弾道予測線が見えてたってことになるわ。あいつ、いつの間に私達のことを認識してたの?」

悪態を付きながらもシノンでは次の弾を装填するが、間に合うはずがない。

キリトも間に合うとは思っていないものの、死銃に斬りかかるために立ち上がった。

それと同時に、空から何かが降ってきて死銃とペイルライダーが居た周辺が土煙に覆われた。

何が起こったのかさっぱりだが、銃声は聞こえていないのでペイルライダーが撃たれてはいないのだろう。

「シノンーもしボロマントを狙えそうだったら狙ってくれー!」

シノンの返事も聞くことなく、キリトは土煙の中心に向かって駆け出した。

ゲームはエフェクトが大袈裟で煩わしい。

現実だと、こんな枯れた土の上で拳を打ち付けたぐらいでは土煙は視界が遮られるほどまじ上がることはない。

せいぜい地面が陥没するか固まっている土の破片がそこかしこに飛び散るぐらいだ

ろう。

普段であれば剣を一閃して土煙をはらうのだが、そんなことが出来る物は持ちあわせていない。

視界を良好にすることを早々に諦め、足元に転がる被害者を抱き上げると、力強く地面を蹴り、乱入者——レインは土煙の外に飛び出した。

「レイン?!」

なにやら聞き覚えのある声が聞こえ、早々に自分がここに来たということバラしてくれたことに対して内心舌打ちをしながらも辺りの気配を探り、ラフコフの残党らしい奴が土煙から出てきていないことを確認する。

普段は装備していない黒のロングコートの裾をはためかせながら、華麗に着地したレインは、肩にかついだペイルライダーを下ろすことなく、標的の気配に集中する。

気配を探って奴がどこにいるかを分かっているレインは今すぐ隠し玉を使って仕留めることも可能だが、そうすると魔力を使って本体の奴を殺すことはできない。

さすがのレインも仮想世界から現実世界に魔力を使って相手を殺すという芸当は、直接相手に触れていないとできないのだ。

それに、一応キリトとの約束もある。

面倒だな、と内心で悪態を付きつつ晴れてきた土煙から頭をのぞかせた死銃と向き

合った。

「今日の中身は違うんだな」

死銃がこちらの事を認識したのを確認したレインは感じ取っていた気配からあえて『中身』について口に出した。

微かに動いた死銃の反応を見るに、レインがその事を看破していることに驚いているのだろう。

「当たり前だ。この世界に住んでいる人間にはそんな芸当は出来ないのだから。」

「さて、お前の標的はこいつで終わりのはずだが、どうする？意地でも今こっこいつを殺すか？それとも、隠れて逃げるか？」

「こっこで死銃をゲームオーバーさせるだけなら簡単だが、今の中身の現実世界での姿を知らない。」

「おそらく、今あのアバターに入っているやつがラフコフの残党だろう。」

レインの本命はあくまでもラフコフの残党だけだ。こっこで殺さずに奴の本体をたたくためにもどうにか現実世界での奴の正体を知る必要がある。

それまでは生かしておくことしかできない。

この世界から魔力を使って殺すならそんなことをしなくてもいいのだが。睨み合うでもなく、ただ視線を合わせ無言の時間が過ぎる。

それを破ったのはけたたましい銃声だった。

銃声が聞こえ、すぐに死銃が動いた。

ゆらりと体を傾け、彼に向かって飛んできた弾丸をするりと避けた死銃はレインに近づくとなく背後の川の方向に向かって駆け出した。

近くにはキリトもいて、目の前にはレイン。遠くからはシノンが狙っている。その状況は流石に不利だと分かったのだろう。

慌てて追いかけるキリトと違い、逃げる死銃を最後までレインは静かに見続けた。

「バーサーカーのアンタ相手に抵抗するのも馬鹿らしい思つて現状を維持してるんだが、そろそろはなしてもらえないだろうか？」

不意に聞こえた声が担いでいた人物からのものだど理解できたのは少し時間がかかった。

「おー、悪い悪い」

一応敵意が無いようなのであっさりとレインはペイルライダーを下ろした。

「なんだかよくわからないが、助けてくれてありがとう」

「こつちの事情だからあんたは気にしなくていいさ」

「ほう、ならここで脱落してくれ」

カチャリという音と同時に銃を頭に突きつけられる。

それはレインにとって想定内の行動でしかなく、驚くこともなく腕をはらって銃口を自分から逸らした。

それと同時に大きな銃声が鳴り響き、レインから少し離れたところに小さな跡を残す。

いきなり打ちに来るとは何事か、と一言文句を言いたかったところではあるが、レインは目の前で上半身を失い、倒れゆく下半身を見つめて小さくため息をついた。

元々、死銃に再び狙われる可能性もあることも考えて、跡形もなく仕留めるつもりだったので彼がここで脱落しても構わないのだが、上半身と下半身を分けるだけで終わってしまったシノンの弾の微妙な結果に少し頭をかいた。

上半身だろうが下半身だろうが身体が残っているだけで、死銃は殺すかもしれないのだ。

「仕方ないか」

キリトはすでに消えた死銃が川に降りたのか確認していてこちらを見ていない。シノンはおそらくこちらに向かって歩いてきていて距離がある。

手早くコートの中から手榴弾を二つほど取り出したレインは、躊躇いもなく安全ピンを抜いてペイルライダーの上半身と下半身に向って投げた。

「悪いな。あんたの命を守るためなんだ」

本戦のガイドに敗れた選手の意識は現実に戻らずそこにあり続けるといっことは知っている。

だからといって、周りの音が聞こえるのかはわからない。

それでも、死体蹴りのようになってしまっているので一声かけるしかないだろう。

レインが何事もなかったかのようにその場を離れた直後、ペイルライダーの身体は爆発によって四散した。

「ちよつと、あんたなんで爆破したの?」

意外にも早くここまで来たらしいシノンが爆発によってできた二つのクレーターを一瞥する。

「持ち歩くのは面倒だからな」

「それって答えになってるの?」

「なってる」

結局のところ、詳しい殺害方法をわかっていないレインは早々に切り替えた。

「キリト。死銃は?」

「逃げられた。で、レインの今からの予定は?」

切り替えの早いキリトにさすがだとおもいつつも、そんなものはおくびにも出さず会話を続ける。

「俺の把握してる死銃の標的になってるやつらは肉片も残さずに仕留めたからこれ以上被害者は出ないとはおもう。だが、もしかしたら俺の知らん標的がいるかもしれない」

「はあ?! お前死銃の標的知ってるのかよ?!」

「言ってるなかつたか? アイツ、総督府のエントリーの端末覗き見てるのを確認してるし、一応把握してるぞ」

標的になった奴らの名前とアバターの見た目は予選で確認済みだしな、と付け加える
とキリトが深くため息をついた。

「何でそれ言わないんだよ。そしたら俺だつて協力したのに」

「お前は死銃の正体突き止めるんだろ」

「ちよつとまつてよ。端末覗き見るなんてそんなこと——」

「アイツはアイテムか何かを使ってるか知らんが、透明になる。俺は仮想世界でも気配を感じ取れるから見えなくてもわかるから透明になろうが関係ないがな」

さらりとレインは言ったが、シノン信じていないようで訝しんだ目でレインを見た。

ちなみにキリトはあきれている様子で、レインの言葉を信じているようすだった。

二人の反応に不満しかないレインは顔をしかめる。

「信じる信じないはお前らの自由だ。だが、俺は気配でキリトの見た目女でもキリトだ」

とすぐわかつたんだぞ。それに、一回死銃に撃たれたときにやつの気配を知ったし、それとエントリー端末を覗いてるやつの気配が一緒だったからアイツが死銃だってわかつて、こうやって被害を防げてるんだ」

レインはぶつぶつと言いながらもコートの中に右手を突っ込み、少し離れた森に向かつて本戦から使い始めた片手で持つには大きい銃を構えた。

それと同時に少し離れた位置にいたキリトとシノンを左腕だけで抱き込む。

「ちよつと?!いきなりなんなの?!」

「おい、レイン?!」

「口閉じてろ。舌噛むぞ」

静かに忠告した直後にレインは躊躇うことなく引き金をひいた。

腹に響くほどの銃声が鳴り響き、普通の銃ではありえない衝撃が発生し、手榴弾が起こした爆発よりも大きな轟音が空気を揺らした。

筋力値に極振りしているレインだからこそ耐えられる衝撃であるが、そんなレインでもある程度脚を踏ん張らなければならない。

それと同時に二人がレインにしがみついたので二人にもそれなりの衝撃が来たのだらう。

しばらくして空気が落ち着き、先程よりもどこか静寂になったような気がするが、そ

れは気のせいではかないだろう。

「自分で威力制御できんっていうのはやっぱり落ち着かん」

今日、これを使うのは数回目で、それ以前にも誰にも見られないところで使ったりしている。

そのため、レイン自身は衝撃には慣れているものの、普段は自身の筋力や魔力、それから技術を駆使して戦っているので、レインの力など何も関係なく高威力の物がどうしても慣れない。

威力を抑えたくても抑えられず、威力を増したくてももちろんそれも出来ない。

その感覚は気持ち悪いことこの上ない。

気持ち悪さを抱えながらも、木の影からこちらを狙っていた誰かを仕留められたのを確認する。

確認すると言ってもレインの放った弾は着弾と共にそこら一帯を吹き飛ばし、クレーターを作っていて、その真ん中で《dead》という文字を見つけるだけだ。

いつもの如く、相手の腕一つ残さず消し飛ばしたように何も無いところに《dead》を確認したレインはコートの中に銃を戻す。

「で、これからどうするんだ？」

そう声をかけながらシノンとキリトに視線を向けると、二人はレインの放った弾が作

り出したクレーターをぼんやりと見ていた。

いきなりやらかしたのは自分なので仕方がないと思いつつも、レインは二人を抱いていた左腕を揺する。

「おい」

ぼんやりしていた二人は突然の事にびっくりと肩を震わせた。

あとで何か言われるのも面倒なので、レインは二人を抱いていた手を離す。

「別行動にするか、一緒に行動するか、キリトが決める」

「えっと、レインのやる事が終わったんなら一緒にいて欲しい、かな」

「わかった。ただ、俺はあいつを殺すべきだと思っただけに殺しにかかるからな。邪

魔はするなよ」

「邪魔はするなよ、じゃないわよ!!今のはなんなの?!」

突然騒ぎ出したシノンの反応にレインは頭をかき、ため息をついた。

「何って、ただのちよつと威力が高い銃だよ」

「どこがちよつとなのよ!っていうか、まさかとおもうけどさっきの銃、あの遺跡のじゃないわよね?」

「あの遺跡?」

今更レインのすることに対して驚きはするものの、レインだからという理由で納得す

るようになっていたキリトだったが、GGOの世界観からなんとなくズレた遺跡という言葉に反応する。

「ゲーマーとしても気になるのだろう。」

「マップの端の方に遺跡があつてね、そこにはガーディアンに守られ桁外れに強い武器があるって噂のクエストがあるのよ。挑戦した人は多いんだけど、ガーディアンっていうのがやたらと強いらしくて今じゃそこに行くやつなんてほとんどいないほどの」

シノンの言葉をつなぐようにレインは口を開く。

「その武器っていうのがな、脅されて武器を作り続けてた奴が反撃のために作ったものなんだが、あまりの威力に調子乗って世界を自分のものしようとし始めたらしい。それを周りのヤツが止めて、その時の武器はもう誰の手にも届かないようになって遺跡の奥深くにしまい込んでガーディアンに守らせてたんだ」

どこかで、聞いたような逸話。

間違いなく全然違う逸話なのだが、レインが興味を持たないわけがなかった。

「で、お前はそれを取りに行つたと」

「そういうことだ。まあ、元々この手の武器は好かんからアイテム欄の中に入れておかないでたんだかな。今回は肉弾戦をいちいちやるのが面倒だから持ってきた」

コートを捲って腰に装備している銃——レイグルを二人に見せる。

銀色をした銃はひどく美しく、全身黒衣を身にまとっているレインにはかなり不釣り合いだった。

「……ほんとあんたつてでたらめよね」

「こいつの話はこれで終わりだ。さっさと死銃探しに行くぞ」

あとは成り行きを見守るだけになればいいんだけどな、と内心でつぶやきながら、これからの方針を決めている二人を静かにレインは眺めた。

仮想と現実と異世界に

死銃がいるであろう街——といつてもすたれている街なのだが——に着いた三人は二手に分かれていた。

というのも、川沿いに北に向かったであろう死銃を追いかけ、サテライトスキャンで周囲にいた銃士Xが死銃かもしれないからだ。

ちなみに真正面から銃士Xに挑みに行くレインとキリト、そして遠くからスナイプするシノンの二手にわかれている。

つまり、今はキリトと二人並んで歩いているわけなのだが……。

「本当に殺し方とかわかってないのか？」

「わかってないっていつてるだろ。こつちで撃たれたあと、ログアウトしたら現実の身体に何かされた感じはあったが、何をされたかわからん程度には回復してからな。多少の違和感があったが何をされたかはさっぱりだ」

実際にレインが感じたことのない身体の違和感なので本当に何をされたのかはわかっていない。

ミュールゲニアで今まで受けたことのある魔法は数えられないほどあるが、どの感覚

とも当てはまらない。だからといって毒を盛られたような感じでもなかった。

ドラゴンスレイヤーという普通の人間ではなくなった自分だからこそ、何事もなかったかのように生きているのだろうということしかわからない。

「ただ、俺の家に誰かが入ったのは間違いない。撃つてきた奴と他人の端末除いてた奴の中身の気配が同一人物。端末には現実の個人情報を持ち込み俺が死銃に撃たれたときに俺の家には誰かが勝手に入ってきた痕跡があった。そこからあいつは個人情報を見て住所を知った奴を標的にするんだろうと推測して死銃が端末除いてた奴を片っ端から仕留めたってわけだ」

「つまり、お前も端末に住所打ち込んで見られたってことか。でも、お前なら見られてる時点でなにか問題起こしそうなんだけど」

「なんで俺が問題起こすと思ってるのかわからんが、俺は何も打ち込んでない。今の家も坂崎に案内されただけのところで住所自体もわからんしな。撃たれた時はすでにバーサーカーとか呼ばれて目立っていたし、名前はそのまま。SAO当時からすれば多少見た目年齢は上がっているがほとんど変わらん。そしてSAOでの見た目は現実と変わらない。なら、俺を探すのなんて容易いさ。現実の裏社会でもそれなりに目立ってるし」

隣でキリトが苦虫を噛み潰したような顔をしたがスルーする。反応したところで何

にもならない。

なにより、裏社会で目立ちたかったわけでもない。坂崎達が働かざる者食うべからずといつて定期的に敵組織のアジトを壊してこいとかの仕事を回してくるせいだ。

まあ、本当は違う理由で死銃に住所が知られているのだが、それを言うことはない。

「ま、俺は今追つてる死銃が誰なのかは知らん。ラフコフのクソ共の事だつて殺しまくっただけで名前とかも一切覚えてない。覚えていたとしても、あれが誰なのかもわからんだろうさ」

これ以上話すと墓穴を掘るかもしれないため、レインは話は終わりだと言わんばかりに口を閉じて空気でキリトを黙らせる。

それからしばらく歩き、すぐに銃士Xなる人物の近くまでたどり着いた。が、
「死銃じゃないな」

気配をよめる範囲まで来たレインは落胆する様子もなく淡々と事実を述べた。

「もうわかるのかよ」

「まあな。お前も気配ぐらい探れるようになれよ」

「……ちよつと練習するか」

戦闘センスはあるし、人によつて作られた音と動いたことで発生する音を聞き分けられるのだからそれほど集中しなくても気配を探ることなどキリトにだってできるだろ

う。

死銃ではないと判断したレインはあっさり踵を返した。

「えっ?どこ行くんだよ」

「シノンのところだ。死銃でもないやつを俺とおまえの二人がかりで仕留めに行く必要もないだろ」

逆に二人相手にすることなら全然かまわないのだが、ただの一般人にその逆はする気はない。一緒に戦う人物がキリトならなおさらだ。

レインは背中を向けながら銃士Xのところに行くであろうキリトにひらひらと手を振った。

この時にはすでに死銃をどうにかしようという気持ちは少なくなっていた。

確かに今回の事件は昔の自分の不始末が原因ではあるが、やはり異世界の問題だ。永住するらなまだしも、自分はミュールゲニアに帰る気である。

そんな自分が本格的に関与するのはやはり躊躇ってしまう。

自分のせいで犠牲者が増えるのは嫌だったため、死者が出ないようにすることは全力でしたが、死銃をどうにかするのはやはり自分ではない気がする。

だから、キリトとシノンの二人に死銃のことは任せようと、自分は邪魔が入らないようにすることだけよしよしようと思っていた。

——シノンに死銃が銃を突き付けているのを見るまでは。

地面に倒れるシノンと、そのシノンに人を殺す時に使っている銃を突き付けている死銃を見た瞬間、何も考えることなくレインの手には傾国の剣が握られていた。

魔力を使って無理やりゲームの世界に傾国の剣を持ち出し、使用することを意識的にレインは避けており、あえてゲーム内の数値やルールに縛られて、あくまでも遊んでいただけだった。

本戦で死銃の標的を先に仕留める時ですらこの世界にはないものは持ち出していない。

そんなレインがもはやルール違反どころではない傾国の剣を持ち出したのはそれほども逆上したからだ。

この世界にはないはずの剣を構えながらレインは一気で死銃との距離を詰め、その間にこめた魔力をみえない斬撃をすぐに解き放つ。

しかし、これはあくまでもシノンから死銃を突き放すためのものだ。

今ここでヒットポイントをゼロにしてしまつては逆に逃げられてしまう。

威嚇程度の見えない斬撃は死銃の足元に当たり、突然のことに驚いた死銃はすぐにシノンから飛びのいた。

それを確認したレインはすぐにシノンと死銃の間に飛び込み、死銃を睨みつけた。

「なぜシノンを狙った。俺はお前じゃないもう一人の死銃が誰なのか知っているからシノンが狙われることがないと思つていたんだが。お前の独断か？」

レインのその言葉に死銃ピクリと反応する。

少し確認したシノンの様子もおかしかったのですが、すぐにも声をかけたいが、その間に死銃が引き金を引き、シノンに当たればそれで終わる。その時点でシノンは死ぬ。

剣を持っているので弾をはじき返すことが容易ではあるが、何がどうなるかはわからない。

万が一にも備えてレインは死銃から目を離さないでいた。

「レイナー！」

死銃とレインがにらみ合っている間に、銃士Xとの闘いを終えたのであろうキリトが帰ってきた。

「キリト。シノンを連れていってくれ」

キリトがシノンに駆け寄つたのを気配で感じ取つたレインはその様子を確認することもなく告げた。

死銃にも聞こえたらしく、無造作に引き金が引かれたが、レインはやすやすとそれを剣ではじき返した。

相手もそれがわかりきっていたのだらう。大して慌てている様子もなかった。

「レイン、一体何が」

「シノンが狙われている。俺はシノンが狙われることがないと思っていたが、そうでもなかったらしい。俺のミスだ。やつはここで殺す」

「殺すつて……まさか」

「文字通り」殺す」という意味だ。言っただろう。俺はあいつらみたいに見せかけじゃなく、この世界からでも実際に殺すことができるつてな」

静かに告げるとキリトは口を閉ざした。

キリトはレインが人を殺すのを止めたいのだろうが、レインの有無を言わさない空気に何も言えなくなってしまうているのだ。

止めたい。しかし、言っただとところで無駄。

それがわかってしまったための沈黙。

「いけ、キリト！」

喝を入れるようにレインが声を張り上げる。

直後、キリトがシノン抱き上げた気配を感じた。ガシャガシャという音も聞こえるのでハカートIIも担いでいるのだろう。

「そいつを殺したらシリカ達に会わせるからな！」

「なっ?!おい!それは受け付けんぞ!」

「絶対だぞ！」

「さて！そんな一方的もん俺が受けるんでも——っ！そんな不意打ちに気付かんとでも思ったか！」

思わずキリトの方を向いたレインの隙をつくようにトカレフから放たれた弾丸をいとも容易く切り捨てる。

傾国の剣を手にしたレインを前にして銃弾が役目を果たすことは無い。

「くそっ。お前のせいでキリトを問い詰められんかっただろうが。どうしてくれる」

「ほう。律儀にさっきの俺を殺さないとかいう約束を守るのか？」

「あんなもん約束なんていうわけないだろ。だが、あの言葉を見殺ししたらしたで面倒なのは間違いない。よかったな。お前の命が守られたぞ」

殺しさえしなければ問題ない。つまり、瀕死はありだ。

魔力を適度に流して動けないようにする。直接脳にこの世界に無いはずの魔力を叩き込むことになるので、殺さない程度に調整するのはかなり難しい。

ドラゴンスレイヤーになってそれなりに力加減ができるようになってきてはいるが、VRの世界から現実には直接流し込むということ自体は初めてなのでじっくりやらなければいけないだろう。

「四肢を切り落としてもHPが無くならなければいいんだがなあ」

傾国の剣を構え、駆け出すために一步踏み出し――

為す術もなく、レインはその場から消えた。



切りかかろうとしたのにも関わらず、突然視界がブラックアウトしたレインだったが、慌てることもなく流れに身をまかせた。

何が起きたのかは分からないが、仮想世界での異変に対してどうすることも出来ないのは身をもって知っている。

意識が無理やり浮上させられ、頭に強い衝撃を受けたレインだったが、そんなことなどは表面に出すことなく瞼を開けた。

「ちよつとレイン?! 何してくれてんのさ!」

真つ先に視界に飛び込んできたのは坂崎のあわてた様子の顔だった。

視線をぐるりと変えれば彼の手にアミュスフィアにつながれているはずのコードが握られている。

今度は自分の感じた不快感を隠そうとはせず、顔を精一杯ゆがめながら坂崎の顔をつ

かんだ。

「何してくれてんのさ、はオレの台詞だ。今からつてところで無理やりアミスファイアの電源を落としてくれやがって。そのせいで犠牲者が出たらお前のせいだぞ」

「いだっ!!!いだだだだ!まって力緩めて!つぶれる!!」

「で、無理やり電源落とした理由は何だ」

強制切断のせいだがんがんと響く頭痛を小さくため息をついて振り払ったレインは坂崎から手を離し、じとりとした目を向けた。

「そうだ、そうだった。君が君の姿のままGGOに潜って傾国の剣まで持ち出したただろ?それでGGOのレインが、僕らの組織に加担してる異邦人のレインだとバレたんだよ!GGOに潜ってる間なら君が出てこないとおもったのか、いろんな組織がいつせいに攻めてきてるわけ!!」

そんな坂崎の言葉にレインは今度は大きいため息をついて体を起こした。

「わかった。そいつらをさっさと黙らせよう。俺は急ぎの用事があるから後処理は任せろぞ」

「え?急ぎの用事?どういうことだい?」

「うるさい。黙れ。ああ、あともしかしたら電話で呼び出すかも知れんから出れるようにしとけよ」

「一方的過ぎないかな?! ちょっと! レイン!!」

アミュスフィアを頭からはずしたレインはすぐそばにあった傾国の剣をつかんで騒がしいエクシードの方へと駆け出した。

感謝の言葉を

夜の暗闇のなか、レインはビルの間を駆け抜けぬけていた。

そんな彼は本人にとっては大した量でないが、日本人の常識から考えると尋常ではないほど服は血で濡れている。

そのほとんどはレイン自身の血なのだが、傷はすでに治癒魔法で塞がっているため、これ以上血濡れることは無い。

全身黒服ということもあって目立つことはないが、これほどにも血を流したのはそれほどにも焦っていたからだ。

キリトを信じていないわけではない。彼がいるならシノンは大丈夫だろうし、どうかしてくれるだろうと思っている。

むしろ、仮想世界では自分よりキリトの方が頼りになることの方が多い。

それでも焦っているのは、シノンが狙われた事実があるからだ。

レインは死銃が1人ではないというのは死銃のアバターの中身が変わっているの気配で感じ取っているから知っている。

そして、そのうちの一人がシノンの友人でもあるシユピーゲルだということもだ。

レインがダイブしていた部屋にシノンとシュピーゲルがああの部屋に来たことがあるので、死銃がレインの仮住居を知っていても違和感はない。

そして、もちろんシュピーゲルがシノンに対して好意抱いていることも知っている。だからシュピーゲルの刺々しい態度に対してもめんどくさいとは思うものの仕方がないと放置していた。

むしろ、だからこそシノンは大丈夫だと思っていたのだ。

しかし、今回シノンは狙われた。殺されかけた。

シュピーゲルには言わずにもう一人が殺そうとしていたのかもしれないが、そんなことは関係ない。

シノンが死銃の標的になったことに変わりはない。

急いでいたため、組織のアジトに奇襲を仕掛けてきた奴らからの攻撃の致命傷以外は避けなかったが、間違いだったかもしれないと、少しだけ鈍る身体にムチを打ちながら少しだけ思う。

少しといっても、日本人の基準で見ると常軌を逸しているのだが。

『レイン！』

耳につけていた通信機からV o Vを見てもらっていた剛の声が聞こえる。

「終わったか？」

『VのV自体は終わった。キリトって子もシノンって子も両方生き残ってる。そのままログアウトになってるはずだ』

剛の言葉を聞いてレインはスピードを上げた。

なにせ実際に殺しをするのは現実に家にくる何者かだ。それがシユピーゲルだという可能性だつてありえる。

この世界の人間の悪意はひどく捻じ曲がつてなにをどうするかはわからない。好意ですらも。

シノンの無事を確認するまで安心などはできない。

黒衣の戦士は暗闇の中をかけづづけた。



なぜ彼が、という思いと早く逃げなければという思いが頭の中でぐちゃぐちゃとかき混ぜられながらも詩乃は玄関に向かってはしり抜ける。

襲いかかつてきた新川は一般男性より細いと言っても男性であることは変わらない。VRの世界なら勝てるかもしれないがここは現実だ。捕まってしまつては逃げることもできないだろう。

ドアまでたどり着いたが、鍵をかけてしまつていたのですぐにあけて逃げる事ができない。チェーンまで付けている自分の習慣がこの時ばかりは憎らしく思う。

震える手を叱咤して鍵を開ける。チェーンに手をかけ大丈夫だと、逃げられると思つた。外に出れば、出れなくてもチェーンをはずすことさえできればこの部屋から聞こえるであろう騒がしい音に誰かが来てくれる。

しかし、そんなにもあまい訳では無いようで、チェーンを外すまで後一歩のところまで腕を掴まれ床に押し倒された。

「朝田さん」

名前を呼ぶ彼が、彼の目が怖いと思つた。

場違いにも程があるかもしれないが、彼の目をしつかりと見たのは初めてかもしれない。こんな怖い目をしていたのだろうか。もつと弱々しい印象がどこかにあったが、あくまでも印象で今までの彼のことはつきりと思ひ出すことはできない。

もしかすると、自分が新川恭二という人をこれほどにも歪めてしまつたのかもしれないとふと思う。自分のことで手一杯で、彼のことはあまり見ていなかったせいであらう。しまったのかと。

ならば、彼に殺されるのは仕方のないことなのかもしれない。

そう思つた瞬間に、不敵な笑みをしたレインと優しく微笑むキリトの顔がよぎつた。

リアルで不思議な出会い方をして、もう出会わないとおもっていたらGGOに出没し始め、なんだかんだつるむようになり謎に包まれいて、本戦の時に死銃に襲われときに助けてくれた男。

死銃に襲われたあと、パニックになった自分を落ち着かせて話を聞いてくれて、受け入れてくれた男。

彼らに感謝の言葉を伝えなければいけない。

だから、ここで今殺されるわけにはいかない。

詩乃は緩めかけた抵抗を強くした。

「やめて！やめて新川くん！」

叫んだ瞬間、がちやりとドアが開く音した。

「シノン！くそ、チェーンが！」

レインとは違う少年のような声に顔も見えていないがキリトが来てくれたのだということがわかった。

「キリト！来ちゃダメ！」

助けに来てくれたと分かっているけど、思わず止める言葉をかけてしまう。

キリトが来たことに反応した新川の力が強くなる。

どうにか、どうにか自力で逃げなければ――

「どけ」

キリトが来たことに反応して新川が叫ぶ声がうるさいのにも関わらず、低く静かな声が耳に届いた。

次の瞬間、何かが砕け散った音と大きな影が新川の向こう側に見えた。

「来たのは間違いじゃなかったようだな」

息を吐くように呟いたと同時に大きな影——レインは新川の首を掴んで詩乃から無理やり引き剥がした。

「お前は!!はなせ!」

「お前を拘束するか気を失わせたら離してやる」

新川の抵抗などないかのようにレインは何をされても微動だにしない。

「レイン」

「すまん。仕方ないことではあったがチェーンを壊した。すぐに直してもらってから安心してくれ」

あまりにも自然で荒事に慣れている様子のレインは片手で新川を掴んだまま、反対の手でスマホをいじってどこかに電話をかける。

「あー、おい。他人の家のドアのチェーン壊したから直しに来てくれ。女の子の家でない訳にもいかん」

ドアのチェーンをこんな夜遅い時間に直しに来てくれる人がいるレインの人脈は一体どうなっているのかと思っていると、新川がポケットに手を突っ込み、注射器を取り出した。

あれは、最初に襲いかかってきた時に見せられたもので、人を殺すことのできるもので。

「だめ!!レイン!」

慌てて体を起こして必死に手を伸ばす。

死んでしまうと。あれほどにも強いレインが、自分のせいで死んでしまうと、泣きそうになりながら手を伸ばした。

「死ね!」

それでも世界とは非情で、間に合うことはなかった。

注射器はレインの胸に当てられ、空気が抜けるような軽い音を鳴らしながらレインに薬が打ち込まれた。

「ん……?」

眉間に皺を寄せたレインはその場に膝をついた。

駆け寄ろうとしたがレインが手でこちらを制してくる。

「大丈夫だ」

微笑んで言うレインだが、新川の抵抗をもものともしていなかったのに徐々に力が拮抗していつている。

「大丈夫なわけがないだろう!!この化け物が!!!お前用に強い薬品を持ってきたんだぞ!!」

「お前からしたららの話だろう。俺からしたらお前達が貧弱すぎるんだ」

どこか吐き捨てるように言ったレインは、新川の頭を引き寄せ頭突きをくらわした。

ゴスツという鈍い音を鳴らした頭にシノンは思わず目をそらす。

「おい！レイン！」

キリトの鬼気迫る声に逸らした目をすぐに戻すと、ぐったりと項垂れるレインがいた。呼吸もかなり浅い。

その時、詩乃の視界に気絶した新川はすでにうつつていなかった。

「レイン?!」

「大丈夫だ。多少力が入らん程度だから心配しなくていい。しばらくすれば動けるようにもなる」

「信じていいんだな?」

「もちろんだ。この程度では死なん。正直、腕が千切れた時の方がやばかった」

「腕がちぎれた?!」

詩乃とキリトの声が重なって夜遅いというのにひどく空気を揺らした。仕方ないことだろう。昨今この日本で腕が千切れるなどということがおきる事体は普通ない。

「いや、それはないだろ。お前の腕、両方ちゃんとあるし」

「そりや自分でくつつけたからな」

「くつつけたって……それって、アレか？」

「まあ、お前が想像してるようなもので大体あつてるだろうさ」

詩乃には二人の会話を完全には理解することはできないが、GGO同様にレインが想像もできないようなことをしでかしたのだろう。

いや、もしかしたらSAO内での話かもしれない。なにせあのゲームの中では本当に死ついてまとう現実と変わらない場所だったのだから。

そんな風に考えている詩乃であるが、実際は本当に現実——といってもレインが住んでいたものと世界の話だ——で腕がちぎれ、魔法をつかってどうにか腕をつなげなした。ということのなのだが、レインが異世界から来ているということも、ましてや魔法を使えることを知らない詩乃がその真実にたどり着くことはできない。

その後、めんどくさいから警察を呼ぶのは少し待ってくれ、というレインの言葉になんとなく従い、体を休めているレインと一応ということで新川を縛り付けて動けないよ

うにしてくれたキリトにお茶を出したりしていると、ばたばたと知らない大人が数人やってきて、レインが壊したチェーンをすぐに直し、動きの鈍いレインをつれて帰っていった。

その後、キリトが警察を呼んだりとあわただしい夜を過ごした詩乃は、数日後、結局二人に感謝の言葉を伝えることができているなどGGO内でヘカートIIを担ぎながら一人ごちたのだった。

残すモノ

よくわからない薬を打ち込まれ、それに対しての耐性が付くまでめずらしく時間のかかったレインはGGOでの一件以降、数日の間のんびりと過ごしていた。

薬品を打ち込まれた瞬間、ドラゴンスレイヤー力を抑えていたということも影響しているうえに、異世界の薬品はレインの体にとって少し特殊なようである後、通常よりも動きが鈍り、その数日はレインの眉間には皺が浮かんでいた。

しかし、それもどうにかなくなり、訓練場で体を動かしても変なところはないことを確認したレインは、この世界に来たときの服装を引っ張り出し小さな鞆につめた後、誰にも何も告げず、世話になった場所を後にした。

「レイン君！」

誰にも何も言わずに元の世界に帰るつもりだったレインは盛大に顔をしかめた。

施設の出入口で声をかけられるとは最悪だな、と息を軽く吐きつつ振り返る。

それと同時にのろのろとやってきた車がレインの左側に止まった。

「あんたは」

「僕もいるよ」

助手席に座って声をかけてきた坂崎のことは放置し、車の運転席側からひよこつと顔を出した眼鏡の男を見て、誰だったのだろうかと記憶を探る。

「君と桐ヶ谷君が再会したときに桐ヶ谷君といった菊岡です」

胡散臭くにつこりと笑う菊岡をじつとりとした目で見返したレインは関わり合いになる必要はないだろうと再び足を進めた。

「待つて待つて！君が元の世界に帰るのを邪魔するつもりはないんだ！」

菊岡のその言葉にレインは足は突然方向転換し、菊岡の運転する車の助手席に座っている坂崎側のドアの窓を結構な力で叩いた。

もちろん、ガラスが割れないようには気をつけている。慌てて坂崎が窓を開ける。

「おい、その胡散臭い男はなんなんだ。今更異邦人だと知られたくないとは思わんし、お前が前に知り合いのように接してしたし知っててもおかしくない。だが、そいつはキリトとも絡んでる。GGOの件に巻き込んだのもそいつだ」

レインはじろりと菊岡を睨む。

「キリトは、あいつらはこちら側の人間じゃないんだぞ」

「もちろんわかっている。あくまでも僕は彼に協力してもらっているだけだし、そのか

わり僕も彼に協力している。それに、S A O 帰還者というだけでいろんなものに巻き込まれるのはこちらとしてもどうすることも出来ないのもまた事実だ」

G G O の一件も S A O 帰還者の仕業だしね。と菊岡は付け加える。

「そこでだ。レイン君。この世界に君を残していくつもりはないかい？」

優しそうに微笑む菊岡の顔はあまりにも胡散臭く、レインは眉間に皺をよせた。

ズズツという音をたてながらキリトは一定値から温度が下がらないコーヒーをすすった。どこかでケーキを食べたときは味などしなかったが、今回は A L O 内ということもあり強制的に味を感じている気がする。

ああ、苦い。

現実逃避に心の中で感想を述べる。口に出していわないのは目の前にいる女性陣に

何か突っ込まれるのは嫌だからだ。

「キリト君。今日は逃がさないんだからね」

「絶対にレインさんのこと教えてもらうんですから！」

「B o B のとき、あいつ突然消えてたけど本当に大丈夫なの？」

「キリトくんだけ会ってたなんてずるい！」

そう。つまりはそういうことである。

四方を囲むアスナ、シリカ、リズ、リーファの視線を受けながら、キリトはすでにこの世界にいないであろうレインに向かって呪詛をはいた。

女性陣からの質問攻めが始まったのはB o B が終わってからである。

B o B は中継されていて、もちろんリアルタイムで配信されていて。キリトがコンバートしてB o B に出るということをアスナ達は知っていたため見るのも当然で。

そんな中、あの全身真っ黒で、銃で戦う世界なのに肉弾戦をしていたかと思えば突然意味のわからない威力の弾を放ちだしたレインががっつりと映ってしまったのだ。

S A O でレインを知っているものであれば、多少アバターの見た目が当時よりも大人びていようが、表情がころころと変わるようになっていようが、あの戦闘センスだけでは説明のできない強さを見れば本人だとわかっただろう。

しかも名前もレインのままなので疑う必要もない。

あのレインが中継されていたことを知らないわけもないだろうが、アスナ達が見ていたかどうかまでは考えてはいないだろう。

だから本戦であんなにも堂々と姿を現したのだ。会うつもりは無いと言っていたから分かっていれば姿を見せずにどうにか対処するようにしていただろう。

そういうことに対してのレインの徹底ぶりはキリトはよく分かっている。

いくらころころと表情が変わり気さくになったとはいえ本質は何も変わっていない。なにもかもレインは昔のままだった。

ラフコフの話聞いた時も、シノンが狙われた時も、何も変わってなどいなかった。

だから、ならば、レインはもう彼の本来の世界に戻っているだろう。

レインという男はそういう奴だ。

「俺だって本当はあいつともっといたかったさ」

思わず呟いてしまった言葉はレイン本人には伝わるはずもない言葉。

甘えたような言葉が出たのはレインのことを兄のように慕ってしまっているからで、レインと並んで戦うことが楽しかったからだ。

「悪いがたとえお前がGGGでの姿だとしても男には興味ないんでほかを当たってくれ」

「俺だって男に興味があるわけじゃねえよ」

自然に言葉を返したキリトはコーヒーカップを口に近づけたところで固まった。今聞いた声は幻聴なのか、それとも本当に聞こえたものなのかしばらく考える。

「そうじゃなきやぶん殴ってたところだ」

もう一度聞こえた声にキリトは勢いよく振り返った。

「よおキリト」

そこにはSAOとALOで見慣れた容姿でGGOで見慣れた不適な笑みを浮かべたレインが立っていた。

閑話 マザーズロザリオ編

天使を迎えに来た死神

誰もいないはずの空間に黒い何かが立っている。

確か彼はボス部屋の前でキリトと共に壁を走ってやってきた人だったはず。

助けてくれた名前も知らない彼が、今は死神にみえてしまうのは、死の直前だからだろう。

「なあ、お前、俺のかわりに神様にならないか？」

全身真っ黒で死神に見えるのに「神様にならないか？」だなんてふざけたことをいつている。

思わず笑ってしまうのは仕方がないだろう。

「いやいや、その見た目で神様はないんじゃないかな？僕から見たら君は死神だよ？」

実際、スリーピングナイトのみんなやアスナ、それからALOのみんなとお別れしてきたばかりだ。

死神がくるにはベストなタイミングだろう。

「死神か。言い得て妙とはこういうこというのかもしれん」

端正な顔の男がくすくすとやさしく笑う。その顔は死神には見えなかった。

そして、彼は優しい顔のまま、手を差し伸べてきた。

”ユウキ”という魂を残したいと思うなら、俺の手をとって見ないか？」

突拍子もない言葉に木綿季は固まる。

「それは……ボクが……」

「すまんが、君を生かすことはできない。だが、ユウキの魂をちよろまかして残しておくことはできる。その条件はユウキが俺の代わりに神様になることだけだな」

「ころころと表情を変えながら、真つ黒な奴はしゃべる。

「いやな、俺は神様なんて柄じやないんだ。正直やりたくない。本気でやりたくない。どちらかといえばお前が言った死神のほうが俺は近いんだ。なのになんで俺が正反対な神様なんてやらなきゃならん」

「そんな神様なんて代わりに、なんて感じてできちゃうものなの？」

死ぬ間際にしてはなかなか面白い話だな、なんて思い始めてのんきに会話を続けてみる。

「まあな。俺に神様になれって言ったやつにやりたくないとか全力拒否したら、なら代わりを連れてこれたらいいぞ、つてるし」

つまりだ、と男は不敵な笑みを木綿季にむける。

「これは俺がお前に神様なんてめんどくさいもんを押し付けようとしてるだけなんだ。だから俺は「ユウキ」の魂をこの世界に残してくれるとすごく助かる」

「それはすごく君の自分勝手な意見だね」

「そうだ。これは俺の我が儘だ」

「神様になりたくない死神の我が儘か」

「こそ」

「すごくおもしろいね」

木綿季はくすりと笑い、ずっと差し出されていた手に手を重ねた。

「どうせボクはしんじやうし、人生最後に面白い話に乗っかっても罰は当たらないと思わないんだけど、どう思う？」

「罰があたるも何もお前が神様になるんだ。罰を当てるほうだぞ」

「そうだった」

男に引つ張られてふわりと体が浮き、男にお姫様だっこされる。それと同時にまぶたも重くなる。きつと死が近い。

「ねえ、やつぱり神様はさすがに仰々しいから天使とかじゃだめかな？」

「さあな。それはユウキが交渉する部分だ」

「でも、天使の羽もいいけど、妖精の羽のほうが好きだな」

「そうだな。妖精たちは生き生きしていて綺麗だ。飛んでるお前のもちろん生き生きしてて綺麗だった」

「ボクのことみてたんだ」

「見た。だから俺はお前のところに来たんだ。さあ、そろそろ寝よう。大丈夫。起きたら新しい世界が始まってる」

優しい声がじんわりと耳に入ってくる。

「死神は思ったよりも優しい存在だったんだね」

体を包む暖かさに縋りながら落ちていく意識に抗うことなく沈んでいく。
「別に優しくなんかないさ」

静かに沈む意識の中、最後に聞こえたその声はどこか孤独を孕んでいた。

「お前、リアルでも人外の動き出来てたもんな……」

じとりとした目で額を赤くさせた少年がぼそりと零す。

「ちよつと!!アンタいくらなんでも無茶しすぎよ!」

強くなった少女が駆け寄りながら叫ぶ。

「えっ……どうして……?」

空を切った手のやり場を失った少女は思わず口にする。

「あら、あなた……私と一緒になのね。せっかくだから仲良くしましょ?」
微笑む歌姫は至極楽しそうにお喋りをする。

電子の世界で剣を振るっていた戦士が、現実世界でも剣を振るう。

オーグデイナル・スケール編

王子というよりヤクザ

この世界に留まることになってから随分と経つたのにも関わらず、未だに自身の住まいを持つていないレインは普段は賑わっているはずなのに、今は昼間にも関わらず静かな街道をのんびりと歩いていた。

最近、この世界——アルヴヘイムにログインするプレイヤーが極端に減っている。

聞くところによるとリアルの方でオーグマーというものが流行っているらしい。

らしい、というのにはレイン自身はそれに触れたことがない。

現実に仮想を実現するというもので、魔法で言う幻術に近いだろう。

相手は仮想で自分は現実なんでもものの相互性など取れるわけがなく、剣を振るい切りつけたとしてもこちらに感触はないし、攻撃を受けても怪我をしたり吹き飛んだりするわけでもない。

オーグマーには私生活にも役立つ特典が色々についているらしいが、それもレインには興味のないものだ。

ゆえに、レインは大してオーグマーに興味をしめすことはなかった。

今は離れているプレイヤー達もそのうち帰ってくるだろうとぼんやりと思いながら、レインは慣れた手つきでログアウトボタンを押した。



「オーディナル・スケール、起動！」

来てしまったからには腹を括らねばならない。

気乗りはしないながらも桐ヶ谷和人は視線をソードアート・オンラインのボスだったカガチザサムライロードに向けながら明日奈と共に声を張り上げた。

次の瞬間、世界が組み替えられるかのように姿をかえる。

仮想世界にフルダイブした訳でもないのに、眼前に広がる空想世界に思わず目を見張ってしまう。

しかし、今の自分がいるのは間違いなく現実世界で実体を持つわけで。正直なところ、目の前に広がるものと、自身の感覚のちぐはぐさに落ち着かない。

実際にはオーグマーが己の眼球に作られた世界を写しているだけに過ぎないと頭ではわかっているが、それでもリアルなそれに慣れそうにはない。

フルダイブならこんな違和感もないのに。

慣れない感覚にそわそわとしながら戦況を見ていけば、A R 戦闘に慣れたらしい風林火山のメンバーが絶妙なコンビネーションでサムライロードにダメージを与えていた。和人自身はS A O 時代にあのボスとの戦いは経験済みで、それ故にA R 戦闘に慣れてもいない自分が出しゃばらなければならない場面があるかもと思つたが案外そうでも無いらしい。

きつと、ここにいるプレイヤーの中にA L O やG G O などの経験者もいるのだろう。今回は明日奈の足になるためにここまでやってきたが、彼らがオーディナル・スケールにハマっている間はA L O で久しぶりで動くのも悪くは無い。

それに腐れ縁のような、相棒のような、そんなそこら辺にある言葉だけでは説明できない関係であるレインもA R 戦闘には興味が無いらしく、オーグマーの話にすら入ろうとはしなかったし、彼と二人でA L O 内にあるS A O のボスに殴り込みに行くのもいいかもしれない。

ああでも、レインはかなり神出鬼没だったな、と眉間にしわを寄せる。

連絡を入れても全く反応しない時があったり、かと思えば連日A L O で遭遇したり。彼本来の世界に帰るのかは未だに不明で、知らぬ間に消えてそうで不安になる日々を送っている。こちらとしても聞くのが怖くて聞いてもいない。

せめて最後の言葉ぐらいかけさせてほしいと思うが、レインのことだ。突然姿を消す

だろう。

彼が分裂でもしてくれれば、この世界に彼は残ってくれるのだろうか、そんなことをする質とも思えない。

「キリトー！」

ぼんやりと考え事をしていたが、クラインの声で現実を意識が戻る。次の瞬間には視界の隅に白いものが視界にうつった。

反射的に身体が動いて避けれたのは、今までの積み上げてきた経験故だろう。飛び込む形で避けた影響で地面についた手のひらや受け身を取った身体が少し痛いのは地面が凹凸のあるレンガで動かしたのが生身だからだ。

しかし、敵の攻撃から生まれるはずの風圧を感じることは無い。

「身体が重い」

ぼそりと零しながらも身体を動かして敵から距離をとる。

いつもならこういう時でも羽を使っているが、現実世界に妖精の羽はない。

「タゲそつちいったぞ!!」

ボスを挟んで反対側にいるクラインが叫んだ通り、カガチザサムライロードのタゲは完全にこちらに来たらしく、向かい合えば視線が交差した。

現実と仮想が混ざり合い、この身体が現実だからなのか少し恐怖という感情が生まれ

る。

もしこれが全て現実だったら。

そんなことを頭に過ぎる。

偽物と分かっているとしても、そこにいるわけではないと分かっているとしても、それでも死がそこにあるのではないかと不安になるのはSAOでの体験のせいなのか、それともこれが現実として違う世界にあるということを通して知っているからなのか。二択が生まれたがおそらく両者だろう。

仮想世界で握ってきたどの剣よりも軽いオーグマーによつて今は剣に見えている端末を握る力強くして軽く構える。

心もとない。

ふと湧き上がる気持ちをぐつと堪え、ボスに向かって駆け出した。

SAOでカガチザサムライロードと戦った時よりも遅い自分のスピードに気を取られそうになるが、そんなことを気にしている暇はない。今は目の前の敵に集中しなければ――

「うおっ?!」

上手く集中できそうなタイミングで地面の凹凸につまづいたと気がついたのはボスの前に転がったあとだった。

仰向けに転がった視線の先にはこちらを見下ろしているカガチザサムライロードがいる。

客観的な自分がどんな漫画展開だと突っ込むが、ボスが刀を振り上げるのが見えてそれどころではないと背中に力を込めた。

「つてこい」ALLOじゃないんだっつた!!」

反射的に羽を使って逃げようとしたロスタイムのせいで今更起き上がったところで間に合うかは五分五分だ。

咄嗟に起き上がって避けるのではなく剣で受け止めようとは持ち上げようとした時、ふつと視界に影が落ちた。

「あまりにも戦え無さすぎじゃないか?」

聞こえたこえた声に全身の緊張が解けて力が抜ける。

「リアルは動きにくくて仕方がない」

「お前の場合はただの運動不足だ」

次の瞬間、刀と剣がぶつかり合う音がオーグマーを通して響き、ぶつかった衝撃のエフェクトが自分の上で刀を受け止める男の姿をはつきりと浮かび上げた。

ピンチな姫を救うかのようなその男はあまりにもかっこよすぎるが、ピンチなのは姫なんて可愛い子ではなく、ただの野郎なのが実に残念だ。せめてGGOの姿であれば見

栄えは良かったかもしれぬ。

いや、無様に転けた時点で残念だ。

一連の想像をやめて和人は颯爽と現れた王子——本性を知ってるせいでどちらかといえどヤクザのほうに近い——に声をかけた。

「さすがにこの登場の仕方はカッコよすぎるんじゃないか？ レイン」

「俺がかっこいいのは当たり前のことだろ」

あいも変わらず全身真っ黒の姿で不敵な笑みを浮かべながら振り返ったレインはただただかっこよく、そしてなによりも頼もしかった。

戦場の歌姫と騎士

レインが力任せに剣を押し返すとそう簡単に吹き飛ばすはずのないカガチザサムライロードが吹き飛んだ。

どういう情報伝達でそうなったのかは分からないが、どうしてだろうか、レインだからという理由で素直にその現象を受け入れてしまっている時分がある。

「ああ……なんか気持ち悪い感覚だ。どう力を込めたらいいのかイマイチわからんな」
肩をグルグルと回し、オーディナル・スケール用の剣を軽く振り回して調子を整えているレインを横目にキリトは立ち上がる。

パンパンと土埃を払うが見えている服と触れているものが違うことにそわりとしてしまう。

「軽いか？」

眉間にシワを寄せたままぶんぶん腕を振り回すレインに声をかける。

「だいぶ。特に剣がだめだ。軽すぎる光剣のほうがまだ質量を感じるぐらいだ」

「わかる。あと——」

言葉が続けようとするが、カガチザサムライロードがこちらに刀を振り下ろして来る

のが見えていたので、今度は余裕を持つて避けそのまま距離をとるために走り出す。

ちらりと横を見ればレインは余裕のある様子で和人の隣を並走していた。

「思うように身体が動かない」

「それはキリト君が運動不足なだけでしょ？」

いつの間にか並走していた明日奈が呆れた様子でぼそりと言った。

先程レインにも言われたこともあり、そんなに自分は運動不足だろうかと考える。体感的には運動してる方だったがほとんどが仮想世界だったことを思い出し、リアルでは確かに運動をほとんどしていないことを思い出す。

「これからだよー」

駆けながら誤魔化すように叫ぶ。

「ラストアタックいただきー」

その直後だった。まだラストアタックと言うには体力が残っているのにも関わらずキリトたちとすれ違った虎顔の男は大砲を構え、遠慮なく打っ放した。

それだけ威力があるものなのかと思うが、GGOで見たレインの暴走銃に比べればそんなに強いものには見えない。

「おいー」

レインも同じことを思っていたのだろう。反射的に声をあげていた。

突然すぎることに和人もレインも明日奈も足を止めて弾がボスに向かっていくところを見ることしか出来ない。

当たれば御の字。おそらくではあるが戦闘パターンが変わるぐらいまではHPが減るだろう。

だが、そんなこともなく、カガチザサムライロードはあつさりと弾を避けてしまった。「あつ、やべつ」

トラ男がそう発したのは弾の軌道上に今まさに戦場の歌姫が如く歌い続けているユナというAIがいたからだ。

AIである彼女に当たるとどうなってしまうのか。

そんなことよりも助けなければいけないはずなのに、ふとそんなことが過ぎる。

いや、きつとそちらに頭が働いたのは生身の自分があの高速で飛ぶ弾に追いついて、さらには二階分ほど高いところに立つ彼女の目の前に飛び上がることも出来ないことを理解しているからだろう。

だが、きつとレインなら生身でもやろうと思えばできるのは想像がついた。

しかし、動くの樣子のない彼はこの世界の人間が多くいる中でそんな言わば人外のよいうなことをしたらどうなるか分かっていないのだろう。

異邦人である彼だがかなりこの世界に馴染んでいる。

違う意味で現実世界だから動けない2人はただ、AIであるユナに弾が当たるのを静観していると、突然彼女の前に黒い影が飛んできて弾をはじき、弾は背後からのものにはさすがに反応できなかったボスの後頭部に直撃した。

華麗に地面に降り立った影は姿勢よく立つ。まるでユナの騎士であるかのようにその場に存在を知らしめるには十二分な演出だ。

突然現れた影を——青年を見つめたことで頭上に2という数字が表示される。それはつまりランキング2位という事だ。先程の身体能力を見せつけられれば当然のこととも言える。

レインの登場といいランク2位の彼の登場といい最近は漫画のような登場が流行りなのか、などと考えていると、先程の一撃で行動パターンが変わったらしいカガチザサムライロードが見境なく暴れ始める。

そこからもキリトはただ見ていただけだった。

隣で立つレインも参戦するつもりはないらしく鞘にしまうことの出来ない剣をぶら下げたままぼんやりと観戦している。

「お前、興味なかったんじゃないのか？」

暇つぶしにここまで来たくせに参加するつもりのないレインに声をかける。

和人の問いかけは自分自身にも同じことを言えるのだが、自分は明日奈の付き添いの

ようなものだ。一人でやってきたレインとは少し違う。

「興味はないな」

「ないのかよ」

考えていたよりも早い即答に変に呆れてしまう。

「じゃあ、なんでわざわざ来たんだよ。来てくれて助かったけどさ」

「……まあ、なんだ。様子を見て来いって言われたんだ。SAO絡みは問題がよく起きるから」

つまり、彼にとってこれは仕事みたいなものなのだろう。レインが所属している組織はいまだにどんなことをしているのかよくわからないが、菊岡と知人らしい坂崎先生から考えるに本当に大丈夫なのかと問いただしたくなる程度には怪しさを感じる。

もとより、SAOに途中参加することになった原因からしてレインの背後からは常に怪しい何かを感じているので今更感はなくもないだが、それでも心配はしてしまふ。

なんでもできる彼には不要な心配だろうが、如何せんSAO初期の時のレインの様子を知っているせいで、いくら見た目が自分より年上でも世話のやける弟のような感覚は抜けない。

「オーグマー自体はそれほど好きじゃないけど、さすがに仮想世界のSAO関連の問題がARのオーディナル・スケールでなにか起こる可能性はないんじゃないか？」

現実を仮想にしてしまうオーグマーのせいになにか問題が起こる可能性はあるが、それはS A O絡みではない。

S A Oのボスモンスターが実際に人間を殺し始めるならそれはS A O絡みの問題だが、所詮A R。人を傷つけることはできない。

「一応警戒しておこう、って認識だ。ただの警備みたいなもんだから気にするほどのことでもない。リアルイベントに警備がついてるのと変わらん」

そう言いながらラストアタックを決めるアスナを眺めていたレインはいつものように掴みどころがなく、いまいち何を考えているのか分からなかった。

関係性

レインとクラインの三人で他愛のない話をしているときに何気なく明日か奈を視線を向けた瞬間に小さなリッツ音が耳に届いた。

「今日のMVPはあなた！おめでとう」

思わず息をのんでしまったのは、女の子同士とはいえご褒美と称してほっぺにキスをするというのは日本ではなかなか見られる光景ではないからだ。

相手がAIといっても見た目も言動も人間と区別をつけることは難しいユナである驚いても仕方がないだろう。

隣で同様に反応したクラインと違い、何も反応を示さなかったレインをちらりとみれば子犬のじゃれあいを見ていたかのようにほほえましそうに眺めていた。

今でこそこの世界に馴染みスマホもオーグマーも使う現代人のようなレインだが、本来は異邦人。彼の世界では先ほどのようなアメリカンなスキンシップは日常的なものだったのかもしれない。

じゃあまたね、と手を振りデータの世界へ帰って行ったユナを見送る。和人は動揺したのをごまかしながら明日奈隣に並んだ。

「ランク二位か。すごいやつもいるんだな」

「そうね。あんな動きが現実でできるのなんてレインさんぐらいだと思ってた」

「オーディナルスケール中で仮想と現実があいまいになってるから許される動きだよ、あれは。とくに登場したとき。あんなのレインじゃなきや良くてヒビ、最悪骨折だぞ」

「この世界の人間が動けなさ過ぎるんだ」

薬品も効かず、鍵のしまったドアを簡単にこじ開ける人間などこの世界には数えるほどしかないだろう。

この世界の人間が、というのを踏まえると、レインのもといた世界の人間は超人ばかりなのかもしれない。

そこまで考えてふと、レインのような身体能力をもつ人間が五万といる世界を想像して思わずげんなりする。仮想世界でのキリトであるならば多少生き残れるかもしれないが、ただの人間でしかない桐ヶ谷和人は一瞬で死ぬる自信がある。

時々感じる感覚のズレにレインと自分は違う世界の人間だということを確認させられる。

考えたところでいまさらどうしようもないことを頭から追い払った。

「とりあえず、道路の真ん中もアレだし歩道行こうぜ」

道路の規制も解除され始めボスイベントに参加していた人たちはすでに撤退を始め

ている。

「いや、俺はこの後人と会う約束があるからこれで失礼する」

言うが早く、レインはすでに背を向けて歩き出していた。

名残惜しいなどという言葉の似合わない彼の背中に向かって和人は声をかけるのを忘れない。

「今度ALLOでデュエルしてくれよ！」

「ああ」

背を向けたまま手を振るレインに声が届いたのを確認してから和人は視線を逸らした。

無駄な話をしない間柄ではないが、それでもどこかあつさりとした二人の付き合いは他人から見れば深くない付き合いに見えがちらしいとALLO内で小耳にはさんだのは少し前のことだ。

今でこそVRMMOの世界でできたつながりのおかげで友人と行動をすることが増えたが、元来二人とも気質としてはソロ寄りだ。それに、今まで一緒に踏んできた場数もあいまつてそれほど話さなくても仕草や行動で大体のことはわかる。

ゆえに二人の関係は他人からみればさっぱりとしたものなのだろう。

だから今日のこの別れ方もいつものもので和人も気にすることなくすぐに視線をレ

インから明日奈たちに移したのだ。

そんないつも通りの行動を止めたのは隣にいた明日奈だった。

彼女には珍しくぼしぼしと凄い勢いで腕を叩かれて思わずぎよっとしてしまう。

「な、なんだよ」

「キリトくん。あれ！あれ見て！」

声の調子で興奮しているのはよく分かるが、雑音の多い都会のど真ん中でこそこそと話そうとする明日奈にかわいいな、なんて思ってしまう。

そして、明日奈が指した方に視線を向け、和人はげっ、と思わず声を上げた。

そちらは先程まで向いていた方で、見えるのは予想した通りレインの背中だ。

しかし、隣の小さな背中では予想外だった。

「あの子レインさんの腕に飛びついたので」

なにやら楽しそうに会話が弾んでいるらしいのは遠目でもわかる。二人の関係はそれなりに浅くない様子だ。

だが、レインに小さな少女の知り合いがリアルいるというのは聞いたことがない。

が、

「まあ、あいつ顔広いしな。俺の知らない交友関係があつても不思議じゃないよ」

そう。レインは知らない間にこの世界で交友関係を広げている。

ALLOでは目立つという意味で顔は広い。もちろんGGOでもだ。

彼のリアルでの過ごし方はほとんど知らないが、あの坂崎先生の知り合いで謎の組織に属していて、菊岡とも話すようになっていているらしい。

知らないことが多いからこそ、逆に驚かない。

結局のところ、今更、ということだ。

「でも、今までにない絡み方じゃない？ 腕組んでるし。……彼女、とか」

「彼女お?!」

突拍子もない、和人が知るレインのことを考えればありえない言葉に思わず大きな声が出る。

いや、確かに女の受けはいいしわりと女たらしではあるが、強くなることしか考えていないし彼と出会った初日にロザリアに放った言葉を思い出すと、あいつに彼女ができるところなんて想像が出来ない。

「ないないないない」

歩道へと移動しながら思わず全力否定する。

「というか、あいつ異邦人だぞ？ こっちで彼女なんて作ってどーすんだよ」

「でも、GGOの一件からもレインさん帰る素振り全然見せないし」

「あいつがそんなの見せるようなやつじゃないだろ」

「……まあ、たしかに？」

でもなあ、とまだ考えている明日奈を微笑ましく見る。

なんでも恋愛に繋げる彼女は、自分よりも年上ということもあり少し大人びていると感ずることの方が多く、バーサクヒーラーなんて呼ばれてもいるが、ただの女の子らしい一面も持ち合わせている。

愛おしいなど、感じる。

そんなことを考えながら、和人は歩道の開けたところで待つクラインの元へと足を進めた。

彼の知らない一面

ボスの出現場所である代々木公園の入り口でクラインたちと話しこんでしまった明日奈がばたばたと急いで広場に向かえば夜遅い時間にもかかわらず、多くの人が集まっていた。

これだけいればボス攻略もそれほど難しいものではないだろう。

「オーディナルスケール、起動」

小さく、しかしシステムが認識してくれる音量でつぶやけが、衣装が変わる。

準備を整えた明日奈は秋葉原UDX線のとくにいた彼がいるのかとあたりを見ますと、目的の人物とは違うが黒衣の青年を見つけ、小走りで近づいた。

「レイン！」

声をかければすぐに振り向いてくれる。

「アスナか。こんな遅い時間に女が一人で出歩くのは看過できんぞ。キリトはいないか？」

「キリト君はいないですよ。私は家が近くなんで来たんです」

笑顔で言えば、レインはため息をついた。

なんだかんだ女性には優しいレインのことだ。本当に心配してくれているのだろう。「俺は事情で送れんが、変わりに知人を呼ぼう」

言うがはやく、レインはスマートフォンを取り出してメッセージを打ち始めた。

「大丈夫ですって！」

「俺が心配なだけだ。呼ぶ奴も俺を扱き使う奴だから気にしなくていいぞ」

簡潔な内容なのか、それとも打つのが早いのかは定かではないが、止める暇もなくレインはポケットにスマホを戻した。

いまさら止めることは無理だろう。レインの雑な優しさに変な人が来ないことを祈ることしかできなくなったことに苦笑する。

そんなことをしている間に時間になったらしく、現実世界がARによってファンタジーなバトルフィールドに変わっていく。

クライアントたちは来ていないが始まってしまったのもは仕方ないとフィールドが切り替わったと同時に現れたボスを見据え、切り替える。

「みんな準備はいい？ さあ戦闘開始だよ。ミュージックスタート！」

いつの間にか現れたユナにあわせて曲が流れ始めるが、どこか不穏な曲調にそわりと

だがそれも演出なのだろうと受け止める。

「レインは参加するの?」

「いいや、俺は前と」

不自然に途切れたレインの言葉に、ボスに向けていた視線をレインに向けると、彼はあさつての方向を見ていた。

「レイン?」

暗がりということもあり、レインが見ている方向に視線を向けても何も見えない。

しかし、彼には何かが見えているのだろう。そう思える程度に、レインは明日奈にとつても規格外の人間なのだ。

返事を待つていれば、静かに見つめていたレインが突然舌打ちをして、思わずびくりとする。

「すまん。野暮用だ。こっちのボスは任せた。大丈夫だと思いが、負けかけたら退けよ」
詳しく説明することなく、それだけ言ったレインは見えていた方向に駆け出した。

驚くほどすぐに小さくなってしまった背中に何か言うこともできず、明日奈はその場に立ち尽くすことしかできなかった。

首をつかまれたクラインに襲い掛かるボスマンスターにレインは全力で切りかかった。

レインの剣は首を切りつけたが、HPを全て削りきれたわけではなかったため、ボスはレインから離れるために距離をとるだけに終わってしまう。

「なんだ、お前」

すでに気を失っているクラインを投げ捨てた男が不機嫌を隠さない声音でこぼす。

「そういうお前は何をしている。ここ最近病院送りになってるSAO帰還者はお前が何かやったな？」

わざわざ聞かなくても倒れる風林火山のメンバーを見れば一目瞭然だ。

だからといってレインが今できることはほとんどなく、無力さに握る手に力がこもる。

「そうだったらなんだ？証拠はないだろう。それともなんだ。お前もSAO帰還者なのか？俺の記憶にはないが」

つまり、目の前の男もS A O帰還者だということになる。

今は少しでも情報がほしいため、レインはボスにも警戒しつつ男と話を続けた。

「俺もお前は知らん。もとよりそれほどあの世界で交流してたのもごく少数だしな。最前線では名前だけ一人歩きしていたみたいだけどな」

「なら、お前も標的だな」

小さくつぶやいた男の声に反応するように、ボスが突然レインに襲い掛かってきた。警戒していたレインは難なく振りかぶられてきた腕を一振りだけで切り落とす。

「フルダイブと現実は違うぞ。天才剣士」

すぐ後ろから聞こえた瞬間、レインの背中に男の拳がめり込み――

「なっ?!」

「それは俺がよく知っている」

――体を突き抜けた。

◆
難なくボスを倒した明日奈は来るであろう” レインの知り合い” という人を代々木公園の入り口で待っていた。

結局あの後、レインは帰ってこなかったし風林火山の人たちが来ることもなく、何かあったのかとレインが向かったほうに行きたかったが、明日奈はここに来るであろうレインの知り合いと連絡が取れるわけもなく、下手にここを動くことができない。

もどかしいことこの上ない。

まあ、彼らはアインクラッドで最前線をともにした人たちでもあるので大丈夫だろう。半ば無理やり自分に言い聞かせるように納得する。

「アスナさんですか？」

納得させた瞬間、声をかけられてどきりとする。

「は、はい！」

驚いて振り向けばごく一般的で素朴な男性と金髪の女性がいた。絹を思わせる金髪は女性である明日奈でも見ほれるほどのものだった。

「あ、あの〜」

女性に声をかけられて我に返る。

「すみません！明日奈です！」

「良かった。レインから連絡きたんですけど」

レインの知り合い、といえは坂崎先生ぐらいしか知らず、目の前の二人のような知り合いがいたことに素直に驚く。

和人からも聞いたことがないので和人も知らないかもしれない。

「わざわざすみません。でも、レインはイベント始まってすぐ行っちゃいました」

「あく大丈夫大丈夫。俺たちオーグマー持ってないし」

「え？」

「ちよつと！」

「あつ」

確かに二人ともオーグマーをつけてはいないが、それが何か関係するのだろうか。

二人はなにやら言い合っているが、あまりにも小さい声のせいで聞き取ることはできない。

初対面でもあるため、声をかけるにもどうしたらわからず黙っていれば、男性が一発叩かれ、女性がこちらに向いた。

「すみません。私、レインの同僚のイヴといいます。こちらはツヨシ。」

「あつ、結城明日奈です。こちらこそすみません。わざわざ来てもらってしまって。家

近いって言ったんですけど」

「大丈夫ですよ。今、いろいろあってレインがちよつと過保護になっただけなんです」
ふわりと微笑む彼女は日本人離れしてどきどきしてしまう。ALLOで綺麗なアバターを見てきたが、所詮ポリゴンで作られたアバターということだろうか。あちらで見れるとは思えない綺麗という言葉だけでは表現できない。

「ちなみに、護衛の本命はイヴのほうなんだ。俺は一応男がいればっていうおまけ」
「えっ」

思わずイヴを見れば照れくさそうに苦笑いをした。

「レインには叶わないけど、私も異邦人だから」

その言葉に納得してしまったのは、レインという異邦人を知っているだけではなく、彼女の放つオーラや美しさが常人離れしているからだろう。

そんな彼女はレイン程ではないが現実世界で戦えるほどの力量の持ち主とは思えないほど華奢にみえる。

やはり、この世界の人間と異世界の人間では身体の作りが根本的に違うのかと、思考がずれる。

ずれた思考を慌てて戻す。

「それなら心強いです。でも、イヴさんも女性なのも変わらないですし、これ以上遅く

なってしまうのも申し訳ないですから、家までよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げれば、そんなに畏まらなくていいよ、と言われる。

距離はそれほどないが、無言で歩くのも気まずいので適当に話を振る。それが必然的に互いに知り合いであるレインの話になってしまうのはどうしようもないだろう。

「お二人はレインと知り合ってどれぐらいなんですか？」

そうだな、と答えたのは剛だった。

「実は君たちがレインとSAOで知り合った数ヶ月前なんだ。というかあいつ、今みたいに丸くなかったからなあ。実際にまともに話したのは数日だけだひ、SAOの1年間を思えば、君たちの方が付き合いが長いと思うよ」

それにしても親しそうな間柄に感じたので、なんだかんだ気のしれた関係なのだろうことは感じ取れる。

明日奈の知らないレインの一面に思わずソワソワしてしまうのは秋葉原UDXで見かけた、あの少女のこともあるからだろう。

この二人なら知っているのだろうか。

レインの腕に飛びついたあの少女のことを。

その事を聞こうかと口を開いたが、何となく、深い意味もなく、明日奈はやめた。

その結果、他愛のない話を振ったにも関わらず、レインが色々としてかしているん

でもない話を聞くことになった。

本格的な介入

レインに頼まれ、アスナという少女を送った次の日、イヴと雪野剛はとある病院に訪れていた。

「俺ら、クライン氏に会ったことないけど、大丈夫か？」

「そうだけど、仕方ないじゃない。レインは今の彼の前に姿を現せないんだから」

「そりやそうだがな」

坂崎やレイン達と共に仕事をしてきたおかげで初対面の人物に会いに行くことにも慣れた剛だが、今回は少し事情が違う。

レインの、彼がこの世界で独自に築き上げた彼の交友関係にある人物に会うのだ。

さらにいえば、裏のある重役や異邦人というわけでもなく、S A O 帰還者ではあるが、剛からすればただの一般人でしかない。

いろんなことが影響して変に緊張してしまう。

「坂崎さんが菊岡さんと協力関係になんてなるからこんなことに」

「仕方ないでしょ。おかげでレインもこの世界にいてくれることになったんだし」

「っていつてもなあ〜」

剛がうだうだと言ってしまふ理由を知っているイヴはただ苦笑いを浮かべただけだった。

そうしている間に、『壺井遼太郎』と書かれた病室の前までやってきた。

「くそお。レインが直接様子見ればいいのに」

「クラインさんにオーグマーつけてもらうわけにはいかないでしょ」

「まあな」

といつても気が進まないことには変わらない。

様子を見なくとも、他の犠牲者と同じであることはわかりきっている。それはもちろん、イヴと剛に様子を見てきてほしいと頼んだレインもわかっているだろう。

それでも、レインは知りたいのだ。クラインが元気なのかどうかを。

「元気だといいな」

「レインの知り合いよ？ 元気でしょ」

「……. だろうな」

先ほどより、落ち着いた剛はあったことのない人の病室の扉を開けた。



「同時に何箇所も出るなんて聞いてねえぞ！」

「それは私もです！」

騒ぎながらもレインとイヴは歩道を駆けていた。

向かう先は恵比寿ガーデンプレイスだ。

二人の頭部にはオーグマーが装着されており、オーディナルスケールは起動済みであり、レインはいつもの様相とそれほど変わらないが、イヴは懐かしい身体に張り付いた戦闘スーツを装備済みだ。もちろん、武器として右手には世界最強のサブマシンガンと言われるMC51を持っている。

「直前までオーグマーの使い方がわからないとかどこの馬鹿崎だ！」

「あの人と同じにしないで！」

「ならちゃんと剛に教えてもらえとけ！」

イヴの不手際で出遅れた二人の眼前ではすでに戦闘が始まっており、慌てて二人ともスピードを上げ、なにやら渋滞している階段の上空を軽々と飛び越えた。

レイン達が所属している組織は今、オーディナルスケールにより記憶を失う人たちを減らすために奔走している。

恵比寿ガーデンプレイスだけではなくほかの場所に現れたボスの元にも今頃大急ぎで人員が送り込まれているだろう。

レインとイヴの二人がここに来た理由は「エイジ」と「ユナ」の二人がいるからだ。すぐに状況を把握に入ったレインの視界に、倒れたアスナと今もドラゴンに狙われているシリカがいた。

叫んだのはもはや条件反射のようなものだった。

「イヴ！ 狙われている二人を頼む！」

「はい！」

同時に着地したレインとイヴは互いに別方向に向かって地面を蹴った。

明らかに人間の動きではないスピードでドルゼル・ザ・カオスドレイクまで辿り着いたレインは勢いよく切りかかり、勢いに任せて吹き飛ばした。

少し遅れて、イヴがアスナとシリカを守るように立つ。

「レインさん！」

「アスナ！」

耳にシリカの声とキリトの声を捕らえながら、レインは被害者を出さないようにボスに集中する。

レインにはこの場にいるSAO帰還者が誰なのかわかるはずもない。そのため、とに

かくボスからプレイヤーを守り、ボスを倒すしか方法はないのだ。

今回は下手をすればキリトも被害者になりえるため、イヴに援護を頼むしかない。

「サブマシンガンでの援護を頼むぞ」

「了解。レインもいろいろ気をつけてね」

「へまはせん」

久しぶりの危機が迫る——といつてもレインではなくキリトたちにだが——場面に剣を握る手に力がこもる。

魔法を使うことはできないし、あくまでもこの世界の人間基準に立ち回らないといけない。さらにはARということもあつて、敵に攻撃判定があるのは剣の刃の部分だけだ。

「縛りプレイなんて趣味じゃないんだがな」

「何しにきた」

ぼそりとつぶやくと、明らかに怒気をはらんだ声音が聞こえた。無反応でいることは相手を逆撫でることになるのは考えなくてもわかるのでレインはボスモンスターを気に留めながらも反応を返した。

「戦いに来たただけだが？」

怒りをこちらに向けているエイジにレインはなんてことのない顔を見せる。

エイジとはすでに代々木公園で相對している。

「お前にはなにも——」

「そのために私が来たんです」

「ほお？女がなんの役に立つって言うんだ。ここはVRじゃないぞ」

「そうですね。ですが、私はもとよりVRなどしたことはありません。しかし、貴方のようなずるい方に負ける気はしませんね」

言い切ったイヴにレインは不敵に笑う。

エイジのことはイヴに任せ、レインはこちらに駆け寄ってきているリズベットたちにドルゼル・ザ・カオスドレイクが放った炎の球に向かって飛び込んで剣で弾き消す。

多少飛びすぎたかもしれないが、現実と仮想が入り混じっている今なら大丈夫な範囲だろう。

「無事か？」

「無事か？ じゃないわよ！」

リズベットに声をかければいつものように声を荒げられる。

だが、リズベットの相手をしている暇はレインに与えられなかった。

ドルゼル・ザ・カオスドレイクがキリトへと飛んでいったのだ。

あわてて地面を蹴ってドルゼル・ザ・カオスドレイクとキリトの間に入った瞬間、そ

れまで流れていた歌が途切れた。

「ギーンねーん」

ユナがそういうと、フィールドにいたボスたちがいつせいに撤退し始める。

お疲れ様々と手を振るユナとボスを追いかけるプレイヤーたちを眺めつつ、レインは剣を収めた。エイジはどさくさに紛れてどこかに行ってしまったらしい。

「明日奈！大丈夫!?!」

リズベツトがアスナに駆け寄ってきたが、彼女が無事ではないことをレインは知っている。

「レイン」

静かに響いたイヴの声が聞こえ、レインは少しだけ息を吐いて気を落ち着かせた。

アスナの元に降りてきたユナは無害そうに話しかけていることに対して複雑な気持ちになる。

レインたちが持っている情報はオーディナルスケールでSAO帰還者のHPがゼロになったときにインクラットでの記憶が消えていくということぐらいだ。そこにエイジが関わっているというを知ったのは、レインがクラインたちが被害にあっているところに遭遇したからだ。

ユナに関しては、本当に関わっているのかは定かではない。だが、オーグマーに関係

のある人物だということと監視対象になっている。

彼女は利用されているのか、それとも共犯者なのか。

それを見定めるためにユナを見ていれば、その視線に気がついたらしいユナとレインは目ががっちり合った。

「あら。貴方……ふーん」

すぐにレインがARに興味を示さなかった理由でもある事情に気がついたらしい彼女がぐいつと顔を覗き込んできた。

「どうしてこんなところでこの人たちと馴染んでいるの？」

「諸事情でいろいろな。黙っていてくれるとありがたい」

「うーん。どうしよっかなあ」

自由奔放で縛られている様子のない、CPUとも違う彼女ができるのであれば利用されているだけであることを願いたい。

「そうだ！黙っておいてあげるから今度お茶しましょう？」

「それぐらいならお安い御用だ」

「なら決定！今度会ったらお茶しましょうね！」

なんていいながら楽しそうに去っていくユナを見送るが、背中に刺さる視線にげんりする。

振り向けば案の定じつとりとした目が六つほどあった。そのうちの二つがイヴというのが少し意外だったが、ごまかすように視線をアスナに向けた。

「アスナ」

「……レイン」

「あのナンバー2のやつなんなのよ」

多少顔見知りのように話していたからだろう。説明しろというリズベットの視線を無視して話を進める。

「お前たちはもうボス戦に参加するな」

「はあ?なんで——」

「申し遅れました。私、菊岡誠二郎さんとおなじ部署に所属しております、イヴと申します」

無理やり話に入ってきたイヴを怪訝そうにリズベットだけではなく、シリカもキリトも見ているのは菊岡と同じ部署だと言ったせいだろう。

事実としては少し違うのだが、あながち間違っている訳でもない。

「えつと……この人たちって全員知ってるんですしたっけ?」

振り向いて聞いてきたイヴの言うものが、どれの何を指しているのか分からないが、予め彼らを色んなことに巻き込むのをレインがやめろと言っているので、異邦人の存在

の話だろうとあたりをつけて頷いておく。

「なら問題ありませんね。私もレインさん同様に異邦人です。と言つても彼ほど強い訳ではないんですけどね」

「つていうことは坂崎先生とも関係が？」

「そうですね。というか、私は坂崎さんの所属している組織から菊岡さんの部署に貸し出されている身です」

実際にそうなのだが、事情を知っているレインはおもわず顔を顰めてしまう。なにせ、レインも言つてしまえばイヴ同様貸し出されている身だからだ。

本人はやりたい放題やつているのでそれほど縛られている気は無いが、イヴの話聞いてみると一社会人としてこの世界に準じていまっていく感じがなんとも言えない。

「イヴの詳しい話はいいだろう。俺同様かなり込み入っているから深く追求するのはやめてやってくれ。少し天然も入っているから機密情報とかもペラペラ話すんだ。こいつは」

「天然だなんて言うのはレインさんだけです！」

「オーグマーの操作がまともに出来なかったやつに言われたかない」

「それはすみませんでした。そうすればアスナさんも被害に合わずにすみましたし」

本気で落ち込むイヴにレインは深くため息をついた。

「大体、剛がイヴに説明しなかったのも悪い」

「ちよつと待つてくれ！明日奈が被害に合わずにつてどういふことだよ！」

キリトが黙つていないとは思つていたが、話せば首を突つ込んでくるであろうことも察することも出来る。

だが、キリトだつて被害者になり得る今回は厄介でしかない。

「レインさん。どうしますか？この方々への干渉はあなたが権限を独占してましたよね」

「いらんことを言わんでいい」

隣のに立つ美人の口を塞げないのがこれほど厄介だとは思わなかつた。

いや、おそらくわざとだろう。何かと秘密主義で裏でこそこそしているレインをどうにか裸の状態でキリトたちの前に転がしたいのだ。

余計なお世話だと内心でぼやく。

「おい、お前何を俺たちに隠してるんだ」

言わんこつちやないとレインは深くため息をついた。

「色々と極秘事項もあつて詳しくは言えん。ただ、オーディナル・スケールでS A O 帰還者から被害者から出てるのは事実だ。俺とイヴは被害者を減らすために動いてる」

どこまで話せば納得してもらえ、どこまで隠せば誤魔化せれるかを考えながら口を動かす。

「なんの被害かは、ここでは言えん。アスナはとりあえず今日は1度帰って休め。だが、明日は病院にかならず行け。何かあればキリトを頼ればいい。キリトはアスナを支えてやれ。こつちの厄介事は俺達がどうにかする」

「お前だつてSAO帰還者だろ」

あまりにもキリトの言葉が予想通りでクスリと笑つてしまう。

「まあ、そうなるが、オーディナル・スケールで俺はチーターだからな。被害には合わん。VRならお前を頼つてもよかつたかもしれないがARの戦闘に、現実世界での戦闘に慣れてないの方が危ない。どうしても関わりたいなら菊岡に話すんだな」

と言つても、レインが菊岡に大してキリトたちを巻き込まないようにと言っているのであいつが自主的にキリトを巻き込むことはしないだろう。

それに、万が一もある。今回はアインクラッドの記憶を失つてしまう。ある程度ならレインもアインクラッドの情報を持っているが、やはりキリト程ではない。

菊岡はキリトの記憶がなくなることをよしとはしないはずだ。

「菊岡の許可が出れば、いいんだな？」

「かまわん」

キリトはレインを睨み、レインはそれを真つ向から受ける。

そんな二人を横目に、イヴはアスナの隣にしゃがみこんだ。

「アスナさん、今真実を言えば取り乱してしまうから言えないけれど、きつと不安になると思う。もしかしたらすでに不安かもしれない。けれど、あなたの周りにはあなたの仲間がいます。安心してとはいえませんが、きつとレインから聞く強いあなたなら乗り越えられるはずですよ」

「・・・イヴさん」

「大丈夫。私達が動いているんですから」

微笑む彼女は相変わらず人間離れた綺麗さがある。

戦闘スーツに身を包み片手にM C 5 1が握られているのが些か勿体なく感じる。

「今日はもう遅い。お前達もさっさと帰れ。悪いがイヴ、そいつらを送ってやってくれ」
「わかりました。レインさんも無理はしないでくださいね？」

「・・・お前、愛海に似てきたな？」

組織の一員である愛海は何も知らなかった当時の剛を見守ってきたからか、いい意味で言えば面倒見の良い姉気質がある。彼女は忙しそうにこちらこちらに行っていることもあり、滅多に会うことがないが、会えば小言を言われるのが常だ。

言い方こそ丁寧ではあるが、イヴの空気はどこかそんな愛海に似てきた気がするのだ。

「気のせいですよ」

「ならいいが。じゃ、先に帰ってる」

背中を向けてひらひらと軽く手を振る動きとは反対に、レインの表情はどこか過去の冷たいレインを髣髴とさせるものだった。